

嘉数トウンヤマ遺跡Ⅰ

— 範囲確認調査報告書 —

2008年（平成20年）3月

沖縄県宜野湾市教育委員会

嘉数トウンヤマ遺跡Ⅰ

— 範囲確認調査報告書 —

2008年（平成20年）3月
沖縄県 宜野湾市教育委員会

序

本報告書は、周知の遺跡である嘉数トゥンヤマ遺跡の包蔵地内において、国有地管理処分に伴う土地売却計画が予定されたことから、平成16年度に宜野湾市教育委員会が実施した範囲確認調査の成果をまとめたものであります。

嘉数地域は、嘉数高台公園等の整備事業のほか、昨今の宅地開発等の市街地化が著しい中で、いまなお碁盤目状の集落形態を呈しており、旧来の面影を残した数少ない地域であります。

また、集落の北側には嘉数高台として名高いウィーヌヤマがあり、さらに北麓には比屋良川が流れ、県指定有形文化財「小禄墓」を主として、流域沿いには断崖を利用した古墓群が連なっており、その他にも拝所や石獅子、湧泉等が確認されております。嘉数トゥンヤマ遺跡の後背にも、トゥン（嘉数之殿）とジトゥーヒヌカン（地頭火の神）と称される祠が配置されており、これらが地域の財産として大切に継承されております。

今回の範囲確認調査により、掘立柱建物跡や倉庫跡と思われる多数の柱穴群や中世（グスク時代）の畑跡として検討されている小穴群のほか、嘉数村の旧道と思われる礫敷遺構も確認されております。また、輸入陶磁器やグスク土器等の中世陶磁器や近世から近代にかけての本土産や沖縄産の陶磁器等が数多く出土しており、これらの調査成果からは、中世から近世を経て、近代へと連綿と営まれてきた往時の嘉数村の様相について窺い知ることができると言えます。

今回の調査成果が、広く市民の歴史的教材ないしは文化財の保護・活用資料として生かされ、歴史学等の学術資料として御検討いただければ幸いに存じます。

末尾になりましたが、多大な御指導を賜りました文化庁文化財部と沖縄県教育庁文化課、並びに貴重な御指導・御助言を賜りました市文化財保護審議会の先生方と嘉数区自治会、その他関係各位に対しまして心から感謝申し上げます。

2008（平成20）年3月

沖縄県 宜野湾市教育委員会
教育長 普 天 間 朝 光



卷頭図版1 調査区全景



溝状礫敷遺構① 全景



溝状礫敷遺構① 礫敷検出状況



溝状礫敷遺構② 全景



溝状礫敷遺構② 礫敷検出状況



柱穴・列状ピット・土坑検出状況



列状ピット群検出状況



土器検出作業

巻頭図版2 遺構・遺物検出状況



土器検出状況

例 言

1. 本報告書は、国有地管理処分に伴う土地売却計画に先立ち、宜野湾市教育委員会が国・県の補助を受けて、平成 16 年度に実施した、嘉数タウンヤマ遺跡の範囲確認調査の成果を収録したものである。
2. 現地調査の実施にあたっては、内閣府沖縄総合事務局 - 財務部統括国有財産管理官の協力を得た。
3. 発掘調査並びに本文中における遺跡の基準方位は、国土座標系(旧座標系)第 XV 座標系の座標北を用い、層位・遺構は海拔高(那覇)を基準とした高さである。
4. 本書に掲載した地図は、基本的に宜野湾市都市計画課発行の都市計画図(1:2,500)を使用しており、他の情報図については、宜野湾市教育委員会が管理・運営している GIS データを使用している。
5. 本書で使用した層名は、農林水産省水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
6. 出土遺物のうち、石材・石製品の石質同定は宜野湾市教育委員会文化財保護審議員の大城逸郎氏、貝類の同定は北谷町教育委員会の島袋春美氏、グスク土器の胎土分析並びに鍛冶関連遺物の分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。なお、石材・石製品、貝類については現在整理中の記録保存調査報告書にて報告することとする。
7. 本書の執筆は、城間 肇・上田圭一・矢作健一・橋本真紀夫があたり、執筆分担は下記する一覧に記してある。なお、本書の編集は杉村千重美・原田 円の協力を得て城間 肇が行った。

城間 肇 (宜野湾市教育委員会文化課 文化財保護係 主事)
第 I 章、第 II 章、第 III 章、第 IV 章、第 V 章
上田圭一・矢作健一・橋本真紀夫 (パリノ・サーヴェイ株式会社)
第 IV 章
8. 本報告書に掲載された遺構・出土遺物の撮影は城間 肇が行った。
9. 現地調査・資料整理にて得られた遺物・実測図・写真・デジタルデータ等の各種調査記録は、すべて宜野湾市教育委員会文化課にて保管している。

目次

序	
巻頭図版	
例言	
第I章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査経過	4
第II章 遺跡の位置と環境	5
第1節 遺跡の位置と環境	5
第2節 自然的環境	6
第3節 歴史的環境	7
第4節 嘉数地域の位置と環境	8
第III章 発掘調査の成果	11
第1節 調査区の設定と層序	11
1. 調査区の設定	11
2. 基本的層序	12
第2節 遺構	16
1. ピット群と掘立柱建物跡	18
2. 列状ピット群	18
3. 土器一括検出土坑	20
4. 溝状礫敷遺構	21
第3節 遺物	23
1. 土器	24
2. 類須恵器	28
3. 白磁	31
4. 青磁	38
5. 青花	56
6. 褐釉陶器（中国産・タイ産）	63
7. 黒釉陶器	66
8. 三彩・鉄釉染付・瑠璃釉	66
9. タイ鉄絵・タイ半練	66
10. 本土産陶磁器	66
11. 沖縄産施釉陶器	69
12. 沖縄産無釉陶器	80
13. アカムヌー	86
14. 銭貨	92
15. ジーファー（簪）	92
16. 玉	92
17. 煙管	92
18. 高麗系瓦	92
第IV章 自然科学分析調査の成果	94
第1節 グスク土器胎土分析	94
第2節 鍛冶関連遺物分析	100
第V章 結語	104
報告書抄録	

巻頭図版目次

- 巻頭図版1 調査区全景
- 巻頭図版2 遺構・遺物検出状況

挿図目次

第1図	宜野湾市の位置図	5	第24図	青磁5 皿	52
第2図	宜野湾市遺跡変遷図	7	第25図	青磁6 盤、酒会壺、香炉、馬上杯、瓶、袋物	54
第3図	宜野湾間切嘉数村全圖(明治36年)一部加筆	8	第26図	青花1 碗	59
第4図	嘉数周辺地域の遺跡情報図1	9	第27図	青花2 皿、杯、小杯、瓶	61
第5図	嘉数周辺地域の遺跡情報図2	10	第28図	褐釉陶器 中国産(壺・播鉢)、タイ産	64
第6図	発掘調査地区位置図(S=1/5000)	11	第29図	黒釉陶器、三彩、鉄釉染付、瑠璃釉、タイ鉄絵、タイ半練、本土産陶磁器	67
第7図	グリッド設定図(S=1/1000)	11	第30図	沖縄産施釉陶器1 碗	74
第8図	調査区設定状況(S=1/1000)	12	第31図	沖縄産施釉陶器2 筒碗、小碗、皿、鉢、鍋	76
第9図	基本的層序(S=1/80)	13	第32図	沖縄産施釉陶器3 壺、瓶、瓶子、急須、酒器、香炉、火取、灯明具、袋物	78
第10図	西側畑地TP断面・平面(S=1/80)	15	第33図	沖縄産無釉陶器1 壺、甕	82
第11図	主要遺構検出状況図(S=1/100)	16	第34図	沖縄産無釉陶器2 甕、播鉢、鉢、蓋	84
第12図	N-15ピット平面図・断面図(S=1/30)	18	第35図	アカムヌー1	88
第13図	ピット群検出状況図(S=1/60)	19	第36図	アカムヌー2	90
第14図	土器一括検出土坑平面図・断面図(S=1/30)	20	第37図	ジーファー(簪)、玉、煙管	93
第15図	(S=1/60)	21	第38図	高麗系瓦	92
第16図	土器 鍋	26	第39図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度	96
第17図	類須恵器 壺	29	第40図	碎屑物・基質・孔隙の割合	98
第18図	白磁1 碗	34	第41図	胎土中の砂の粒径組成	98
第19図	白磁2 皿、杯、小杯、瓶	36			
第20図	青磁1 碗①	44			
第21図	青磁2 碗②	46			
第22図	青磁3 碗③	48			
第23図	青磁4 碗④	50			

図版目次

図版1	調査経過1	4	図版17	褐釉陶器	65
図版2	戦前の旧嘉数村(昭和20年米軍撮影)	8	図版18	黒釉陶器、三彩、鉄釉染付、瑠璃釉、タイ鉄絵、タイ半練、本土産陶磁器	68
図版3	西側畑地 試掘坑堆積状況	14	図版19	沖縄産施釉陶器1	75
図版4	調査経過2	22	図版20	沖縄産施釉陶器2	77
図版5	グスク土器 鍋	27	図版21	沖縄産施釉陶器3	79
図版6	類須恵器 壺	30	図版22	沖縄産無釉陶器1	83
図版7	白磁1	35	図版23	沖縄産無釉陶器2	85
図版8	白磁2	37	図版24	アカムヌー1	89
図版9	青磁1	45	図版25	アカムヌー2	91
図版10	青磁2	47	図版26	銭貨	92
図版11	青磁3	49	図版27	ジーファー(簪)、玉、煙管	93
図版12	青磁4	51	図版28	高麗系瓦	92
図版13	青磁5	53	図版29	胎土薄片	99
図版14	青磁6	55	図版30	鍛冶滓の顕微鏡組織	103
図版15	青花1	60			
図版16	青花2	62			

挿表目次

第1表	嘉数地域の埋蔵文化財包蔵地一覧	9	第15表	褐釉陶器出土状況一覧	63
第2表	嘉数周辺地域の遺跡	10	第16表	沖縄産施釉陶器観察一覧1	70
第3表	ピット法量一覧	17	第17表	沖縄産施釉陶器出土状況一覧	71
第4表	主要遺物出土状況一覧	23	第18表	沖縄産無釉陶器出土状況一覧	80
第5表	土器出土状況一覧	24	第19表	沖縄産無釉陶器観察一覧	81
第6表	グスク土器観察一覧	25	第20表	アカムヌー出土状況一覧	86
第7表	類須恵器出土状況一覧	28	第21表	アカムヌー観察一覧	87
第8表	類須恵器観察一覧	28	第22表	煙管出土状況	92
第9表	白磁出土状況一覧	31	第23表	分析試料一覧及び胎土分類結果	94
第10表	白磁観察一覧	32	第24表	薄片観察結果	96
第11表	青磁出土状況一覧	39	第25表	鍛冶関連遺物出土状況	100
第12表	青磁観察一覧	40	第26表	供試材の履歴と調査項目	102
第13表	青花出土状況一覧	56	第27表	供試材の化学組成	102
第14表	青花観察一覧	57	第28表	出土遺物の調査結果のまとめ	102

第 I 章 調査に至る経緯

第 1 節 調査に至る経緯

嘉数タウンヤマ遺跡は、『土に埋もれた宜野湾』（1989 年）・『宜野湾市文化財情報図』（2002 年）等にて報告がなされている「周知の遺跡」である。同遺跡が所在する嘉数地域は、比屋良川護岸整備、嘉数高台公園、比屋良川流域公園整備等の各種開発事業のほか、戦後の外人住宅建設や昨今の宅地開発等の市街地化によって旧来の姿を失いつつあり、同遺跡についても遺跡の性格を把握するための詳細な確認調査が必要とされていた。

嘉数タウンヤマ遺跡の国有地管理処分に伴う保護調整

嘉数タウンヤマ遺跡の包蔵地一帯については、市文化課において定期的に文化財パトロールを実施している地域で、調査対象となった地所については、同遺跡包蔵地内の当該地所において、国有地管理処分に伴う土地売却の公告看板が設置されているのを確認したため、同遺跡の保護を含めた今後の取り扱いについての調整が急務となり、内閣府沖縄総合事務局財務部に対して、その詳細についての確認作業を行った。

その後、文化財保護法に基づく文化財の取り扱い及び埋蔵文化財調査の必要性について説明を行い、当該地所が国有地としての管理地であるという性格から、法定された所定の手続き等を経た上で試掘・確認調査の事前実施についての理解を得て、国有地管理処分に伴う競売計画の延期を要請した。

範囲確認調査の実施

調整経緯としては、内閣府沖縄総合事務局との調整後に県教育庁文化課に対して報告し、開発調整用資料の取得を目的として、文化庁国庫補助事業による試掘・確認調査の実施について承諾を得た。その後、当該管理地の地権者である内閣府沖縄総合事務局より、平成 16 年 7 月 6 日付で調査承諾書を添えて、市教育委員会宛に管理処分予定地の試掘・確認調査の依頼がなされ、文化財保護法第 58 条の 2 第 1 項（当時）により、平成 16 年 7 月 30 日付、宜教文第 110 号文書にて発掘調査通知を提出し、試掘・確認調査の実施に向けた手続きを終了した。

以上により、市教育委員会は文化財保護担当職員と文化財保護指導嘱託員並びに発掘作業員を充てて、平成 16 年 8 月 9 日より試掘・確認調査に着手した。調査の対象となったのは、宜野湾市嘉数一丁目 235 番で、遺跡の詳細な性格や範囲を把握するための確認調査を実施した。また、これに平行して調査区西側の耕作地においても、地権者と小作者の理解を得て試掘調査を実施し、最終的には、同年 11 月 5 日の埋め戻し及び原状回復措置をもって試掘・確認調査を終了した。調査の結果、管理処分の対象となった国有地全域に埋蔵文化財が包蔵されていることが確認されたほか、調査区西側の耕作地についても同等の埋蔵文化財包蔵地であることが確認された。これにより、同年 11 月 9 日付け宜教文第 110 号文書にて、宜野湾警察署長宛に埋蔵文化財発見届を提出したほか、県教育庁文化課には埋蔵文化財保管証をそれぞれ提出した。その後、沖縄県教育委員会による埋蔵文化財認定通知があった旨の事務連絡が宜野湾警察署長より、平成 17 年 1 月 20 日付け文書にて宜野湾市教育委員会宛に提出され、同年 3 月 31 日に県教育庁文化課宛に発掘調査終了報告を提出している。なお、地権者である内閣府沖縄総合事務局長への完了報告については、不動産鑑定評価に係る個別的要因の留意事項である「埋蔵文化財の有無及びその状態について」に関する調査履歴と成果を整理した上で、同年 7 月 26 日付、宜教文第 142 号文書にて完了報告書を提出しており、これにより、今回の試掘・確認調査及びそれに伴う事務手続きを終了している。

第2節 調査体制

嘉数タウンヤマ遺跡包蔵地内の国有地管理処分に伴う土地売却計画に係る範囲発掘調査については、平成16年度に実施し、資料整理及び報告書作成に係る整理業務は平成18～19年度に実施した。なお、調査体制については下記のとおりである。

事業主体	沖縄県宜野湾市教育委員会		
事業責任者	教育長		宮城義昇(平成16年度)
	〃		普天間朝光(平成16～19年度)
事業総括	教育部	教育部長	外間伸義(平成16～18年度)
	〃	〃	新田和夫(平成18～19年度)
教育次長			新田和夫(平成16～18年度)
	〃	〃	伊佐友孝(平成18～19年度)
事業事務	文化課	課長	城間盛久(平成16～18年度)
	〃	〃	和田敬悟(平成19年度)
	〃	文化財保護係長	呉屋義勝(平成16～18年度)
	〃	〃	豊里友哉(平成19年度)
	〃	文化財保護係主事	城間肇(平成16～19年度)
	〃	臨時職員	西銘五月(平成16～19年度)
	〃	〃	宮平優子(平成19年度)
調査業務	〃	文化財保護係主事	城間肇(平成16～19年度)
	〃	嘱託職員	宮平盛晃(平成16年度)
	〃	〃	伊藤圭(平成19年度)
調査作業員	〃	臨時職員	伊波敏夫、伊波晴美、上里やよい、奥浜恵子 米須清太、米須富士江、崎浜隆一、津波古美津江 德里末子、玉城文子、照屋充、仲松光子 新田政江、仲村幸子、比嘉ムツ子、宮城常正 宮城春義 (平成16年度)
資料整理業務	〃	文化財保護係主事	城間肇(平成18～19年度)
	〃	嘱託職員	伊藤圭(平成19年度)
	〃	〃	宮城初枝(平成19年度)
	〃	〃	杉村千重美(平成19年度)
資料整理作業員	〃	臨時職員	池田一美、伊佐祐姫、翁長和佳子、喜名ひとみ 古謝和美、杉村千重美、田盛謹代、新田政江 原田円、比嘉ムツ子、平川邦子、真志喜正枝 宮里みどり、山田葉月 (平成18～19年度)

委託業務	画像解析業務等	財団法人京都市埋蔵文化財研究所
	自然科学分析調査	パリノ・サーヴェイ株式会社
	発掘労務作業	社団法人宜野湾市シルバー人材センター

調査指導及び調査協力（職名等は当時）

調査指導及び協力者として以下の方々に指導・協力を仰いだ。

坂井 秀弥	文化庁文化財部記念物課	主任文化財調査官
清野 孝之	〃	文化財調査官
大城 慧	沖縄県教育庁文化課	課長補佐
島袋 洋	〃	〃
盛本 勲	〃	主幹兼記念物係長
中山 晋	〃	専門員
知念 隆博	〃	〃
瀬戸 哲也	〃	〃
宮城 勲	市嘉数区自治会	嘉数区自治会長
仲田 求	内閣府沖縄総合事務局財務部	
知花 幸伸	嘉数区在（地権者）	
伊波 真康	嘉数区在（土地使用者）	
嵩元 政秀	宜野湾市文化財保護審議会	会長
新垣 義夫	〃	委員
大城 逸郎	〃	委員
池田 榮文	琉球大学法文学部	教授
赤嶺 政信	〃	教授
島袋 春美	北谷町教育委員会	

第3節 調査経過

発掘調査の経過

嘉数タウンヤマ遺跡包蔵地内の国有地管理処分に伴う土地売却計画に係る範囲発掘調査については、嘉数区自治会に対して事前の協力依頼を行い、地籍上の境界確認や安全対策等の環境整備を実施した上で調査区のグリッド設定を行っており、実質的な現地調査を平成16年8月9日より着手した。

今回の調査は、市文化課文化財保護担当職員1人・文化財保護指導嘱託員1名・発掘作業員8人・発掘労務作業員（市シルバー人材センター会員）6人の計16人で実施し、調査範囲は面積にして883㎡であった。

調査区設定については、タウン（嘉数之殿）と称される嘉数集落の拝所から南方向の軸線を基軸とし、それに直交する形で東西に任意の作業軸を設けてグリッド設定を完了しており、これに基づいて調査区内にて散見される遺物の表面採集を行った。

調査は基軸となる15ライン西側の各グリッドの表土を重機にて除去し、一部については基盤層である石灰岩まで掘り下げて基本的層序の確認を行ったところ、旧耕作土と思われる堆積土とピット群が検出されたため、作業員による掘り下げを行い、下層の堆積状況確認と遺構面検出作業を行った。これにより、調査グリッド全面にて旧耕作土が確認されたほか、国有地化以前の開発行為で、一部は遺構面まで大規模に攪乱されていることが確認された。

耕作土や一部の攪乱土を除去後に検出された各遺構については、ガスク時代（中世）が想定される柱穴や小穴・土坑等が多数検出されたほか、近世から近代の嘉数村の旧道と思われる溝状礫敷遺構が検出されており、これらの多くについては、国有地管理処分後に予想される本発掘調査にて詳細を把握することとし、国有地化以前の開発行為による重機攪乱の土坑壁面に確認された柱穴・土坑等と前述の溝状礫敷遺構を調査した。これらの確認された各遺構の検出状況や断面図等の記録作業の後、自然科学分析調査用の各種サンプルを採取して、調査区内の原状回復を行い、平成16年11月5日には、調査に係る全ての作業を終了した。



図版1 調査経過 1

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

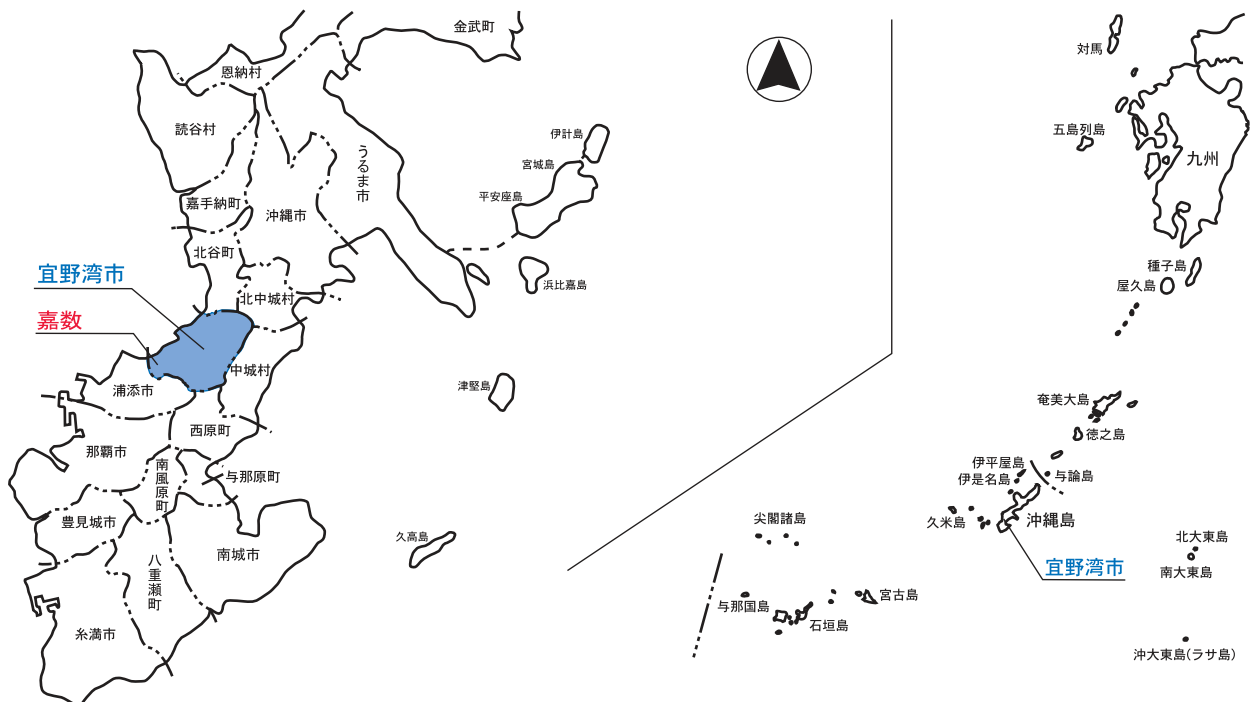
第1節 遺跡の位置と環境

宜野湾市の位置と環境

宜野湾市は、沖縄本島中部西海岸にあって東シナ海に面し、周辺には北谷町・北中城村・中城村・西原町・浦添市が隣接する。那覇市からは北に12.4 km離れた地点に位置し、市域には国道58号線、330号線等の主要幹線が、普天間飛行場基地の外縁部に廻っている。さらに、沖縄自動車道北中城IC・西原ICへのアクセス道路として、県道宜野湾北中城線や34号線などの県内主要幹線道路も展開し、本島中南部と北部地域を結ぶ要所となっている。

総面積は19.37k m²で、略東西6.1 km、略南東5.2 kmの略長方形を呈す。市域北側にキャンプ瑞慶覧、中央に普天間飛行場基地が占拠し、市民居住区域は普天間飛行場基地の外縁部に展開するドーナツ状をなす。地目比率は、米軍基地が33.3%、民間地の宅地36.3%、田畑8.5%、原野2.1%、その他19.8%となっている(1992 現在)。

地形は、ひな壇状の4つの段丘面を形成し、海岸沿いの沖積低地、内陸側の3つの段丘面は大半が琉球石灰岩層で成り立つ。琉球石灰岩層の段丘縁には洞穴と湧泉が点在し、本市の自然及び人文的景観の特徴となっている。また、中城と接する範囲では、クチャと称される泥岩の島尻層群が見られる。海拔高度の最高位は、中城村・西原町・本市の3市町村界にあたるサンカホージリと称する146 mの地点である。河川は浦添市と西原町の境に比屋良川、北谷町・北中城村・中城村との境に普天間川が流れている。気候は亜熱帯性で、年間平均気温は22.4℃と温暖である。雨量は春から夏が多く、夏から秋は台風が多い。年間降水量は1800～2500 mm程である。



第1図 宜野湾市の位置図

前身の「宜野湾間切」は、1671年に浦添・中城・北谷の三間切から13村を割き、新たに1つの村を設けて、14村で新設された。1649年編纂『絵図郷村帳』には、宜野湾間切新設以降の“村名”として、浦添間切に「かよく・宜湾・かミ山・加数・志ゃな・大志ゃな・内ミな・喜友名・あら城・いさ」、中城間切に「前ふてま・寺ふてま」、北谷間切に「あきな」がある。先の三間切から割かれた“村”がそれらの“村々”に相当し、「真志喜」村が新たな“村”に相当する。

1908年(明治41)「沖縄県及島嶼町村制」の施行により、従来の間切は町・村に、村は字に改められた、宜野湾間切は宜野湾村となる。宜野湾村の戸数は2,401戸、人口は11,184人を数え、1939年(昭和14)には、志真志・長田・愛知・赤道・中原・上原・真栄原の7つの屋取集落が新たな“字”として設置され、1943年(昭和18)には真栄原から佐真下が分離して新たな“字”が設置された。今次大戦を経て、1955年段階で18,469人の人口も1960年3月には3万人を越え、1962年7月1日に宜野湾市に昇格し、1964年2月には戦後の混乱期の産物である対人的行政区を、地域を明確にした20の行政区に分割統合している。

市制施行後も市域の市街化傾向は急激をきわめ、嘉数ハイツ・大謝名団地・上大謝名区の自治会が新設されるにおよび、宜野湾市は都合23自治会20行政区によって編成されるようになった。さらに、「那覇広域都市計画圏」において軍用地を除く市全域が市街化区域に指定されることとなった。これに併せて、西海岸の公有水面埋め立てに伴うコンベンションセンター・市営球場などの公共施設の整備により、宜野湾市は新しい市街地として発達している状況にある。宜野湾市の総世帯数は、2006年4月現在、36,021世帯、人口は89,532人となっている状況で年々増加傾向にあると言える。現在、宜野湾市は将来の都市像“ねたてのぎのわん”の実現に向けて、経済の自立＝コンベンション・リゾート都市の形成、生活・居住の自立＝ハイアアメニティ都市の形成、文化の自立＝国際学園文化都市の形成を柱とする諸公共事業が推進されている。

第2節 自然的環境

宜野湾市の地形は、4つの海岸段丘からなる。第1面は、比屋良川河口右岸から宇地泊・大山・伊佐に連なる標高3～30m(低位段丘下位面)の海岸低地で、第2面は、海岸低地から崖や急斜面となって比高5～10m程上方になる大山・真志喜・宇地泊・伊佐一帯で、標高30～40m(低位段丘上位面)の石灰岩段丘をなす。第3面は、キャンプ瑞慶覧から普天間飛行場基地へと延びる標高50～90m(中位段丘下位面)の石灰岩段丘で、普天間飛行場基地の滑走路建設の際に大部分が改変されたが、1950年米軍作成地形図では、標高60～80mの地形が500mの幅で続いている。第4面は、標高90m以上(中位段丘上位面)の高位置で、野嵩のヒージャーバンタ～沖縄国際大以東に残存し、代表的なのは赤道から宜野湾の緑地帯である。石灰岩段丘縁辺部には、洞穴・湧泉が発達し、洞穴は第3段丘や第4段丘の周縁に点在、湧泉は第2段丘や第4段丘の麓部に多い。

地質は、泥岩(クチャ)の島尻層群と、不整合に覆う琉球石灰岩層、海岸低地の沖積層で形成される。島尻層群は、標高80～120mの位置の丘陵地に発達しており、その上層には肥沃なジャーガルが被さっている。琉球石灰岩層は、第3面以下に発達する。石灰岩層上部にはマージが堆積し、島尻層群と石灰岩層の境界一帯は、地質・地形の湾入・起伏が著しく、シマシガーやシリガーラなどの小河川によりブロックが分かれる。

嘉数タウンヤマ遺跡は、ウィーヌヤマと称される石灰岩堤からなる丘陵とウチグスクと称される円錐カルストからなる小丘陵との間にあり、標高62～75mの緩斜面状の小丘陵に位置する。

第3節 歴史的環境

沖縄諸島に人類が住み着いたのは現在から約3万年前とされ、宜野湾市では大山洞穴から「大山洞人」と称される20歳前後の男性の下顎骨片が発見されている。このほかにも、普天満宮洞穴遺跡等においてリュウキュウムカシキオンやムカシキオン等の化石動物が発見されている。

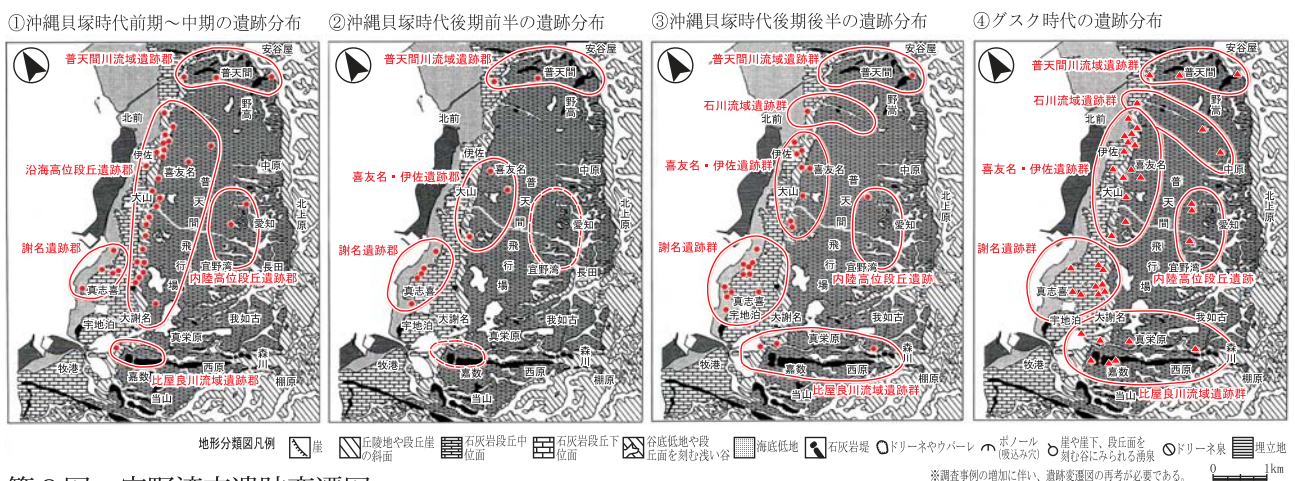
現在から6,000～7,000年前より、沖縄諸島に土器や石器などの技術を用いた生活文化が登場する。この文化は、沖縄固有の独自性が強いことから、九州や本州の縄文・弥生等の時代区分とは別に沖縄貝塚時代と称され、同時代は遺跡の立地・出土遺物等の違いから早期・前期・後期に大別されている。前期は、沖縄諸島域に当時の土器形式が広く分布することから、定着的な集団が各地域に形成される時期と考えられ、中期は、拠点的な大規模集落が平地帯に展開し、小規模遺跡が周縁に点在する。後期は、海岸低地の砂地にも居住域が拡散し、その規模も一律的に大きくなっていくようである。

12～15世紀に及ぶグスク時代は、農耕を基礎とする社会が形成・発達した時期である。農耕の基盤である土地・その生産を支える道具の入手や製作・同時期に展開された日本や中国・朝鮮・東アジア地域との交易などを通して各地域の集団は共同化し、その中から“按司”と称される在地支配者層が出現する。按司を中心とした各地域の集団は、互いの在地の権益を守り、且つ、それを拡大させるために相互に抗争を繰り返しながら淘汰していき、14世紀頃には中山・山北・山南の3つの勢力が拮抗するようになる。市域のグスク時代の遺跡は、迫地や河川流域の谷底低地を控える平地・丘陵斜面・段丘縁の高所に立地しており、市域の伝統的集落である近世の“村”の形態がこの時期に端緒が求められる。

グスク時代以降は、第一尚氏、第二尚氏王統による中央集権の古代国家の確立、1609年の薩摩藩島津氏の侵攻等、幾通りかの過程を経て近世基盤型集落へと変化させ市域の伝統的村落や18世紀以降の屋取集落が形成されていく。

近代以降は、1872年に琉球藩、1879年には沖縄県の設置が強行され、1881年(明治14)6月には沖縄県庁の中部支所として中頭郡役所が普天間に移設された。併せて中頭郡教育事務所、中頭郡組合農事試験場などの官公署が設置され、市域は本島中部地域の政治・経済・教育の中心となる。1902年(明治35)には首里から普天間に至る普天間街道、1922年(大正11)には県営鉄道嘉手納線(軽便鉄道)が開通し、利便性は一層高まりをみせた。1908年(明治41)の「沖縄県及び島嶼町村制」の施行により間切は町・村に、村は字に改められ宜野湾村となる。また、屋取人口の社会的増加等もあり、新たな字が分離・新設された。

先きの大戦により本市域も壊滅的な打撃を被り、戦後の軍用地接收と度重なる基地造成によって市域の景観は大きく変貌した。他地域に比べ、僅かに焼失を免れた野嵩地区が市域住民をはじめ以南の戦闘地域住民の収用所となった。1946年9月以降、帰住が許可され、社会基盤の復活が果たされると米軍基地関連産業の活況により市域の人口も急増した。1962年7月1日には市に昇格し、1964年2月には対人的行政区の地域を明確にした20行政区に分割統合された。



第2図 宜野湾市遺跡変遷図

第4節 嘉数地域の位置と環境

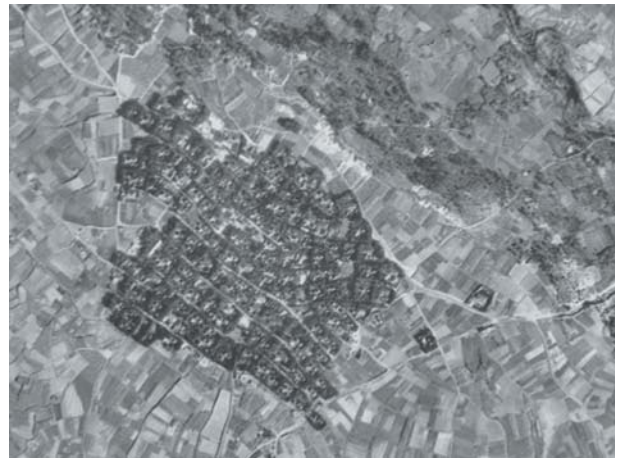
嘉数地域の概況

嘉数地域は、方言で「カカジ」と称されており、近世の首里王府によって編纂された『おもろさうし』巻十五には、「かかずもりぐすく」と聖地ウィーヌヤマの歌謡が見られることでも知られている地域である。

嘉数集落の北側には大謝名、北東側には真栄原・佐真下、西側から南東側にかけて浦添市に隣接しており、旧嘉数村の頃の小字には伊礼原・内城原・後原・嘉数原・前原・東原・東門原・仲嘉原・比屋田原・上栄茶原・水玉屋原・西原があったが、昭和14年の村行政区画設置に基づき、西原が佐真下に、仲嘉原・比屋田原・上栄茶原・水玉屋原が真栄原に分離されている。旧集落は嘉数原にあり、旧来の碁盤目型集落の面影を残した数少ない集落である。集落の後方にはウィーヌヤマ（嘉数高台）があり、その北麓を比屋良川が流れ、東側のウシヌクス坂から浦添当山に至る道路は、旧並松街道であった。

嘉数地域に残る伝承によると、小字後原と同内城原に集落があり、その2つの集団が嘉数原に移動合併して旧嘉数村を形成したとされ、慶長検地時には既に「賀数」（浦添間切）は存在していたとされている。現在の嘉数集落の大半は伊礼原・内城原・嘉数原に集在しており、1979年（昭和54）には伊礼原を中心とした新興住宅地に嘉数ハイツ自治会が設置されている。

戦前までの嘉数は、ほとんどが純農業集落で家畜も盛んであった。畑作は甘藷が主で、ミーゾーキ（箕）等の竹細工も盛んで、嘉数ソーキとしても有名であった。



図版2 戦前の旧嘉数村（昭和20年米軍撮影）



第3図 宜野湾間切嘉数村全圖（明治36年）一部加筆

嘉数トウンヤマ遺跡と周辺遺跡

嘉数地域にて確認されている遺跡には、テラガマ洞穴遺跡・前原遺跡・内城原遺跡・内城原第二遺跡・内城原洞穴遺跡・内城原遺物散布地・後原遺物散布地・ウィグスク遺跡・トウンヤマ遺跡・ウチグスク遺跡・ミーガー遺跡・ジトゥーヒヌカン祭祀遺跡・トーバルヌヤマ祭祀遺跡・比屋良川流域古墓群・後原古墓群・内城原古墓群・後原石畳道・シュイワタンジ古道・嘉数91高地戦跡の19遺跡が確認されており、これらの遺跡の時代や時期・立地・内容・現況・保存状況等の詳細については、第4図及び下記する一覧（第1表）を参照されたい。

周辺遺跡としては、昭和14年の村行政区画設置以前の旧嘉数村の小字であった上栄茶原（現真栄原）のアガリイサガマ洞穴遺跡・比屋川橋、水玉屋原（現真栄原）や比屋田原（現真栄原・我如古に分割）のナガサクガマ遺物散布地がある。周辺地域の遺跡としては、大謝名前原第一・第二遺物散布地のほか、大謝名黄金森グスク遺跡・大謝名カンジャーガマ岩陰遺跡がある。

第1表 嘉数地域の埋蔵文化財包蔵地一覧

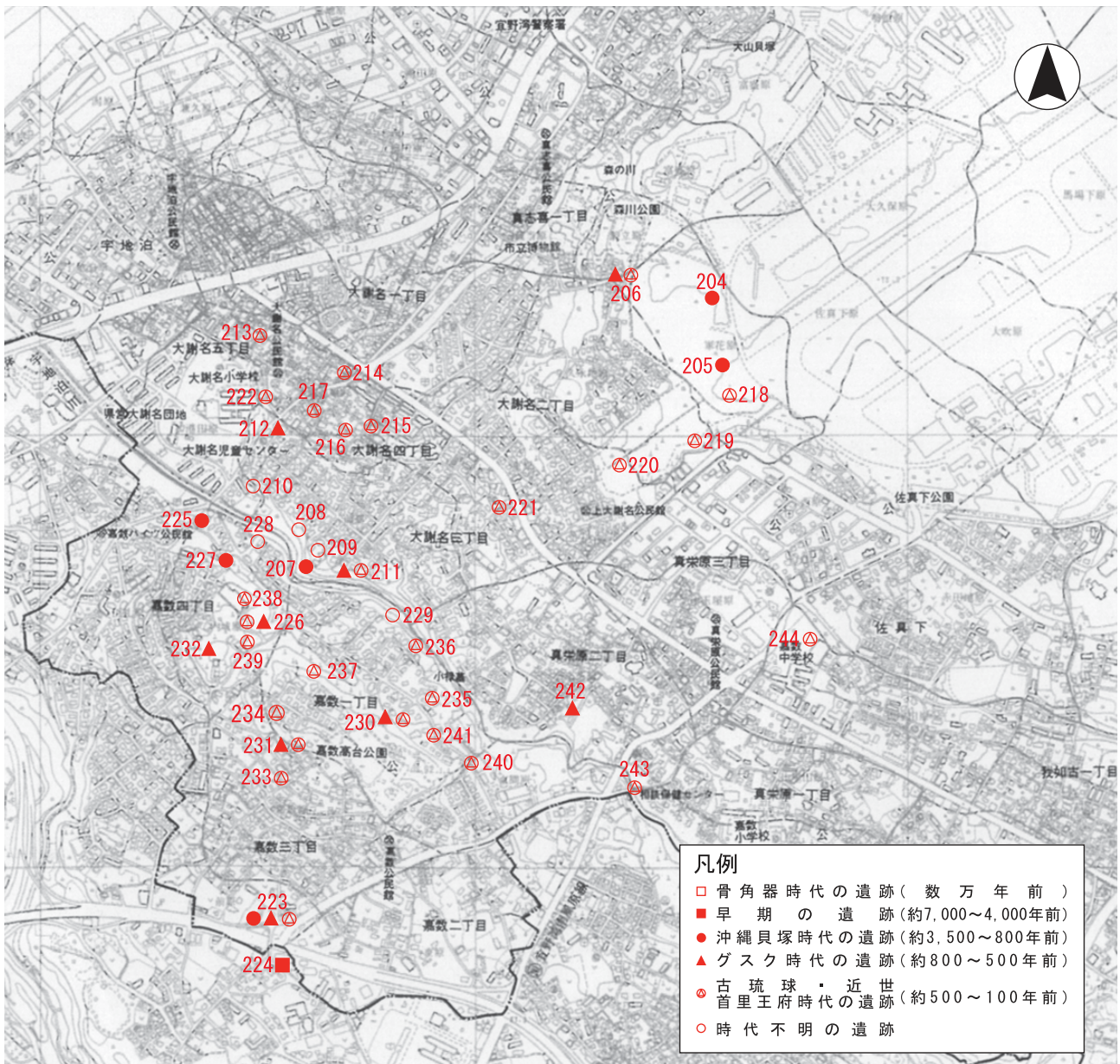
大字	遺跡名	非内器時代	早期	沖縄具塚時代				グスク内代古遺跡	近世琉球	近代沖縄	立地 (右上数値は標高、単位:m)	内容説明	現況	保存状況
				前期	中期	後期後半	後期後半							
223	テラガマ洞穴遺跡	?					+	◎ ^{#2}	◎ ^{#2}	中位段丘下位面の石灰岩丘、洞穴 ⁷⁷	^{#1} 石器製作跡?、 ^{#2} 祭祀場跡	拝所	良好	
224	前原遺跡		+	*						中位段丘下位面の石灰岩丘、洞穴 ^{73~80}	[#] 性格不明	原野、国道	不明	
225	内城原遺跡				+	*				中位段丘下位面の丘陵斜面 ^{6~21}	[#] 性格不明	原野、宅地	不明	
226	内城原第二遺跡							◎ [#]	◎ [#]	中位段丘下位面の平地 ⁵⁷	[#] 生産遺跡	原野	良好	
227	内城原洞穴遺跡						+	*		中位段丘下位面の段丘崖、洞穴 ¹⁰	[#] 地点具塚形成	宅地	不明	
228	内城原遺物散布地						?	*		中位段丘下位面の活断層 ^{30~28}	[#] 遺物散布地	宅地	不明	
229	後原遺物散布地						?	*		中位段丘下位面の活断層 ³⁰	[#] 遺物散布地	宅地	不明	
230	ウィグスク遺跡							+	◎ ^{#2}	中位段丘下位面の石灰岩丘 ^{79~94}	^{#1} 城館跡?、 ^{#2} 祭祀場跡	公園、拝所	改変	
231	トウンヤマ遺跡							◎	◎	中位段丘下位面の石灰岩丘斜面 ^{2~75}	[#] 祭祀場跡	拝所、原野	良好	
232	ウチグスク遺跡							+	*	中位段丘下位面の石灰岩丘 ^{60~73}	[#] 性格不明	原野、私立病院	不明	
233	ミーガー古湧泉							△	◎	中位段丘下位面の石灰岩丘斜面 ²⁸	[#] 井泉跡、祭祀場跡	洞穴、原野	残存	
234	ジトゥーヒヌカン祭祀遺跡							△	△	中位段丘下位面の石灰岩丘斜面 ⁷¹	[#] 祭祀場跡	拝所、原野	改変	
235	トーバルヌヤマ祭祀遺跡							△	△	中位段丘下位面の平地 ⁵⁷	[#] 祭祀場跡	宅地、拝所	改変	
236	比屋良川流域古墓群							◎	◎	中位段丘下位面の活断層 ^{12~61}	[#] 墓地	墓地、原野	良好	
237	後原古墓群							◎	◎	中位段丘下位面の石灰岩丘 ^{51~82}	[#] 墓地	墓地	良好	
238	内城原古墓群							◎	◎	中位段丘下位面の石灰岩丘 ^{41~73}	[#] 墓地	墓地	良好	
239	後原石畳道							△	△	中位段丘下位面の石灰岩丘 ^{53~64}	[#] 伝道跡、石畳道	里道	残存	
240	シュイワタンジ古道							△	△	中位段丘下位面、同の丘陵斜面 ^{56~66}	[#] 伝道跡、石畳道	里道	残存	
241	嘉数91高地戦跡								◎	中位段丘下位面の石灰岩丘 ^{79~94}	[#] 戦争遺跡	公園	残存	



第4図 嘉数周辺地域の遺跡情報図1

第2表 嘉数周辺地域の遺跡

大字	遺跡名	大字	遺跡名	大字	遺跡名
大謝名	204 軍花原遺跡	大謝名	218 軍花原古墓群	嘉数	231 トウヤマ遺跡
	205 久永地原遺物散布地		219 久永地原第一古墓群		232 ウチグスク遺跡
	206 軍花原第二遺跡		220 久永地原第二古墓群		233 ミーガー古湧泉
	207 大謝名洞穴遺跡		221 東原古墓群		234 ジトゥーヒヌカン祭祀遺跡
	208 前原第一遺物散布地		222 カンジャーガマ岩陰遺跡		235 トーバルヌヤマ祭祀遺跡
	209 前原第二遺物散布地(旧称比屋良川沿い①地点)	223 テラガマ洞穴遺跡	236 比屋良川流域古墓群		
	210 港田原遺物散布地	224 前原遺跡	237 後原古墓群		
	211 黄金森グスク遺跡	225 内城原遺跡	238 内城原古墓群		
	212 大謝名原古瓦散布地	226 内城原第二遺跡	239 後原石畳道		
	213 ヤマトウッガー古湧泉	227 内城原洞穴遺跡	240 シュイワタンジ古道		
	214 クシヌカー古湧泉	228 内城原遺物散布地(旧称比屋良川沿い②地点)	241 嘉数91高地戦跡		
	215 ウィーヌヤマ祭祀遺跡	229 後原遺物散布地(旧称比屋良川沿い③地点)	242 アガイサガマ洞穴遺跡(旧称新町洞穴遺跡)		
	216 ウカマ祭祀遺跡	230 ウィーグスク遺跡(旧称嘉数遺跡)	243 比屋良川橋		
	217 ジトゥーヒヌカン祭祀遺跡		佐真下		244 ナガサクガマ遺物散布地



第5図 嘉数周辺地域の遺跡情報図2

第三章 発掘調査の成果

第1節 調査区の設定と層序

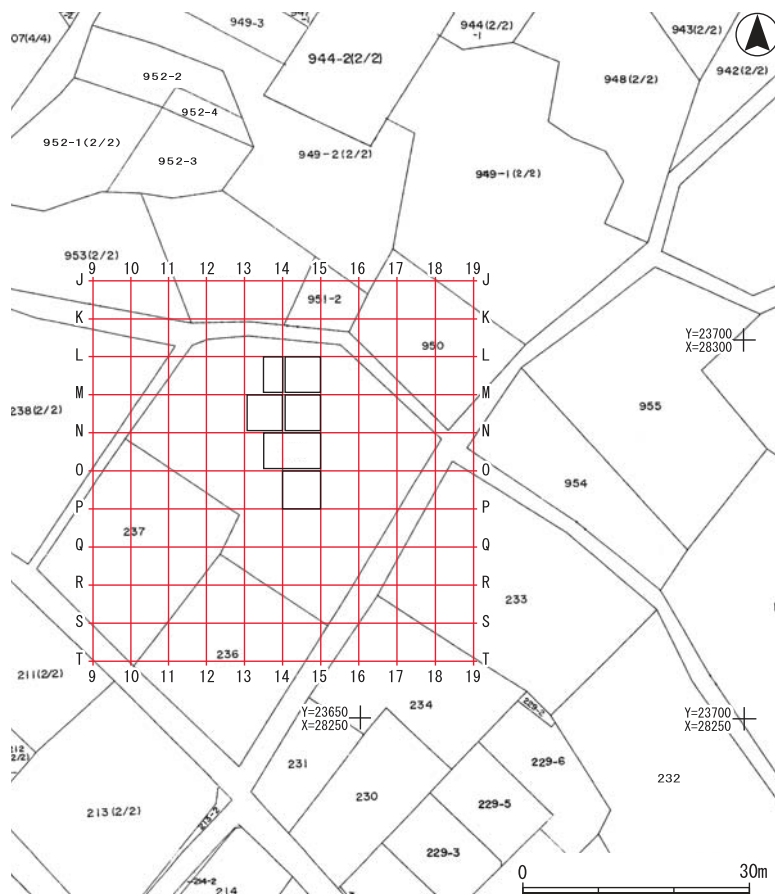
1. 調査区の設定

調査区の設定については、トウン（嘉数之殿）と称される嘉数集落の拝所から、南方向の軸線を基軸としてアルファベット数字を、それに直交する形で東西に算用数字を5m毎に付して任意の作業軸を設定した後に、北東隅の交点に各グリッド番号をL-15・M-15のように指示している。さらに、地籍併合図や登記簿図面等をもとに境界測量を行い、隣接する住宅塀や市道・里道等との境界を把握し、その損壊防止に努めたほか、GPS測量を導入して調査区内の基準点測量と水準点観測も併せて実施することで、国土座標系（旧座標 第XV座標系）の座標地を確認し、調査範囲並びに位置を確定した。また、西側隣地の畑地についても、地権者並びに土地使用者より試掘調査の実施についての許可を得たことから、試掘調査実施に向けた簡易な地形測量を実施した。

なお、今回の調査は、嘉数トウンヤマ遺跡包蔵地内の国有地管理処分が予定される地所の範囲確認調査であったことから、当該遺跡の範囲や時期・時代等の性格を把握することが目的とされたため、基軸となる15ラインを中心として西側のL-14～N-14グリッドとL-15～O-15のみを発掘調査の対象とし、残りについては競売後に予想される本発掘調査に委ねることとした。



第6図 発掘調査地区位置図 (S=1/5000)



第7図 グリッド設定図 (S=1/1000)

2. 基本的層序

今回の嘉数トゥンヤマ遺跡における範囲確認調査では、石灰岩基盤層を含めて基本的に9枚の層序が確認できている(第9図参照)。前述のとおり、バックホーにて表土を除去したところ、調査グリッド全面にて旧耕作土が確認されたほか、国有地化以前の開発行為で、一部は遺構面まで大規模に攪乱されていることが確認されており、僅かに遺構を覆土する堆積層が残存する状況であった。また、検出された各遺構は、地山であるマージを検出面としており、下位の状況としては、普天間飛行場基地内において設定されている基本層序のV層(マージ)～VIII層(石灰岩基盤層)が把握されており、平成13年度以降、継続的に調査する普天間飛行場基地内の層序観が基地外においても確認された初の事例となっている。以下に、今回の調査にて確認された嘉数トゥンヤマ遺跡の基本的層序について記す。あわせて西側畑地にて実施した試掘調査の層序観についても記することとする。

〈範囲確認調査区〉

I a層 腐植土層。暗褐色混礫土層で、改変後の客土上層が腐食土壌化した層。7.5YR4/1

I b層 客土層。茶褐色混礫土層でコンクリ片・ゴミ等の現代遺物が散見される。7.5YR4/1・10YR4/2

II a層 旧耕作土層①。畑としての終期か。灰褐色土層で1cm程度の石灰岩礫のほか、焼土や炭化物も含まれている。基本的に耕作土層であることから、粒形は小さい。2.5 Y R 4/1・10 Y R 3/1～4/1

II b層 旧耕作土層②。II a層以前の耕作土。暗灰褐色混礫土層で、1cm程度の石灰岩礫のほか、粒形の小さい焼土を多量に含んでいる。II a～b層のいずれも耕作土層であることから、混入物の粒形は攪拌されたことに由来する団粒化を呈している。2.5 Y R 4/1・10 Y R 4/1～5/2

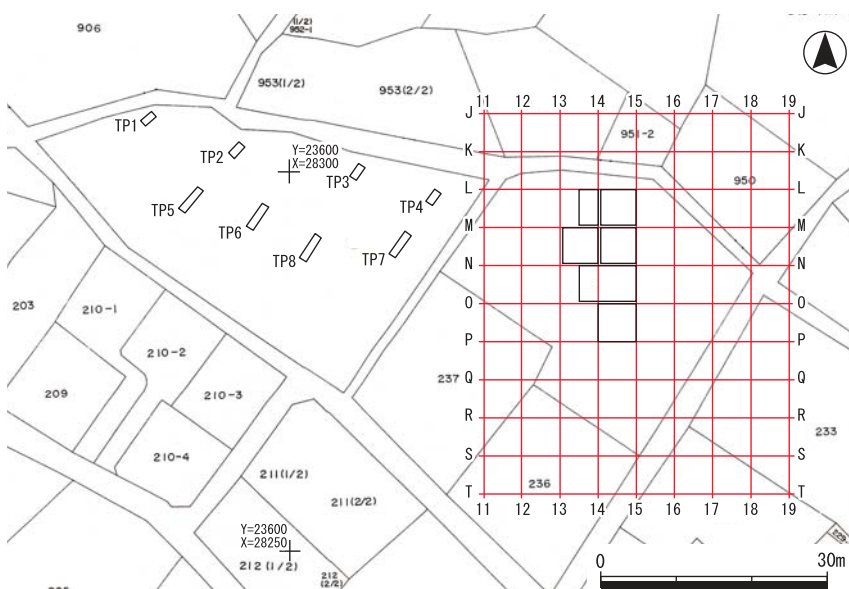
溝状礫敷遺構①～② L-14～15グリッドやM-15グリッドにて検出された溝状礫敷遺構①及び②の敷地造成層または覆土層。上位層であるII a～b層とは明らかに様相が異なり、黒褐色土で混入物が非常に少ない。7.5YR4/1

V層 明褐色の粘土質シルト(普天間飛行場基地基本層序)。

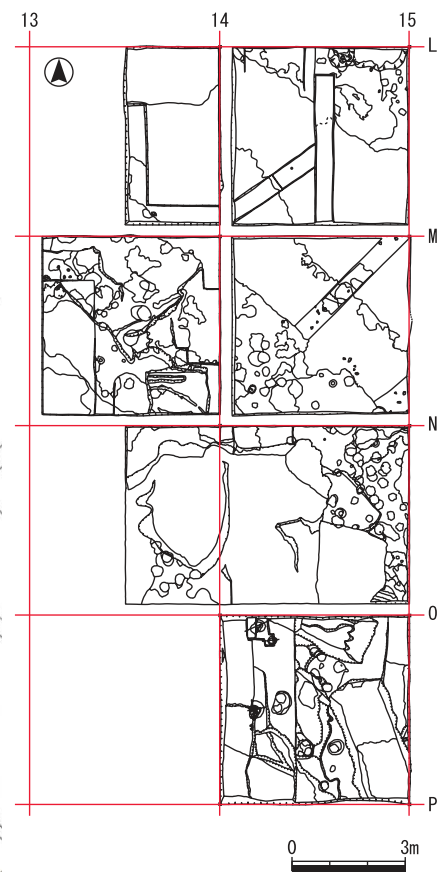
VI層 鈍い明黄褐色で上方細粒化する砂質シルト(同上)。

VII層 暗褐色の粘土質シルト。VIII層に沿うように堆積(同上)。

VIII層 黄灰白色を呈する琉球石灰岩を構成する石灰岩(同上)。



第8図 調査区設定状況 (S=1/1000)



(S=1/200)

〈西側畑地試掘調査区 基本的層序〉

範囲確認調査区の西側には小作農の行われている農地があり、葉菜や豆類等の畑作が営まれているが、地権者と小作者の御理解と御協力をいただき、農閑期の時期に試掘調査を実施した。当該地の地形条件は南西方向への緩斜面をなすことから、西側畑地の前面において南西方向に軸を持つ試掘坑を8箇所設定した。これらの試掘坑には、1～8のTP No.を付して記録している。いずれの試掘坑についても耕作に伴う攪乱が認められており、プライマリーな遺物包含層等は確認されていない。なお、試掘調査を実施する以前に、地表面に散見される遺物の表面採集を行っている。以下に、各試掘坑の共通層序の概要を記す。

- 1層 耕作土層。試掘調査時点での耕作面。暗褐色混礫土層で焼土粒・炭化物粒僅かに含む。
- 2層 耕作土層。耕作機の攪拌により形成された1層以前の耕作土層。茶褐色混礫土層で、1層に比して焼土粒を多く含む。炭化物粒はあまり見られない。
- 3層 耕作土層。2層以前の耕作土層で耕作機により攪拌されている。やや粘質の暗褐色混礫土層で、焼土粒・炭化物粒・石灰岩小礫を多く含んでいる。
- 4層 耕作土層。遺構検出面であるマージ上層を大きく巻き上げる状態で攪拌された層。橙褐色混礫土層で、マージ塊や大きめなマージ粒を含んでいるほか、焼土粒や石灰岩小礫を含む。初期の作土化の痕跡が顕著である。
- 5層 地山面。いわゆるマージで、普天間飛行場基地の基本層序であるV～VII層に対応する層である。
- 6層 基盤層である琉球石灰岩。普天間飛行場基地の基本層序であるVIII層に対応する層である。



TP3 南壁



TP3 西壁



TP4 東壁



TP4 検出ピット

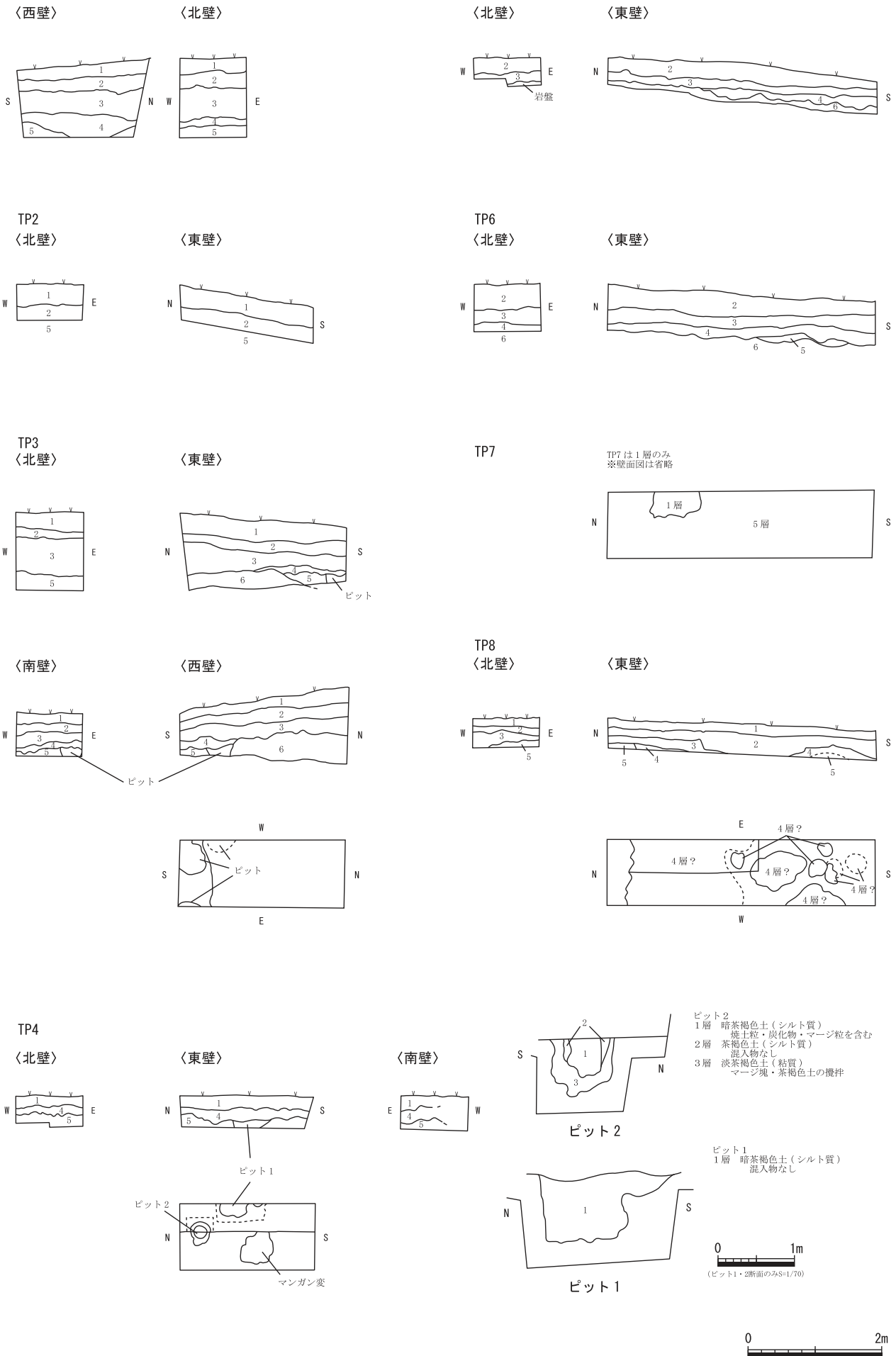


TP8 北壁



TP8 南西より

図版3 西側畑地 試掘坑堆積状況



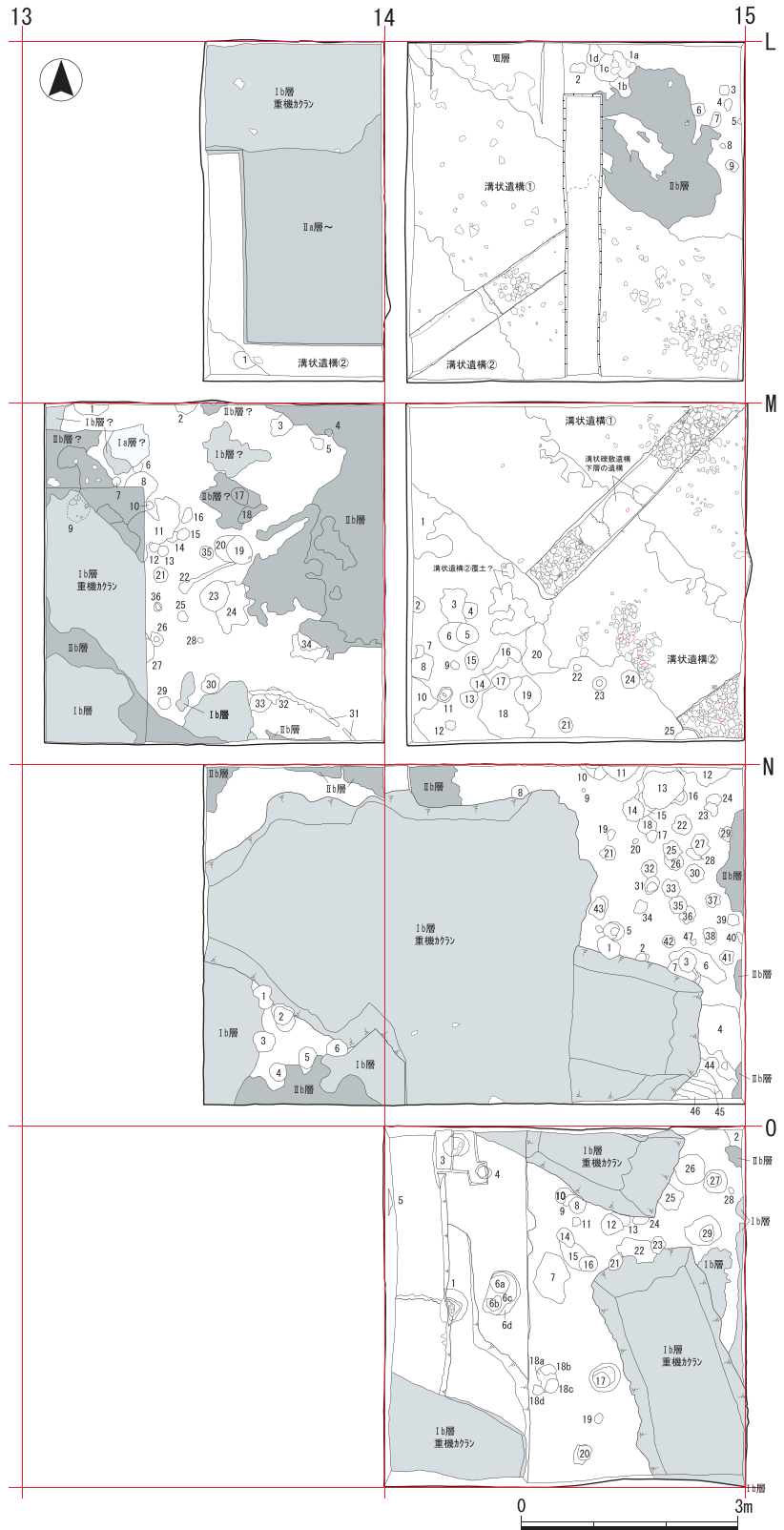
第10図 西側畑地 TP 断面・平面 (S=1/80)

第2節 遺構

これまでも述べてきたように、表土除去後に調査グリッド全面において旧耕作土層が確認されたほか、国有地化以前の開発行為によって、一部は遺構面まで大規模に攪乱されているのが確認されており、そのことを示すバックホーによる攪乱土坑が無数に存在する状況であった。言うまでもなくプライマリーな遺物包含層についても、今回の調査においては確認することができなかったことから、当初より、調査区内の遺構の保存状況は芳しくないことが予想されていた。しかしながら、予想に反して今回の範囲確認調査では、住居跡や倉庫跡等の掘立柱建物跡が想定される多くの

ピット群や土坑が集中的に検出されており、これらの中には柱痕が明瞭なピットについても複数例が認められ、建物の平面的プランについても検討が可能な状況であった。その他にも、規則的に列状をなすピット群が検出されており、当該遺構は昨今の発掘調査の事例からグスク時代の畑跡が考慮されている。また、グスク土器複数個体が一括して検出された土坑も確認されており、周辺のピットからは接合資料も検出されていて特徴的であると言える。これらは、いずれもグスク時代(中世)が比定されている遺構である。また、近世以降に成立した嘉数村の旧道が想定される溝状礫敷遺構も2条検出されており、現在の里道とおおよそ平行する形で並列している状況であった。

このような状況から、嘉数タウンヤマ遺跡が中世から近世～近代にかけての複合遺跡であることが把握されたわけだが、今回の調査は遺跡の範囲や時期・時代等の性格を把握することが目的とされた範囲確認調査であることから、これらの確認された各種の遺構については、基本的に競売後に予想される本発掘調査において詳細な調査を実施することとし、N-15グリッド内のバックホーによる攪乱土坑において認められた断面情報が把握できる遺構のみを調査対象としたことを断っておく。以下に、確認された主要な遺構についての詳細を記す。



第11図 主要遺構検出状況図 (S=1/100)

第3表 ピット法量一覧

グリッド	遺構番号	法量(cm)			形状	出土遺物	備考	
		長径	短径	深さ				
L14	1	36	17	—	楕円形			
	1a	44	30	—	不定形			
	1b	27	21	—	不定形	青磁		
	1c	38	35	—	不定形			
	1d	31	23	—	不定形			
	2	23	11	—	隅丸方形			
	3	13	13	—	隅丸方形			
	4	16	10	—	不定形			
	5	—	—	—	—			
	6	17	17	—	隅丸方形			
L15	7	21	13	—	不定形			
	8	7	6	—	円形			
	9	18	14	—	隅丸方形			
	1	49	—	—	—			
	2	31	—	—	—			
	3	32	27	—	不定形			
	4	11	10	—	楕円形			
	5	20	17	—	不定形			
	6	17	12	—	円形?			
	7	—	11	—	楕円形?			
M14	8	45	41	—	隅丸方形			
	9	30	30	—	楕円形	石灰岩礫焼石		
	10	11	10	—	楕円形			
	11	—	—	—	不定形			
	12	15	14	—	楕円形			
	13	15	12	—	楕円形			
	14	14	13	—	楕円形?			
	15	19	15	—	楕円形			
	16	23	12	—	不定形			
	17	28	21	—	楕円形			
	18	45	18	—	不定形			
	19	39	32	—	楕円形			
	20	—	35	—	隅丸方形?			
	21	21	21	—	楕円形			
	22	—	—	—	溝状?		円弧状遺構?	
	23	42	36	—	楕円形			
	24	71	51	—	不定形			
	25	15	12	—	楕円形			
	26	21	19	—	楕円形		柱穴(柱痕)?	
	27	40	—	—	不定形			
	28	7	7	—	楕円形			
	29	17	17	—	円形			
	30	28	23	—	楕円形			
	31	—	—	—	溝状?		円弧状遺構?	
	32	20	19	—	楕円形			
	33	25	23	—	円形			
	34	52	—	—	不定形		柱穴(柱痕)?	
	35	20	20	—	楕円形			
	36	14	12	—	楕円形			
	M15	1	100	—	—	不定形		
		2	—	19	—	楕円形?		
		3	46	31	—	不定形		
		4	22	20	—	円形?		
		5	31	26	—	楕円形		
		6	—	40	—	楕円形?		
		7	17	9	—	不定形		
8		34	29	—	隅丸方形			
9		13	10	—	楕円形			
10		89	—	—	不定形			
11		23	17	—	楕円形			
12		13	12	—	楕円形			
13		25	21	—	楕円形			
14		25	19	—	隅丸方形			
15		24	19	—	楕円形			
16		53	34	—	不定形			
17		25	22	—	楕円形			
18		82	55	—	不定形			
19		50	37	—	隅丸方形?			
20		70	38	—	不定形			
21		20	18	—	円形			
22		10	8	—	楕円形			
23		19	18	—	円形		柱穴(柱痕)?	
24		26	25	—	円形			
25		35	—	—	円形?			
N14	1	37	26	—	楕円形?		植栽痕?	
	2	41	30	—	楕円形		植栽痕?・切合い?	
	3	31	30	—	楕円形		植栽痕?	
	4	25	24	—	円形		植栽痕?	
	5	29	23	—	楕円形		植栽痕?	
	6	27	24	—	円形?		植栽痕?	
N15	1	34	25	36	楕円形	グスク土器	柱穴(柱痕)?・第16図2	
	2	18	11	12	楕円形?	グスク土器	第16図9	

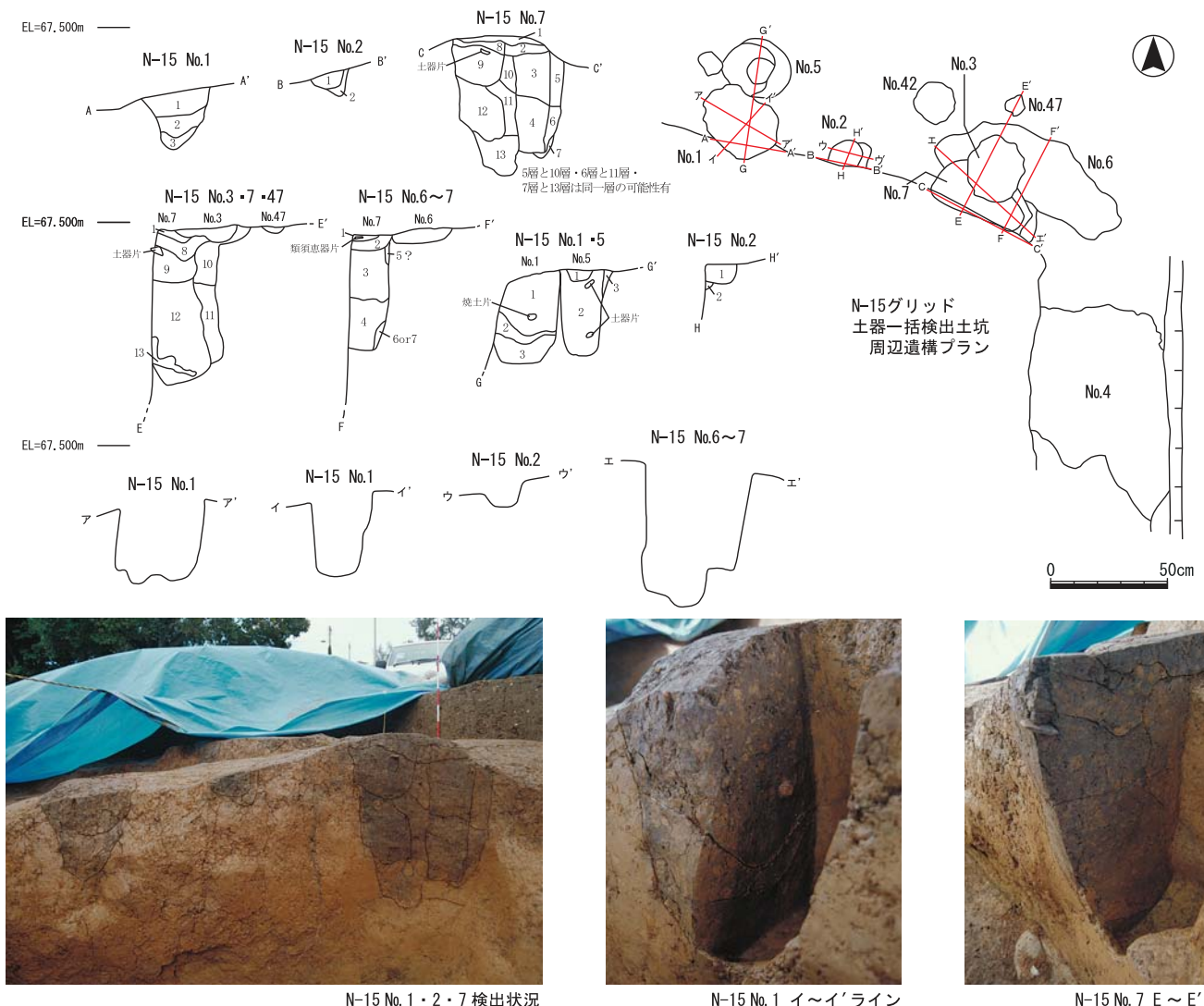
グリッド	遺構番号	法量(cm)			形状	出土遺物	備考	
		長径	短径	深さ				
N15	3	30	25	8	楕円形	グスク土器	植栽痕?	
	4	92	61	27	不定形	グスク土器	一括検出土坑・第16図1~12	
	5	30	25	37	楕円形	グスク土器	柱穴(柱痕)?・第16図1	
	6	87	23	8	不定形	グスク土器		
	7	42	—	69	楕円形?	グスク土器・須恵器	柱穴(柱痕)?・第16図13	
	8	23	22	—	円形		植栽痕?	
	9	5	5	—	円形			
	10	—	—	—	楕円形?			
	11	52	—	—	楕円形?			
	12	88	—	—	—			
	13	63	63	—	隅丸方形			
	14	30	27	—	楕円形		植栽痕?	
	15	—	—	—	—			
	16	—	—	—	楕円形?			
	17	16	14	—	楕円形		植栽痕?	
	18	25	24	—	隅丸方形?		植栽痕?	
	19	15	10	—	不定形			
	20	9	6	—	楕円形			
	21	20	18	—	楕円形		植栽痕?	
	22	28	28	—	楕円形		植栽痕?	
	23	21	12	—	不定形		植栽痕?	
	24	20	15	—	楕円形?		植栽痕?	
	25	25	22	—	隅丸方形		植栽痕?	
	26	27	23	—	楕円形?		植栽痕?	
	27	30	23	—	楕円形		植栽痕?	
	28	24	14	—	不定形		植栽痕?	
	29	—	17	—	楕円形?		植栽痕?	
	30	25	21	—	楕円形?		植栽痕?	
	31	26	18	—	楕円形?		植栽痕?	
	32	26	22	—	楕円形?		植栽痕?	
	33	27	24	—	楕円形		植栽痕?	
	34	18	14	—	楕円形		植栽痕?	
	35	26	24	—	楕円形		植栽痕?	
	36	25	20	—	楕円形		植栽痕?	
	37	19	16	—	楕円形		植栽痕?	
	38	23	20	—	楕円形		植栽痕?	
	39	17	16	—	楕円形		植栽痕?	
	40	—	10	—	—			
	41	18	17	—	楕円形		植栽痕?	
	42	16	16	—	円形		植栽痕?	
	43	28	22	—	不定形			
	44	—	—	—	溝状?		円弧状遺構?	
	45	—	—	—	溝状?		円弧状遺構?	
	46	—	—	—	溝状?		円弧状遺構?	
	47	10	8	—	楕円形			
	O15	1	48	40	59	円形?	グスク土器・ニービ塊	柱穴(柱痕)?・プラン2
		2	—	—	—	不定形	グスク土器、石器	
3		40	30	25	楕円形?			
4		24	20	16	円形			
5		40	—	57	—		柱穴(柱痕)?プラン1	
6a		26	24	—	楕円形			
6b		22	20	—	楕円形			
6c		60	40	—	不定形		柱穴(柱痕)?プラン1	
6d		60	46	—	不定形			
7		74	56	—	不定形			
8		24	18	—	楕円形		植栽痕?	
9		20	—	—	楕円形?		植栽痕?	
10		24	—	—	円形?		植栽痕?	
11		14	10	—	不定形			
12		32	28	—	楕円形			
13		24	15	—	楕円形?			
14		30	24	—	楕円形			
15		44	38	—	不定形			
16		24	24	—	楕円形			
17		45	40	—	円形		柱穴(柱痕)?プラン1	
18a		24	24	—	不定形			
18b		24	22	—	不定形			
18c		20	18	—	楕円形		柱穴(柱痕)?プラン2	
18d		15	12	—	楕円形			
19		16	14	—	楕円形			
20		30	28	—	楕円形			
21		30	18	—	不定形			
22		48	30	—	不定形			
23		22	18	—	楕円形			
24	24	—	—	隅丸方形?				
25	30	—	—	隅丸方形?				
26	37	37	—	円形				
27	31	31	—	円形		柱穴(柱痕)?		
28	10	10	—	円形				
29	47	42	—	楕円形		柱穴(柱痕)?		

1. ピット群と掘立柱建物跡

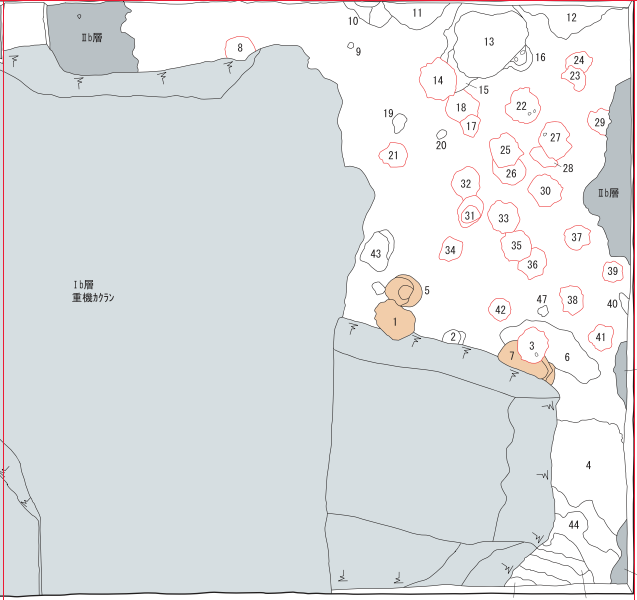
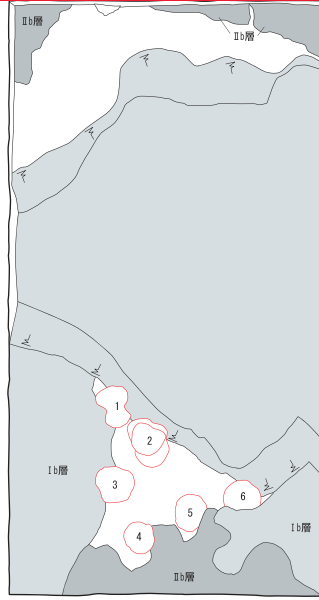
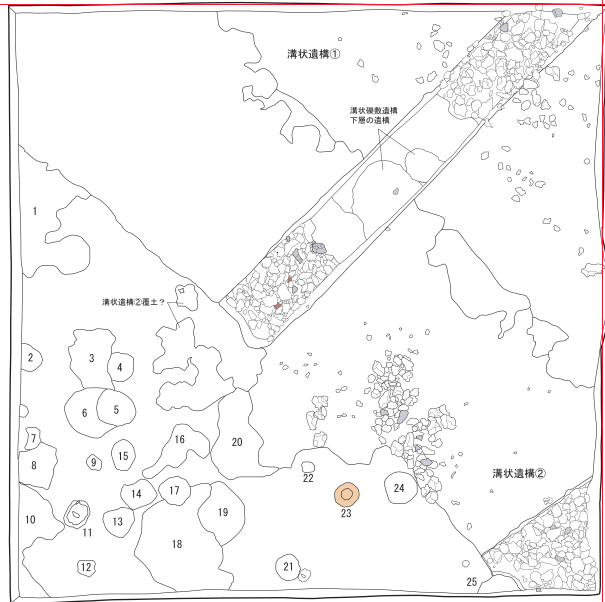
V層以降（マージ）の地山面にて159基のピット群が検出されている（第13図・第3表）。これらのピット群は他の遺構とともにグリッド設定範囲外の当該敷地全域に広がっている可能性が十分に想定される。ピット群159基の内訳は、後述する列状ピット群35基と柱穴等が想定される124基で、ここでは後者について述べる。平面形は円形・楕円形・隅丸方形・不定形を呈しており、多くが円形・楕円形で、M-14 No.26・34、M-15 No.23、N-15 No.1・5・7、O-15 No.1・5・6・17・18・27・29は柱痕が明瞭であり、掘立柱建物の柱穴が想定される。M-15の重機攪乱部分やO-15のサブトレンチにより損壊を受けた複数のピットを基礎資料とするべく調査・記録化を行い、積極的に平面プラン1・2を想定した（第12図）。直径20～30cmで深度40cm前後のタイプと直径40cm前後で深度60cm前後のタイプの規格性が窺える。

2. 列状ピット群

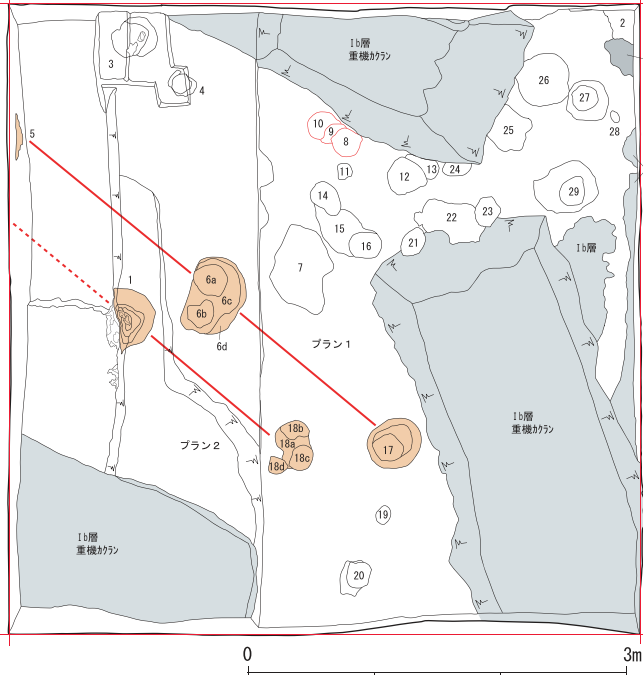
N-14～15・O-15において植栽痕と称される列状ピット群が検出されている。当該遺構は、グスク時代（中世）の畑跡が考慮されており、近年の発掘調査成果においても報告事例が増加傾向にある。集中的に検出されているN-15の状況からは上述のプラン1・2と同様に北西～南東の軸を有しており、直径20～30cm前後で、N-14やO-15検出の当該ピットの基軸・直径についても同様な状況が窺える。なお、今回の調査ではN-15 No.3のみを調査・記録化し、その他の列状ピット群については検出状況のみを把握しただけである。



第12図 N-15ピット平面図・断面図 (S=1/30)



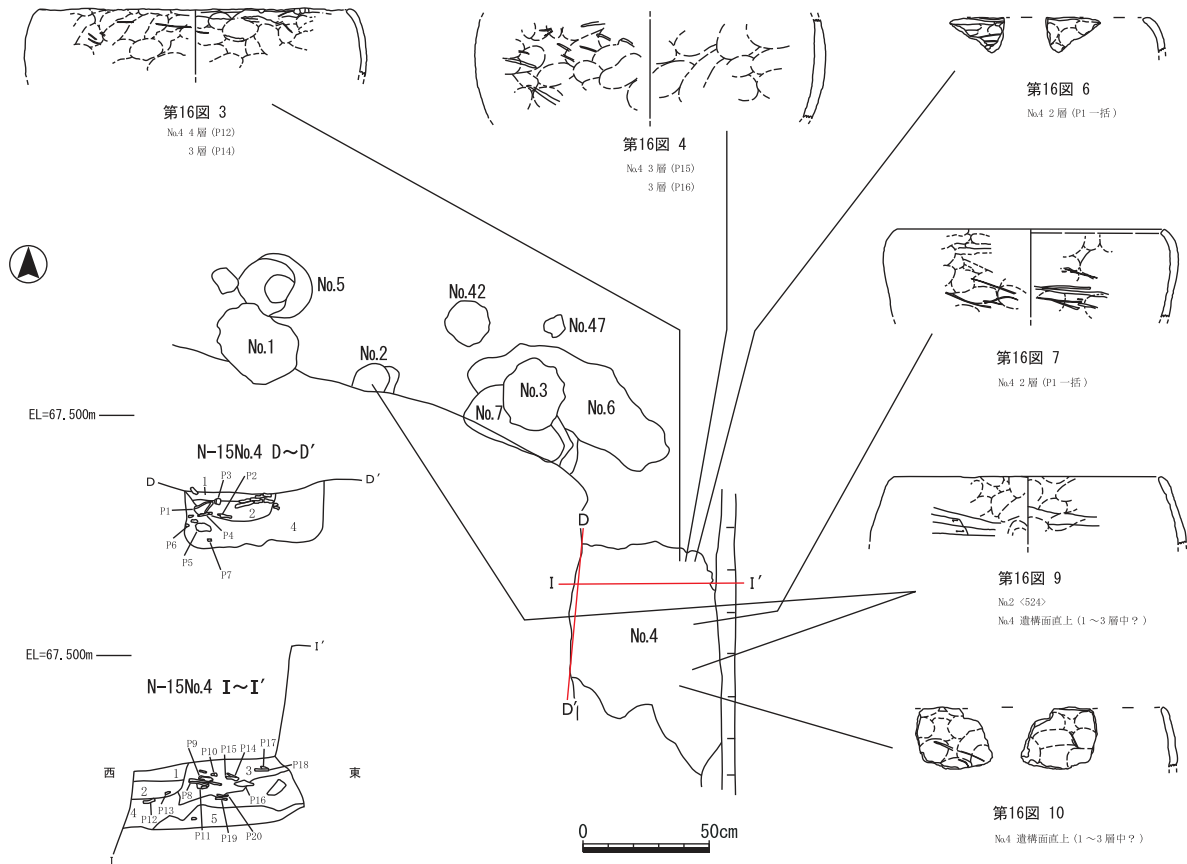
N-15 No. 7 F~F'ライン



第13図 ピット群検出状況図 (S=1/60)

3. 土器一括検出土坑

N-15 No.4 土坑において、グスク土器片が一括して検出されている。重機攪乱により全容は把握できないが、II b 層除去後の遺構検出時において、すでに上位面に多量の土器片が露出している状況であったことから、平面的な堆積層の分層を行い、北側 1/3 部分を半裁して堆積状況及び出土状況を図化した。また、土坑中央部分の 1～3 層中において集中する土器片についても図化して取り上げており（第 14 図）、残りについては本調査時において調査することとし、今回の調査成果から残存部分の最大限の情報を抽出する手法を検討することとした。これらの一括出土された土器片の詳細については後述するが、遺構の性格としては廃棄土坑が想定され、1～3 層中の出土数は全体の約 80% を占めており、完掘していないにも関わらず、No.4 土坑全体の 1/3 程度の出土資料で多くの接合が可能である。大部分が鍋であると思われ、口縁資料から少なくとも 10 個体以上はあるものと想定された（第 4 表）。また、質感・色調・焼成状況等の情報から 4 種に大別されたため、肉眼観察等による初期の分類に対する自然科学分析調査による精査を行っている（第 IV 章）。さらに、周辺のピットからも土器片が検出されており、それらが No.4 土坑より検出された土器片と接合することも確認されている。



N-15 No. 4 検出状況



グスク土器出土状況①

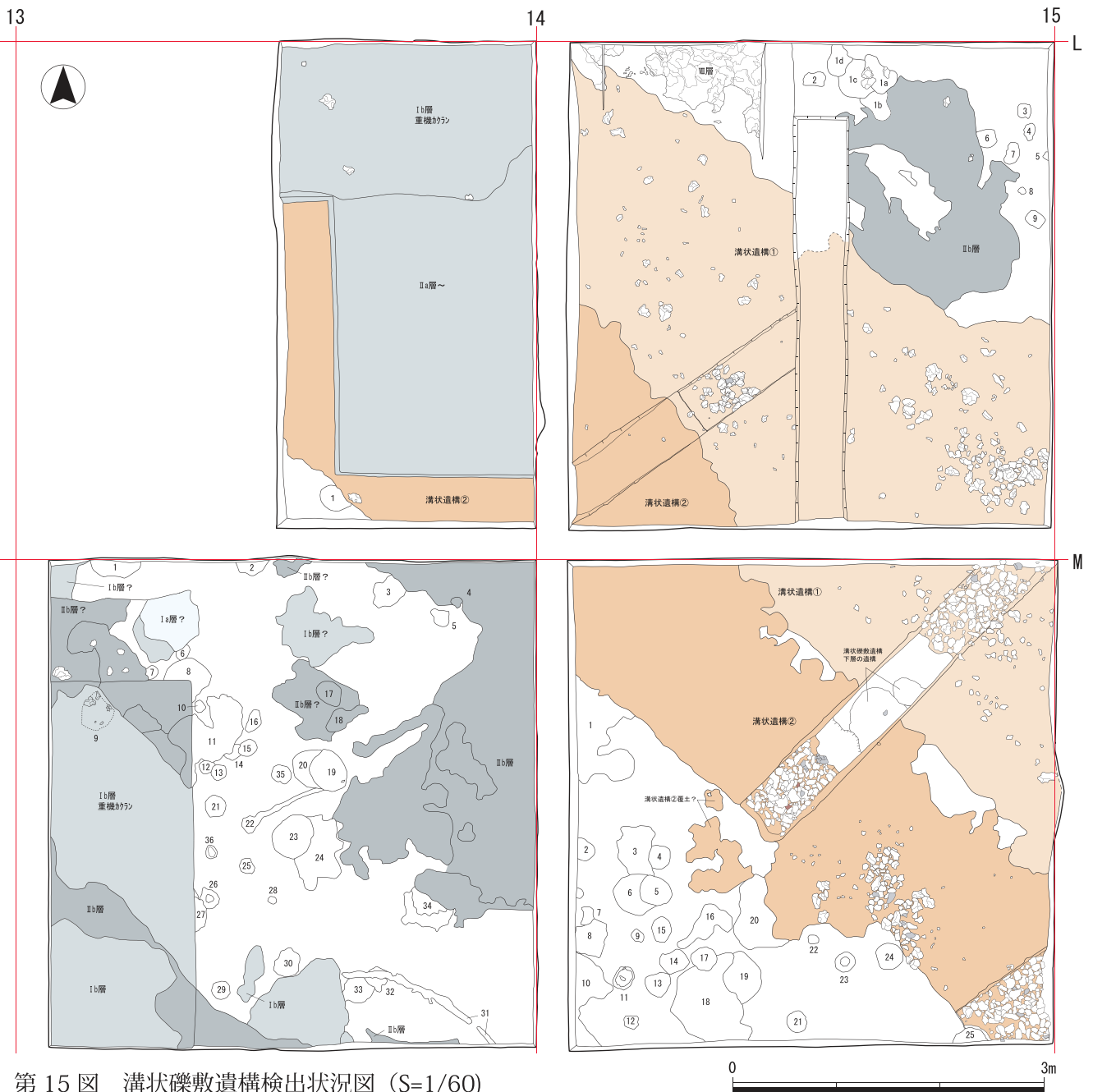


グスク土器出土状況②

第 14 図 土器一括検出土坑平面図・断面図 (S=1/30)

4. 溝状礫敷遺構

L-14～15・M-14～15において溝状の礫敷遺構が2条確認されている。これらは、近世以降に成立したとされる旧嘉数村の旧道が想定されており、現在も利用されている里道とおおよそ平行する形で2条とも検出されている。いずれも北西～南東に軸を持ち、M-15の北東～南西に設定した2つのサブトレンチにおける溝状礫敷遺構①～②の状況からは、溝状礫敷遺構②は溝幅が平均して1.5mと狭く、半円状に20～25cm程掘り下げた後、石灰岩礫を丁寧に充填している状況であったが、①は溝幅が2.5～4mと広く、5～10cm程の非常に浅い溝に雑に石灰岩礫を敷いている状況であった。さらに、両者の切りあい状況から溝状礫敷遺構①に先行して溝状礫敷遺構②が存在していたものと考えられ、溝状礫敷遺構②→溝状礫敷遺構①→現在の里道という変遷が推察できると言える。両者ともグリッド設定範囲外の北西～南東方向に延長して残存している可能性が十分に予想できる。また、溝状礫敷遺構①・②については、礫敷直上に青磁・白磁・褐釉陶器・黒釉陶器等の中世陶磁や沖縄産陶器等の近世以降の在地の陶器類が確認されており、青磁と沖縄産施釉陶器が顕著であった。さらに礫敷中には沖縄産施釉・無釉陶器のほか、アカムヌー等が含まれているのが確認されており、これらが旧道普請時に廃棄された可能性が考慮される。



第15図 溝状礫敷遺構検出状況図 (S=1/60)



O 15 グリッド西壁断面図



サブトレンチ東壁



O 15 No. 1 断面



O 15 No. 5 断面



M15 北壁断面



M15 東壁断面



N 15 No. 4 土器取り上げ後



発掘調査メンバー

図版 4 調査経過 2

第3節 遺物

今回の範囲確認調査にて出土した遺物は、グスク時代（中世）及び近世の時期の輸入陶磁器と在地の土器・陶器類が主体となっている。種別ではグスク土器・類須恵器・白磁・青磁・青花・中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器・三彩・鉄釉染付・瑠璃釉・黒釉陶器・タイ鉄絵・タイ産半練・本土産陶磁器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・アカムヌー・銭貨・ジーファー（簪）・玉・煙管・高麗系瓦・鍛冶関連遺物等がある（第4表）。調査以前の耕作に伴う攪乱により多くの遺物は細片化しており、遺物の接合状況についても非常に複雑で、表採や上位の攪乱層（I a～b）と耕作土層（II a～b）との層の上下での接合が顕著に見られ、平成18年度に実施した個人住宅建設及び土地造成に係る緊急発掘調査時の成果を現在整理中であるが、当然ながら接合が可能と思われる資料についても確認されており、今回整理した資料についても改めて精査した上で、接合・分類の再検討をすることとしている。なお、グスク土器については今回、遺構検出資料のみを対象としており、その他攪乱層や耕作土層等より出土した資料については分類済みだが未集計である。本報告では、主要遺物の出土傾向・組成を把握することを目的とし、グスク土器を含めた瓦質土器・瓦・円盤状製品・釘・近現代遺物・石器・石材・自然遺物等については、緊急発掘調査成果報告書にて取り扱うことを了されたい。

集計された主要遺物の層位別出土傾向を見てみると、西側畑表採が3,346点と最も多く、次いでI a～b層中が3,108点、II a～b層中が1,779点となっており、耕作等に伴う攪乱の状況を表していると言える。また、遺構からの出土傾向を見た場合、一部遺構を調査対象としたにも関わらず、N-15 No.4からはグスク土器が一括して検出されており、1～4層中において100点ものグスク土器片が検出されており、特筆されると言える。出土遺物別に傾向を見てみた場合、アカムヌーが3,056点と他を圧倒する出土状況を呈しており、沖縄産無釉陶器2,276点、沖縄産施釉陶器2,047点、青磁1,882点と後続し、青花、褐釉陶器、白磁は比較的少ないことから、本遺跡の稼動時期を考察する上で興味深いと言える。以下、各節において種類別に述べることとする。

第4表 主要遺物出土状況一覧

種別		土器	須恵器	白磁	青磁	青花	陶磁器	三彩	鉄釉染付	総焼陶器	黒釉陶器	タイ鉄絵	タイ産半練土器	本土産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	アカムヌー	古銭	簪	玉	煙管	高麗瓦	合計	
出土位置・層位	表採		8	21	84	25	25			2					107	264	157						693	
	I	a	1	1	5	4	3								6	3	7							30
		b	10	56	302	84	66		7					3	248	263	345	3			1			1388
		a～b	28	70	372	90	86	1					1	6	265	317	457	1				3	1	1690
II	a	1		8			1							3	7	1							22	
	b			2	9										11	10	4						36	
	a～b			12	39	151	38	35		1		1	1	111	94	150							633	
	①			8	53	10	9	1		1				42	28	39					1		192	
遺構	a		4	21	131	31	30			5			1	98	90	102	1			1			515	
	b		5	42	248	67	73	1		6	1		3	206	255	206	1			2	1		1117	
	a～b		1	4	28	4	3			1				33	34	39							147	
	①				1																		1	
I15	②		1	6	25	13	9				2			20	64	12				1			153	
	③～⑤				1									2	7	1							11	
	⑥1				1																		1	
	⑥2																						1	
N15	⑦1																						11	
	⑦2																						17	
	⑦3																						4	
	⑧	1層																						1
		2層																						49
		3層																						7
	⑨	1～3層中																						22
		4層																						21
		5層																						2
	⑩	6層																						4
		7層																						6
		8層																						2
9層																							3	
O15	10層																						19	
	11層																						2	
	12層																						2	
	不明																						19	
I15層不明	⑪1																						2	
	⑪2																				1		2	
	炭酸層不明				5	1											2						8	
	両炭層不明				1	2	1									2							6	
I15層不明	⑫1				5		4						1	6	4	9							29	
	⑫2				1	12								4	4	3							24	
	⑫3																						1	
	⑫4																						1	
N15層不明	⑬1																						59	
	⑬2																						244	
	⑬3																						244	
	⑬4																						244	
西側畑表採	⑭1		1	7	25	16	8			1	1		1	47	59	78							244	
	⑭2		28	71	306	139	160	2	1	1	7	1	2	682	674	1270					2		3346	
	⑭3		2	15	56	47	27	1				1	1	87	56	128					1		422	
	⑭4			3	18	9	14				1			42	23	45							155	
TP	⑮1				1	1	1							3	1								7	
	⑮2				5	9	7	3						19	16	18							78	
	⑮3													1									1	
	⑮4																						1	
合計		175	103	376	1882	597	566	6	1	1	47	5	1	20	2047	2276	3056	6	1	5	9	1	11181	

1. グスク土器

今回の範囲確認調査において、遺物収納コンテナ（大）8箱分のグスク土器が得られており、その大部分が表採や攪乱層、耕作土層等より出土した資料である。ここでは N-15 No. 4 土坑において一括検出されたグスク土器片と周辺遺構から出土したグスク土器を対象としている。前節でも述べたが、N-15 No. 4 一括検出土坑の性格としては廃棄土坑が想定されている。1～3層中の出土数はNo. 4 全体の約 80%を占めており、完掘していないにも関わらず、No. 4 土坑全体の 1/3 程度の調査で、多くが接合可能となっている。興味深いのは殆どが鍋であると思われる点で、口縁資料から少なくとも 10 個体以上はあるものと想定されたほか、周辺ピット出土の土器片がNo. 4 土坑より検出された土器片と接合することも確認されており特徴的であると言える（第 4 表）。これらのグスク土器は、質感・焼成状況・硬質程度・特徴的混和材等の情報に特に留意して肉眼観察を行い、下記する 4 分類の特徴を設定してみた。なお、攪乱層や耕作土層等より出土した資料については分類済みだが未集計であるため、グスク土器全体の詳細については、現在整理中の緊急発掘調査報告書にて述べることとする。また今回は、肉眼観察等の初期分類に対する自然科学分析調査による精査を行っており、新たな観察視点や分類基準を模索すべく、肉眼観察における分類項目を補完する形でさらに細分類をしている（第 IV 章参照）。

鍋（第 16 図 1～13）

概ね内彎・内傾に広口・広底を基調とした煮沸形態で、グスク土器の主要器種である。N-15 No. 4 一括検出土坑より得られたグスク土器片は、口縁・胴部・底部が確認されており、把手・突起部分は得られていない。今回の分類は、質感・焼成状況・硬質程度・特徴的混和材等の情報に特に留意して行った。以下に分類概要を記す。

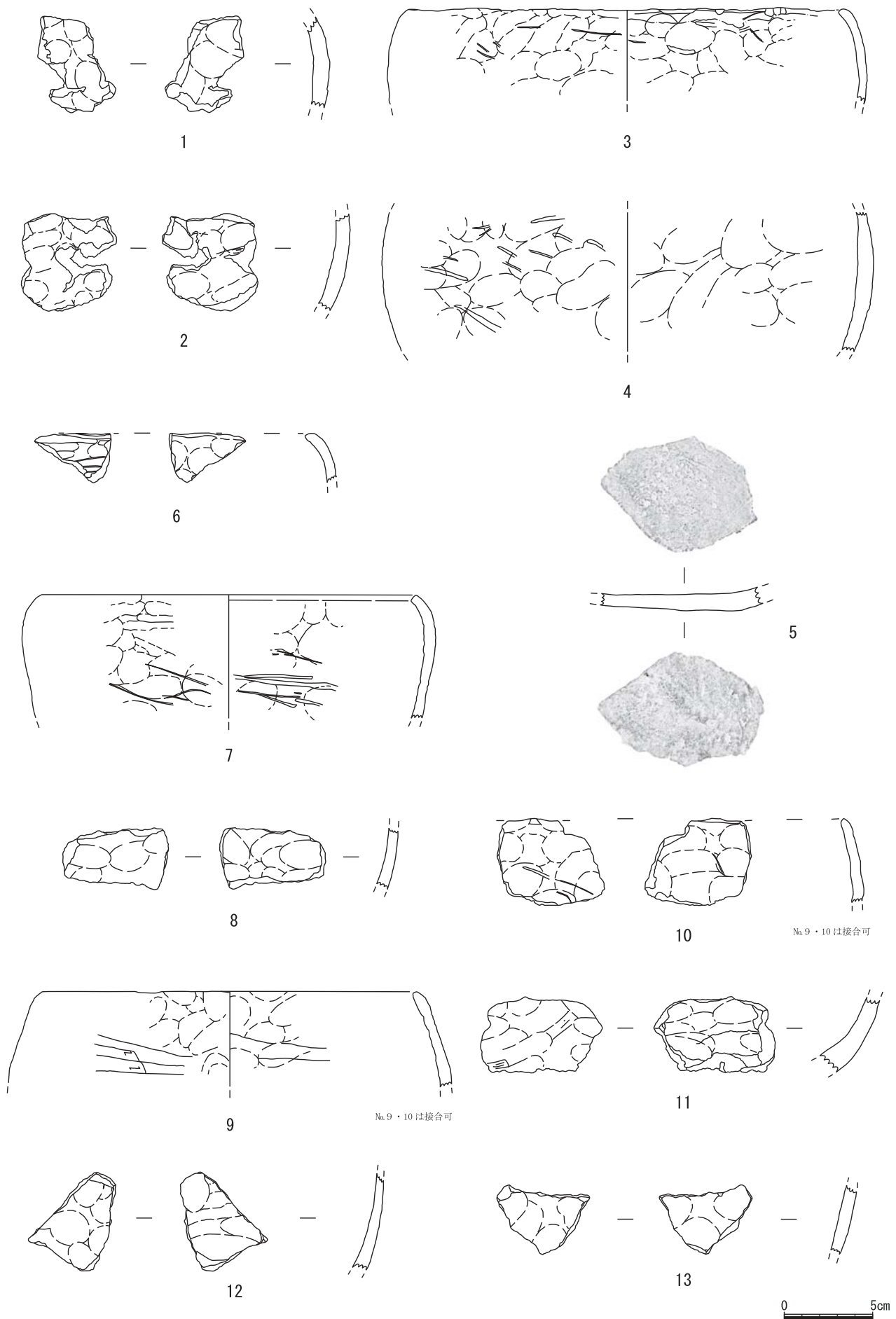
- I 類 軟質泥胎であばた状を呈する多孔質の土器で焼成も比較的良好。胎土中には石英のみ、もしくは石英と長石が認められ、僅かではあるが鉍物片あるいは岩石片等の有色鉍物を含み、調整痕も顕著である。真志喜森川原遺跡 A 口類に相当するものと思われる。内外面に土付着が著しいタイプを a、やや硬質なタイプを b、いわゆる軟質泥胎を c、やや砂質なタイプを d として細分した。
- II 類 軟質泥胎であばた状の多孔質土器で調整痕も認められ、焼成も良好である。肉眼観察的な情報は I 類に類似するが、胎土中には混和材としての石灰質砂粒が顕著に認められる。真志喜森川原遺跡 A 口類に相当するものと思われる。
- III 類 比較的硬質で胎土は砂質である。器面は鉍物片あるいは岩石片と思われる有色鉍物の混和材の露出によりザラツキ感がある。真志喜森川原遺跡 B 口類に相当するものと思われる。
- IV 類 硬質で胎土は泥砂質を呈しており、III 類に類似する。滑石粒の混和が認められ、細粒と粗粒とがあり、量により青灰色を呈するものもある。III 類に比して少量ではあるが、鉍物片あるいは岩石片と思われる有色鉍物の混和材が認められる。

第 5 表 土器出土状況一覧

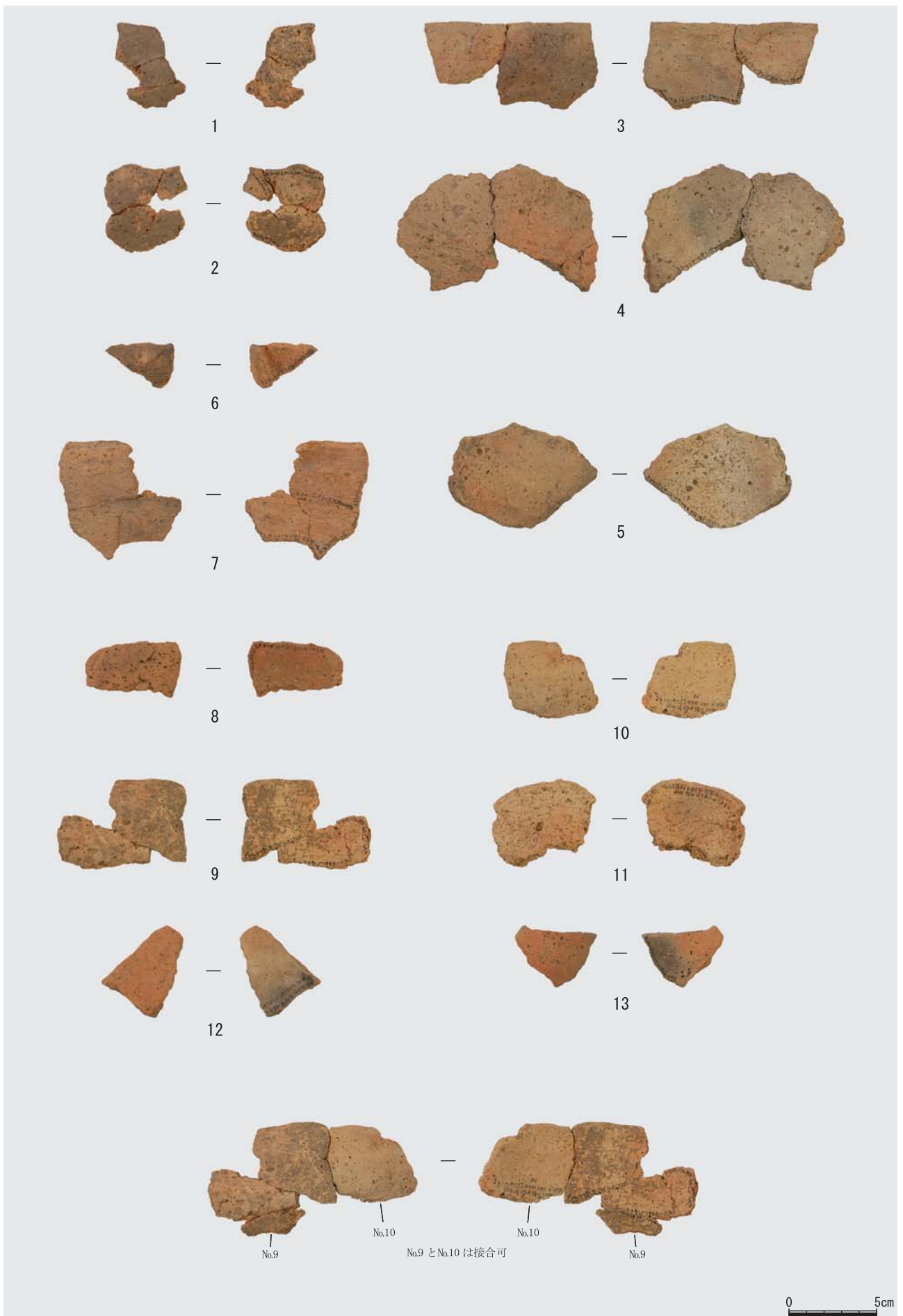
種類・器種・部位 出土位置・層位	I																II			III		IV	合計
	a			b			c			d			鍋	鍋?	鍋	鍋?	鍋						
	口縁	胴部	鍋?	口縁	胴部	鍋?	口縁	胴部	底部	鍋?	胴部	鍋?	口縁	胴部	鍋?	口縁	胴部	鍋?					
N15 No.1 層不明			11																	11			
N15 No.2 層不明	5		6												1					12			
N15 No.3 層不明			3				1													4			
N15 No.4 1層			20			1	25	2	3		1							2		54			
N15 No.4 2層			3		1		2				1									7			
N15 No.4 1～3層中				2			8			1					3	5	1	2		22			
N15 No.4 4層						1	13				2	1	1			1	2			21			
N15 No.5 2層																	2			2			
N15 No.5 層不明			4																	4			
N15 No.6 層不明			6																	6			
N15 No.7 9層																			1	1			
N15 No.7 12層			3																	3			
N15 不明 層不明			19																	19			
O15 No.1 層不明											2									2			
O15 No.2 層不明												1			1					1			
N15 No.4 1～3層中・N15 No.2																1				1			
N15 No.1 ・N15 No.4 3層		1																		1			
N15 No.4 4層・N15 No.4 3層					1															1			
N15 No.4 ・N15 No.5		1																		1			
N15 No.6 ・N15 No.7			1																	1			
合計	5	2	76	3	1	2	49	2	3	1	7	1	2	1	3	7	1	8	1	175			

第6表 ガスク土器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	胎土質・混和材 器面観察等	器形・成形等の特徴	器面調整	色調	出土地		
第16図 図版5	鍋	I a	1	- - -	軟質泥胎。 あばた状で多孔質。 石英・長石・赤色粒を混入。 外面に土が付着する。	胴部中央より口縁部に 向かい緩やかに内彎。	内外面ともに指圧痕が 顕著である。 外面はナデ調整がなさ れている。	内外面ともに にぶい橙色	N-15No.4 N-15No.5	
			2	- - -	軟質泥胎。 あばた状で多孔質。 石英・長石・赤色粒を混入。 外面に土が付着する。	胴部下部より緩やかに 丸みを持って胴上部へと 立ち上がる。	内外面ともに指圧痕が 顕著である。 外面はナデ調整がなさ れている。	内外面ともに にぶい橙色	N-15No.1 N-15No.4 3層	
		I b	3	24.8 - -	軟質泥胎でやや硬質。 あばた状で多孔質。 石英・長石・赤色粒・ 石灰質砂粒を混入。	内彎口縁。 全体的に丸みを持たせて 内彎させる。 口唇は丸みを帯びる。 全体的に丁寧な成形。	内外面ともに指圧痕が 顕著。横位に刷毛目状の 調整。ナデ調整がなさ れている。	にぶい橙色 にぶい黄褐色	N-15No.4 3層 N-15No.4 4層	
			4	- - -	軟質泥胎でやや硬質。 あばた状で多孔質。 石英・長石・赤色粒・ 石灰質砂粒を混入。 (最大胴径28cm)	胴部下部より緩やかに 丸みを持って胴上部へと 立ち上がる。	内外面ともに指圧痕が 顕著。横位に刷毛目状の 調整。ナデ調整がなさ れている。比較的雑な 成形である。	にぶい橙色 にぶい黄褐色	N-15No.4 3層	
		5	- - -	軟質泥胎でやや硬質。 あばた状で多孔質。 石英・長石・赤色粒・ 石灰質砂粒を混入。	底面の立ち上がりは 比較的緩やかである。 全体的に雑な成形。	内面の器面状態良好で 比較的丁寧な成形。 外面底面は葉脈痕か？ 凹凸が顕著である。	にぶい橙褐色 にぶい黄褐色	N-15No.4 3層		
		I c	6	- - -	軟質泥胎。 あばた状で多孔質。 石英・長石・赤色粒を混入。 No.7と同一個体か？	口縁直下で強く内彎。 口唇は丸みを帯びる。 全体的に雑な成形。	内外面ともに指圧痕が 顕著。横位に刷毛目状の 調整。ナデ調整がなさ れている。比較的雑な 成形である。	にぶい橙褐色 にぶい橙色	N-15No.4 2層	
			7	21.2 - -	軟質泥胎。 あばた状で多孔質。 石英・長石・赤色粒を混入。 No.6と同一個体か？	口縁直下で強く内彎。 口唇部は雑な成形の ため口唇断面が舌状・ 平坦と均一性がない。 全体的に雑な成形。	内外面ともに指圧痕が 顕著。横位に刷毛目状の 調整が顕著で、その後 ナデ調整がなされている。 比較的雑な成形である。	にぶい橙褐色 にぶい橙色	N-15No.4 2層	
		I d	8	- - -	軟質泥胎でやや砂質。 あばた状で多孔質。 石英・長石・赤色粒を混入。	胴部下部より緩やかに 丸みを持って胴上部へと 立ち上がる。	内外面ともに指圧痕が 顕著である。 外面はナデ調整がなさ れている。	にぶい橙褐色	N-15No.4 4層	
		II	9	21.2 - -	軟質泥胎。 あばた状で多孔質。 石英・長石・赤色粒・ 石灰質砂粒を混入。 No.10と同一個体。	内彎口縁。 胴部中央からハの字状に 強く内傾させる。 口唇は丸みを帯びる。 全体的に丁寧な成形。	内外面ともに指圧痕が 顕著。横位に刷毛目状の 調整が顕著で、その後 ナデ調整がなされている。 比較的丁寧な成形で ある。	にぶい橙褐色 にぶい橙色	N-15 No.1 N-15 No.2	
			10	- - -	軟質泥胎。 あばた状で多孔質。 石英・長石・赤色粒・ 石灰質砂粒を混入。 No.9と同一個体。	内彎口縁。 胴部中央からハの字状に 内傾させる。 口唇は丸みを帯びる。 全体的に丁寧な成形。	内外面ともに指圧痕が 顕著。横位に刷毛目状の 調整が顕著で、その後 ナデ調整がなされている。 比較的丁寧な成形で ある。	にぶい橙褐色 にぶい橙色	N-15No.4 1~3層	
		11	胴部	- - -	軟質泥胎。 あばた状で多孔質。 石英・長石・赤色粒・ 石灰質砂粒を混入。	胴部下部より緩やかに 丸みを持って胴上部へと 立ち上がる。 厚手の成形である。	内外面ともに指圧痕が 顕著。横位に刷毛目状の 調整が顕著で、その後 ナデ調整がなされている。 比較的雑な成形である。	にぶい橙褐色	N-15No.4 1~3層	
		III	12	胴部	- - -	比較的硬質で砂質を呈す。 輝石等の有色鉱物を 多量に混入。 全体にザラツキ感がある。	薄作りで、胴部下部より 弱い丸みを持って立ち 上がる。 非常に丁寧な成形。	内外面ともに指圧痕が 顕著である。 外面はナデ調整がなさ れている。	にぶい赤褐色	N-15No.4 1~3層
		IV	13	胴部	- - -	比較的硬質で泥砂質。 滑石粒の混入は非常に 少ない。輝石等の有色鉱物を 僅かに混入。	薄作りで、胴部下部より 弱い丸みを持って立ち 上がる。 比較的丁寧な成形。	内外面ともに指圧痕が 顕著である。 外面はナデ調整がなさ れている。	にぶい赤褐色	N-15No.7 9層



第16図 土器 鍋



図版5 土器 鍋

2. 類須恵器

類須恵器と思われる資料については、総数 103 点が得られている。本遺跡より出土した類須恵器は、概ね徳之島カムイヤキ窯の須恵器であると思われる。いずれも全形の窺えない破片資料であるが、その全てが壺であると思われ、その他の器種については確認できていない。これらを出土層位別に見た場合、I a～b 層中 39 点、西側畑表採 28 点で II a～b 層中は僅かに

10 点と、ここでも重機攪乱や耕作に伴う恒常的な攪拌の状況が窺えると言える。さらに、部位別に見た場合、口縁部 3 点、把手 1 点、胴部 93 点、底部が 6 点となっており、胴部資料が極端に多く偏向的であると言える（第 7 表）。以下、特徴的な 14 点について図示して部位別に概観することとし、個々の遺物については観察表に記載した。

壺（第 17 図 1～14）

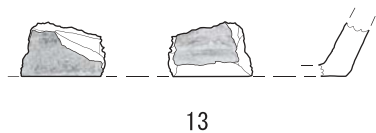
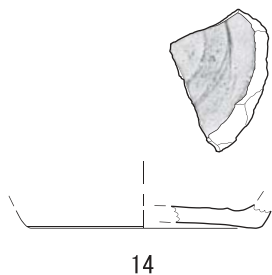
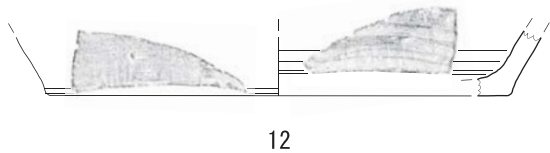
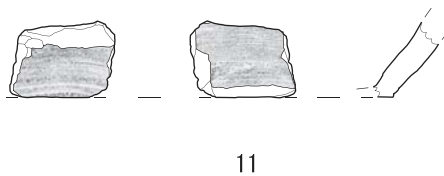
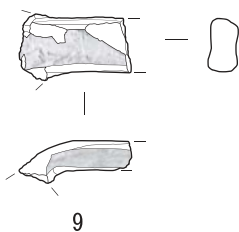
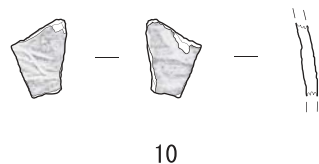
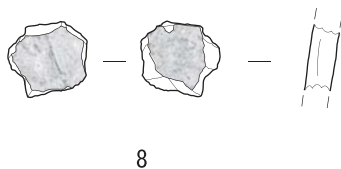
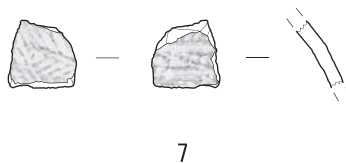
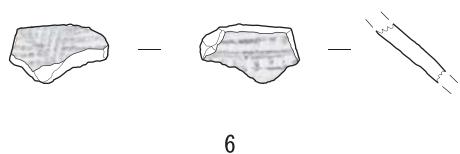
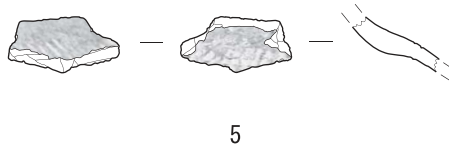
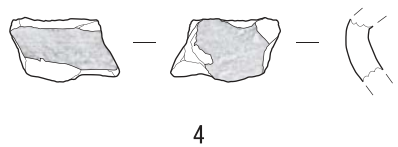
いずれの部位についても破片資料であることから全形は窺い知れないが、口縁部資料については、形態的な特徴から把手付壺や短頸の壺である可能性が考慮され、把手も 1 点検出されている。多くは無文であるが、一部の胴部資料については波状沈線が認められる資料がある。器壁両面ともに篋削りや叩き締め、ナデ調整等が行われている。底部資料については、大きめの壺と小壺とが得られている。

第 7 表 類須恵器出土状況

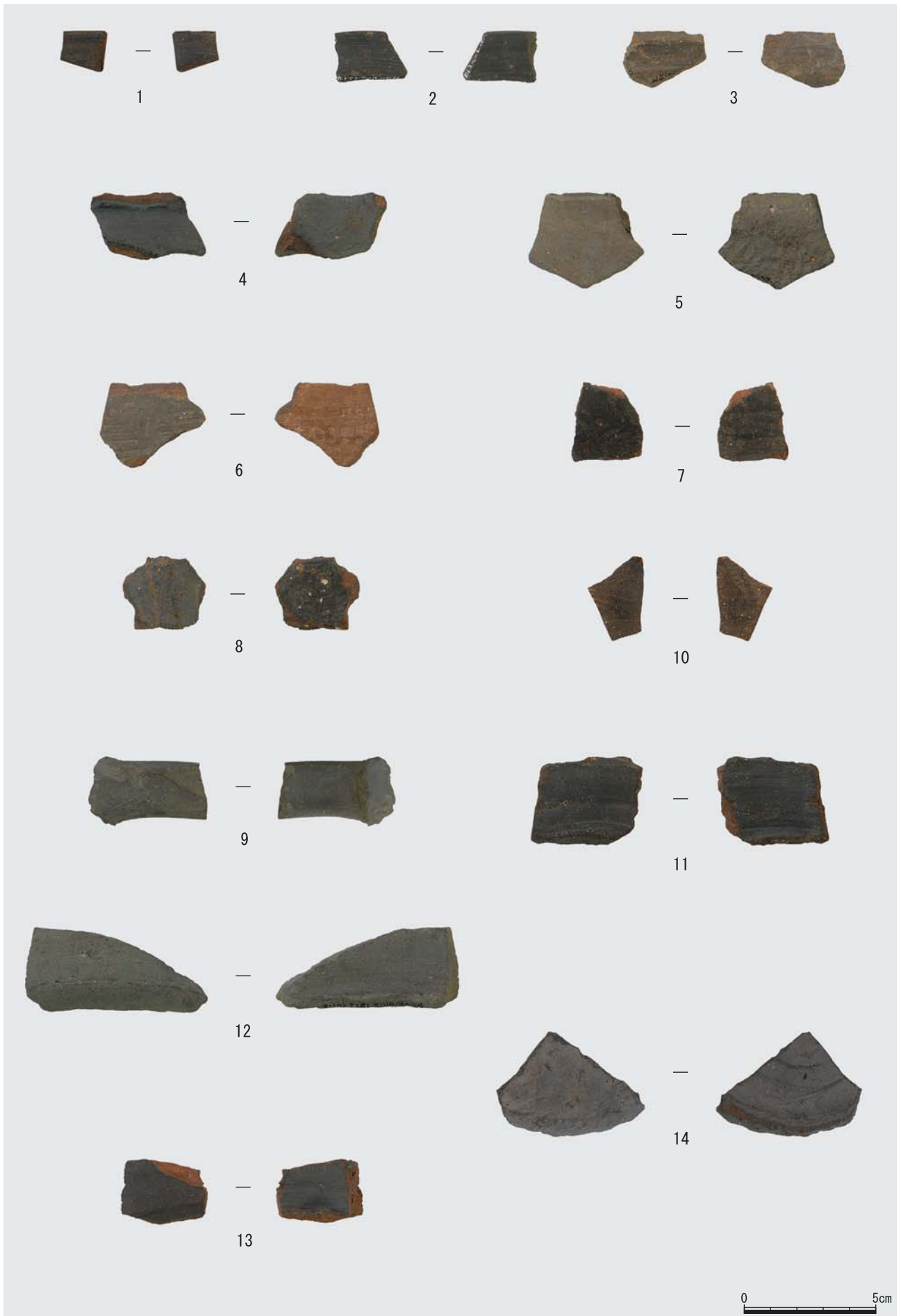
種類・器種・部位 出土位置・層位 表採	壺				合計
	口縁	把手	胴部	底部	
	1		7		8
I	a	1			1
	b		9	1	10
	a～b	1	25	2	28
I a～II a			1		1
I b～II a			11	1	12
II	a		4		4
	b		5		5
	a～b		1		1
溝状遺構②				1	1
N15 No7 1層			1		1
不明			1		1
西側畑表採		1	26	1	28
TP 1			2		2
合計	3	1	93	6	103

第 8 表 類須恵器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	焼成	色調等 外/内	器形・成形技法・文様等	出土地
第 17 図 図版 6	壺	1	— — —	還元焼成	黒灰色	把手付壺の口縁か？微弱な外反。 薄手で、口唇部は舌状を呈する。 両面ともヘラ削り後に、ナデ調整を行う。	L15 表採
		2	— — —	還元焼成	黒灰色	把手付壺の口縁か？微弱な外反。 1 に比して厚手で、口唇はやや平坦気味。 両面ともヘラ削り後に、ナデ調整を行う。	N14 I a～b
		3	— — —	還元焼成	灰褐色	無頸壺の口縁か？くの字状に大きく外反。 やや厚手で、口唇は平坦に成形。 両面ともヘラ削り後に、ナデ調整を行う。	M15 I a
		4	— — —	還元焼成	黒灰色	無頸壺の胴部片。くの字状に大きく外反。 厚手で、両面ともヘラ削り後にナデ調整を行う。	西側畑表採
		5	— — —	還元焼成	灰褐色	短頸壺の胴部(肩)片か？ 外面は綾杉文の叩きの後にナデ調整。 内面に格子文の叩き痕。	L14 I b
		6	— — —	焼成不良	灰褐色/茶褐色	短頸壺の胴部(肩)片か？ 外面に綾杉文の叩きの後にナデ調整。 内面に格子文の叩き痕。	L14 I a～b
		7	— — —	焼成不良	灰褐色	外面に綾杉文の叩きの後にナデ調整。 内面に格子文の叩き痕。	西側畑表採
		8	— — —	還元焼成	灰褐色/黒灰色 (白色鈹物)	把手付壺の胴部片。把手の位置に見られる 円形の凹部分が確認できる。 両面ともヘラ削り後に、ナデ調整を行う。	L14 I a～b
		9	— — —	還元焼成	灰褐色	把手付壺の把手。 比較的丁寧なナデ調整を行う。	西側畑表採
		10	— — —	還元焼成	黒灰色	外面はヘラ削り後に、ナデ調整を行う。 波状沈線を施す。 内面に格子文の叩きの後にナデ調整。	O15 表採
		11	— — —	還元焼成	黒灰色	両面ともにヘラ削り後にナデ調整を行う。 全体的に雑な調整である。	M1 I a～b
		12	— — 18.2	還元焼成	灰褐色	両面ともにヘラ削り後にナデ調整を行う。 全体的に丁寧な調整である。	O14 I a～b
		13	— — —	焼成不良	器面は黒灰色 胎土は茶褐色	両面ともにヘラ削り後にナデ調整を行う。 全体的に丁寧な調整である。	M15 I b～II a
		14	小壺	底部	— — 9.0	還元焼成	灰褐色



第 17 図 類須恵器 壺



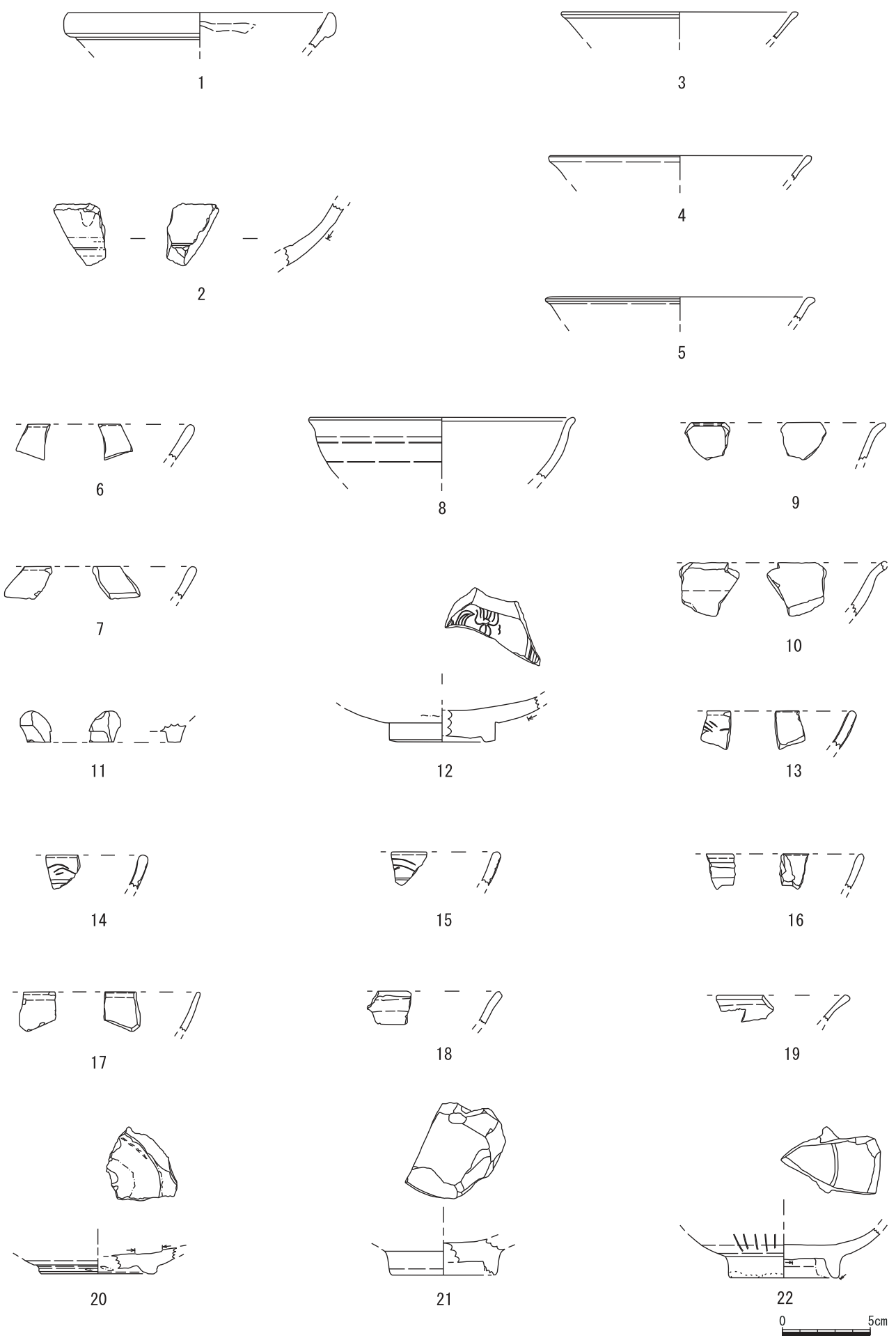
図版6 類須恵器 壺

第10表 白磁観察一覧1

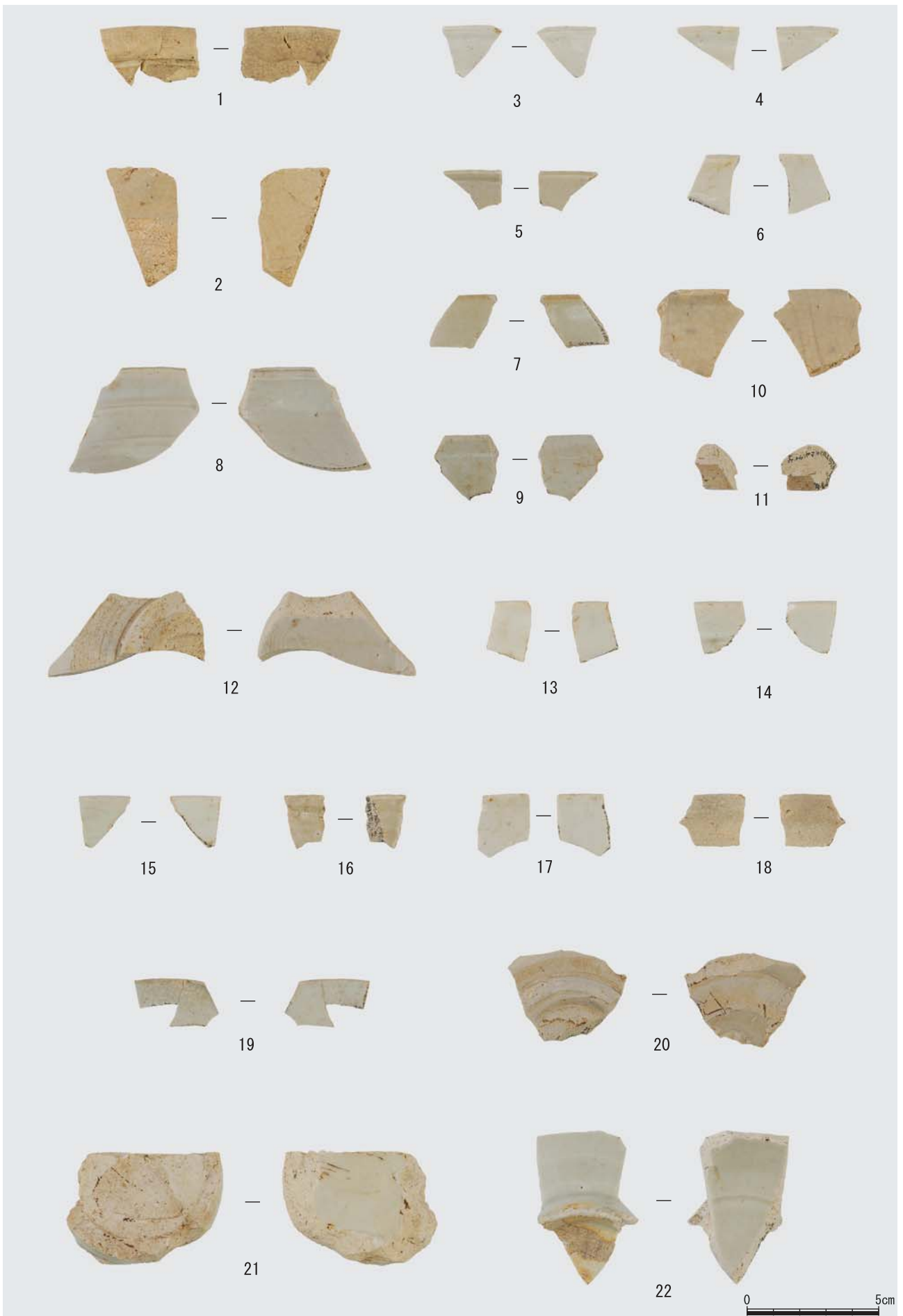
挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉状況・貫入等	出土地		
第18図 図版7	碗	I	1	口縁 15.0 - -	逆「ハ」の字状に開く器形。玉縁下部を篋状工具で挟り、稜をなす。全体的に薄作りである。	淡黄灰白色の細粒子。僅かに気泡痕。	黄灰白色の釉を両面に施す。内面口縁下部に釉溜り。両面に非常に細かい貫入。	L14 II b L15 I a~b	
			2	胴部 - - -	厚手の成形で、見込みに圈線を巡らす。	淡黄灰白色の細粒子。僅かに気泡痕。	黄灰白色の釉を内面から外面胴下部まで施す。外面胴下部に釉溜り。あばた状の気泡痕。細かい貫入。	TP7-1層	
		II	3	口縁 13.6 - -	口縁部を短く折り、口唇を平坦に成形し内端に明瞭な稜を持つ。	淡灰白色の細粒子。	淡灰白色の釉を両面に施す。	L14 I b	
			4	口縁 15.0 - -	口縁部を短く折り、口唇を平坦に成形し内端に明瞭な稜を持つ。	淡灰白色の細粒子。黒色微粒子を含む。	淡灰白色の釉を両面に施す。	L12表探	
			5	口縁 15.4 - -	口縁部をやや長めに折り、口唇を平坦気味に成形し内端に明瞭な稜を持つ。	灰白色の細粒子。黒色微粒子を含む。	灰白色の釉を両面に施す。	M15 I b~II a	
		III	6	口縁 - - -	口縁部を微弱に内彎させる。口唇は丸みを帯びる。	淡灰白色の細粒子。黒色微粒子を含む。	淡灰白色の釉を両面に施す。	M15 I b~II a	
			7	口縁 - - -	口縁部を微弱に内彎させ、内端に稜を持つ。口唇は丸みを帯びる。	灰白色の細粒子。黒色微粒子を含む。	灰白色の釉を両面に施す。	L15 II b	
		IV	8	口縁 15.2 - -	腰下部から丸みを持って立ち上がる。口縁を緩やかに外反させ、口唇は丸みを持つ。外面には轆轤痕が見られる。	淡灰白色の細粒子。黒色微粒子を含む。	灰白色の釉を両面にやや厚めに施す。両面に粗い貫入。	L15 I b	
			9	口縁 - - -	口縁を緩やかに外反させ、口唇は丸みを持つ。	灰白色の細粒子。黒色微粒子を含む。	灰白色の釉を両面にやや厚めに施す。両面に細かい貫入。	M14 II a	
			10	胴部 - - -	腰下部から丸みを持って立ち上がる。口縁を緩やかに外反させる。	淡黄灰白色の細粒子。黒色微粒子を含む。	白濁した灰白色の釉を両面にやや厚めに施す。両面に細かい貫入。	TP5-3層	
			11	底部 - - -	無文外反碗の底部資料と思われる。高台内削りは浅く、比較的丁寧な成形である。	淡灰白色の細粒子。僅かに気泡痕。黒色微粒子を含む。	-	L15 I b~II a	
		V	12	底部 - - 5.0	見込みに圈線と構成不明な印花文。高台内削りは浅く、畳付内端のみが量に付く。高台の造りは雑である。	灰白色の細粒子。僅かに気泡痕。黒色微粒子を含む。	灰白色の釉を内面から胴下部まで施す。	L15 I b~II a	
			13	口縁 - - -	口縁部をやや内彎気味に立ち上がらせて直口とする。口唇は丸みを持って成形。外面口縁直下に波状沈線を描く。	淡灰白色の細粒子。黒色微粒子を含む。	淡灰白色の釉を両面に厚めに施す。両面に粗い貫入。	西側畑表探	
			14	口縁 - - -	口縁部をやや内彎気味に立ち上がらせて直口とする。口唇は丸みを持って成形。外面口縁直下に波状沈線を描く。	淡灰白色の細粒子。黒色微粒子を含む。	淡灰白色の釉を両面に厚めに施す。両面に粗い貫入。	L15 I b	
			15	口縁 - - -	口縁部をやや内彎気味に立ち上がらせて直口とする。口唇は丸みを持って成形。外面口縁直下に波状沈線を描く。	淡灰白色の細粒子。黒色微粒子を含む。	淡灰白色の釉を両面に厚めに施す。両面に細かい貫入。	西側畑表探	
			16	口縁 - - -	口縁部をやや内彎気味に立ち上がらせて直口とする。口唇は丸みを持って成形。V類に似るが、全体的に雑な成形である。	淡灰白色の細粒子。黒色微粒子を含む。	淡灰白色の釉を両面に薄く施す。両面に非常に細かい貫入。	西側畑表探	
			17	口縁 - - -	口縁部をやや内彎気味に立ち上がらせて直口とする。口唇は舌状に成形。外面轆轤痕。内面口縁直下に圈線。丁寧な成形である。	淡灰白色の微粒子。黒色微粒子を含む。	淡灰白色の釉を両面に薄く施す。	M15 I b~II a	
		VII	18	口縁 - - -	薄手の直口口縁。微弱に外側に折れる。口唇はやや平坦に成形。外面に調整痕。全体的に雑な造りである。	淡黄灰白色の細粒子。僅かに気泡痕。	黄灰白色の釉を両面に施す。両面に非常に細かい貫入。	TP7-1層	
			19	口縁 - - -	薄手の直口口縁。微弱に外側に折れる。口唇はやや平坦に成形。外面に調整痕。全体的に雑な造りである。	淡灰白色の細粒子。黒色微粒子を含む。	灰白色の釉を両面に施す。両面に非常に細かい貫入。	M14・15 I a~b	
			20	底部 - - 6.4	高台は「ハ」の字状に開き、打ち削りは浅い。外端を竹節状に削り取る。雑な成形である。	灰白色の細粒子。僅かに気泡痕。	灰白色の釉を内面に施した後、蛇の目状に掻きとっている。	TP6-3層	
		不明	21	底部 - - 6.0	分類不明の底部資料。青花の可能性も考慮しておく。高台内削り等は比較的丁寧である。	淡灰白色の微粒子。黒色微粒子を含む。	淡灰白色の釉。内底から高台外面まで施す。	K13表探	
			22	底部 - - 6.2	高台は高く、内端を斜位に削り取る。外面に細蓮弁様の沈線。見込みに圈線。	淡灰白色の微粒子。黒色微粒子を含む。僅かに気泡痕。	淡灰白色の釉。内底から基本的に高台外面まで施す。畳付にアルミナ様の溶着痕。	L15 I a~b	
		III	I	23	口縁 10.3 - -	口縁部を緩やかに外反させる。釉を掻き取って口禿にする際、口唇が尖り気味になる。外面に調整痕。	淡灰白色の微粒子。黒色微粒子を含む。	淡灰白色の釉を両面に施した後、口唇の釉を掻き取り口禿とする。	L15 I a~b
				24	口縁 - - -	口縁部を緩やかに外反させる。釉を掻き取って口禿にする際、口唇が若干尖り気味になる。外面に調整痕。	淡灰白色の微粒子。黒色微粒子を含む。	淡灰白色の釉をやや厚めに施した後、口唇の釉を掻き取り口禿とする。	L15 I a~b
			II a	25	口縁 - - -	薄手で、口縁を内彎気味に立ち上がらせる。口唇は丸みを帯びる。外面に調整痕とあばた状の気泡痕。	淡灰白色の細粒子。	白濁した白色釉を施す。両面に粗い貫入。	M15 II b
				26	口縁 - - -	薄手で、口縁を内彎気味に立ち上がらせる。口唇は丸みを帯びる。	淡灰白色の細粒子。黒色微粒子を含む。	灰白色の釉を両面に施す。両面に粗い貫入。	西側畑表探
				27	口縁 - - -	薄手で、口縁を内彎気味に立ち上がらせる。口唇は丸みを帯びる。外面に調整痕。	淡灰白色の細粒子。黒色微粒子を含む。	灰白色の釉を両面に施す。	M15 II a
				28	口縁 - - -	灯明皿の口縁部で、外端を平坦に削り取る。口唇部には煤が多量に付着。	淡灰白色の粗粒子。黒色微粒子を含む。	灰白色の釉を内面に薄く施し、口唇から外面にかけて露胎。	L15 II b

第10表 白磁観察一覽2

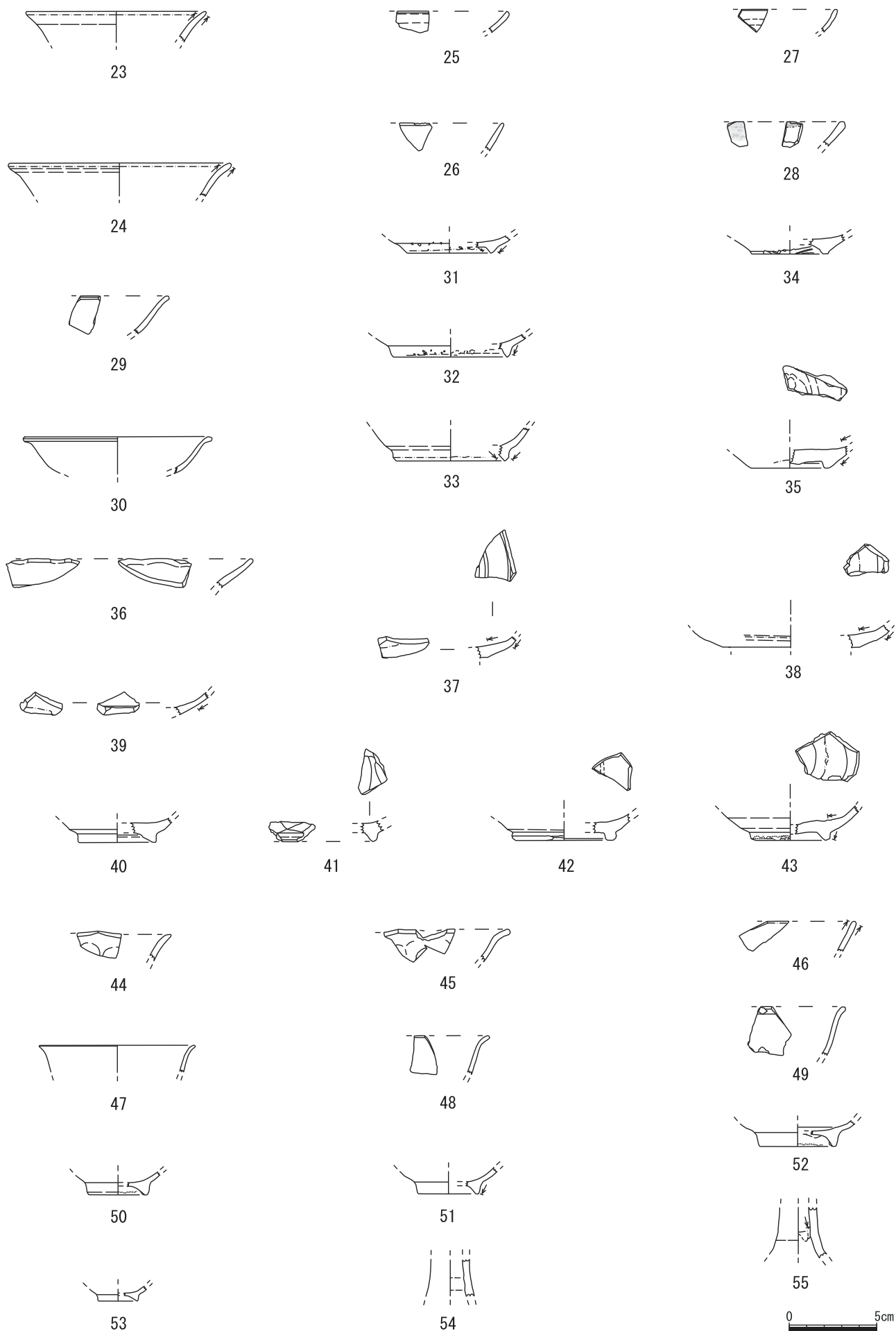
挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉状況・貫入等	出土地	
第19図 図版8	皿	III	口縁	- - -	薄手の皿の口縁破片。 口縁部を微弱に外反させる。 口唇は丸みを持つ。丁寧な造りである。	淡灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	灰白色の釉を両面に厚く施す。	L14 I b
			口縁	- - -	薄手の皿の口縁破片。 口縁部を緩やかに外反させ、口唇は丸みを持つ。 比較的雑な造りである。	淡灰白色の細粒子。 黒色微粒子を含む。	淡灰白色の釉を両面に厚く施す。	L14 I b L15 II b
			底部	- 4.8	薄手の皿の底部資料。 高台を逆三角形に成形する。 比較的丁寧な造りである。	淡灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	淡灰白色の釉を両面に厚く施した後、 壘付部分の釉を掻き取る。 高台付近の内外面に砂粒が付着。	L15表採
			底部	- 6.6	薄手の皿の底部資料。 高台を逆三角形に成形する。 31に比して雑な造りである。	淡灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	淡灰白色の釉を両面に厚く施した後、 壘付部分の釉を掻き取る。 高台付近の内外面に砂粒が付着。	西側畑表採
			底部	- 6.2	薄手の皿の底部資料。 高台を逆三角形に成形する。 比較的丁寧な造りである。	淡灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	淡灰白色の釉を両面に厚く施した後、 壘付部分の釉を掻き取る。	西側畑表採
		IV	底部	- 4.4	高台が不明瞭のため、基筒底とした。 外底の成形は非常に雑で縮れている。	灰白色の細粒子。	見込みに施釉した後、掻き取ったかの ような痕跡が認められる。	西側畑表採
			底部	- 4.4	内削りは浅く、成形は雑である。	淡灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	外面の胴下部まで施釉。 内面は露胎とする。 非常に細かい貫入。	M15 I b~II a
		V	口縁	- -	薄手の稜花皿の口縁資料。 口唇を微弱に窪ませ稜花としている。	淡灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	淡灰白色の釉を両面に厚く施す。	L15 I b~II a
		VI	胴部	- -	胴下部から角度を変えて立ち上がらせ、 腰折れとする。高台脇は水平に削り取る。 比較的丁寧な造りである。	灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	灰白色の釉を内面から胴下部まで 施釉した後、見込みの釉を掻き取る。	M15 I a~b
			胴部	- -	胴下部から角度を変えて立ち上がらせ、 腰折れとする。高台脇は水平に削り取る。 比較的雑な造りである。	淡灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	灰白色の釉を内面から胴下部まで 施釉する。外面は釉が垂れる。	N14 I b
		不明	胴部	- -	薄手の皿の胴部破片。 見込みに陰圏線を施す。 比較的丁寧な造りである。	淡灰白色の細粒子。 黒色微粒子を含む。 微細な気泡痕。	灰白色の釉を内面から胴下部まで 施釉した後、見込みの釉を掻き取る。 粗い貫入が入る。	L15 II b
			底部	- 4.4	外底を円形に内削りしている。 高台脇を斜位に削り取り、角度を変えて 立ち上がらせる。比較的雑な成形。	淡灰白色の細粒子。 黒色微粒子を含む。 微細な気泡痕。	見込みに施釉した後、掻き取ったかの ような痕跡が認められる。	M14 I a~b
			底部	- -	外反皿の底部資料か？ 高台を逆三角形に成形する。 比較的雑な造りである。	淡灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	—	L15 I a~b
			底部	- 3.6	高台外面を段状に抉り取る。内削りは浅い。 高台脇を斜位に削り取っている。	淡灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	見込みに重ね焼きの際の胎土目？	M14 I a~b
			底部	- 4.0	高台を逆「ハ」の字状となるように削り取る。 外面に不明瞭なカンナ目が見られる。	灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	灰白色の釉を高台外面まで施釉後に 見込みを掻き取っている。	L15 II b
	杯	I	口縁	- -	口唇を弧状に削り、波状口縁とする。 外面を筒削りで八角とする。	淡灰白色の細粒子。 黒色微粒子を含む。	白色の釉を両面に施す。 両面に細かい貫入が入る。	L14 I a~b
			口縁	- -	口唇を弧状に削り、波状口縁とする。 外面を筒削りで八角とする。 44に比して丁寧な成形である。	淡灰白色の細粒子。 黒色微粒子を含む。	白濁した灰白色の釉を両面に厚く施す。	I b~II a
		II	口縁	- -	薄手の直口口縁。口唇を口禿としている。 型成形か？	白色の微粒子。 微細な気泡痕。	白濁した白色の釉を両面に厚く施す。 口唇を口禿としている。	西側畑表採
		III	口縁	9.0 -	薄手で緩やかに外反させる。型成形か？	白色の微粒子。 微細な気泡痕。	白濁した白色の釉を両面に厚く施す。 外面はやや失透気味である。	M15 I b~II a
			口縁	- -	薄手で、若干強めに外反させる。型成形か？	白色の微粒子。	白濁した灰白色の釉を両面に厚く施す。	L14 I a~b
		不明	口縁	- -	薄手で、若干強めに外反させる。型成形か？	淡灰白色の細粒子。 黒色微粒子を含む。	白濁した灰白色の釉を両面に厚く施す。	L14 I a~b
			底部	- 3.2	型成形の杯底部。	淡灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	白濁した白色の釉を両面に厚く施す。 高台内面に砂粒が付着する。 外面はやや失透気味である。	西側畑表採
			底部	- 3.4	型成形の杯底部。	淡灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	白濁した白色の釉を両面に厚く施す。 外面はやや失透気味である。	西側畑表採
		底部	- 4.4	型成形の杯底部。	淡灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	白濁した白色の釉を両面に厚く施す。 壘付両端に砂粒が付着する。	西側畑表採	
		小杯	底部	- 2.2	型成形の小杯底部。	淡灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	白濁した灰白色の釉を両面に厚く施す。 壘付両端に砂粒が付着する。	西側畑表採
瓶	頸部	- -	瓶の頸部資料。 内面の調整痕が顕著。	淡灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	白濁した灰白色の釉を両面に厚く施す。	N14 I b		
	頸部	- -	瓶の頸部資料。 内面に雑な調整痕。	淡灰白色の微粒子。 黒色微粒子を含む。	白濁した灰白色の釉を厚く施す。 内面に釉垂れ。	西側畑表採		



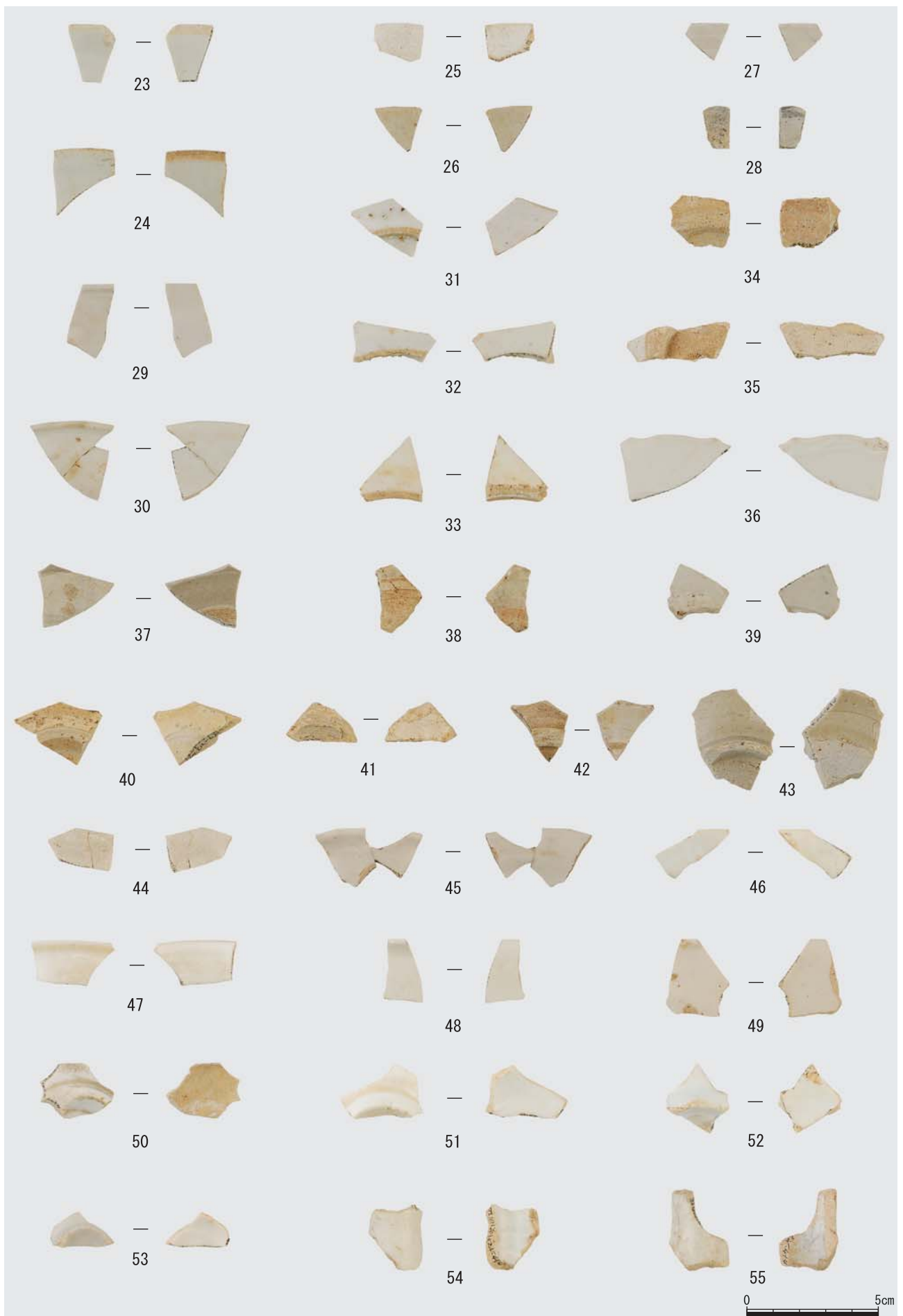
第 18 图 白磁 1 碗



图版7 白磁 1



第19图 白磁2 皿(23~43)、杯(44~52)、小杯(53)、瓶(54~55)



图版8 白磁 2

4. 青磁

輸入陶磁器で最も多く検出されたのは青磁である。総点数は 1,882 点を数え、他の輸入陶磁器を圧倒する。確認された器種としては、碗・皿・盤・酒会壺・香炉・馬上杯・瓶・袋物等がある。層位別出土傾向としては、I a～b 層中が 679 点、II a～b 層が 407 点、I～II 層一括が 221 点と全体の 7 割弱を占めている。器種別傾向としては、碗が 1,510 点と全体の 8 割を占めている状況にある（第 12 表）。以下、器種別分類について述べ、詳細は観察表に記した。

碗（第 20 図～23 図 1～104）

- I 類 劃花文碗（第 20 図 1～5） 直口タイプで内面に片切彫りや篋削りにより沈線や蓮華文を描いている。
- II 類 櫛描文碗 内外面に櫛描文を施す碗。小破片のため、本報告では割愛した。
- III 類 鎬蓮弁文碗（第 20 図 6～12） 直口タイプで外面に鎬を削りだした後、片切彫りにより蓮弁文を描いている。
- IV 類 無鎬蓮弁文碗（第 20 図 13～20） 直口タイプで外面に片切彫りにより蓮弁文を描いている。
- V 類 二叉蓮弁文碗（第 20 図 21） 比較的薄手の直口碗で、先の尖った叉状工具で蓮弁文を描いている。
- VI 類 無文外反碗（第 20 図 22～29） 口縁部が外反する大振りの碗で、口唇は丸く成形されている。
- VII 類 玉縁口縁碗（第 21 図 30～35） 口縁部を玉縁状に成形する碗で、佐敷タイプと称されている碗である。
- VIII 類 ラマ式蓮弁文碗（第 21 図 36～40） やや厚手の外反碗で、外面にラマ式の蓮弁文を描いている。
- IX 類 有文外反碗（第 21 図 41～43） 波状口縁のほか内面口縁直下に四方禪文（七宝繫文？）を描くものもある。
- X 類 雷文帯碗（第 21 図 44～55） 口縁直下に雷文帯を巡らす。施文方法により篋削りを a、片押しを b とした。
- XI 類 細蓮弁文碗（第 22 図 56～67） 外面に線描きによる蓮弁文を描く。弁先や蓮弁の幅に差異が認められる。
- XII 類 無文直口碗（第 22 図 68～75） 直口タイプの無文碗。口唇が舌状となるものを a、断面方形状を b とした。
- XIII 類 有文直口碗（第 22 図 76～77） 直口タイプの有文碗。波状沈線等の文様が認められる。
- XIV 類 薄手直口碗（第 22 図 78～83） 薄手直口タイプで、口縁が逆「ハ」の字状に大きく開く。高台は広く、浅い。
底部資料は、特徴的な資料を図化した。第 23 図 84～91 を無文外反、同図 92～104 を無文直口と想定した。

皿（第 24 図 105～133）

- I 類 櫛描文皿（第 24 図 105～107） 見込みに櫛描文を施す、平底の皿。碗 II 類とセット関係にある。
- II 類 口折皿（第 24 図 108～111） 口縁部を逆 L 字状に折り、口折れとする。外面には蓮弁文を施す。
- III 類 稜花皿（第 24 図 112～114） 口唇部に浅目の袂りを入れて稜花とする。内面にはラマ式蓮弁文を描く。
- IV 類 外反皿（第 24 図 115～118） 口縁部を緩やかに外反させる皿。線彫りのラマ式蓮弁文も見られる。
- V 類 直口皿（第 24 図 119～124） 直口タイプの皿。無文のものと外面に片切彫りの蓮弁文を描くものがある。
- VI 類 泉州窯系皿（第 24 図 125） 素地や施釉状況などから泉州窯系の皿と思われる資料が 1 点得られている。底部資料は、特徴的な資料のみ図化した（第 24 図 126～133）。

盤（第 25 図 134～143）

- I 類 鏝縁盤（第 25 図 134～136） 鏝縁部をつまみ上げて成形しており、内面には篋描きの蓮弁文を施す。
- II 類 口折タイプ（第 25 図 137） 口縁部を逆「L」字状に折る。口唇の平坦面には篋描きの文様が認められる。
- III 類 直口タイプ（第 25 図 138～139） 口縁部を内彎気味に成形するのと逆「ハ」の字状に開くタイプとがある。

底部資料については、図上復元が可能な 2 点のみを図化した（第 25 図 140～141）。

酒会壺（第 25 図 144～148） 酒会壺の蓋と底部が得られている。蓋内面には陽刻文、底部外面には篋削り文。

香炉（第 25 図 149～153） 口縁・胴部・底部がそれぞれ得られており、いずれも三足香炉であろう。

馬上杯（第 25 図 154） 馬上杯の脚部が 1 点得られている。外面に螺旋状の調整痕が認められる。

瓶（第 25 図 155～158） 双耳瓶の環破片、胴部片が得られている。文様構成等は判然としない。

袋物（第 25 図 159） 袋物の底部資料を 1 点図化した。瓶か小壺等が考慮される。

第12表 青磁観察一覧1

挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉状況・貫入等	出土地		
第20図 図版9	碗	I	1	口縁	16.8 -- --	内面に片切り彫りによる2本の圈線か区画線を描く。	灰白色の微粒子。	両面に淡緑灰色の釉。	M14 I b~ II b
			2	口縁	-- -- --	口唇は舌状に成形。内面に片切り彫りによる区画線と蓮華文？を描く。	淡灰白色の微粒子。微細な気泡痕。	両面に淡緑灰色の釉。	西側畑表探
			3	口縁	-- -- --	外面口縁直下を削り、擬似肥厚とする。内面に片切り彫りによる区画線を描く。	淡灰白色の微粒子。	両面に淡青緑色の釉。	西側畑表探
			4	口縁	-- -- --	口唇は舌状に成形。内面に線彫りの曲線文を描く。	淡灰白色の微粒子。黒色鉱物を含む。	両面に淡緑灰色の釉。口唇は失透気味。	出土地不明
			5	胴部	-- -- --	外面には轆轤痕が見られる。内面に片切り彫りによる区画線を描く。	淡灰白色の微粒子。黒色鉱物を含む。	両面に濃灰白色の釉。	L15表探
		6	III	口縁	-- -- --	口唇は舌状に成形。外面に片切り彫りによる蓮弁文を丁寧に描く。縮は明瞭である。	淡灰白色の微粒子。黒色鉱物を含む。	両面に淡緑黄色の釉。	N15 I b
		7		口縁	-- -- --	口唇は舌状に成形。外面に片切り彫りによる蓮弁文を雑に描く。縮は不明瞭である。	灰白色の微粒子。	両面に灰白色の釉。	西側畑表探
		8		口縁	-- -- --	口唇は舌状に成形。外面に片切り彫りによる蓮弁文を丁寧に描く。縮は明瞭である。	淡灰白色の微粒子。黒色鉱物を含む。	両面に淡緑黄色の釉。	M15 I a~b
		9		口縁	-- -- --	口唇は舌状に成形。外面に片切り彫りによる蓮弁文を描く。縮は不明瞭である。	淡灰白色の微粒子。黒色鉱物を含む。	両面に濃緑黄色の釉。失透気味。	L15 I b
		10		口縁	-- -- --	口唇は舌状に成形。外面に片切り彫りによる蓮弁文を丁寧に描く。縮は明瞭である。	淡灰白色の微粒子。	両面に淡緑黄色の釉。	M15表探
		11	胴部	-- -- --	外面に片切り彫りによる蓮弁文を描く。縮は不明瞭である。	灰白色の細粒子。	両面に濃緑黄色の釉。失透気味。	西側畑表探	
		12	口縁	-- -- --	口唇は丸みを持つ。外面に片切り彫りによる蓮弁文を雑に描く。	淡灰白色の細粒子。	両面に淡緑黄色の釉を厚く施す。	M15 II a	
		13	IV	口縁	16.4 -- --	口唇は丸みを持つ。外面口縁直下に2本の圈線と片切り彫りによる蓮弁文を描く。	淡灰白色の微粒子。黒色鉱物を含む。	両面に淡緑黄色の釉を厚く施す。粗い貫入が入る。	L15 II a~b
		14		口縁	15.2 -- --	厚手の成形で、口唇は丸みを持つ。片切り彫りによる蓮弁文を描くが不明瞭である。	淡灰白色の微粒子。黒色鉱物を含む。	両面に濃緑黄色の釉を厚く施す。細かい貫入が入る。	L15 II b
		15		口縁	-- -- --	薄手の成形で、口唇は舌状となる。外面に片切り彫りによる蓮弁文を描く。	淡灰白色の微粒子。黒色鉱物を含む。	両面に淡緑黄色の釉。	L15 I a
		16		胴部	-- -- --	厚手で、片切り彫りの蓮弁文を雑に描く。	灰白色の細粒子。	両面に濃緑黄色の釉を厚く施す。	K16表探
		17		胴部	-- -- --	薄手で、片切り彫りの蓮弁文を雑に描くが不明瞭。内面に陽刻の文様が見られるが判然としない。	灰白色の細粒子。黒色鉱物を含む。	両面に緑黄色の釉を施す。粗い貫入が入る。	L15 II b
		18	胴部	-- -- --	厚手で、片切り彫りの蓮弁文を雑に描く。	灰白色の微粒子。黒色鉱物を含む。	両面に緑黄色の釉を施す。	西側畑表探	
		19	V	底部	-- -- 6.2	比較的薄手で、高台の成形や内削りは丁寧。高台脇に片切り彫りによる蓮弁文が見られる。	淡灰白色の細粒子。微細な気泡痕。	淡緑黄色の釉高台内面まで施す。	M14 I b
		20		底部	-- -- --	厚手で、高台の成形や内削りは比較的丁寧。高台脇に片切り彫りによる蓮弁文。見込みに印花文。	淡灰白色の細粒子。微細な気泡痕。	淡緑黄色の釉高台内面まで施す。粗い貫入が入る。	M15 II b
		21		口縁	-- -- --	口唇は丸みを持つ。外面に又状工具で蓮弁文を描く。内面には焼成時の溶脱痕。	灰白色の細粒子。黒色鉱物を含む。	両面に濃緑黄色の釉を施す。粗い貫入が入る。	L15 I b
		22		口縁	-- -- --	口縁を緩やかに外反させ、口唇は丸みを持つ。	灰白色の細粒子。黒色鉱物を含む。	両面に緑黄色の釉を施すが二次的被熱を受けている。	TP8-2層
		23		口縁	-- -- --	口縁を緩やかに外反させ、口唇は丸みを持つ。外面に轆轤痕が見られる。	灰白色の細粒子。黒色鉱物。微細な気泡。	両面に緑黄色の釉を施す。	L15 I b
		24	VI	口縁	-- -- --	厚手で、口縁を緩やかに外反させる。外面に轆轤痕が見られる。	赤褐色の細粒子。(焼成不良)	失透気味の緑黄色の釉を施す。	西側畑表探
		25		口縁	14.0 -- --	口縁を緩やかに外反させ、口唇は丸みを持つ。外面に轆轤痕が見られる。	灰白色の細粒子。黒色鉱物を含む。	失透気味の緑黄色の釉を施す。	N14 I b
		26		口縁	14.6 -- --	口縁を緩やかに外反させ、口唇は舌状。	灰白色の細粒子。黒色鉱物を含む。	失透気味の緑黄色の釉を施す。外面に釉垂れ。	M14 I a~b
		27		口縁	15.4 -- --	口縁を緩やかに外反させ、口唇は丸みを持つ。	灰白色の細粒子。黒色鉱物。微細な気泡。	両面に緑黄色の釉を施す。	L15 I b~ II b
		28		口縁	16.3 -- --	口縁を大きく外反させ、口唇は丸みを持つ。	淡灰白色の細粒子。微細な気泡痕。	両面に緑黄色の釉を施す。両面に粗い貫入が入る。	L15 II b
		29	口縁	15.4 -- --	口縁を緩やかに外反させ、口唇は平坦に成形。	淡灰白色の細粒子。微細な気泡痕。	両面に黄緑灰色の釉を施す。両面に細かい貫入が入る。	M14 I a~b	
第21図 図版10	碗	VII	30	口縁	18.3 -- --	丸みを持って立ち上がる大振りの碗。口唇は玉縁状に肥厚する。外面は轆轤痕明瞭。	灰白色の細粒子。白色鉱物を含む。	両面に緑黄色の釉を施す。両面に粗い貫入が入る。	L15No.1 b
			31	口縁	-- -- --	口唇は玉縁状に大きく肥厚する。	淡灰白色の細粒子。微細な気泡痕。	両面に緑黄色の釉を施す。両面に粗い貫入が入る。	M15 II a
			32	口縁	-- -- --	口唇は玉縁状に大きく肥厚する。	淡灰白色の細粒子。微細な気泡痕。	両面に緑黄色の釉を施す。両面に粗い貫入が入る。	L14 I b
			33	口縁	-- -- --	口唇はやや外反気味に肥厚する。	灰白色の細粒子。白色鉱物を含む。	両面に失透気味の緑黄色の釉を施す。両面に粗い貫入が入る。	M14 I b
			34	口縁	-- -- --	外面口縁を削り取り、口唇を玉縁状に肥厚させる。	淡灰白色の細粒子。微細な黒色鉱物。	両面に黄緑色の釉を施す。	L15 II b
			35	口縁	-- -- --	外面口縁を削り取り、口唇を玉縁状に肥厚させる。	淡灰白色の細粒子。	両面に失透気味の濃緑色の釉を施す。	出土地不明(残土内表探)
		36	VIII	口縁	-- -- --	厚手の外反碗で、外面にラマ式蓮弁文を片切り彫りで描く。	淡灰白色の細粒子。	両面に緑黄色の釉を厚く施す。	L15表探
		37		胴部	-- -- --	厚手で、両面にラマ式蓮弁文を片切り彫りで描く。	淡灰白色の細粒子。微細な気泡痕。	両面に緑黄色の釉を厚く施す。粗い貫入が入る。	L15 I a~b M15 I b~ II a
		38		胴部	-- -- --	厚手で、両面にラマ式蓮弁文を片切り彫りで描く。	淡灰白色の細粒子。微細な気泡痕。	両面に緑黄色の釉を厚く施す。粗い貫入が入る。	L15 II b
		39		胴部	-- -- --	厚手で、両面にラマ式蓮弁文を片切り彫りで描く。	灰白色の細粒子。白色鉱物を含む。	両面に緑黄色の釉を厚く施す。	西側畑表探
		40		胴部	-- -- --	厚手で、外面にラマ式蓮弁文を片切り彫りで描く。内面見込み近くに陰圏線。	淡灰白色の微粒子。黒色鉱物。微細な気泡痕。	両面に緑黄色の釉を厚く施す。	L15 I b

第12表 青磁観察一覽2

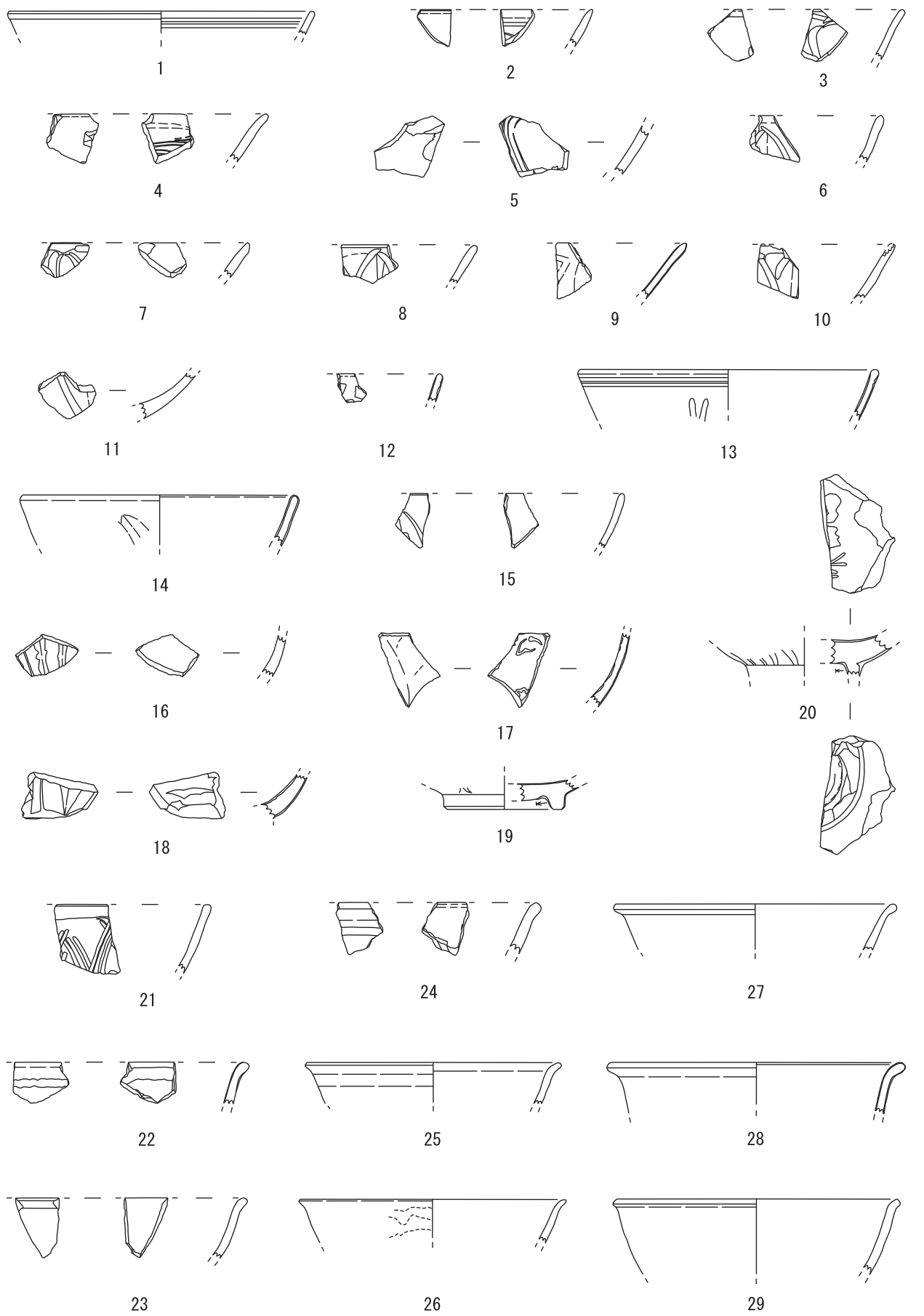
挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉状況・貫入等	出土地		
第21図 図版10	碗	IX	口縁	— — —	口縁を微弱に外反させる。 内面口縁直下に2条の圈線と四方禪文を陰刻。	淡灰白色の微粒子。 黒色鉄物を含む。	両面に緑黄色の釉を施す。	西側畑表探	
			口縁	— — —	丸みを持って立ち上がる大振りの外反碗。 口唇を波状に成形。外面外面に蓮弁文？を描く。	淡灰白色の微粒子。 黒色鉄物を含む。	両面に淡緑黄色の釉を施す。 両面に細かい貫入が入る。	O15層不明	
			口縁	17.0 — —	丸みを持って立ち上がる大振りの外反碗。 外面外面に蓮弁文？を描く。	淡灰白色の微粒子。 黒色鉄物を含む。	両面に失透気味の淡緑黄色の釉。 両面に粗い貫入が入る。	L14~L15 I a~b	
		X a	口縁	16.4 — —	外面に篋描きで雑な雷文帯を描く。	灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	両面に淡緑黄色の釉を施す。 両面に粗い貫入が入る。	L15 II b	
			口縁	16.4 — —	外面に篋描きで雑な雷文帯を描く。 内面には調整痕が認められる。	淡灰白色の微粒子。 黒色鉄物を含む。	両面に淡緑黄色の釉を施す。	L15 II a~b	
			口縁	— — —	外面に篋描きで雑な雷文帯を描く。 内面には型押しによる雷文帯を施文。	灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	両面に淡緑黄色の釉を施す。	TP7-1層	
			口縁	— — —	外面に篋描きで崩れた雷文帯を描く。	淡灰白色の微粒子。 黒色鉄物を含む。	両面に緑黄色の釉を施す。	西側畑表探	
			口縁	— — —	外面に篋描きで雑な雷文帯を描く。 内面には構成不明な文様が描かれる。	淡灰白色の微粒子。 黒色鉄物を含む。	両面に緑黄色の釉を施す。	M14 II b	
			X b	口縁	— — —	外面に型押しで雷文帯を施文する。	淡灰白色の微粒子。	両面に緑黄色の釉を施す。	L15 II b M15 II b
				口縁	— — —	外面に型押しで雷文帯を施文する。 内面には構成不明な文様が描かれる。	淡灰白色の微粒子。	両面に黄緑灰色の釉を施す。 細かい貫入が入る。	M15 I a~b
				胴部	— — —	外面に片切り彫りによる蓮弁文？ 内面には構成不明な文様が型押しで施文。	淡灰白色の微粒子。 黒色鉄物を含む。	両面に黄緑灰色の釉を施す。 粗い貫入が入る。	M14 I b
			X a	胴部	— — —	内面には片切り彫りで構成不明な文様を描く。 割花文碗の可能性も考慮しておく。	灰白色の微粒子。 黒色鉄物を含む。	両面に濃灰白色の釉を施す。	M14 I a~b
				X b	胴部	— — —	内面には構成不明な文様が型押しで施文。	淡灰白色の微粒子。	両面に淡緑黄色の釉を施す。 細かい貫入が入る。
			胴部		— — —	内面には構成不明な文様が型押しで施文。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡。	両面に淡緑黄色の釉を施す。 粗い貫入が入る。	TP7-1層
			胴部		— — —	外面に指圧痕？ 内面には葉状の文様を陽刻。	赤褐色の細粒子。 (焼成不良)	両面に濃緑黄色の釉を施す。 細かい貫入が入る。	出土地不明 (残土内表探)
第22図 図版11	碗	X I	口縁	— — —	外面に篋描きにより弁先と幅の狭い細蓮弁を描く。	橙褐色の細粒子。	両面に失透気味の濃緑黄色の釉。	L15 I b	
			口縁	— — —	外面に線描きにより幅の狭い細蓮弁を描く。	淡黄白色の細粒子。	両面に濃黄緑色の釉を施す。 細かい貫入が入る。	L15 I b~II a	
			口縁	— — —	外面に篋描きにより弁先と幅の狭い細蓮弁を描く。	淡灰白色の微粒子。	両面に黄緑灰色の釉を施す。 細かい貫入が入る。	西側畑表探	
			口縁	— — —	外面に線描きにより弁先と幅の狭い細蓮弁を描く。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡。	両面に淡灰白色の釉を施す。 細かい貫入が入る。	L15 II b	
			口縁	— — —	外面に篋描きにより弁先と幅の狭い細蓮弁を描く。	灰白色の微粒子。	両面に黄緑灰色の釉を施す。 粗い貫入が入る。	TP8-2層	
			口縁	— — —	外面に線描きにより弁先と幅の広い細蓮弁を描く。	灰白色の微粒子。	両面に濃緑灰色の釉を施す。 細かい貫入が入る。	L12表探	
			口縁	— — —	外面に線描きにより弁先と幅の広い細蓮弁を描く。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡。	両面に淡緑黄色の釉を施す。 細かい貫入が入る。	TP8-2層	
			口縁	— — —	外面に線描きにより弁先と幅の広い細蓮弁を描く。 全体に丁寧な造りである。	灰白色の微粒子。	両面に灰白色の釉を施す。 細かい貫入が入る。	西側畑表探	
			口縁	— — —	外面に篋描きにより弁先と幅の広い細蓮弁を描く。 比較的丁寧な造りである。	灰白色の微粒子。	両面に淡緑灰色の釉を施す。 細かい貫入が入る。	M14 I a~b	
			口縁	— — —	外面に線描きにより弁先と幅の狭い細蓮弁を描く。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡。	両面に淡緑灰色の釉を施す。 細かい貫入が入る。	西側畑表探	
			口縁	— — —	外面に線描きにより幅の狭い細蓮弁を描く。	淡灰白色の微粒子。	両面に淡緑灰色の釉を施す。 細かい貫入が入る。	TP7-1層	
			底部	— — —	外面に線描きにより細蓮弁を描く。	灰白色の微粒子。 黒色鉄物を含む。	青灰色の釉を高台外面まで施す。	L14表探	
			X II a	口縁	14.9 — —	薄手で口唇は丸みを帯びるが内端は稜をなす。	赤褐色の細粒子。 (焼成不良)	両面に失透気味の黄緑灰色釉。	M15 II b
				口縁	15.0 — —	口唇は丸みを帯びるが内端は稜をなす。	淡橙褐色の細粒子。 (焼成不良)	両面に失透気味の黄緑灰色釉。	TP8-1層
				口縁	16.2 — —	薄手で口唇は舌状。比較的丁寧な成形。	灰白色の微粒子。 黒色鉄物を含む。	両面に緑黄色釉を施す。 細かい貫入が入る。	N14 I b
			X II b	口縁	18.2 — —	厚手で大振りの碗。口唇は丸みを持つ。	淡灰白色の微粒子。 黒色鉄物を含む。	両面に緑黄色釉を厚く施す。 粗い貫入が入る。	N14 I b
				口縁	— — —	口唇は尖り気味。古手の資料の可能性も考慮する。	淡灰白色の細粒子。 微細な気泡。	緑黄色釉を厚く施す。 粗い貫入が入る。	K12表探
				口縁	— — —	やや内彎気味で、口唇は丸みを帯びる。	淡灰白色の細粒子。 黒色鉄物を含む。	両面に淡緑灰色の釉を施す。 細かい貫入が入る。	L15 I b~II a
		X III	口縁	— — —	逆「ハ」の字状に開き、口縁断面は方形をなす。	灰白色の細粒子。	両面に淡緑灰色の釉を施す。 細かい貫入が入る。	L15 II a	
			口縁	— — —	逆「ハ」の字状に開き、口縁断面は方形をなす。	灰白色の細粒子。	両面に淡緑灰色の釉を施す。 細かい貫入が入る。	西側畑表探	
		X IV	口縁	14.2 — —	成形等はX II 類と同一である。 外面に波状沈線を描いている。	淡黄白色の細粒子。	両面施釉するも、焼成不良か二次的 被熱の影響で白濁した失透釉となる。	M15 II b	
			口縁	— — —	成形等はX II 類と同一である。 外面に波状沈線(細蓮弁文?)を描いている。	淡橙褐色の細粒子。 (焼成不良)	焼成不良のため淡橙褐色となる。	M15 I b	
		X IV	口縁	— — —	薄手で逆「ハ」の字状に開く。外面に明瞭な轆轤痕。	淡橙褐色の細粒子。	黄緑灰色の釉を施す。粗い貫入。	M15 I a~b	
			口縁	— — —	薄手で逆「ハ」の字状に開く。外面に轆轤痕。	淡灰白色の細粒子。	黄緑灰色の釉を施す。	L15 I b	
口縁	— — —	薄手で逆「ハ」の字状に開く。外面に轆轤痕。	淡橙褐色の細粒子。	白濁した黄緑灰色の釉を施す。	L15 II a				

第12表 青磁観察一覧3

挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉状況・貫入等	出土地	
第22図 図版11	碗	XIV	81	底面 6.3	高台「ハ」の字状で内削りは浅い。 高台外端を段状に成形。雑な造りである。	明褐色の粗粒子。 (焼成不良)	白濁した青灰白色の釉を高台外面まで 施す。見込み蛇の目釉剥ぎ。胎土目。	出土地不明
			82	底面 7.4	高台「ハ」の字状で内削りは浅い。 高台外端を斜位に削る。雑な造りである。	明褐色の粗粒子。 (焼成不良)	白濁した青灰白色の釉を高台外面まで 施す。見込み蛇の目釉剥ぎ。	L12表採
			83	底面 6.4	高台「ハ」の字状で内削りは浅い。 高台外端を斜位に削る。雑な造りである。	明褐色の粗粒子。 (焼成不良)	白濁した青灰白色の釉を高台外面まで 施す。見込み蛇の目釉剥ぎ。胎土目。	L14 I b L15 II b
第23図 図版12	碗	VI?	84	底面 5.5	高台は低く成形。畳付外端を斜位に削る。 内底見込みに「金玉満堂」の印花文。	淡灰白色の細粒子。	淡緑灰色釉を総釉後、外底見込みを 蛇の目釉剥ぎ。細かい貫入が入る。	K12表採
			85	底面 6.8	高台は高く内削りは深い。畳付外端を斜位に削る。 内面に構成不明の陰刻。	淡灰白色の細粒子。 白色鉱物を含む。	淡緑灰色釉を総釉後、外底見込みを 蛇の目釉剥ぎ。細かい貫入が入る。	M15 II b
			86	底面 5.6	高台は低く成形し、内削りは浅い。 畳付外端を斜位に削る。	淡灰白色の細粒子。	緑黄色釉を総釉後、内外底の 見込みを釉剥ぎ。細かい貫入が入る。	M14 I a~b
			87	底面 4.8	高台は低く成形し、内削りは浅い。 畳付外端を斜位に削る。	淡灰白色の細粒子。 黒色鉱物を含む。	淡緑灰色釉を総釉後、内外底の 見込みを釉剥ぎ。細かい貫入が入る。	西側畑表採
			88	底面 4.6	高台はやや高めで内削りは浅い。 畳付外端を斜位に削る。	淡灰白色の細粒子。	淡緑灰色の釉を高台外面まで施す。 内底見込みを釉剥ぎ。細かい貫入。	M15 II b
			89	底面 5.0	高台は低く成形し、内削りは浅い。 畳付外端を斜位に削る。内底見込みに印花文。	灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	濃灰白色の釉を高台外面まで施す。	K15表採
			90	底面 7.4	高台は低く成形し、内削りは浅い。 畳付外端を斜位に削る。	淡灰白色の細粒子。 黒色鉱物を含む。	淡緑灰色の釉を高台外面まで施す。 粗い貫入が入る。	L14 I b
			91	底面 5.3	高台は低く成形し、内削りは浅い。 畳付外端を斜位に削る。内底見込みを段状。	明褐色の粗粒子。 (焼成不良?)	緑黄色の釉を高台外面まで施す。 細かい貫入が入る。	M15 I a~b
			92	底面 4.0	高台は低く小さい。内削りは浅い。 畳付外端を斜位に削る。	淡灰白色の細粒子。	淡青灰色の釉を高台外面まで施す。 細かい貫入が入る。	O15層不明
			93	底面 5.8	高台は低く成形し、内削りは深い。 畳付外端を斜位に削る。	淡灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	淡青灰色の釉を畳付まで施す。 粗い貫入が入る。	TP8-3層
		XII?	94	底面 5.2	高台は低く成形し、内削りは深い。 畳付外端を斜位に削る。	淡灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	緑灰色の釉を高台外面まで施す。 細かい貫入が入る。	K15表採
			95	底面 4.6	高台はやや高く成形し、内削りは浅い。 畳付外端を斜位に削る。	灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	緑灰色の釉を高台外面まで施す。 細かい貫入が入る。	M15 II b
			96	底面 4.8	高台は低く成形し、内削りは浅い。 畳付外端を斜位に削る。	淡灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	濁った緑灰色の釉を高台外面まで施す。	L~M15 II a~b
			97	底面 5.6	高台は低く成形し、内削りは浅い。 畳付外端を斜位に削る。	淡灰白色の細粒子。	濁った青灰色の釉を高台外面まで施す。	N15 I b
			98	底面 6.4	高台はやや高く成形し、内削りは浅い。 畳付外端を斜位に削る。	淡灰白色の細粒子。	淡黄緑灰色の釉を畳付まで施す。	M14 I b~II b
			99	底面 5.8	高台はやや高く成形し、内削りは浅い。 畳付外端を斜位に削る。	淡灰白色の細粒子。	淡黄緑灰色の釉を高台外面まで施す。	L15 I a~b
			100	底面 6.2	高台は高く成形し、内削りは非常に浅い。 畳付外端を斜位、高台外面を竹節状に削る。	淡灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	濁った緑灰色の釉を高台内面まで施す。	TP3-3層
			101	底面 3.4	高台は低く成形し、内削りは浅い。 畳付外端を斜位に削る。	淡灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	淡黄緑灰色の釉を畳付まで施す。 細かい貫入が入る。	N15 I b
			102	底面 5.8	高台はやや高く成形し、内削りは浅い。 畳付外端を斜位に削る。	淡灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	淡青灰色釉を総釉後に外底見込みを 蛇の目釉剥ぎ。粗い貫入が入る。	M~N15 I a~b
			103	底面 5.2	高台は低く成形し、内削りは非常に浅い。 畳付外端を斜位に削る。	淡褐色の細粒子。	黄緑色釉を高台外面まで施釉後、 見込みを釉剥ぎ。細かい貫入。	L15表採
104	底面 6.0	高台は低く成形し、内削りは非常に浅い。 畳付外端を斜位に削る。	淡黄白色の細粒子。	濁った青緑灰色釉を高台外面まで 施釉後、内底見込みを釉剥ぎ。	西側畑表採			
第24図 図版13	皿	I	105	底面 5.2	やや上げ底状に成形。胴下部から角度変えて 立ち上がる。内底に櫛描文。	灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	灰白色の釉を外腰部まで施す。	L14 I b
			106	底面 5.2	やや上げ底状に成形。胴下部から角度変えて 立ち上がる。内底に櫛描文。	淡灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	灰白色の釉を外腰部まで施す。	N15 I b
			107	胴部	内面に櫛描文。碗の胴部も考慮しておく。	淡灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	淡緑灰色の釉を外腰部まで施す。	M14 I a~b
		II	108	口縁	12.2 逆「J」字状に折り、口折れとする。 文様は確認できない。	淡灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	TP6-1層
			109	口縁	12.4 逆「J」字状に折り、口折れとする。 外面胴部に蓮弁文?	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡緑灰色の釉を両面に厚く施す。	L14 II a~b
			110	口縁	12.8 逆「J」字状に折り、口折れとする。 外面胴部に篋削りによる不明瞭な蓮弁文。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡黄緑色の釉を両面に厚く施す。 内面口縁直下、釉垂れ。	L15 II b
			111	口縁	13.0 逆「J」字状に折り、口折れとする。 外面胴部に篋削りによる蓮弁文。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	黄緑色の釉を両面に施す。 細かい貫入が入る。	M15 II a
		III	112	口縁	口唇に浅めの袂りを入れて稜花とする。 内面に篋削りと線彫りによるラマ式蓮弁。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	緑灰色の釉を両面に施す。 両面に粗い貫入。	L15 II a
			113	口縁	12.3 口唇に浅めの袂りを入れて稜花とする。 内面に線彫りによるラマ式蓮弁。	灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	緑灰色の釉を両面に施す。 両面に細かい貫入。	N14 I b
			114	口縁	12.2 口唇に浅めの袂りを入れて稜花とする。 内面に線彫りによるラマ式蓮弁。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡緑灰色の釉を両面に施す。 両面に細かい貫入。	N15 I b
		IV	115	口縁	口縁部を大きく外反させる。口唇は丸みを持つ。	淡灰白色の微粒子。	淡緑灰色の釉を両面に施す。	N15 I a~b
			116	口縁	12.4 口縁部を緩やかに外反させる。 口唇は丸みを持つ。	白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡緑灰色の釉を両面に施す。 両面に細かい貫入。	M14 I b
			117	口縁	12.0 口縁部を緩やかに外反させる。 口唇は丸みを持つ。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡黄緑灰色の釉を両面に施す。	M15 I b~II a
			118	口縁	12.8 口縁部を緩やかに外反させる。 口唇は舌状。両面にラマ式蓮弁文?	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡緑灰色の釉を両面に施す。	西側畑表採
			119	口縁	直口口縁で、口唇は舌状。外面口縁直下を 削り取る。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡黄緑灰色の釉を両面に施す。	西側畑表採
			120	口縁	内彎気味に立ち上がる。内面に篋削りによる 蓮弁文?を描いている。	淡灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	緑黄色の釉を両面に施す。 細かい貫入が入る。	M15 II b

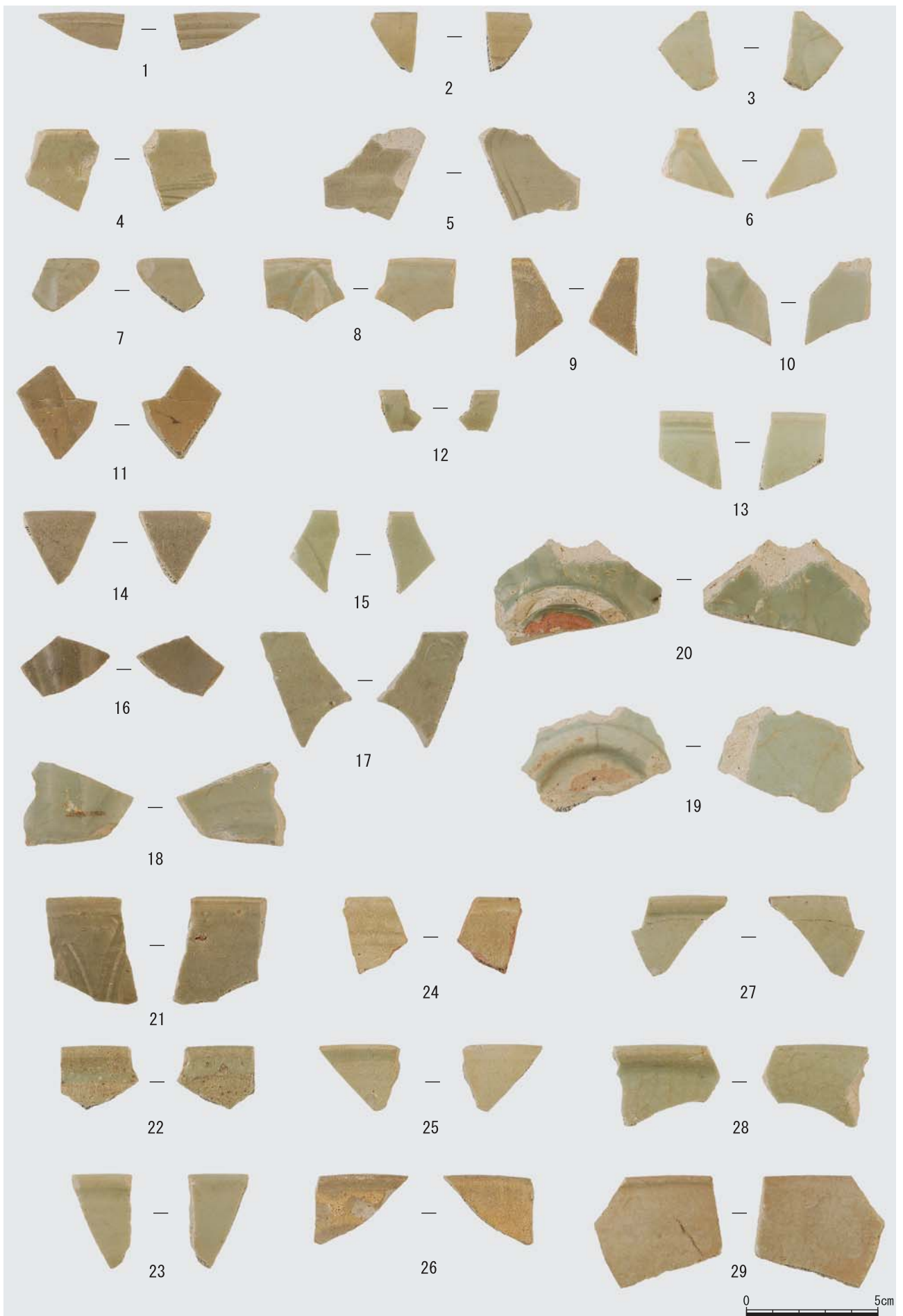
第12表 青磁観察一覽4

挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉状況・貫入等	出土地		
第24図 図版13	皿	V	口縁	— — —	直口口縁で、口唇は丸みを持つ。 内面口縁直下に調整痕。	淡灰白色の微粒子。	黄緑灰色の釉を両面に施す。	L14 II a~b	
			口縁	10.0 — —	内彎気味に立ち上がる。 口唇は丸みを持つ。	淡灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	淡緑灰色の釉を両面に施す。 外面口縁直下、釉垂れ。粗い貫入。	M14 I a~b	
			口縁	12.5 — —	直口口縁で、逆「ハ」の字状に開く。 口唇は舌状に尖る。	淡灰白色の微粒子。	淡緑灰色の釉を両面に施す。	TP6-3層	
			口縁	11.2 — —	内彎気味に立ち上がる。口唇は丸みを持つ。 外面に片切り彫りの蓮弁文、内面に篋削りの蓮弁文。	淡灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	淡緑灰色釉を総釉後、外底の 見込みを釉剥ぎ。粗い貫入。	M14 I b	
		VI	胴部	— — —	泉州窯系と思われる資料。雑な成形である。	淡灰白色の粗粒子。 微細な気泡痕。	内面に緑黄色の釉を施す。	西側畑表採	
		不明	底部	— — 2.9	底径非常に小さい。高台もかなり低く、内削りは浅い。	淡灰白色の細粒子。	高台外面まで淡黄緑色の釉を施す。 細かい貫入。	M15 II a~b	
			底部	— — 4.8	高台はかなり低く、内削りは浅い。	灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	青灰色の釉を畳付まで施す。 粗い貫入。	L15 I b	
			底部	— — 4.8	高台はかなり低く、内削りは浅い。「ハ」の字状。 畳付外端を斜位に削り取る。	灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	青灰色の釉を高台外面まで施す。 粗い貫入。	西側畑表採	
			底部	— — 6.0	高台は低く、内削りは浅い。腰折状に立ち上がる。 畳付外端を斜位に削り取る。	淡橙白色の細粒子。	黄緑色釉を総釉後、外底見込みを 釉剥ぎ。細かい貫入。	N15 I a~ II a	
			底部	— — 5.6	高台は低く、内削りは浅い。 畳付両端を斜位に削り取る。	灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	淡黄緑色釉を総釉後、外底 見込みを釉剥ぎ。	西側畑表採	
			底部	— — 6.8	高台はかなり低く、内削りも浅い。 畳付外端を斜位に削り取る。	淡灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	淡緑灰色釉を総釉後、外底 見込みを釉剥ぎ。粗い貫入。	西側畑表採	
			底部	— — 5.6	高台はかなり低く、内削りは浅い。「ハ」の字状。 畳付外端を斜位に削り取る。内底見込みに圏線。	灰白色の細粒子。	淡緑灰色の釉を総釉後、外底 見込みを釉剥ぎ。細かい貫入。	西側畑表採	
			底部	— — —	高台の断面形三角形状。非常に丁寧な成形。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡緑灰色の釉を両面に施す。 畳付端部の釉を掻き取る。粗い貫入。	TP8-1層	
第25図 図版14	盤		I	口縁	25.2 — —	鐙端部をつまみ上げて成形。 内面に篋削りによる幅の広い蓮弁文を描く。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	濃緑黄色の釉を両面に施す。 全体に細かい貫入。	L15 I b L15 II b
				口縁	27.4 — —	鐙端部をつまみ上げて成形。 内面に篋削りによる幅の狭い蓮弁文を描く。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡緑灰色の釉を両面に施す。 粗い貫入。	L15 II b
		口縁		— — —	鐙端部をつまみ上げて成形。 内面に篋削りによる幅の狭い蓮弁文を描く。	淡灰白色の微粒子。	淡緑黄色の釉を両面に施す。 全体に粗い貫入。	N15 I b	
		II	口縁	23.4 — —	口縁部を逆「L」字状に折り曲げて口折れとする。 口唇の平坦面に文様？	淡灰白色の微粒子。 微細な黒色鉱物。	濃緑黄色の釉を両面に施す。 全体に粗い貫入。	N15表採	
		III	口縁	25.6 — —	盤もしくは鉢となる資料を扱った。 厚手で、内彎気味に立ち上がる。口唇は丸くなる。	淡灰白色の微粒子。 微細な黒色鉱物。	濃緑黄色の釉を両面に施す。	L14 I a~b	
			口縁	— — —	逆「ハ」の字状に直口させる。 内面に篋削りによる蓮弁文を描く。	淡灰白色の微粒子。	淡濃緑黄色の釉を両面に施す。	西側畑表採	
			底部	— — 11.2	高台断面三角形状。外端を斜位に削る。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡濃緑黄色釉を総釉後、外底 見込みを掻き取る。	TP7-1層	
			底部	— — 11.6	高台断面三角形状。外端を斜位に削る。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡濃緑黄色釉を総釉後、外底 見込みを蛇の目釉剥ぎ。	L14 I a~b M15 II b	
		不明	底部	— — —	非常に厚手で、外面に片切り彫りによる文様。 内面にも片切り彫りによる文様と見込みに圏線。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡濃緑黄色の釉を両面に施す。	L12表採	
			底部	— — 8.0	高台断面三角形状。外端を斜位に削る。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡濃緑黄色釉を総釉後、外底 見込みを蛇の目釉剥ぎ。細かい貫入。	N13表採 M14 I a~b	
			酒会壺	甲	— — —	蓋甲頂部の撮み直下である。撮みの痕跡が残る。 内面には印花文。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡濃緑灰色の釉を施す。	L15 I a~b
		酒会壺	蓋	甲	— — —	蓋甲頂部片。内面には印花文。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡濃緑灰色の釉を施す。	N14 I b
				鐙	— — —	酒会壺蓋の鐙端部片。内面に調整痕が顕著。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	濃緑灰色の釉を蓋甲面に施す。	M15 II b
鐙	— — —			酒会壺蓋の鐙端部片。僅かにつまみ上げ波状と している。内面は雑な調整。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	緑灰色の釉を蓋甲面に施す。	西側畑表採		
身	底部		— — —	外面に片切り彫りの蓮弁文？落とし底の造りと なっているが、欠落しており判然としない。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	緑灰色の釉を施す。細かい貫入。	M15 II a~b		
香炉	三足 香炉？	口縁	5.5 — —	口縁部を強く内彎させる口寄口縁。 外面に構成不明の文様を描いている。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡緑灰色の釉を両面に施す。 細かい貫入。	L14 I a~b M14 I b~ II b		
		口縁	— — —	口寄口縁。149に比して大きいタイプとなる。 外面に凸状の貼付文？	淡灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	西側畑表採		
		胴部	— — —	薄手で、外面に竹節状の稜をなす。	淡灰白色の微粒子。	緑灰色の釉を両面に施す。	西側畑表採		
		胴部	— — —	薄手で、外面に竹節状の稜をなす。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡緑灰色の釉を両面に施す。	TP8-3層		
		底部	— — 4.2	腰部下方に三角状の足を付す。いわゆる「千鳥足」 外底の高台外端を斜位に削る。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	濃緑灰色の釉を施す。内面は見込み 部分を釉剥ぎ。	N15 I b		
馬上杯	脚	— — —	馬上杯の脚部。外面に螺旋状の凹凸。	灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	緑灰色の釉を施す。粗い貫入。	L13表採			
瓶	双耳 環	環	— — —	双耳瓶の環破片。	灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	濃緑灰色の釉を厚く施す。	M14 I b		
		胴部	— — —	薄手で、外面には構図不明の文様を描く。 内面は調整痕。	淡灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	淡緑灰色の釉を厚く施す。	西側畑表採		
	不明	胴部	— — —	厚手で、外面には構図不明の文様を描く。 内面は調整痕が顕著である。	淡黄灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	黄緑色の釉を施す。	出土地不明		
		胴部	— — —	厚手で、外面に調整痕が顕著である。	灰白色の微粒子。 微細な気泡痕。	失透気味の淡緑灰色釉を 外面に施す。内面は露胎。	TP6-3層		
袋物	不明	底部	— — —	高台は低く、内削りも浅い。 全体的に雑な造りである。	灰白色の細粒子。 微細な気泡痕。	濃緑灰色の釉を厚く施す。 内面は露胎である。	M15 I b~ II a		

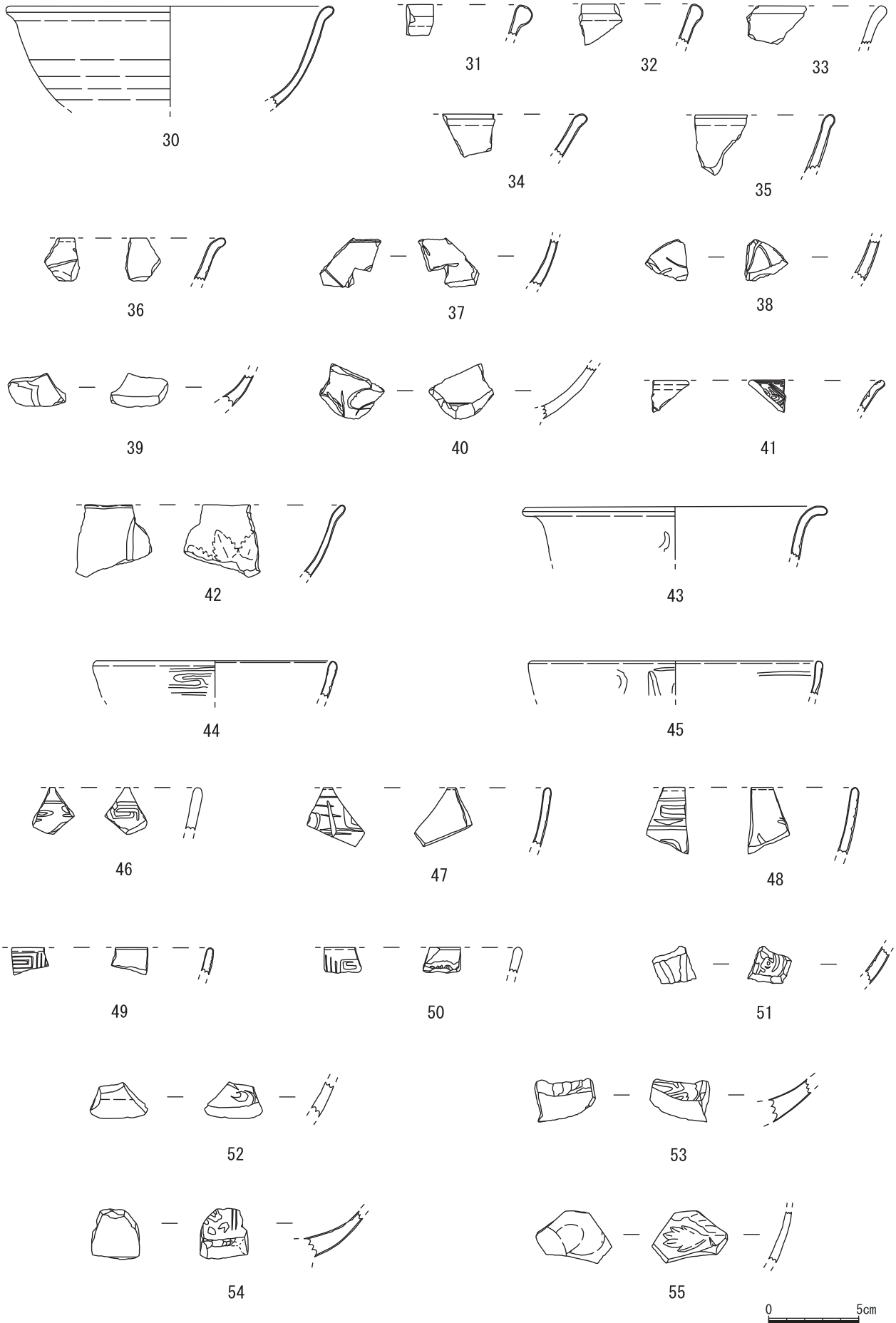


0 5cm

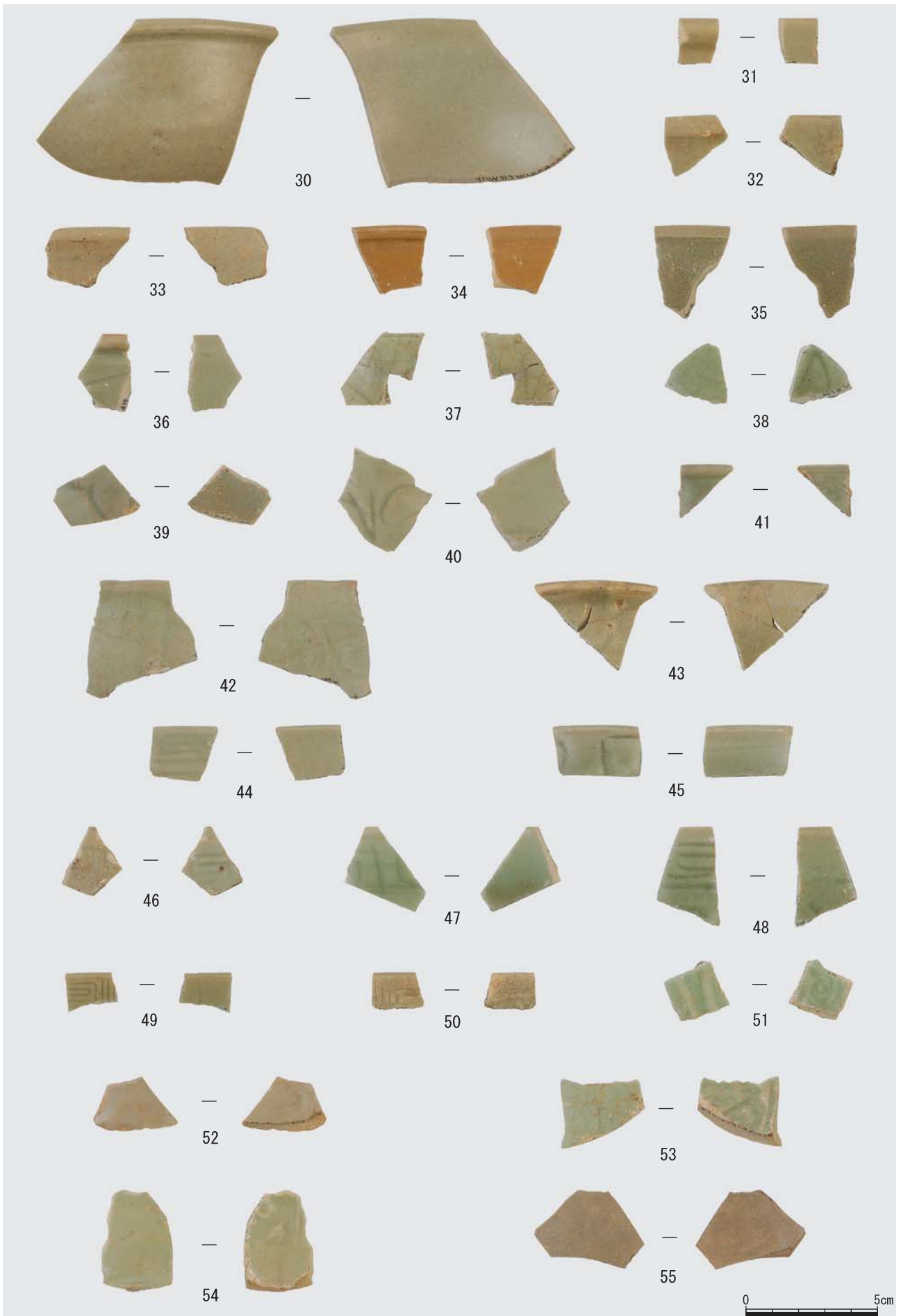
第 20 图 青磁 1 碗①



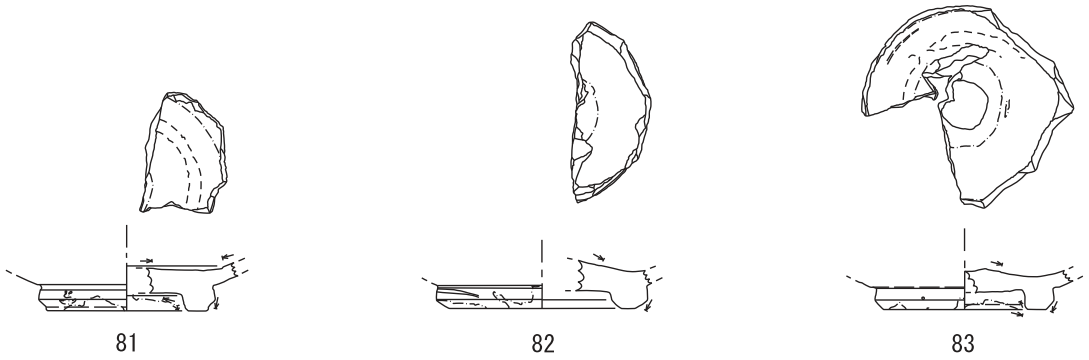
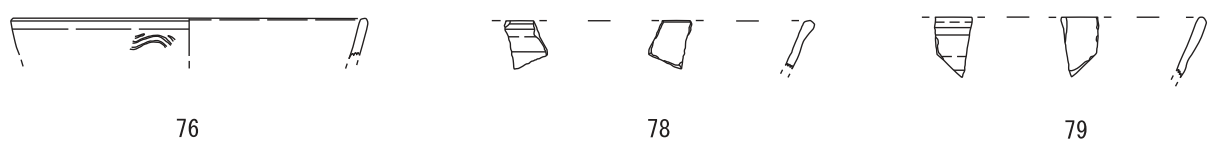
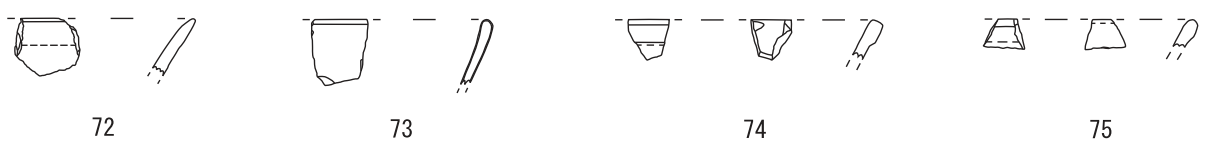
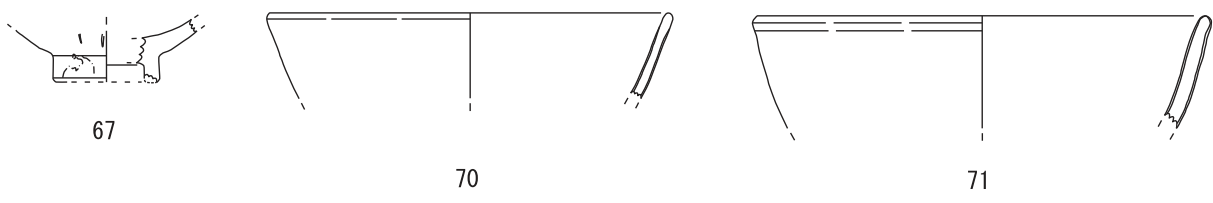
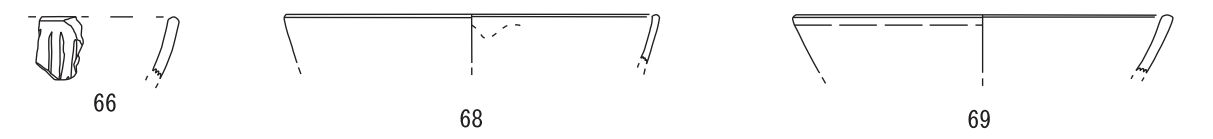
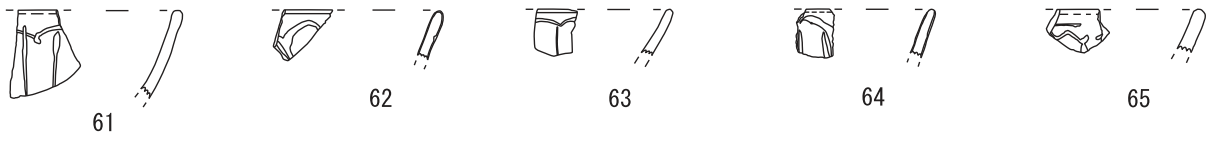
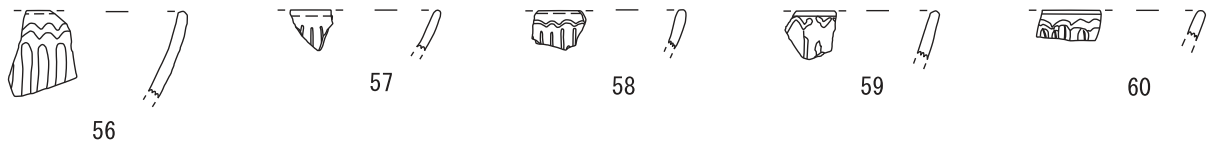
图版9 青磁 1



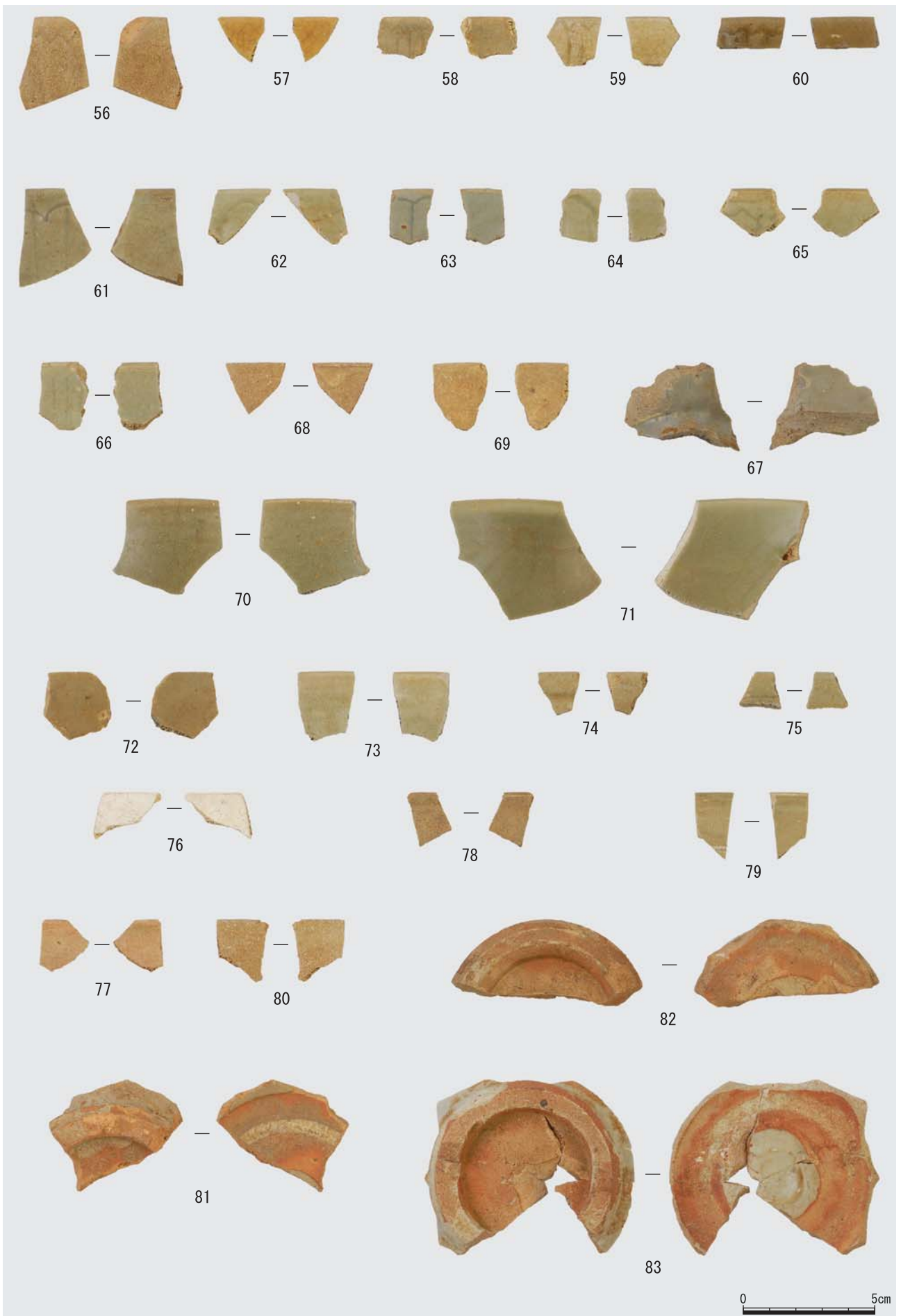
第 21 图 青磁 2 碗②



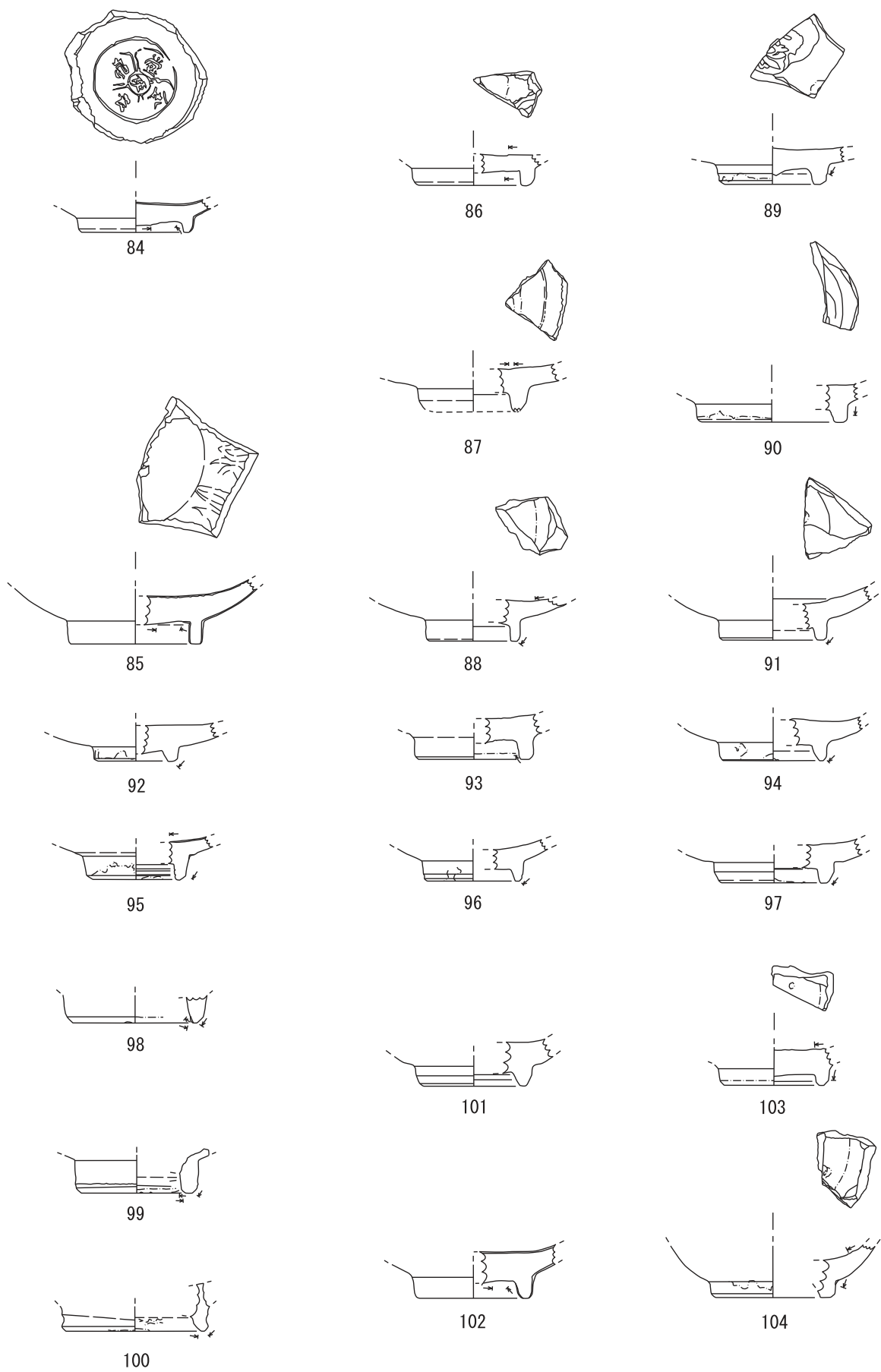
图版 10 青磁 2



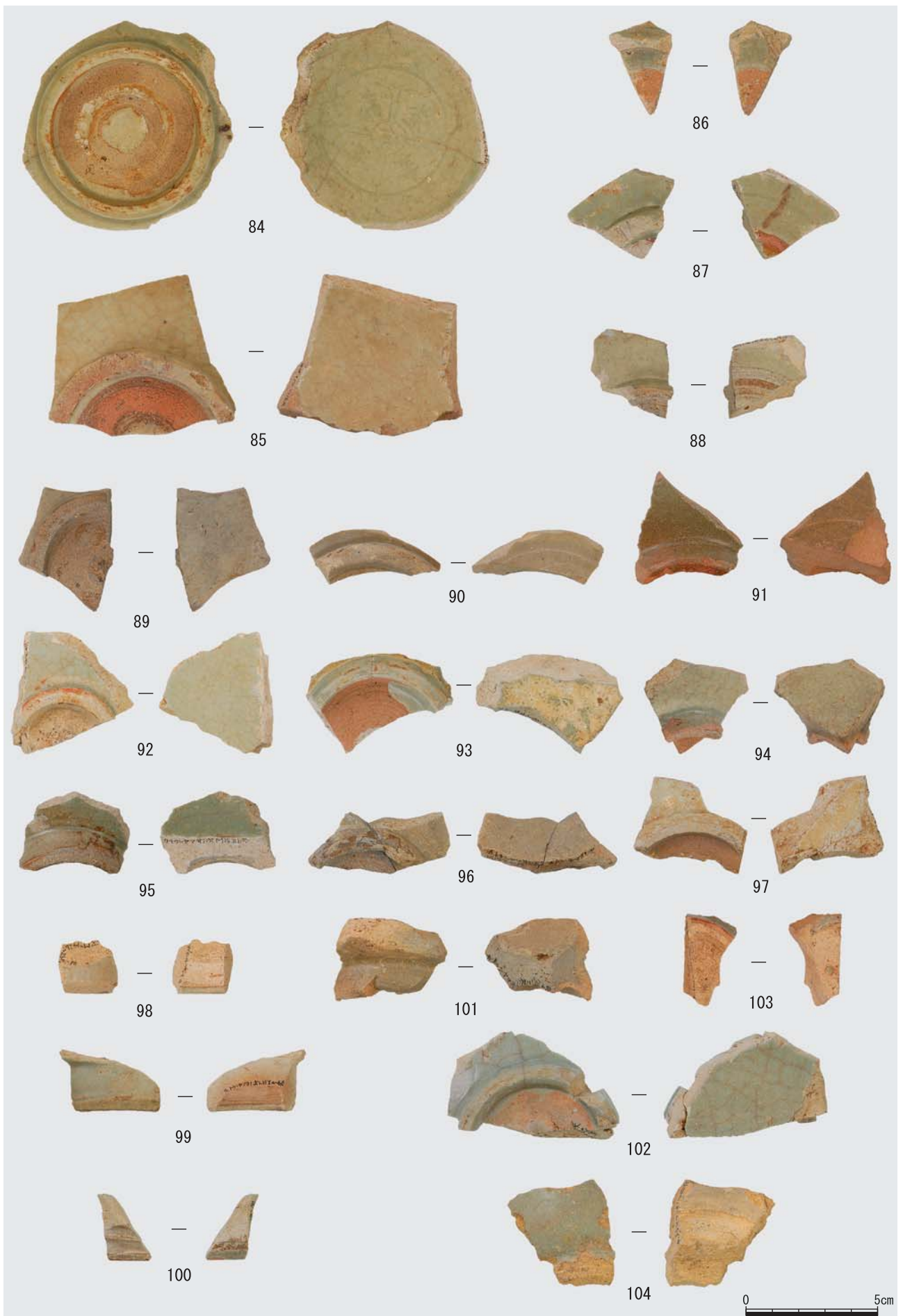
第22图 青磁3碗③



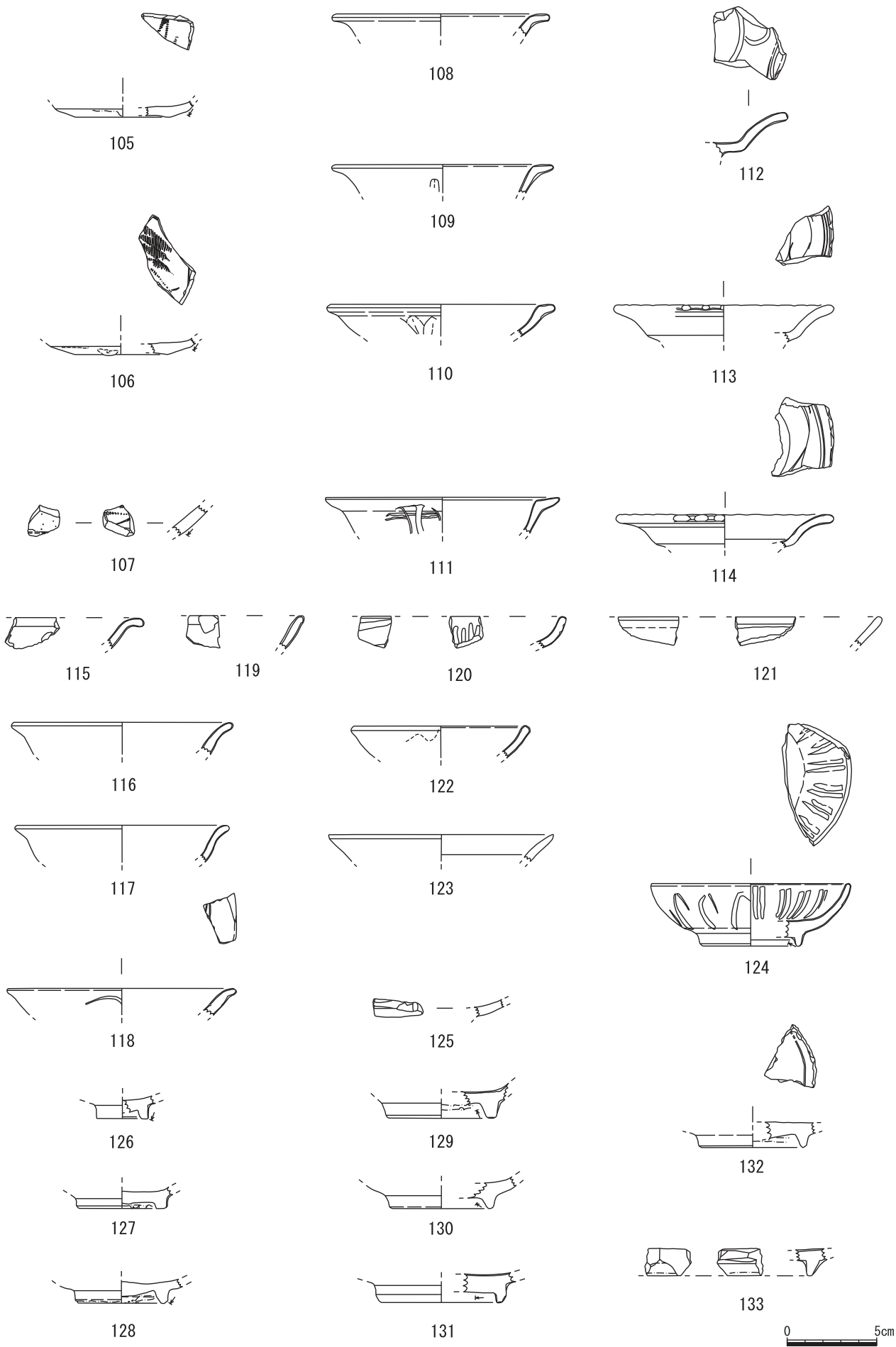
图版 11 青磁 3



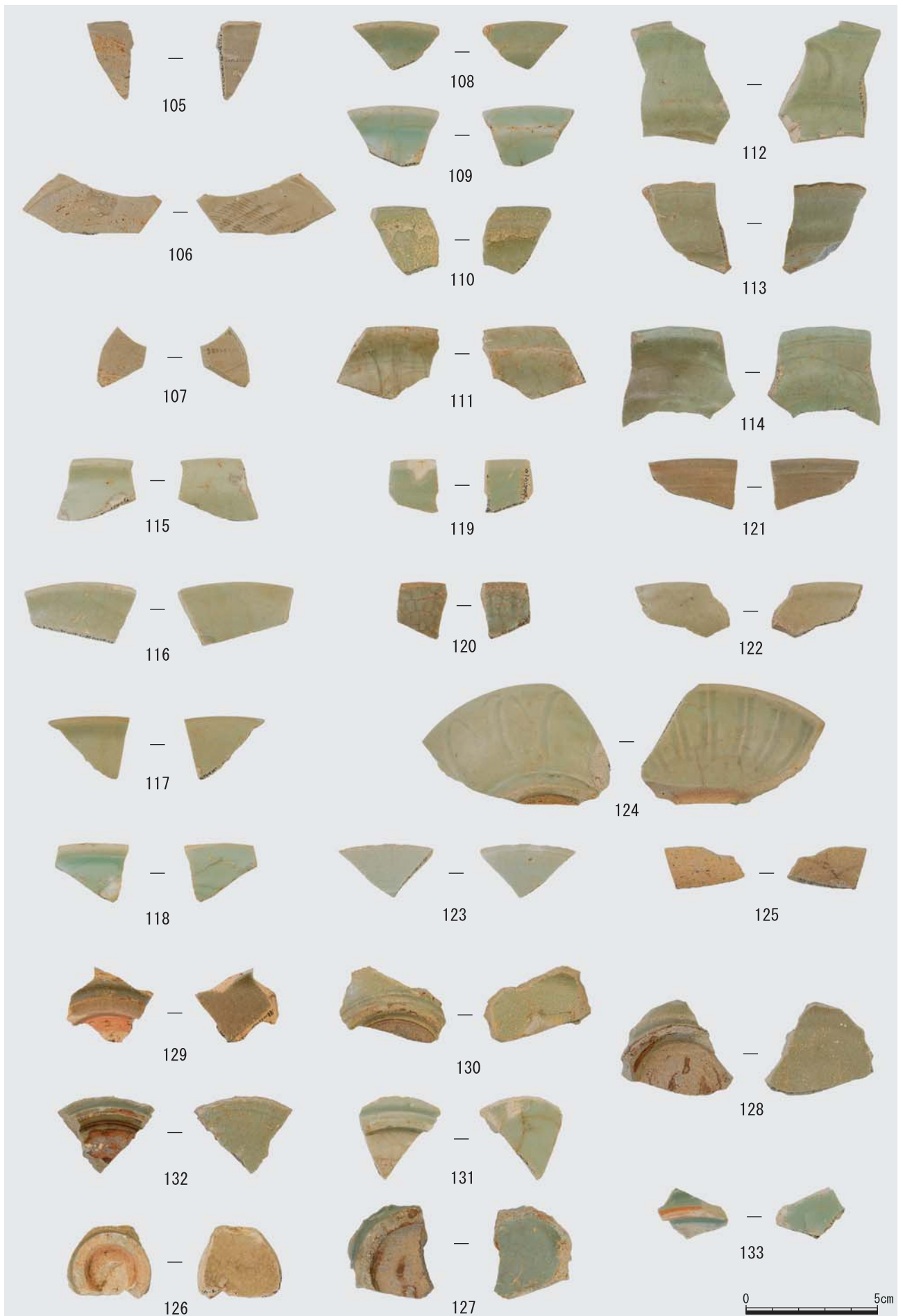
第 23 图 青磁 4 碗④



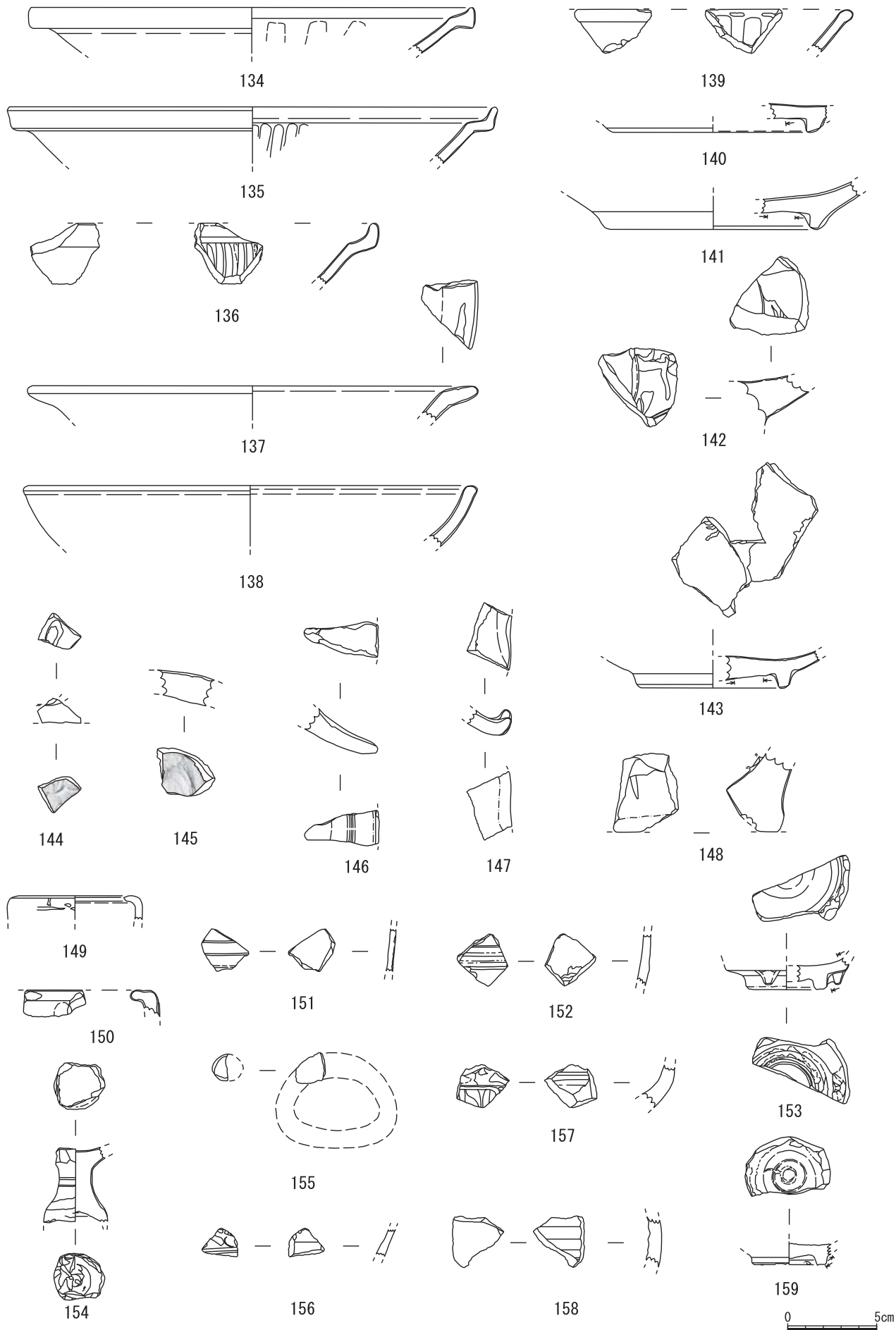
图版 12 青磁 4



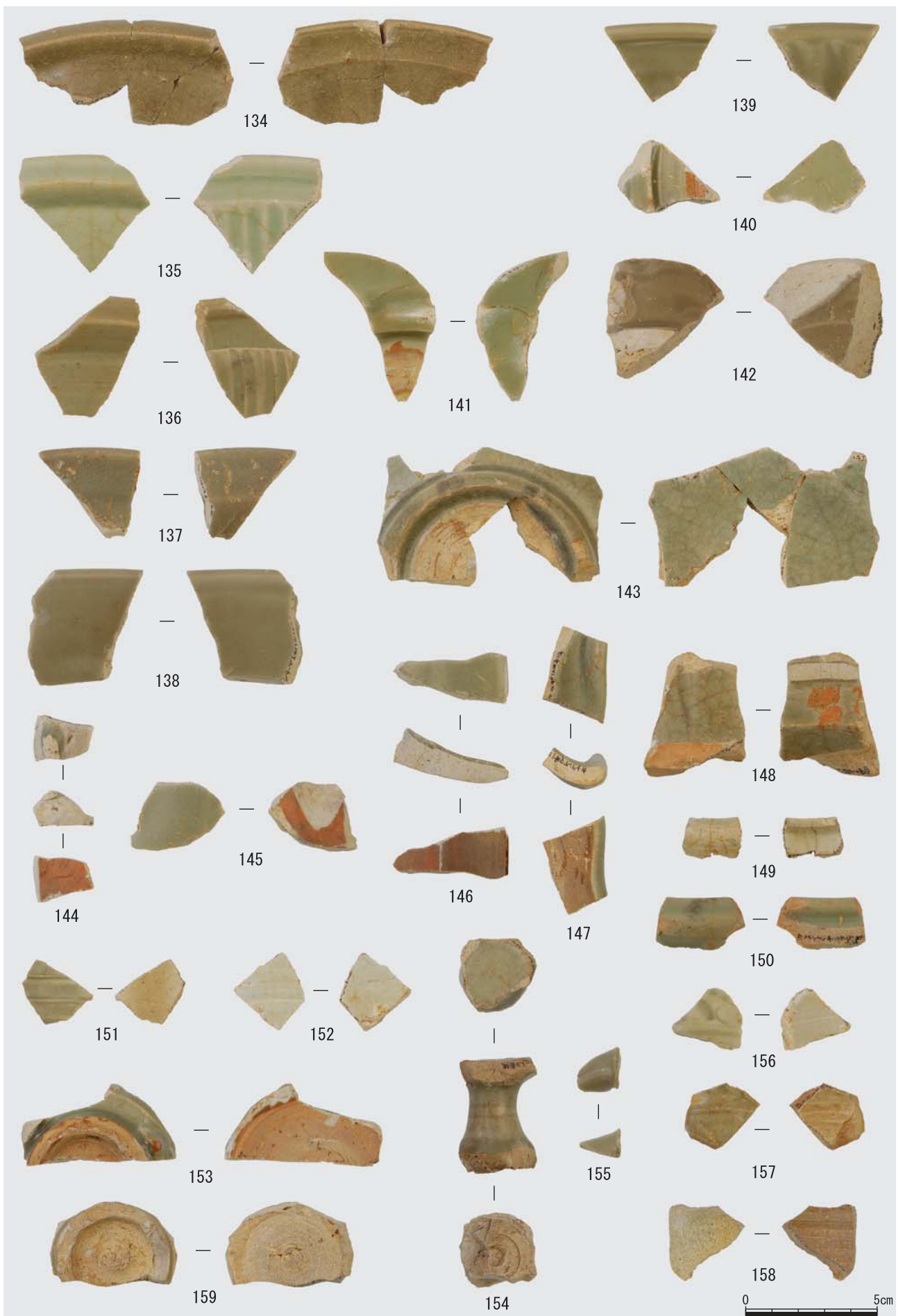
第 24 图 青磁 5 Ⅲ



图版 13 青磁 5



第 25 图 青磁 6 盤 (134 ~ 143)、酒会壺 (144 ~ 148)、香炉 (149 ~ 153)、馬上杯 (154) 瓶 (155 ~ 158)、袋物 (159)



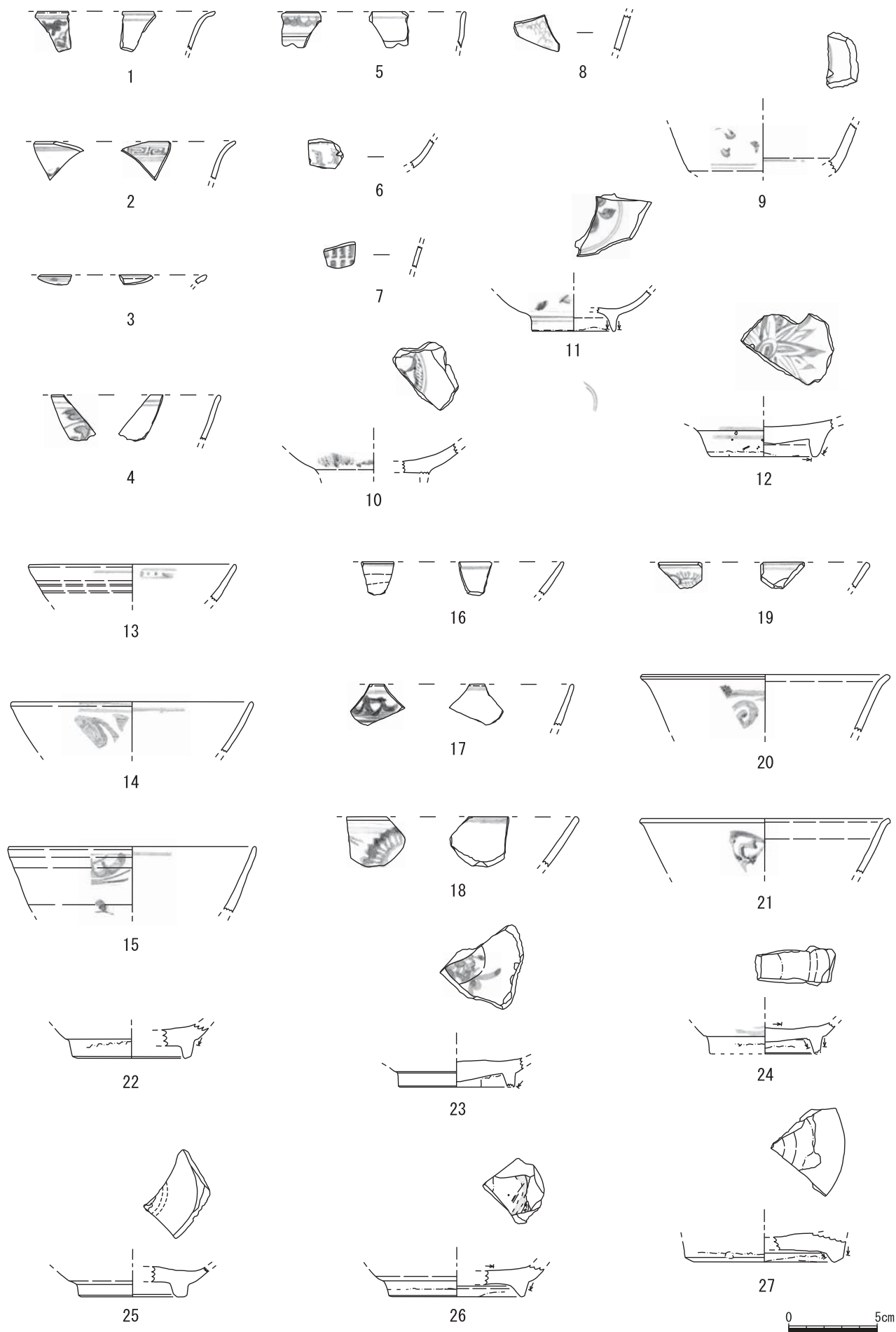
图版 14 青磁 6

第14表 青花観察一覧1

挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉状況・貫入等	出土地		
第26図 図版15	碗	I	口縁	—	薄手の外反碗。外面に圈線、草花文と牡丹唐草文。内面は圈線のみ。小碗の可能性も考慮しておく。	淡灰白色の微粒子。	淡青白色を呈し、口唇は口禿。	西側畑表採	
			口縁	—	薄手の外反碗。外面に圈線、草花文？内面は圈線、雷文。	淡灰白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	N15 I b	
			口縁	—	薄手の外反碗。外面に圈線、構図不明文。内面は圈線のみ。蓋付碗の身/小碗の可能性。	淡灰白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	TP7-1層	
		II	口縁	—	薄手の直口碗。外面に圈線と草花文。内面は圈線のみ。	白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	L15 I b	
			口縁	—	腰折碗の口縁部。外面に圈線、簡略化した波瀆文。内面は圈線のみ。	白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	L15表採	
		I or II	胴部	—	薄手の碗胴部片。外面に梵字文。	白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	M14 I b~II a	
			胴部	—	薄手の碗胴部片。外面に梵字文。具須が明瞭。	白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	西側畑表採	
		III	胴部	—	薄手の碗胴部片。外面に雲文。いわゆる「雲堂手」タイプ。	白色の微粒子。	濁った青白色を呈す。	M15 I a~b	
			底部	—	腰折碗の胴部片。外面に圈線、簡略化されたアラベスク？(構図不明文様)。内面は圈線のみ。	白色の微粒子。	濁った青白色を呈す。	西側畑表採	
		I or II	底部	—	蓮子タイプの底部資料。外面に芭蕉文のくずれ内底見込みに蓮華文と圈線。	淡灰白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	M14 I a~b M15 II a	
			底部	—	饅頭心タイプの底部資料。外面に草花文？内底見込みに圈線、草花文。外底見込み圈線。	白色の微粒子。	淡青白色を呈す。畳付のみ露胎とする。	L15 II b	
		末 17c 18c 前半	III	底部	6.0	腰折碗と思われる底部資料。高台外面に圈線。内底見込みに十字花文。	淡灰白色の微粒子。	濁った淡青白色を呈す。総袖後に畳付~外端のみ露胎とする。	L15 II b
	口縁			11.8	薄手の直口碗で、いわゆる福建・広東系統。外面に圈線。内面は圈線と波瀆文のくずれ？	淡灰白色の微粒子。	濁った淡灰白色を呈す。	TP8-1層	
	口縁			13.8	薄手の直口碗で、いわゆる福建・広東系統。外面に圈線と草花文、内面は圈線のみ。	淡灰白色の微粒子。	失透気味の黄灰色を呈す。	M15 I b~II a	
	IV		口縁	14.1	薄手の直口碗で、いわゆる福建・広東系統。外面に圈線と草花文、内面は圈線のみ。	淡灰白色の微粒子。	濁った灰白色を呈す。	西側畑表採	
			口縁	—	薄手の直口碗で、いわゆる福建・広東系統。轆轤痕が明瞭。内外面に圈線。	淡灰白色の微粒子。	濁った黄灰白色を呈す。	O14 I b	
			口縁	—	薄手の直口碗で、いわゆる福建・広東系統。外面に圈線と草花文、内面は圈線のみ。	淡灰白色の微粒子。	濁った灰白色を呈す。	L14 I a~b	
	IV		口縁	—	薄手の直口碗で、いわゆる福建・広東系統。外面に圈線とコンニャク印判、内面は圈線のみ。	淡灰白色の微粒子。	濁った灰白色を呈す。	西側畑表採	
			口縁	—	薄手の直口碗で、いわゆる福建・広東系統。外面に圈線と波瀆文？内面は圈線のみ。	淡灰白色の微粒子。	濁った黄灰白色を呈す。	M14 I a~b	
			口縁	14.2	薄手の直口碗で、いわゆる福建・広東系統。外面に圈線と波瀆文？内面は圈線のみ。	淡灰白色の微粒子。	濁った灰白色を呈す。	TP6-3層	
			口縁	14.2	やや厚手の外反碗。外面に草花文？	淡灰白色の微粒子。	濁った灰白色を呈す。	TP6-3層	
			底部	6.0	福建・広東系統の底部資料。高台は低く、内削りは浅い。畳付外端を斜位に削る。	淡黄白色の微粒子。	濁った黄灰白色を呈す。高台外面まで施釉。内底は露胎。	西側畑表採	
			底部	6.4	福建・広東系統の底部資料。見込みに草花文。高台は低く、内削りは浅い。畳付外端を斜位に削る。	淡黄白色の微粒子。	濁った黄灰白色を呈す。一部、高台内面まで施釉。細かい貫入。	M15 I a	
	碗		V	底部	6.2	福建・広東系統の底部資料。高台外面に圈線。高台は低く、内削りは浅い。畳付外端を斜位に削る。	淡黄白色の微粒子。	濁った灰白色を呈す。内底見込み蛇の目釉剥き。畳付内端は露胎。	出土地不明
				底部	6.4	福建・広東系統として分類。高台は低く、内削りは浅い。畳付両端を斜位に削る。	淡橙褐色の細粒子。	内底見込みに重ね焼きの痕跡？	L15表採
				底部	7.6	福建・広東系統の底部資料。「ハ」の字状に開く。高台は低く、内削りは浅い。畳付外端を斜位に削る。	淡橙褐色の細粒子。	濁った灰白色を呈す。内底見込み蛇の目釉剥き。高台両端は露胎。	TP8-3層
		底部		8.0	福建・広東系統の底部資料。「ハ」の字状に開く。高台は低く、内削りは浅い。畳付外端を斜位に削る。	淡黄白色の微粒子。	濁った灰白色を呈す。内底見込み蛇の目釉剥き。高台両端は露胎。	O15層不明	
VI		口縁	—	薄手の直口碗で比較的丁寧な成形。外面に圈線、波瀆文。内面に圈線。	白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	TP7-2層		
		口縁	11.8	薄手の直口碗で雑な成形。外面に圈線、簡略化された波瀆文と芭蕉文？内面に圈線。	淡灰白色の微粒子。	濁った灰白色を呈す。	L14 I b~II a L15 II a~b M15 II a~b		
		口縁	11.8	薄手の直口碗で比較的丁寧な成形。外面に圈線、波瀆文。内面に圈線。	白色の微粒子。	淡青白色を呈す。粗い貫入。	TP8-2層		
		口縁	—	薄手の直口碗で雑な成形。外面に圈線、簡略化された波瀆文と芭蕉文？内面に圈線。	淡灰白色の微粒子。	濁った灰白色を呈す。	M15 II b		
18c 19c 前半	IV	胴部	—	薄手の直口碗の胴部片。比較的丁寧な成形。外面に芭蕉文。内面に圈線。	白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	M14 I b		
		胴部	—	薄手の直口碗の胴部片。比較的丁寧な成形。外面に芭蕉文。内面に圈線。	白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	M14 I a~b M15 II b		
	VI	口縁	—	口縁部を緩やかに外反させる。外面に圈線、草花文	淡灰白色の微粒子。	濃灰白色を呈す。	西側畑表採		
		口縁	—	口縁部を緩やかに外反させる。外面に圈線、草花文。内面に圈線。	淡灰白色の微粒子。	灰白色を呈す。	M14 I b~II b		
		口縁	—	口縁部をきつく外反させる。外面に圈線、寿文。内面に圈線。	淡灰白色の微粒子。	灰白色を呈す。	L14 I b		
	IV	口縁	12.6	口縁部をややきつく外反させる。外面に圈線、草花文。内面に圈線。	淡灰白色の微粒子。	灰白色を呈す。	M15 II b		
		口縁	14.8	口縁部をややきつく外反させる。外面に圈線、草花文。内面に圈線。	淡灰白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	L15 II b		
皿	I	胴部	—	VI類としていたが、見込みを釉剥き(露胎)とするため、福建・広東系統の胴部片とした。	淡灰白色の微粒子。	灰白色を呈す。	西側畑表採		
		胴部	—	薄手の外反皿胴部。外面に圈線、牡丹唐草文。内面の文様は構図不明。	淡灰白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	西側畑表採		

第14表 青花観察一覧2

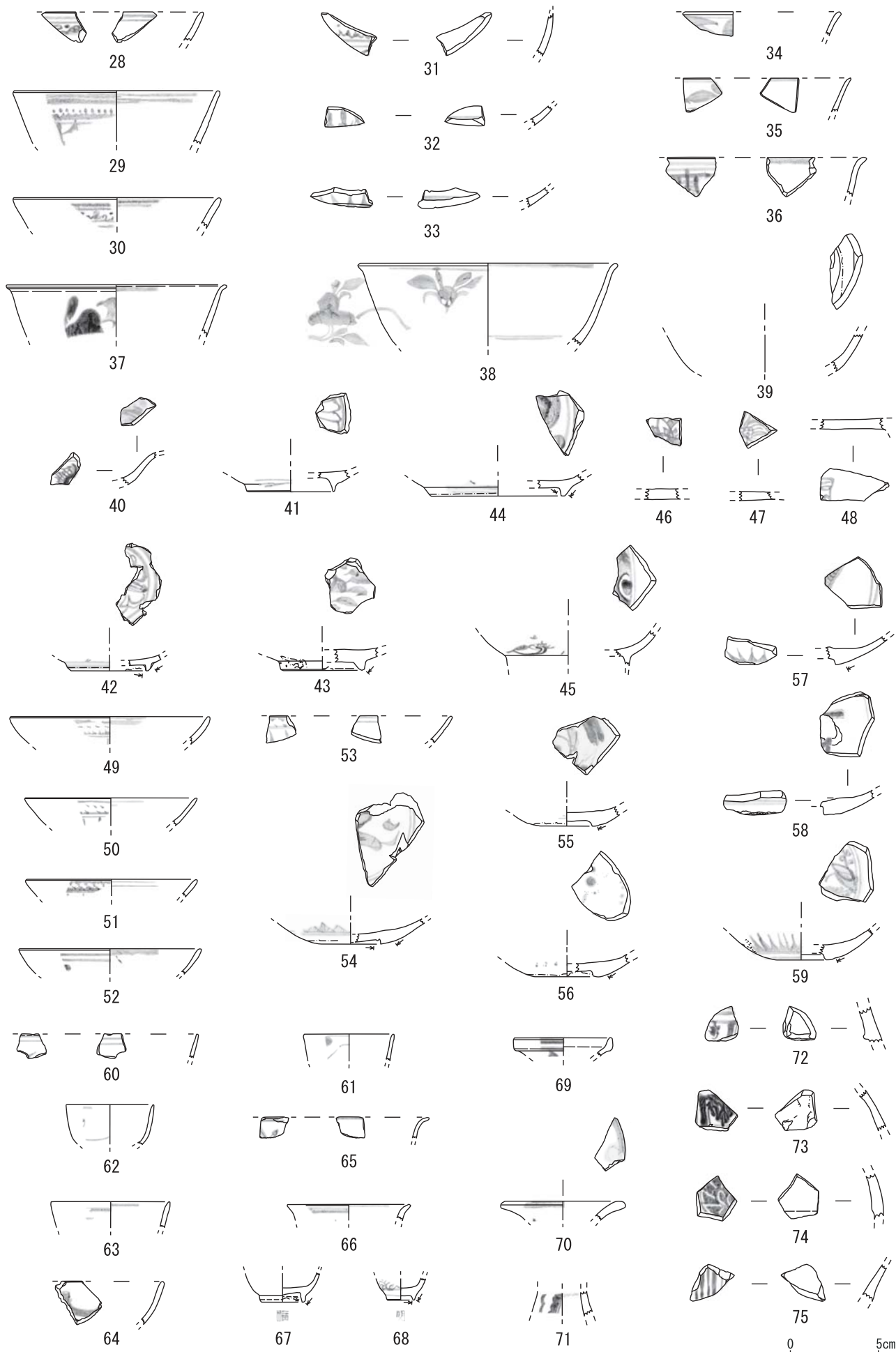
挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉状況・貫入等	出土地		
第27図 図版16	皿	I	41	底部 — 4.8	型成形であると思われる。外面は胴下部と高台外面に圏線、内底見込みに圏線と菊花状文様。	淡黄白色の微粒子。	濁った灰白色を呈す。	TP6-3層	
			42	底部 — 4.4	薄手での外反皿。畳付外端を斜位に削る。外面に唐草文、内底見込みに十字花文と圏線。	淡黄白色の微粒子。	濁った灰白色を呈す。	M15 I b ~ II a M15 II b	
			43	底部 — 4.8	福建・広東系碗に成形近似。「ハ」の字状に開く。畳付外端を斜位に削る。見込みに構図不明文様。	淡黄白色の微粒子。	濁った灰白色を呈す。 細かい貫入。	残土内採集	
			44	底部 — 7.6	大き目の外反皿。畳付外端を斜位に削る。外面に圏線、内底見込みに圏線と草花文？	淡灰白色の微粒子。	淡青白色を呈す。 粗い貫入。	L15 I b	
			45	底部 — —	大き目の外反皿。外面に圏線と如意文頭？内底の見込みに圏線と構図不明文様。	淡灰白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	TP4-1層	
			46	底部 — —	外反皿になるとと思われる底部資料。見込みに花卉文？	淡灰白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	N14 I b	
			47	底部 — —	外反皿になるとと思われる底部資料。見込みに花卉文？	淡灰白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	L14 I b	
			48	底部 — —	外反皿になるとと思われる底部資料。外底の見込みに銘。	淡灰白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	M14 I b	
			49	口縁 10.4 —	直口縁の碁筭底皿。外面に圏線、簡略化した波濤文。内面に圏線。	淡灰白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	L14 I a ~ b M15 II b	
		50	口縁 11.4 —	直口縁の碁筭底皿。外面に圏線、簡略化した波濤文と芭蕉文。内面に圏線。	淡灰白色の微粒子。	濁った黄灰白色を呈す。	M14 I b M15 II b		
		51	口縁 10.8 —	直口縁の碁筭底皿。外面に圏線、簡略化した波濤文と芭蕉文。内面に圏線。	淡灰白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	L ~ M14 I b		
		52	口縁 10.4 —	直口縁の碁筭底皿。外面に圏線、簡略化した波濤文と不明文様。内面に圏線。	淡灰白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	L14 I a ~ b		
		53	口縁 — —	直口縁の碁筭底皿。外面に圏線、簡略化した波濤文と芭蕉文。内面に圏線。	淡灰白色の微粒子。	淡青白色を呈す。	M14 I b ~ II a		
		54	底部 — 3.4	碁筭底皿の底部。内削りは浅く、雑な成形。外面に圏線と芭蕉文。内面に圏線と草花文？	淡灰白色の細粒子。	淡青白色を呈す。	L15表採 L15 I a ~ b L15 II b		
		55	底部 — 2.8	碁筭底皿の底部。内削りは浅く、雑な成形。外面に圏線と芭蕉文？内面に草花文？	淡灰白色の細粒子。	淡青灰白色を呈す。	西側畑表採		
		56	底部 — 3.0	碁筭底皿の底部。内削りは浅く、雑な成形。外面に簡略化された芭蕉文。内面に草花文？	淡灰白色の細粒子。	失透気味の濁った黄灰白色を呈す。	西側畑表採		
		57	底部 — —	碁筭底皿の底部。内削りは浅く、雑な成形。外面に芭蕉文？内面に圏線と草花文？	淡灰白色の細粒子。	淡青灰白色を呈す。	M15 II b		
		58	底部 — —	碁筭底皿の底部。内削りは浅く、砂粒が付着。外面に圏線、内面に草花文？	淡灰白色の細粒子。	淡青灰白色を呈す。	M15 II b		
		59	底部 — —	碁筭底皿の底部。内削りは浅く、雑な成形。外面に簡略化された芭蕉文。内面に花卉文？	淡灰白色の細粒子。	失透気味の濁った黄灰白色を呈す。	M14 I b ~ II a		
	60	杯	I	60	口縁 — —	直口縁の杯。外面に圏線と不明文様。内面に圏線。	淡灰白色の細粒子。	淡青灰白色を呈す。 口唇部を口禿とする。	L14 I b
	61			口縁 5.2 —	直口縁の杯。型成形と思われる。外面に圏線と花卉文？	淡灰白色の細粒子。	淡青灰白色を呈す。	M15 II a	
	62			口縁 5.0 —	直口縁の杯。型成形と思われる。外面に圏線と花卉文？	淡灰白色の細粒子。	淡青灰白色を呈す。	TP8-1層	
	63			口縁 6.8 —	直口縁の杯。型成形と思われる。内外面に圏線。	淡灰白色の細粒子。	淡青灰白色を呈す。	M15 I b	
	64		口縁 — —	直口縁の杯。内面に不明文様。	淡灰白色の細粒子。	淡青灰白色を呈す。	残土内採集		
	65		II	65	口縁 — —	薄手での外反口縁。外面に圏線と花卉文、内面に圏線。	淡灰白色の細粒子。	淡灰白色を呈す。	西側畑表採
66	口縁 7.0 —			厚手の外反口縁。両面に圏線。	淡灰白色の細粒子。	淡青灰白色を呈す。	L15 I a ~ b		
67	小杯		不明	67	底部 — 2.4	型成形。杯の可能性も考慮しておく。外底見込みに銘。	淡灰白色の細粒子。	淡灰白色を呈す。	L15 I b
68		底部 — 1.6		型成形。外面に圏線と如意文頭。外底見込みに銘。	淡灰白色の細粒子。	淡青灰白色を呈す。	M15 I a ~ b		
69	瓶	瓶	69	口縁 5.4 —	瓶の口縁。端部を上方につまみ上げる。外面に圏線と芭蕉文。	淡灰白色の細粒子。	淡青灰白色を呈す。	西側畑表採	
70			口縁 7.1 —	外反口縁。口唇に圏線。	淡灰白色の細粒子。	淡青灰白色を呈す。	L15 I b		
71			頸部 — —	外面に芭蕉文。内面に黒い変色。	淡灰白色の細粒子。	青灰白色を呈す。	M15 I a ~ b		
72			胴部 — —	内面に積み痕が明瞭に残る。外面に圏線とラマ式蓮弁文？	淡灰白色の細粒子。	淡青灰白色を呈す。	L14 I b		
73		胴部 — —	内面に積み痕が明瞭に残る。外面に下向きのラマ式蓮弁文。	淡灰白色の細粒子。	淡青灰白色を呈す。	L15 I a ~ b			
74		胴部 — —	内面に積み痕が残る。外面に宝相華唐草文？	淡灰白色の細粒子。	淡青灰白色を呈す。	出土地不明			
75		胴部 — —	瓶の胴下部。外面に蓮弁文。	淡灰白色の細粒子。	淡青灰白色を呈す。	TP6-3層			



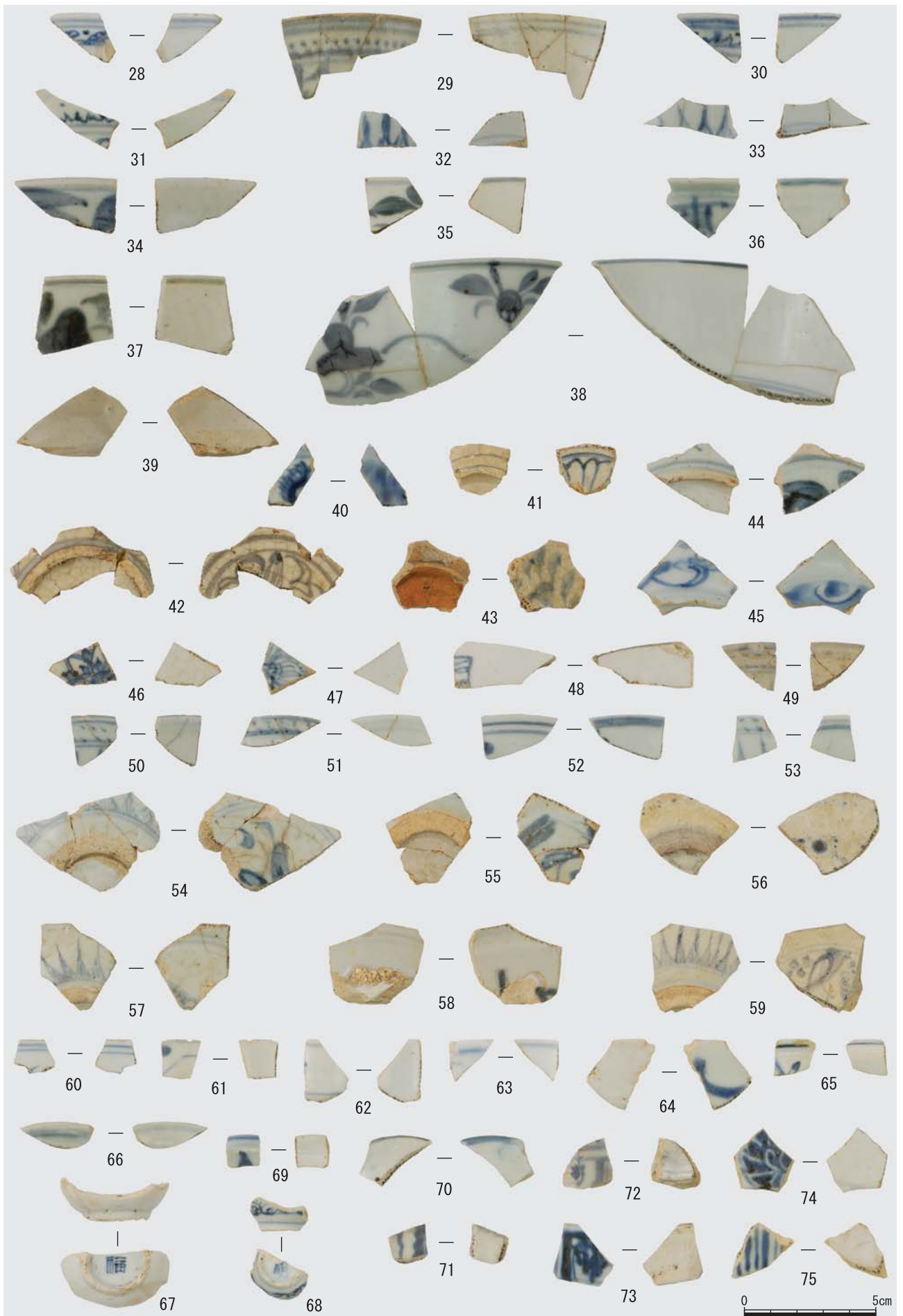
第 26 图 青花 1 碗



图版 15 青花 1



第27图 青花2 碗 (28~39)、皿 (40~59)、杯 (60~66)、小杯 (67~68)、瓶 (69~75)



图版 16 青花 2

6. 褐釉陶器

ここでは中国産褐釉陶器及びタイ産褐釉陶器について述べる。確認された器種としては、中国産褐釉陶器が壺・播鉢、タイ産褐釉陶器が壺のみである。出土総数は566点で、層位別出土傾向は、I a～b層中155点、西側畑表採160点で、全体の5割強を占め、産地別だと中国産褐釉陶器が85%を占めている。以下、比較的形が窺える資料について図化し、概要を記することとする。

中国産褐釉陶器 (第28図1～17)

壺 (第28図1～16)

一般的な大型壺をいわゆる中国産褐釉陶器壺(第28図1～10)として扱い、小型の壺や口縁形態の異なる資料等はその他中国産褐釉陶器壺(第28図11～16)とした。いずれも素地は淡灰色で微細な白色鉱物を含み、釉調は黄茶褐色～淡黄茶褐色を呈する。

1～2は口縁部の断面が方形状を呈する有頸壺である(L15 I a～b/L15 II b)。3～4は有頸壺の頸部資料である(L15 I b～II b/L15 II b)。5～6は有頸壺の耳であるが縦耳であると思われる、先述の1～4とは若干異なる上質なタイプの有頸壺であると思われる。首里城京の内出土資料が参考資料となる(M14 I b/N15 I b～II a)。7～8の胴部(M15 I a～b/L15 I b)、9～10の底部資料(N15 I b/L15 I a～b)については1～4と同タイプに分類できる。

11は短頸もしくは無頸壺の口縁で、微弱に外反するタイプである(M15 II b)。12は肩部から角度を変えてすぼまるように立ち上がる無頸壺であると思われる(L15 I a～b)。13～15は小型壺の底部であるが、15は薄作りで広底のタイプである(西側畑表採/L14 I b/L15 II b)。16は中国産褐釉陶器でない可能性も考慮されるが本文にて扱った。口縁を外側に折り曲げた後で立ち上がらせており、蓋の受けのように成形されている(西側畑表採)。

播鉢 (第28図17)

播鉢の口縁が1点得られている。口縁部を折り返して玉縁状に成形している。筋目は確認できない。一般的な中国産褐釉陶器の播鉢に比して厚手であることから、他産地の可能性も考慮しておく(西側畑表採)。

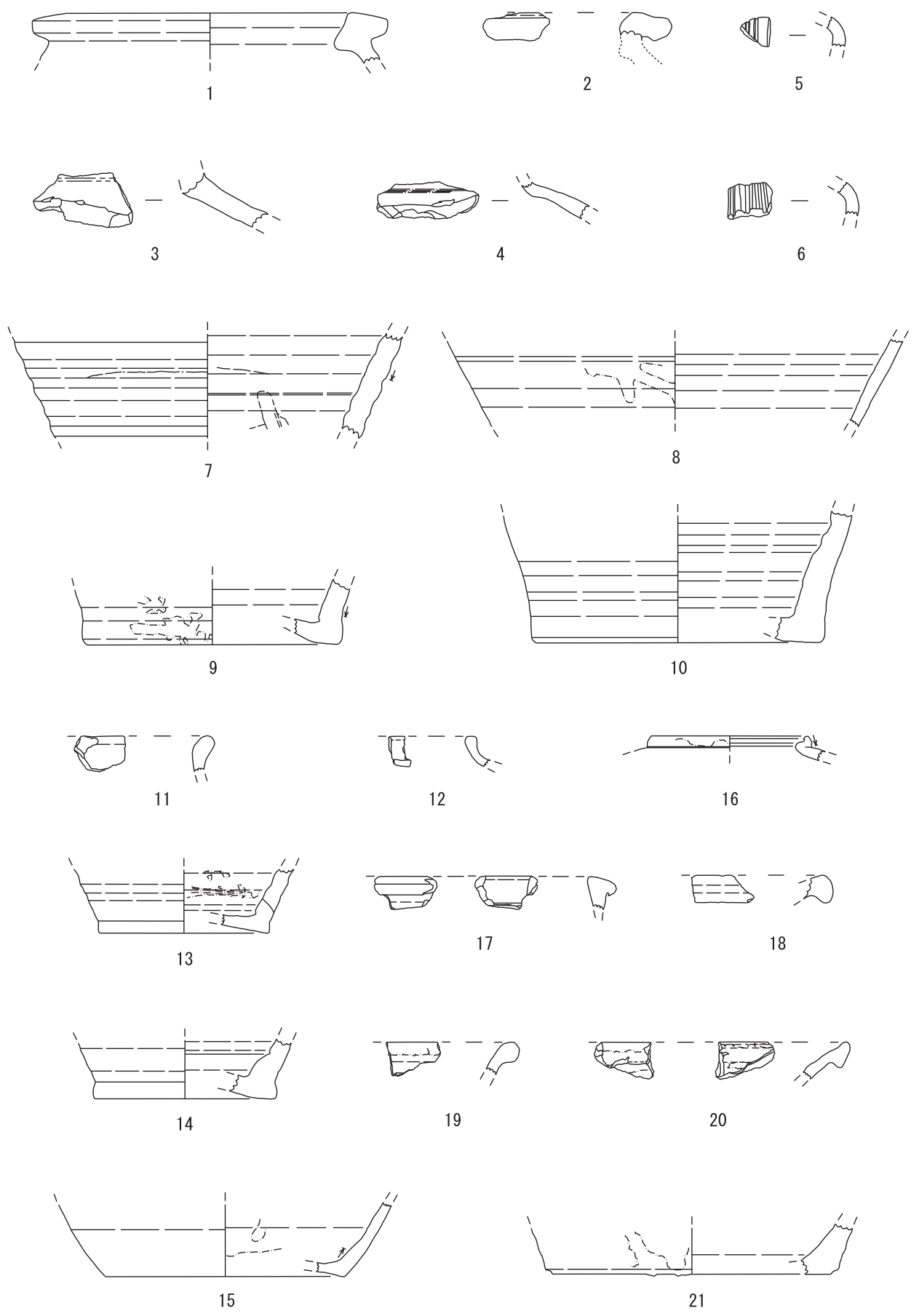
タイ産褐釉陶器 (第28図18～21)

口縁部をきつく外反させて、口唇を上方につまみ上げ突出させるものや緩やかに外反させるものがある。いずれも素地は灰紫色で微細な白色・茶褐色の鉱物を含み、釉調は濃茶褐色～黒茶褐色を呈する。

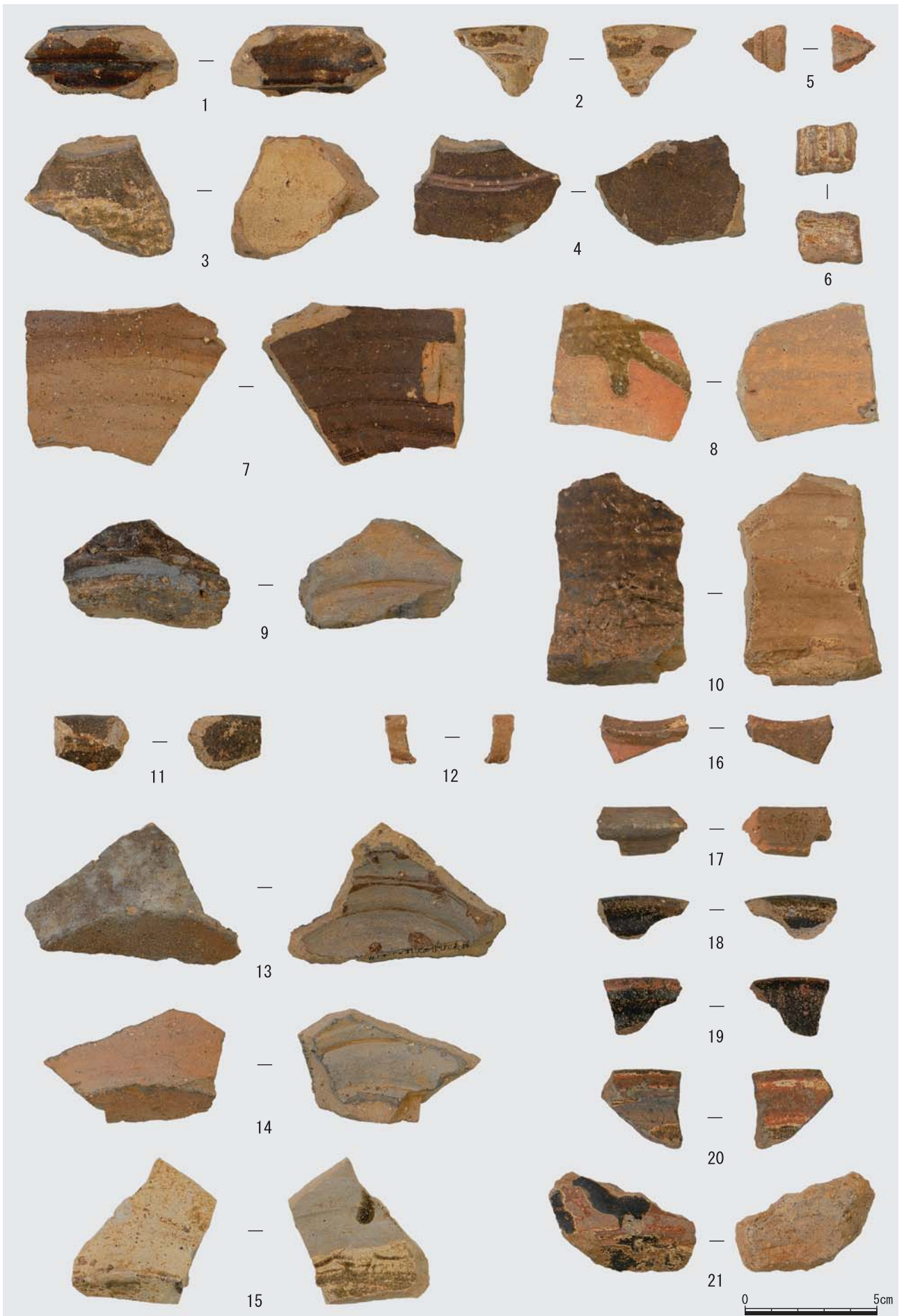
18～20は、頸部で一端締まった後にラッパ状に開く有頸壺の口縁資料である(L15 II b/西側畑表採/西側畑表採)。18は口唇が下方に突出するタイプで、20は上方につまみ上げるように突出するタイプである。21は底部資料で18～20と同タイプに分類できる有頸壺の底部である。

第15表 褐釉陶器出土状況一覧

出土位置・層位	種類・器種・部位																	合計
	中国産										タイ産							
	壺						(その他)壺				播鉢		壺					
	口縁	頸	耳	肩	胴部	底部	口縁	胴部	底部	口縁	口縁	頸	耳	肩	胴部	底部		
表採				1	14			5							5		25	
I	a				2										1		3	
	b	1		1	31	3		21	2		1				5		66	
	a～b	1			51	2	1	21				1			8		86	
I a～II a					1												1	
I b～II a		1		1	18			11									35	
I b～II b					5			2					1		3	1	9	
II	a		1		12			14					1		2		30	
	b		1		3	1	1	21	1		4			1	8		73	
	a～b				1									1	1		3	
溝状遺構②					4			4							1		9	
L15層不明					2			1							1		4	
O15南壁層不明					1												1	
L14 I b・L15 II b					1			1									2	
L14 I a～b・O14 I b					1												1	
L15 I b・L15 II b					1												1	
L15 I a～b・M14 I b					1												1	
L15 I b～II a・M14 I b・M15 II b															1		1	
L15 II a・M15 I a～b					1												1	
M14 I a～b・M14 II b															1		1	
不明			1					6							1		8	
西側畑表採	1	4		3	85		2	38	1	1	3			3	19		160	
I					1			5									27	
2					8			1									14	
1～2					1							1		4			1	
3					2			1									3	
合計	4	7	2	12	298	6	4	146	4	1	8	1	3	5	64	1	566	



第 28 図 褐釉陶器 中国産（壺 1～17）、タイ産（18～21）



图版 17 褐釉陶器

7. 黒釉陶器

いわゆる天目茶碗が得られている。表採や I a～b 層中等から出土しており(総数 47 点)、部位別では口縁 12 点、胴部 34 点、底部 1 点となっている。

1～3 は口縁部片。1 は内傾後に角度を変えて立ち上がる。淡灰色の細粒子で両面に黒色釉を施釉する (M15 I a～b)。2 も 1 と同様で、内傾後に角度を変えて立ち上がる。淡灰色の細粒子で両面に茶褐色釉を施釉する (L15 I b～II a)。3 は 1～2 に比して内傾は弱い。淡黄灰色の粗粒子で両面に黒色釉を施釉する (西側畑表採)。4～7 は胴部片。4 は高台脇を水平に削り、灰黒色の細粒子で両面に茶褐色釉を施す (西側畑表採)。5 も同タイプで、灰黒色の細粒子で両面に黒色釉を施す (西側畑表採)。6 も同タイプで、灰黒色の細粒子で両面に茶褐色釉を施す (M15 I a～b)。7 も同タイプ。灰黒色の細粒子で両面に茶褐色釉を施す (TP3-3 層)。8 は底部資料。高台脇を水平に削り、底径は 2.8 cm で、内削りは浅く雑な成形である。灰黒色の細粒子で両面に黒褐色釉を施す (L13 表採)。

8. 三彩・鉄釉染付・瑠璃釉

その他の中国産陶磁器として、三彩・鉄釉染付・瑠璃釉がある。三彩は 6 点得られており、西側畑表採や I a～b 層中、II b 層等より出土している。

9 は鶴型水注の頸部資料である。白化粧後に外面に緑釉と黄釉を施釉している (西側畑表採)。10 は鴨型の水注の胴部片で外面に羽状文が見られ、白化粧後に緑釉と黄釉を施釉する (西側畑表採)。11 は瓜型水注の胴部片で、白化粧後に外面に緑釉と黄釉を施釉する (L14 I b)。いずれの素地も淡橙色で軟質。12 は鉄釉染付小杯の胴部片。内面に呉須による文様、外面には茶褐色の鉄釉を施釉。白色微粒子を含む (西側畑表採)。13 は瑠璃釉の袋物底部。型成形で内面に白色、外面に白濁の藍色の釉を施釉。白色微粒子を含む (西側畑表採)。

9. タイ鉄絵・タイ半練

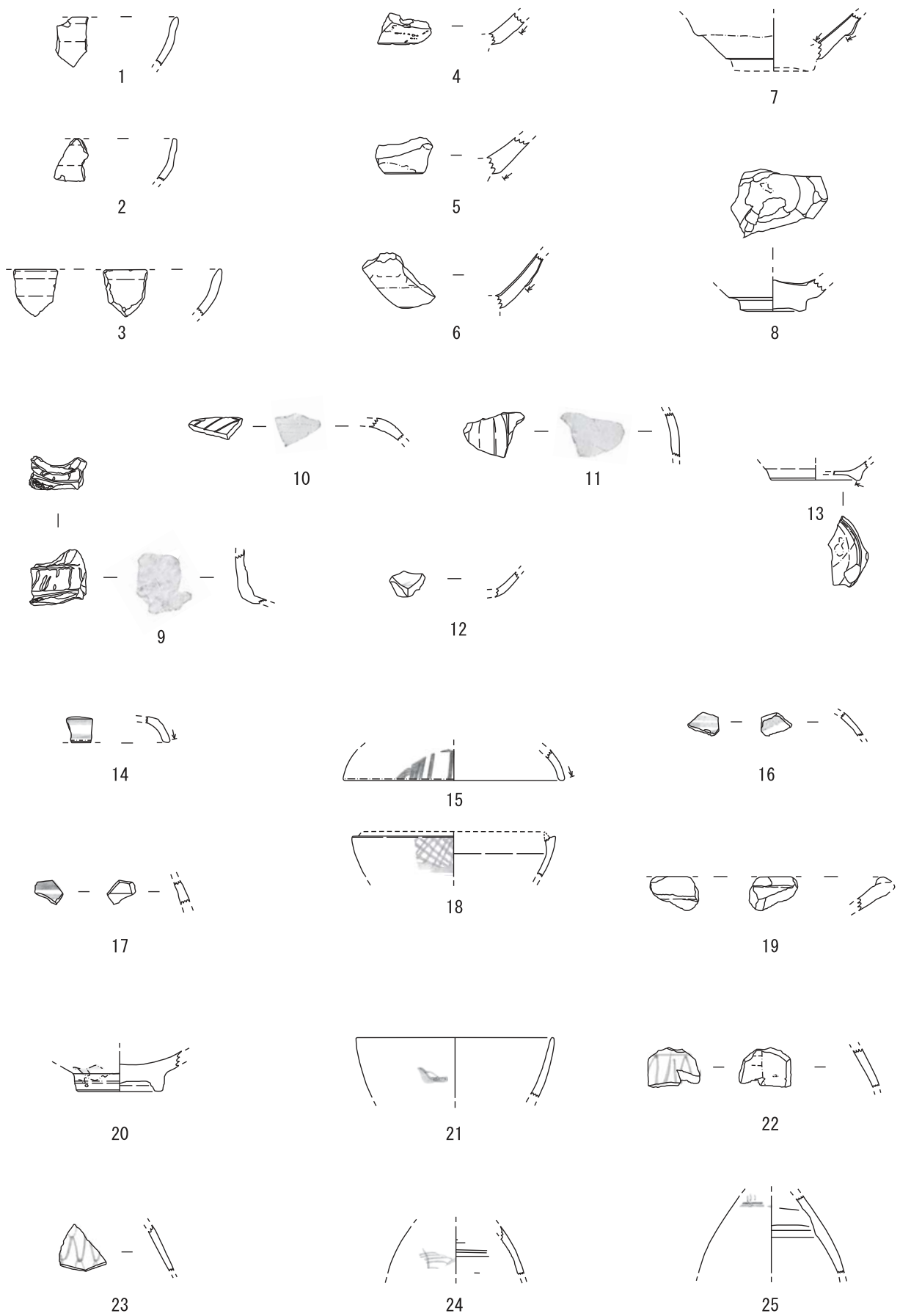
タイ鉄絵合子の蓋 4 点と身 1 点の破片計 5 点、タイ半練は落とし蓋の破片 1 点が得られている。

14 はタイ鉄絵合子の蓋片。外面に灰黒色釉で圏線を描き、灰白色釉を施して縁端部の釉を掻き取る。内面露胎で轆轤成形後にナデ調整をする。素地は淡黄灰色の粗粒子で微細な黒色鉱物を含む (表採)。15 は蓋の図上復元資料で径は 11.8 cm。外面に灰黒色釉で圏線・縦線を描いて灰白色釉を施して端部の釉を掻き取る。器面調整・施釉・素地等は 1 と同様 (TP7-1 層)。16・17 とも蓋の破片資料で、外面に灰黒色釉で圏線を描き、灰白色釉を施す。器面調整・施釉・素地等は 1～2 と同様 (L15 I a～b/ 西側畑表採)。18 は合子の身で見受けの突起は欠損する。外面に灰黒色釉で圏線・格子状線を描き、透明釉を施すも失透気味。器面調整・施釉・素地等は 1～3 と同様 (L14 II b)。19 はタイ半練の落とし蓋の端部破片である。折り曲げた先端部をつまみ上げて突起状に成形している。器面にはナデ調整を施す。焼成は比較的良好だが軟質である (M15 I b～II a)。

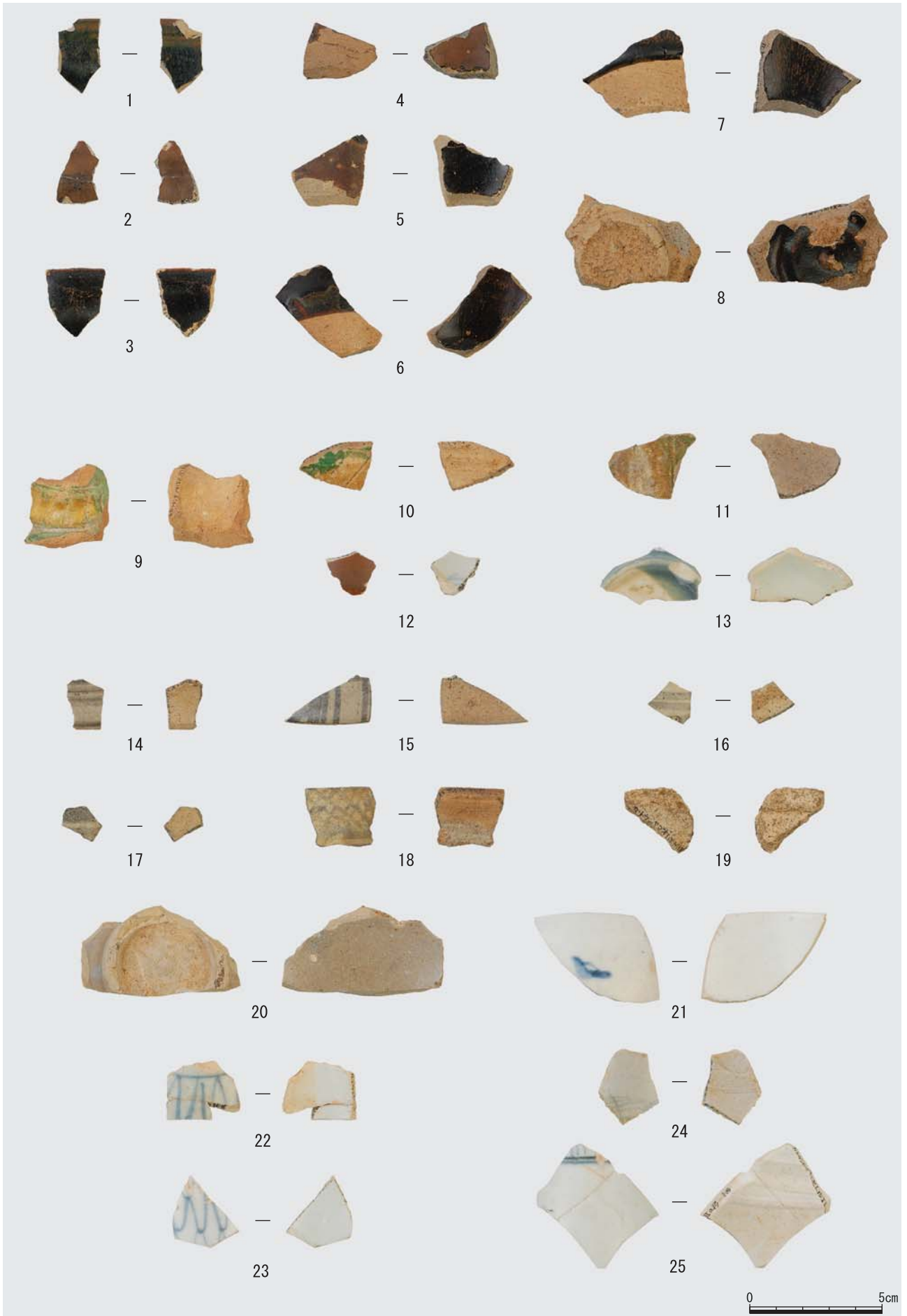
10. 本土産陶磁器

ここでは、肥前を産地とする陶磁器について扱うことし、産地不明とした資料については、現在整理中の緊急発掘調査より得られた資料とともに産地同定を行った上で再整理する予定である。今回の調査にて確認された肥前産の陶磁器には陶器と磁器がある。確認された器種は、陶器が碗・皿、磁器が碗・瓶・袋物で、出土総数 20 点のうち 8 点が磁器の瓶である。このような出土状況は沖縄の集落遺跡での特徴的な傾向であると言える。

20 は陶器で、内野山産の碗底部。外面銅緑釉、内面に透明釉を掛け分ける。外底無釉で淡灰白色粗粒子。底径 2.5 cm (L15 I b)。21 は磁器で小振りの丸碗。外面に呉須による文様。白色微粒子。口径 10.8 cm (L15 I b)。22～25 は磁器で瓶の胴部片。22 は外面に網目文と圏線を描き、白色の釉を施す。は白色微粒子 (出土地不明)。23 も同様に外面に網目文を描き、白色釉を施す。白色微粒子 (N15 I a～b)。24 は外面に草花文? を描き、灰白色釉を施す。淡灰白色微粒子 (L15 I b)。25 は外面に圏線と縦位の線を描く。外面白色釉で白色微粒子 (L15 I b～II a)。



第 29 図 黒釉陶器 (1~8)、三彩 (9~11)、鉄釉染付 (12)、瑠璃釉 (13)
 タイ鉄絵 (14~18)、タイ半練 (19)、本土産陶磁器 (20~25)



図版 18 黒釉陶器、三彩、鉄釉染付、瑠璃釉、タイ鉄絵、タイ半練、本土産陶磁器

11. 沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器の出土総数は2,047点で、アカムヌー、沖縄産無釉陶器に次いで多い。確認された器種としては、碗・小碗・皿・鉢・鍋・壺・瓶・急須・酒器・香炉・火炉・灯明具・袋物がある。層位別出土状況としては、西側畑表採が682点、Ⅰa～b層中が519点、Ⅱa～b層中が337点となっており、実に全体の75%を占めている。耕作行為に伴う攪乱等に起因すると言え、他の出土遺物と同様な傾向である。器種別出土傾向を見た場合、碗が1,226点と約6割を占めており、次いで急須181点、壺137点となっている(第17表)。基本的に、分類に際しては器種ごとに、主として施釉方法に注目して、下記のようにⅠ～Ⅲ類に大別しており、形態的特徴や蛇の目釉剥ぎの有無等から細分を行っている。以下、分類概念について述べることにし、詳細については観察表に記載する。

Ⅰ類 灰釉(イ)・鉄釉(ロ)・黒釉(ハ)を単掛けするタイプである。

Ⅱ類 内外面に釉薬を掛け分けるタイプで、外面に鉄釉(ロ)・黒釉(ハ)等を施釉し、内面には透明釉のみ(①白化粧無)か白化粧後に透明釉を施釉(②白化粧有)する。

Ⅲ類 内外面の両面に白化粧を施した後、透明釉(灰釉)を施釉するタイプである。

碗(第30図1～28・第31図29)

Ⅰ類(第30図1～12)

口縁形態からA直口、B外反とし、a腰が張らない、b腰が張るとした。また、内底の施釉状況から(1)フィガキー、(2)錆釉による同心円、(3)蛇の目状釉剥ぎに細分した。

Ⅱ類(第30図13～24)

内面の白化粧の有無から、①白化粧無か②白化粧有に大別し、口縁形態からA直口、B外反、C玉縁とした。

Ⅲ類(第30図25～28)

口縁形態からA直口かB外反に大別した。

筒碗(第31図29) 筒状の碗(小碗?)で、内外面に透明釉を施釉する。

小碗(第31図30～40)

Ⅰ類 口縁形態が直口となるタイプが得られているが、小破片であるため割愛した。

Ⅱ類(第31図30～33)

内面の①白化粧無か②白化粧有とし、口縁形態からA直口、B外反、C玉縁(小破片のため割愛)に細分した。

Ⅲ類(第31図34～40)

口縁形態からA直口、B外反とし、外面の面取りの有無で、a面取り無し、b面取り有りに細分した。

皿(第31図41～45)

Ⅰ類のみが得られており、大・中・小に分類した。口縁形態は直口のみが確認されている。

鉢(第31図46～57)

Ⅰ類(第31図46～47)

浅鉢になると思われるタイプの口縁資料と深鉢の底部とがある。

Ⅱ類(第31図48～57)

白化粧の有無から、①白化粧無か②白化粧有にとし、口縁形態からA逆L字、B外反、C波状に細分した。

鍋(第31図58～64)

Ⅰ類のみが得られており、胴部がa張る、b張らないに細分した。

壺(第32図65～75)

蓋と身が得られており、大きさから大と中に大別した。Ⅰ類のみで、身は胴部がa張る、b張らないに細分した。

瓶 (第 32 図 76 ~ 80)

円筒形の瓶 (76) や瓶子 (77 ~ 80) の破片資料が得られている。I 類とⅢ類のみである。

急須 (第 32 図 81 ~ 94)

蓋と身が得られており、大ききから大と中到大別した。I 類とⅢ類のみである。

酒器 (第 32 図 95 ~ 96)

いわゆるカラカラと称されるタイプ。I 類とⅢ類が得られているが、小破片のため、IV類の特徴的なものだけ図化した。

香炉 (第 32 図 97)

一類の底部資料が得られている。1 点のみ図化した。

火炉 (第 32 図 98 ~ 101)

Ⅲ類のみが得られており、口縁形態から a 直口、b 微弱に内彎するタイプに細分した。

灯明具 (第 32 図 102)

特徴的な口縁資料について図化した。秉燭や燭台と思われる資料である。

袋物 (第 32 図 103)

全て小破片であるため、全体の状況は把握できない。薄手の I 類の胴部片のみ図化した。

第 16 表 沖縄産施釉陶器観察一覧 1

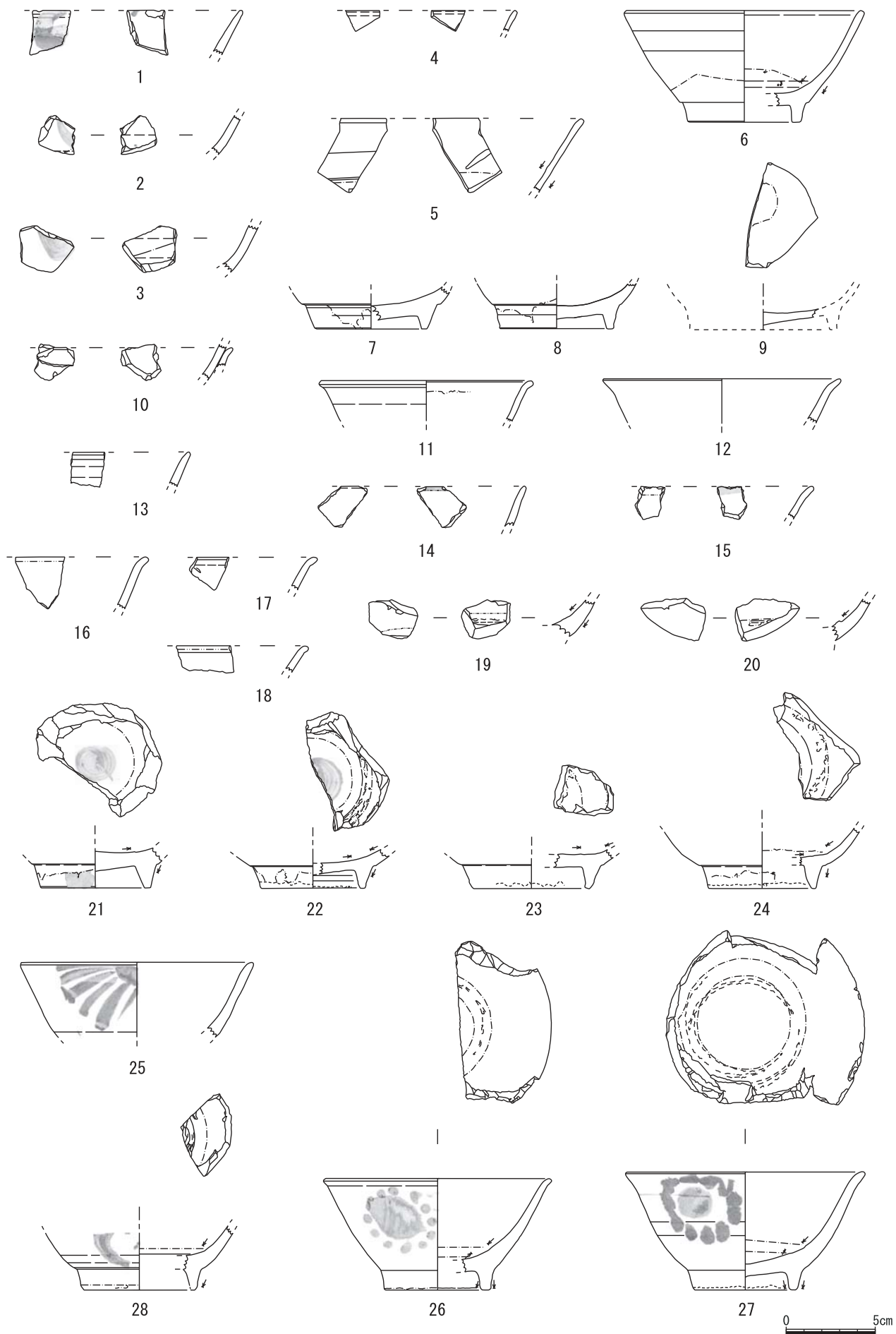
挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉状況・貫入等	出土地	
第30図 図版19	碗	I	1	A-(1)-イ 口縁	直口口縁。いわゆる灰釉碗。外面に鉄絵。	淡灰白色の細粒子。	両面に施釉。	西側畑表探
			2	A-(1)-イ 胴部	直口口縁。いわゆる灰釉碗。外面に鉄絵。	淡灰白色の細粒子。	両面に施釉。	TP6-2層
			3	A-(1)-イ 胴部	外側に大きく直口する。いわゆる灰釉碗。外面に鉄絵。	淡灰白色の細粒子。	内底は露胎とする。	出土地不明
			4	A- イ 口縁	小破片のため、詳細な施釉状況は不明。	淡橙褐色の細粒子。		M15 I a~b
			5	A-(1)-イ 口縁	直口口縁。いわゆる灰釉碗。	淡灰白色の細粒子。	内面胴中央から見込みは露胎。	TP3-3層
			6	A-(1)-イ 完形	13.6 6.3 6.2 直口口縁。いわゆる灰釉碗。丁寧な成形。高台脇を水平に切る。	灰白色の細粒子。	胴中央から底部にかけて露胎。細かい貫入。	L15 II b
			7	A-(1)-イ 底部	いわゆる灰釉碗。雑な成形。高台脇を水平に切る。	灰白色の細粒子。	胴中央から底部にかけて露胎。細かい貫入。	M15 I b
			8	A-(1)-イ 底部	いわゆる灰釉碗。雑な成形。高台脇を水平に切る。砂粒が少量に付着。	灰白色の細粒子。	胴中央から底部にかけて露胎。粗い貫入。	K15表探
			9	-(1)-イ 底部	いわゆる灰釉碗。内底見込みに丸文。	淡橙白色の細粒子。	内底見込みの丸文以外が露胎。	L15 II b
			10	B-(2)-イ 口縁	口縁が微弱に外反気味。重ね焼き時の溶着痕。判然としないが②とした。	淡橙白色の細粒子。	両面に施釉。	西側畑表探
	11	B-(1)-イ 口縁	12.0 口縁緩やかに外反させる。	灰白色の細粒子。	両面に施釉。	TP6-1層		
	12	B-(1)-イ 口縁	13.4 口縁緩やかに外反させる。	灰白色の細粒子。	両面に施釉。	N15 I b		
	13	II	①-A-口 口縁	直口口縁。外面口縁直下を篋削りする。	灰白色の細粒子。	両面に施釉。	西側畑表探	
	14		①-A-口 口縁	直口口縁。外面口縁直下を篋削りする。	灰白色の細粒子。	両面に施釉。	L14 II b	
	15		①-B-口 口縁	微弱に外反させる。	淡橙白色の細粒子。	両面に施釉。内面口縁直下まで黒釉を施す。	L15 II a~b	
	16		②-B-口 口縁	微弱に外反させる。	灰白色の細粒子。	両面に施釉。外面口縁直下まで白化粧・透明釉を施す。	M15 I a~b	
	17		②-C-口 口縁	外面口縁直下篋削りを加えて、玉縁状とする。	灰白色の細粒子。	両面に施釉。	M15 I b~II a	
	18		②-C-口 口縁	外面口縁直下篋削りを加えて、玉縁状とする。	灰白色の細粒子。	両面に施釉。	西側畑表探	
	19		①- 底部	口縁形態不明。	灰白色の細粒子。	両面に施釉。内面見込みを蛇の目状釉剥ぎ。	TP2-1層	
	20		①- 底部	口縁形態不明。	灰白色の細粒子。	両面に施釉。重ね焼き時の胎土目？内面見込みを蛇の目状釉剥ぎ。	西側畑表探	
	21		①- 底部	6.2 高台逆「ハ」の字状。比較的丁寧な成形。高台脇をやや水平に切る。	淡橙白色の細粒子。	錆釉で丸文。内面見込みを蛇の目状釉剥ぎ。畳付化粧土。	M15 II b	
	22		①- 底部	5.8 高台逆「ハ」の字状。比較的雑な成形。高台脇をやや水平に切る。	灰白色の細粒子。	錆釉で丸文。胎土目。畳付化粧土。内面見込みを蛇の目状釉剥ぎ。	西側畑表探	
	23		②- 底部	6.5 高台逆「ハ」の字状。比較的雑な成形。高台脇をやや水平に切る。	淡橙白色の細粒子。	重ね焼き時の胎土目？畳付化粧土。内面見込みを蛇の目状釉剥ぎ。	M15 II b	
	24		②- 底部	6.0 高台逆「ハ」の字状。比較的雑な成形。高台脇をやや水平に切る。	淡橙灰色の細粒子。	重ね焼き時の胎土目？畳付化粧土。内面見込みを蛇の目状釉剥ぎ。	L15 II b	

第16表 沖縄産施釉陶器観察一覧2

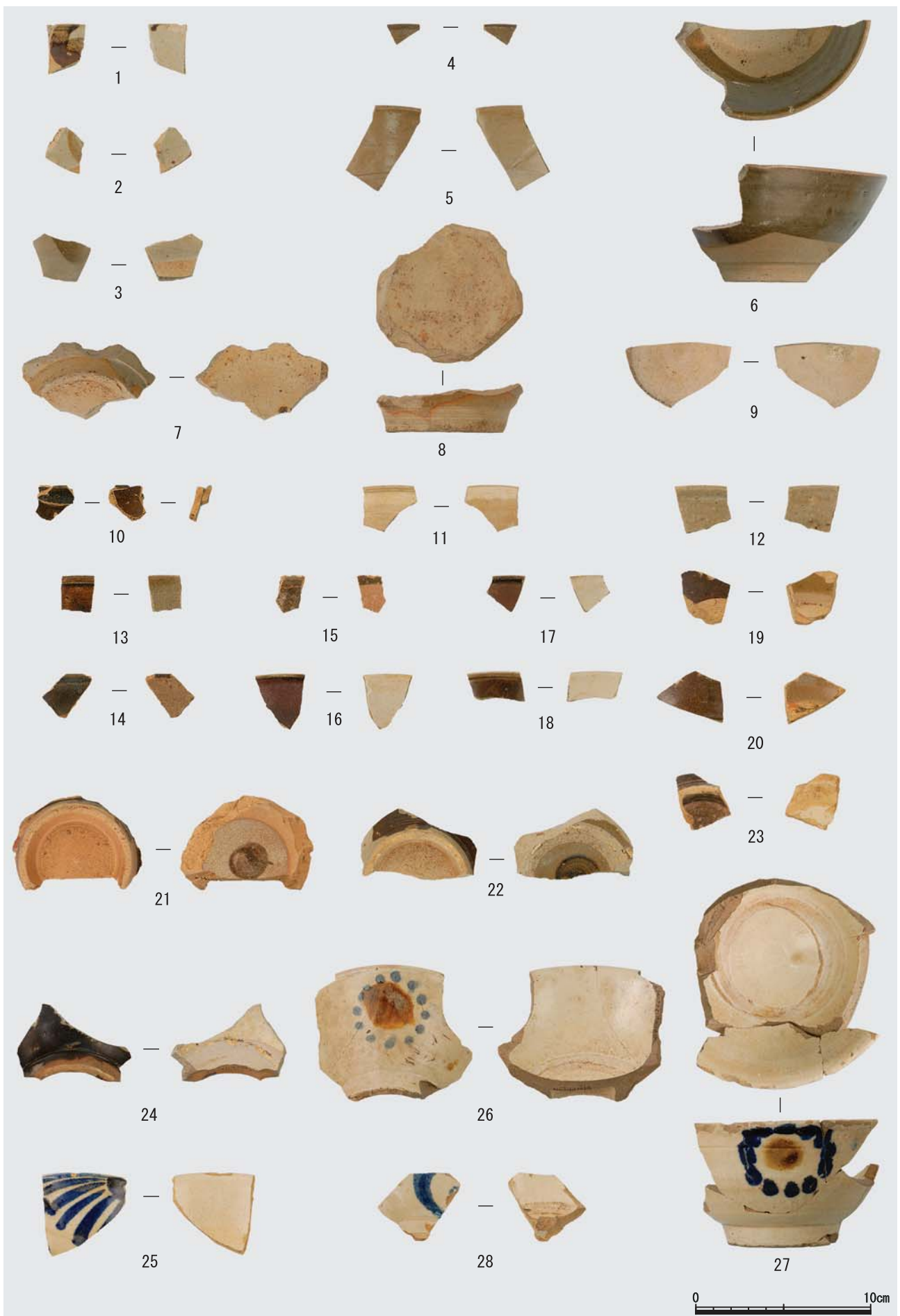
挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉状況・貫入等	出土地				
第30図 図版19	碗	III	A	口縁	13.2 — —	腰から丸みを持つ直口口縁。 外面に呉須による草花文。	淡黄白色の粗粒子。	両面に施釉。一部失透気味。 粗い貫入。	西側畑表採		
			B	完形	12.8 6.3 5.8	腰から丸みを持つ外反口縁。 外面に丸文。	灰白色の細粒子。	総釉後、見込み蛇の目釉剥ぎと 畳付の釉を掻き取る。粗い貫入。	K14~15表採		
			B	完形	13.4 6.6 5.7	腰から丸みを持つ外反口縁。 外面に丸文。	灰白色の細粒子。	総釉後、見込み蛇の目釉剥ぎと 畳付の釉を掻き取る。細かい貫入。	K~L15表採		
			B?	底部	— — 6.2	腰から丸みを持って立ち上がる。 外面に丸文。	淡灰白色の細粒子。	総釉後、見込み蛇の目釉剥ぎと 畳付の釉を掻き取る。	西側畑表採		
第31図 図版20	筒碗	I	—	口縁	7.2 — —	薄手の筒碗(小碗?)。両面とも轆轤痕顕著。 本土産の可能性も考慮しておく。	淡灰白色の微粒子。	両面に施釉。	L15 II a		
			小碗	II	①-A-口	口縁	— — —	直口口縁。	淡橙褐色の細粒子。	両面に施釉。 内面口縁直下まで黒釉を施す。	西側畑表採
	②-B-口	口縁			— — —	微弱に外反させる。	淡橙褐色の細粒子。	両面に施釉。 内面口縁直下まで黒釉を施す。	西側畑表採		
	①-口	底部			— — 4.3	高台逆「ハ」の字状。比較的丁寧な成形。 高台脇をやや水平に切る。	淡黄白色の細粒子。	内面見込みを蛇の目状釉剥ぎ。 畳付に白化粧土。	西側畑表採		
	②-口	底部			— — 4.0	高台逆「ハ」の字状。比較的雑な成形。 高台脇をやや水平に切る。	淡黄白色の細粒子。	内面見込みを蛇の目状釉剥ぎ。 重ね焼き溶着痕。畳付白化粧土。	M15 I a~b		
	III	A-a		口縁	— — —	直口口縁。面取りなし。	灰白色の細粒子。	両面に施釉。	L15 I a~b		
		A-b		口縁	— — —	直口口縁。面取りあり。	淡橙褐色の細粒子。	両面に施釉。細かい貫入。	M15 I a~b		
		B-a?		口縁	— — —	微弱に外反させる。面取りなし?	淡橙褐色の細粒子。	両面に施釉。粗い貫入。	TP1-2層		
		B-b		口縁	— — —	微弱に外反させる。面取りあり。	淡灰白色の微粒子。	両面に施釉。細かい貫入。	TP6-3層		
		B-b	口縁	— — —	微弱に外反させる。面取りあり。	淡橙褐色の細粒子。	両面に施釉。細かい貫入。	西側畑表採			
		-b	底部	— — 3.0	腰から丸みを持って立ち上がる。 高台脇をやや水平に切る。面取りあり。	淡橙灰色の細粒子。	総釉後、見込み蛇の目釉剥ぎと 畳付の釉を掻き取る。	M15表採			
	III	I	小-イ	口縁	— — —	やや内彎気味の直口口縁。	淡灰白色の粗粒子。	両面に施釉。細かい貫入。	西側畑表採		
			中-口	口縁	— — —	やや内彎気味の直口口縁。	淡橙灰色の細粒子。	両面に施釉。	西側畑表採		
			大-イ	口縁	— — —	やや内彎気味の直口口縁。	淡橙灰色の細粒子。	内面に錆釉後、両面に施釉。	TP8-1		
			小-口	底部	— — 3.6	薄手で高台は低く、内削りは浅い。 比較的雑な造り。	淡橙灰色の細粒子。	内面に錆釉。 両面施釉後、見込み蛇の目釉剥ぎ。	M15 I b~II a		
			中-口	底部	— — 3.0	薄手で高台は低く、内削りは浅い。 比較的丁寧な造り。	淡灰白色の細粒子。	両面施釉後、見込み蛇の目釉剥ぎ。 畳付白化粧土。重ね焼き胎土目。	西側畑表採		
			I	浅-口	口縁	— — —	朝顔状に大きく開く。口縁内端をつまみ上げる。 外面に轆轤痕が顕著。	淡橙灰色の細粒子。	内面口縁直下まで施釉。	西側畑表採	
				深-口	底部	— — 9.8	高台断面三角形。雑な成形。 II類の可能性も考慮しておく。	赤紫色の細粒子。 白色鉱物を含む。	外底施釉。高台外面まで施釉。 畳付に白化粧土。	出土地不明	
			鉢	II	①-深-A-口	口縁	— — —	口縁断面弱い逆L字状。	淡灰白色の細粒子。	両面に施釉。 内面口縁直下まで黒釉を施す。	西側畑表採
					①-深-A-口	口縁	— — —	口縁断面弱い逆L字状。	淡灰白色の細粒子。	両面に施釉。 口縁上端まで黒釉を施す。	O15表採
					②-深-A-口	口縁	— — —	口縁断面逆L字状。	淡橙灰色の細粒子。	口縁外端まで白化粧。口縁外端まで 黒釉。口縁上端の釉掻き取り露胎。	L~M15 II b
	②-深-A-口	口縁			28.0 — —	口縁断面逆L字状。	灰白色の細粒子。	口縁上端まで白化粧。口縁外端まで 鉄釉。内面に細かい貫入。	M15 I a~b		
	②-深-A-口	口縁			31.5 — —	口縁断面逆L字状。両面とも轆轤痕顕著。	灰黒色の細粒子。	口縁外端まで白化粧。口縁下端まで 黒釉。	O15 I b		
	②-深-B-口	口縁			— — —	口縁部を緩やかに外反させる。	淡橙灰色の細粒子。	口唇部まで白化粧。口縁外端まで 黒釉。内面に細かい貫入。	M15 I a		
	②-深-B-口	口縁			— — —	口縁部を微弱に外反させる。	淡橙灰色の細粒子。	内面口縁下部まで白化粧。内面の 口縁下部に黒釉の釉垂れ。	西側畑表採		
	②-深-C-口	口縁			— — —	口縁を波状(片口?)に成形。	淡橙灰色の細粒子。	両面に施釉。内面に細かい貫入。	M14 I a~b		
	②-深-口	底部			— — 8.6	高台は高く、打ち削りも深い。 比較的雑な成形。	淡橙灰色の細粒子。	外底施釉。高台外面まで施釉。 内底蛇の目釉剥ぎ。	L13表採		
	②-深-口	底部			— — 7.8	高台は高く、打ち削りも深い。 比較的丁寧な成形。	灰白色の細粒子。	畳付には白化粧土。 内底蛇の目釉剥ぎ。	N15 I b		
	鍋	I			a-口	口縁	— — —	口縁部をくの字状に折れ、やや内彎気味に 蓋受け部を成形。胴部は張る。	淡橙白色の細粒子。	蓋受け部のみ露胎。	西側畑表採
					a-口	口縁	— — —	口縁部をくの字状に折り、蓋受け部を成形。 耳は欠落する。胴部は張る。	淡灰白色の細粒子。	蓋受け部のみ露胎。	西側畑表採
			a-口	口縁	18.0 — —	口縁部をくの字状に折れ、やや内彎気味に蓋受け 部を成形。胴部は張る。下向きの耳を貼付。	灰白色の細粒子。	蓋受け部のみ露胎。	M14~15 I a~b		
			b-イ	口縁	— — —	口縁部をくの字状に折り、蓋受け部を成形。	淡橙褐色の粗粒子。	両面に施釉。失透気味。	西側畑表採		
			a-口	底部	— — 7.0	平底タイプ。 三足と思われる脚部のナデ調整痕。	淡灰白色の細粒子。	外面胴下部まで施釉。	西側畑表採		
			a-口	底部	— — 6.4	平底タイプ。 三足と思われる脚部欠落した痕。	淡灰白色の細粒子。	外面胴下部まで施釉。	西側畑表採		
a-口			底部	— — —	平底タイプ。 三足と思われる脚部欠落した痕。	淡灰白色の細粒子。 白色鉱物を含む。	両面に施釉。	L15 I a~b			

第16表 沖縄産施釉陶器観察一覧3

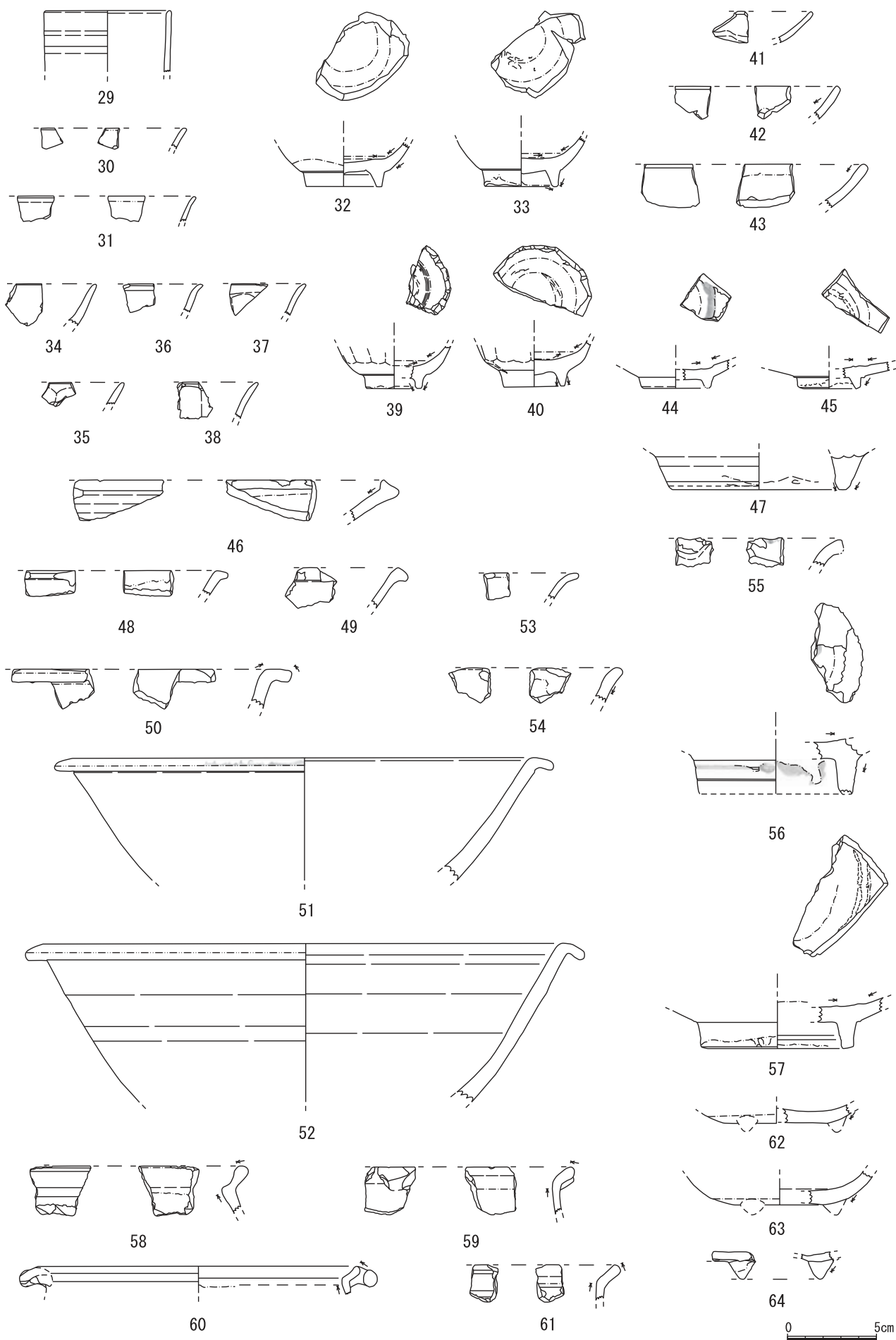
挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器形・成形・文様等の特徴	素地	釉色・施釉状況・貫入等	出土地		
第32図 図版21	壺	蓋	中-口	—	アンダガミの蓋。身請けの突起は欠落。 径12.2。蓋甲面に3条の凹線。	淡橙白色の細粒子。	蓋甲面から鋳端部まで施釉。	出土地不明	
			中-口	—	アンダガミの蓋。身請けの突起は欠落。 径12.6。蓋甲面に2条の凹線。	淡橙白色の細粒子。	蓋甲面のみ施釉。	西側畑表採	
			中-口	—	アンダガミの蓋。身請けの突起は欠落。 径11.8。蓋甲面に3条の凹線。	淡灰白色の細粒子。	蓋甲面から鋳端部まで施釉。	L14 I a~b	
			中-口	—	アンダガミの蓋か。 径9.0。身請けの突起は内傾する。	淡灰白色の細粒子。	蓋甲面から鋳端部まで施釉。	M14 I b	
		中-口	口縁	—	アンダガミの口縁。 口縁部を逆し字状に成形。	淡橙褐色の細粒子。	口唇上端以外に施釉。	L15 I b	
		中-b-口	口縁	—	アンダガミの口縁。 口縁部を方形状に成形。	淡橙白色の細粒子。	口唇上端以外に施釉。 口唇上端に白化粧土。	西側畑表採	
		中-b-口	口縁	—	アンダガミの口縁。 口縁部を逆し字状に成形。	淡灰白色の細粒子。	口唇上端以外に施釉。 口唇上端に白化粧土。	M15 II a	
		中-口	口縁	—	アンダガミの口縁。 口縁部を逆し字状に成形。	淡橙白色の細粒子。	口唇上端以外に施釉。	L15 II b	
		中-a-口	口縁	8.8	アンダガミの口縁。 口縁部を逆し字状に成形。	淡灰白色の細粒子。	外面及び内面口縁直下のみ施釉。 内面口縁直下に砂目と釉垂れ。	M15 I b~II b	
		中-a-口	口縁	7.9	アンダガミの口縁。 口縁部を逆し字状に成形。	淡橙褐色の細粒子。	外面及び内面口縁直下のみ施釉。 口縁上端白化粧土。内面釉垂れ。	M15 II b	
	大-口	底部	9.6	アンダガミの底部か。 比較的丁寧な成形。	淡灰白色の細粒子。	畳付を露胎とする。	M15 II b		
	瓶	I	角瓶?	肩部	円筒形の瓶肩部。外面に2条の圈線。 本土産の可能性も考慮しておく。	淡灰白色の細粒子。	両面に灰釉を施す。	TP8-2層	
			瓶子	底部	—	瓶子の底部片。 両面の轆轤痕顕著。	淡橙白色の細粒子。	両面に黒釉を施す。内面に錆釉。	西側畑表採
				底部	8.2	瓶子の底部片。 外面は凹状の沈線2条。	淡灰白色の細粒子。	外面に灰釉を施す。	西側畑表採
		III	頸部	—	瓶子の頸部片。外面に線描きの後、呉須で圈線。 内面口縁直下にも呉須。	淡橙白色の細粒子。	内面に釉垂れ。	西側畑表採	
			底部	9.4	瓶子の底部片。断面三角形。 両面とも轆轤痕顕著。	淡黄白色の細粒子。	外面にのみ施釉。	西側畑表採	
	急須	大	I	把手 (注口)	—	按瓶の把手or注口と思われる。 雑な成形である。	灰黒色の粗粒子。	両面に黒釉を施す。	西側畑表採
				注口	—	按瓶の注口と思われる。 比較的丁寧な成形である。	灰黒色の粗粒子。	両面に鉄釉を施す。	M15 I a~b
				底部	—	按瓶の底部と思われる。 雑な成形である。	灰白色の細粒子。	外面に灰釉を施す。 鉄釉の釉垂れ?	西側畑表採
		中	I	蓋	—	撮径2.2。按瓶蓋の可能性も考慮しておく。 両面とも調整痕が明瞭である。	淡橙白色の細粒子。	外面にのみ鉄釉を施す。	西側畑表採
				口縁	—	薄手で、口縁部で角度を変えて立ち上がる。	淡橙白色の細粒子。	外面にのみ黒釉を施す。	TP6-1層
				耳	—	胴上部に貼付。外面に2本の沈線。	淡黄白色の細粒子。	両面に黒釉を施す。	M15 II b
				注口	—	胴上部に穴を1つ穿った後、注口を貼付。	淡灰白色の細粒子。	黄緑気味を呈した鉄釉を施す。	M15 II a
			III	蓋	—	鋳径5.0。白化粧後、十字状の三角文を線描き。	灰白色の細粒子。	蓋甲面のみ施釉。	西側畑表採
				蓋	—	鋳径5.6。 白化粧後、線彫りによる圈線とトビカンナ。	灰白色の細粒子。	蓋甲面のみ施釉。	TP7-1層
				口縁	5.0	胴上部から角度を変えて立ち上がらせ 口縁部を成形。外面に線彫りの圈線と縦位の線。	淡黄白色の細粒子。	両面に施釉。	M14 I b~II b
				注口	—	胴上部に穴を2つ穿った後、注口を貼付。	淡黄白色の細粒子。	両面に施釉。	LM15 I b~II b
				胴部	—	楕円形状に成形。外面に注口の貼付痕。 縦位・格子状・横位の線彫りと呉須・緑釉。	淡灰白色の細粒子。	外面にのみ施釉。	K15表採
				底部	—	楕円形状に成形。 横位の線彫りと呉須。	淡灰白色の細粒子。	両面に施釉。	M14~15 I a~b
				胴部	—	楕円形状に成形。 白化粧後、線彫りの圈線とトビカンナ。	淡灰白色の細粒子。	外面にのみ施釉。	TP6-2層
				口縁	5.0	カラカラの口縁部。 朝顔状に開き、端部を上方につまみ上げる。	淡橙褐色の細粒子。	両面に施釉。	西側畑表採
	酒器	III	口縁	5.5	カラカラの口縁部。 朝顔状に開き、端部を上方につまみ上げる。	淡灰白色の細粒子。	両面に施釉。	西側畑表採	
			底部	—	香炉の底部と思われる。三脚をなす脚部を貼付。 平底状を呈す。比較的雑な成形。	灰白色の細粒子。	外面にのみ施釉。	L15 II b	
火炉	III	a	口縁	11.2	口縁部を筒状に成形。	灰白色の細粒子。	内面胴上部まで施釉。口唇部は 掻き取る。口唇部にアルミナ?	L15表採	
		b	口縁	8.7	口縁部を内彎気味に成形。	灰白色の細粒子。	内面口縁直下まで施釉。 口唇部は掻き取る。	K15表採	
		不明	底部	7.6	胴下部から腰折れとし、角度を変えて立ち上がる。 高台内削りはハの字状に斜位。	灰白色の細粒子。	外面高台脇まで施釉。 内面・外底は透明釉なし。	K15表採	
		不明	底部	6.6	胴下部から腰折れとし、角度を変えて立ち上がる。	灰白色の細粒子。	外面高台脇まで施釉。 内面・外底は透明釉なし。	M14 I a~b	
		灯明具	III	口縁	—	乗燭or燭台の口縁部。	淡灰白色の細粒子。	両面に施釉。	西側畑表採
袋物	I	—	胴部	—	薄手の袋物胴部片。 内面調整痕が明瞭。	茶褐色の素粒子。	外面にのみ施釉。	M15 II a	



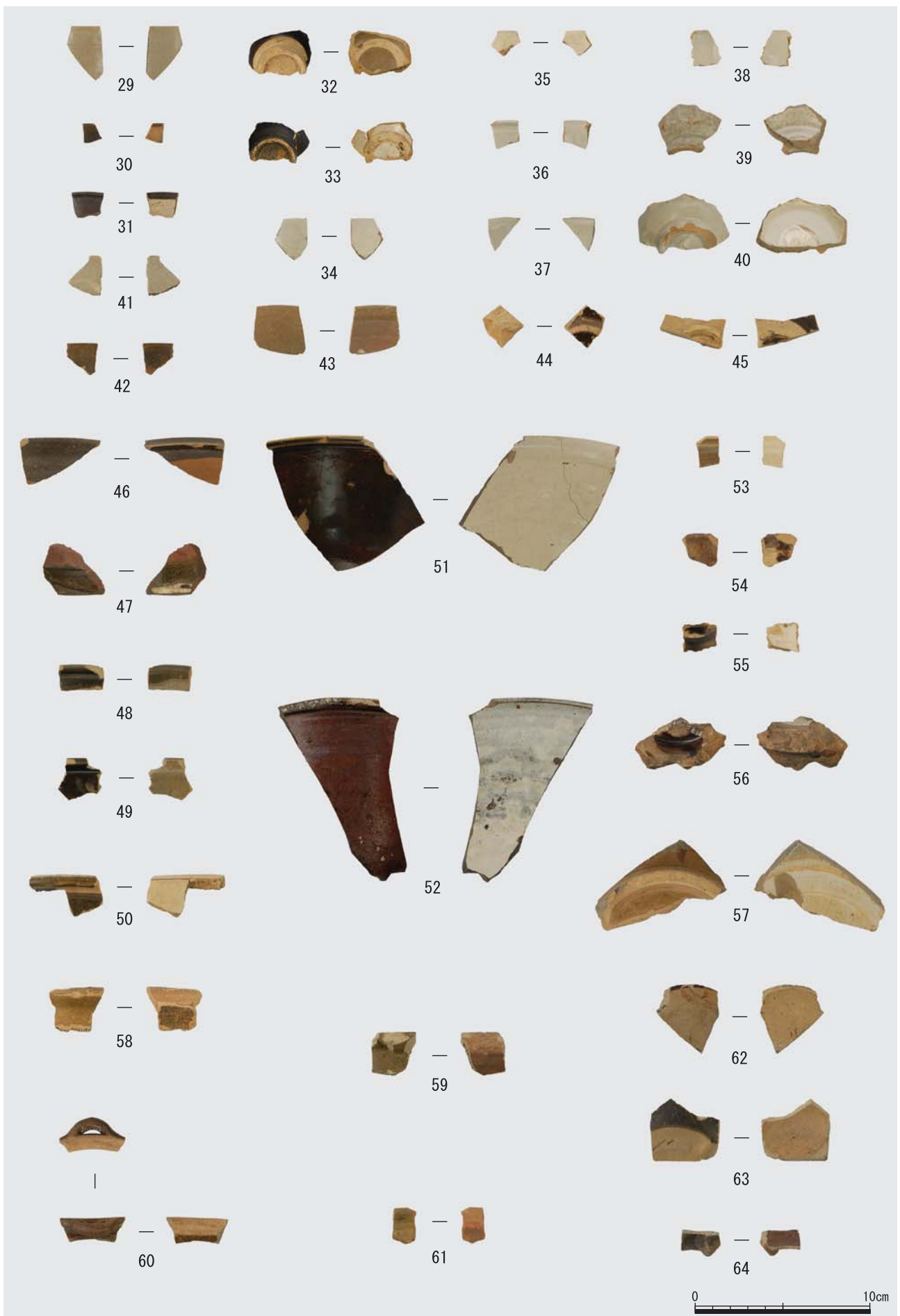
第30図 沖縄産施釉陶器1 碗



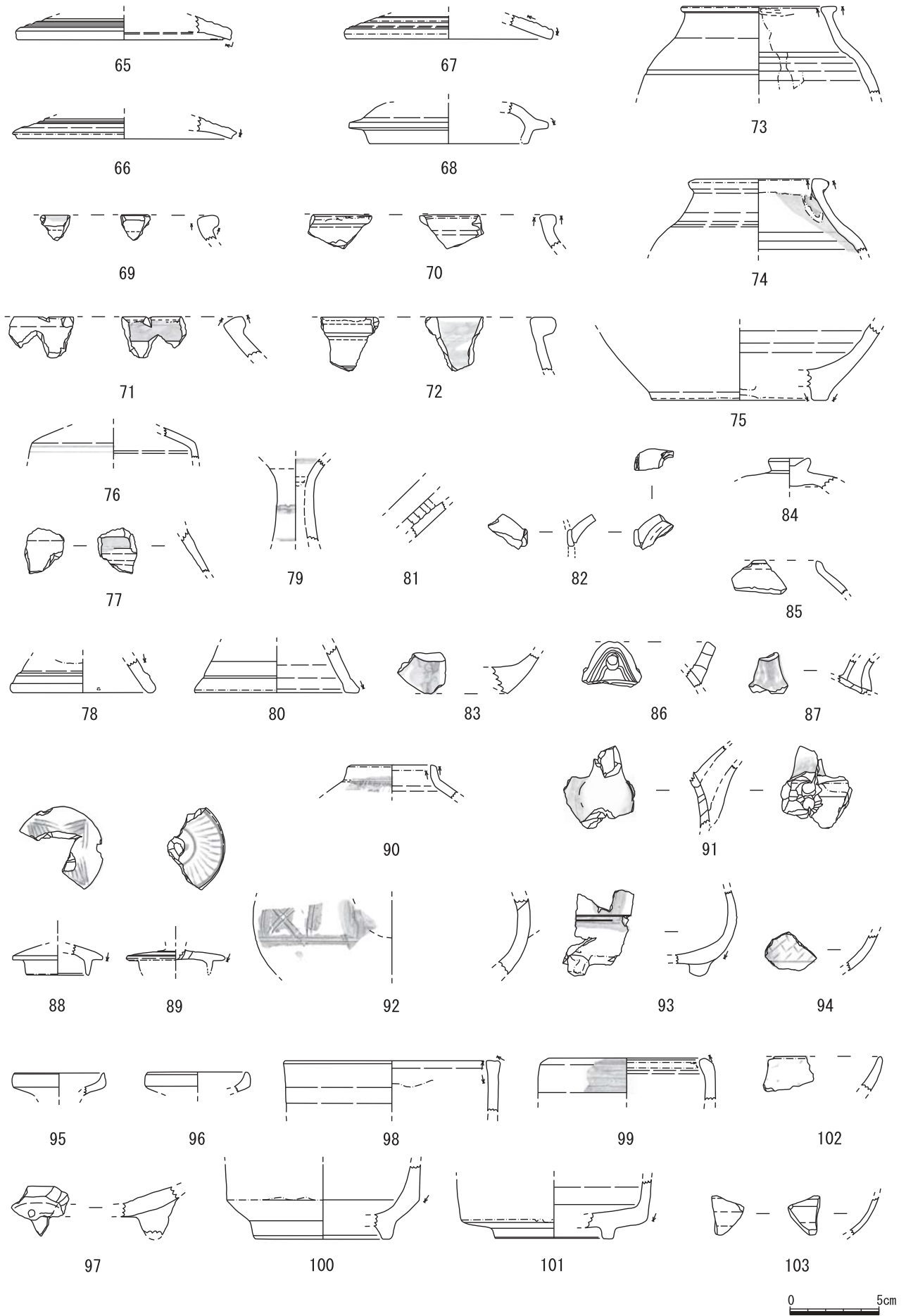
図版 19 沖縄産施釉陶器 1



第31図 沖縄産施釉陶器2 筒碗(29)、小碗(30~40)、皿(41~45)、鉢(46~57)、鍋(58~64)



図版 20 沖縄産施釉陶器 2



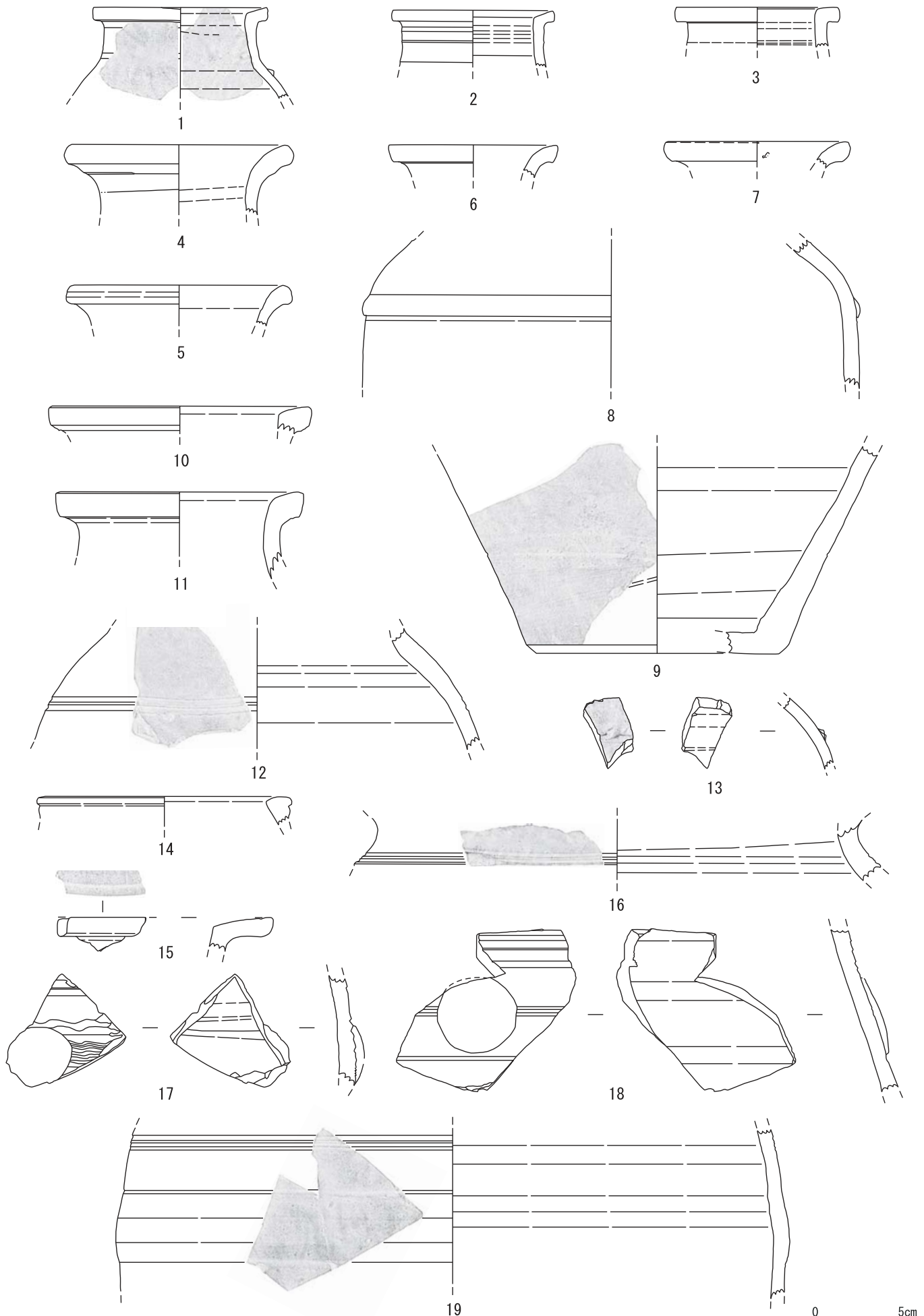
第 32 図 沖縄産施釉陶器 3 壺 (65 ~ 75)、瓶 (76 ~ 80)、急須 (81 ~ 94)、酒器 (95 ~ 96)
 香炉 (97)、火炉 (98 ~ 101)、灯明具 (102)、袋物 (103)



図版 21 沖縄産施釉陶器 3

第19表 沖繩産無釉陶器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器色	素地	観察事項	出土地	
第33図 図版22	壺	I	1	口縁 10.2 — —	両面ともに暗茶褐色。	暗赤茶褐色。 白色鉱物を含む。	胴部に斜位の沈線。轆轤痕明瞭。	N15 I a~b
			2	口縁 9.6 — —	両面ともに茶褐色。	暗赤茶褐色。 白色鉱物を含む。	両面ともに轆轤痕が明瞭である。	西側畑表採
			3	口縁 9.8 — —	外面は白濁した暗茶褐色。 内面はにぶい黒褐色。	暗赤茶褐色。 白色鉱物を含む。	内面は轆轤痕が明瞭である。	M15 II b
		II	4	口縁 15.0 — —	外面は暗茶褐色。 内面は赤茶褐色。	暗赤茶褐色。 白色鉱物を含む。	両面ともに轆轤痕が明瞭である。	L15 I a~b
			5	口縁 13.4 — —	両面とも白濁した暗茶褐色。	暗赤茶褐色。 白色鉱物を含む。	外面泥釉？ 両面ともに調整痕が明瞭である。	O15 I b
			6	口縁 10.0 — —	両面とも濁った黄茶褐色。	暗赤茶褐色。 白色鉱物を含む。	外面泥釉？ 両面ともに轆轤痕・調整痕が明瞭である。	西側畑表採
			7	口縁 11.0 — —	両面とも赤茶褐色。	暗赤茶褐色。	両面ともに轆轤痕・調整痕が明瞭である。	L15 II a
			8	胴部 — — —	外面は濁った黄茶褐色。 内面は赤茶褐色。	暗赤茶褐色。 白色鉱物を含む。	外面に凸帯文。 両面ともに轆轤痕が明瞭である。	N15 I a~II a
			9	底部 — — —	外面は黒褐色。 内面は赤茶褐色。	暗赤茶褐色。 白色鉱物を含む。	両面ともに轆轤痕・調整痕が明瞭である。 内面に漆喰を塗布している。	N12表採
		III	10	口縁 15.6 — —	両面とも暗茶褐色。	暗赤褐色。	外面泥釉？ 両面ともに調整痕が明瞭である。	L14 I b
			11	口縁 14.6 — —	両面とも暗茶褐色。	暗赤褐色。 白色鉱物を含む。	外面泥釉？ 両面ともに調整痕が明瞭である。	L15表採
			12	胴部 — — —	両面とも明茶褐色。	明茶褐色。	外面に2本の沈線。 両面ともに調整痕が明瞭である。	L14 I b
			13	胴部 — — —	両面とも暗茶褐色。	暗茶褐色。 白色鉱物を含む。	外面に波状の凸帯文。 両面ともに調整痕が明瞭である。	M15 I b~II b
	甕	I	14	口縁 15.4 — —	両面とも茶褐色。	茶褐色。 白色鉱物を含む。	両面ともに轆轤痕・調整痕が明瞭である。	K12表採
			15	II 口縁 — — —	外面は茶褐色。 内面は明茶褐色。	茶褐色と黒色のサンドウィッチ 状。白色鉱物を含む。	口唇部に1本の沈線。 両面ともに轆轤痕・調整痕が明瞭である。	O15 I b
		III	16	胴部 — — —	外面はにぶい茶褐色。 内面は明茶褐色。	赤茶褐色。	外面に2本の沈線。 両面ともに轆轤痕・調整痕が明瞭である。	出土地不明
			17	IV 胴部 — — —	外面はにぶい茶褐色。 内面は明茶褐色。	暗茶褐色。 白色鉱物を含む。	外面に沈線・波状沈線・貼付の丸文。 両面ともに轆轤痕・調整痕が明瞭である。	M15 I b~II a
		II	18	胴部 — — —	外面はにぶい茶褐色。 内面は暗茶褐色。	暗茶褐色。 白色鉱物を含む。	外面に沈線・貼付の丸文。 両面ともに轆轤痕・調整痕が明瞭である。	K15表採
			19	胴部 — — —	外面はにぶい茶褐色。 内面は暗茶褐色。	茶褐色。 白色鉱物を含む。	外面に沈線・凸帯文。 両面ともに轆轤痕・調整痕が明瞭である。	L14 I a~b
20			III 胴部 — — —	外面は濁った暗茶褐色。 内面は明茶褐色。	赤茶褐色。 白色鉱物を含む。	外面に波状の凸帯文。 両面ともに轆轤痕・調整痕が明瞭である。	M15 I b~II a	
第34図 図版23	挿鉢	I	21	胴部 — — —	外面は濁った茶褐色。 内面は明茶褐色。	明茶褐色。	外面に沈線・波状沈線。 両面ともに轆轤痕・調整痕が明瞭である。	L14 I a~b
			22	IV 口縁 — — —	両面とも暗茶褐色。	赤茶褐色。 白色鉱物を含む。	外面に沈線・波状沈線・貼付の丸文。 両面ともに轆轤痕・調整痕が明瞭である。	L15 II b
		II	23	口縁 — — —	両面ともにぶい茶褐色。	赤茶褐色。 白色鉱物を含む。	外面に沈線・波状沈線・貼付の丸文。 両面ともに轆轤痕・調整痕が明瞭である。	K16表採
			24	I 口縁 — — —	両面とも暗茶褐色。	赤茶褐色。	外面に凸状の稜線。 内面に間隔の狭い櫛目を施す。	L15 I b~II a
	鉢	I	25	口縁 — — —	両面ともにぶい黒褐色。	赤茶褐色。	外面に凸状の稜線。 内面に間隔の広い？櫛目を施す。	西側畑表採
			26	II 口縁 — — —	外面は濁った黄茶褐色。 内面は赤茶褐色。	赤茶褐色。 白色鉱物を含む。	挿鉢としたが、鉢の可能性も考慮しておく。 両面とも調整痕が明瞭である。	N15 II a~b
			27	II 口縁 — — —	外面は濁った黄茶褐色。 内面は赤茶褐色。	赤茶褐色。	内面に櫛目。 両面とも調整痕が明瞭である。	N15 I b
		II	28	口縁 — — —	両面とも黄色く濁った黒茶褐色。	暗赤茶褐色。	内面に櫛目。外面に凸状の稜線。 両面とも調整痕が明瞭である。	M15 I b~II b
			29	口縁 — — —	外面は濁った黄茶褐色。 内面は赤茶褐色。	赤茶褐色。	外面に波状沈線。 両面とも調整痕が明瞭である。	M15 I a~b
			30	I 口縁 — — —	両面ともにぶい黒茶褐色。	にぶい黒褐色。	外面に波状沈線。 両面とも雑な成形である。	西側畑表採
III	31	口縁 27.0 — —	両面ともにぶい赤茶褐色。	赤茶褐色。	外面に沈線・波状沈線。 両面とも調整痕が明瞭である。	K14表採		
	32	II 口縁 12.0 — —	両面ともにぶい黒褐色。	暗赤茶褐色。	内面に調整痕。全体的に雑な成形である。	西側畑表採		
	33	II 口縁 — — —	外面は濁った黄茶褐色。 内面は赤茶褐色。	暗赤茶褐色。	外面に波状沈線。 両面とも雑な成形である。	L15 I b		
	34	III 口縁 30.2 — —	外面は暗茶褐色。 内面は赤茶褐色。	暗赤茶褐色。	両面ともに轆轤痕・調整痕が明瞭である。	LM14~15 I a~b		
挿鉢	III	35	口縁 — — —	両面ともにぶい暗茶褐色。	暗赤茶褐色。	口唇部に片口を成形。内面に櫛目。 両面ともに轆轤痕・調整痕が明瞭である。	L14 I b	
		36	口縁 15.2 — —	外面は暗茶褐色、明茶褐色。 内面は明茶褐色。	明茶褐色。	口唇部に1本の沈線。内面に櫛目。 両面ともに轆轤痕・調整痕が明瞭である。	O15 I b	
	不明	37	底部 7.6 — —	両面とも赤茶褐色。	茶褐色と黒色のサンドウィッチ 状。白色鉱物を含む。	内面に櫛目。 外面に明瞭な調整痕。	M15 I b~II a	
		38	底部 10.8 — —	両面とも明茶褐色。	明茶褐色。	内面に櫛目。 外面に明瞭な調整痕。	L15表採	
		39	蓋 厨子 — — —	両面とも明茶褐色。	明茶褐色。	ボージャー厨子の蓋破片と思われる。 両面に明瞭な轆轤痕・調整痕	TP6-1層	
40	蓋 急須 — — —	両面とも赤茶褐色。	暗赤茶褐色。	急須の蓋と思われる。丁寧な成形。 両面とも明瞭な調整痕。	M14 I b~II b			

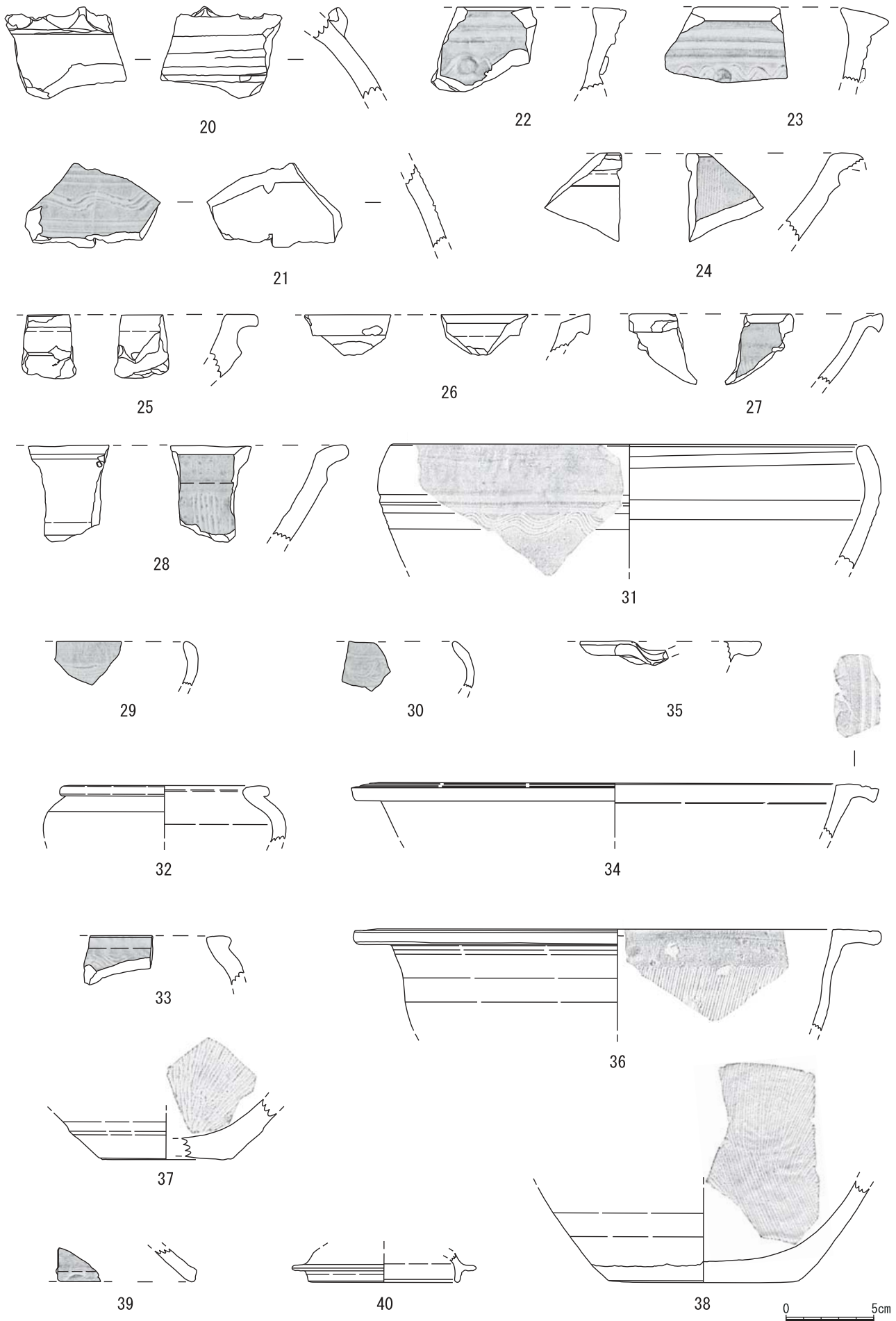


第 33 図 沖縄産無釉陶器 1 壺 (1 ~ 13)、甕 (14 ~ 19)

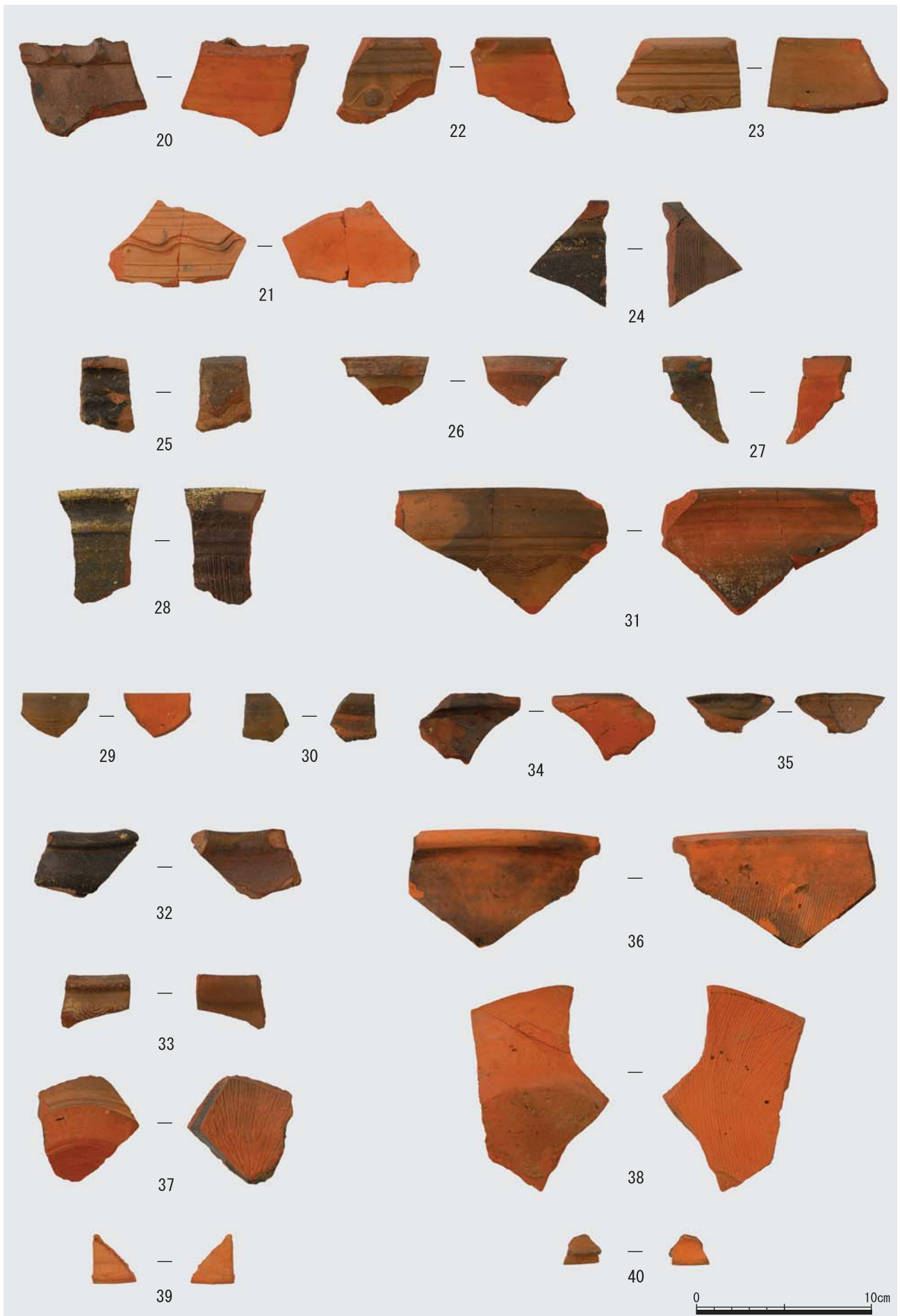
0 5cm



図版 22 沖縄産無釉陶器 1



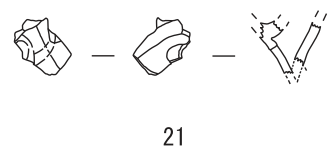
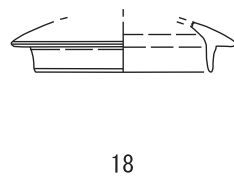
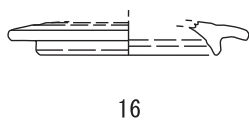
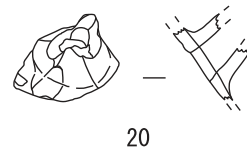
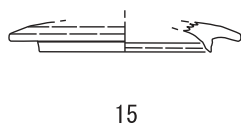
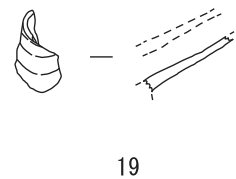
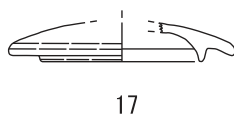
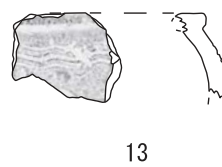
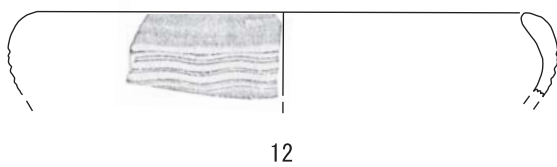
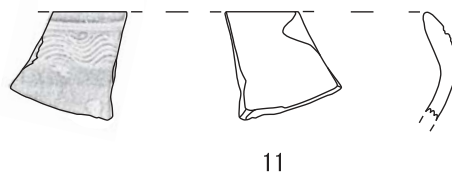
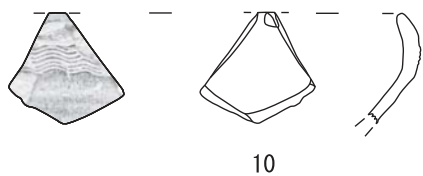
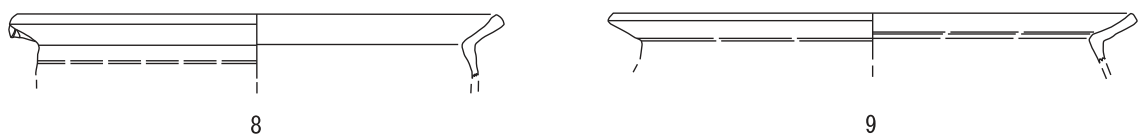
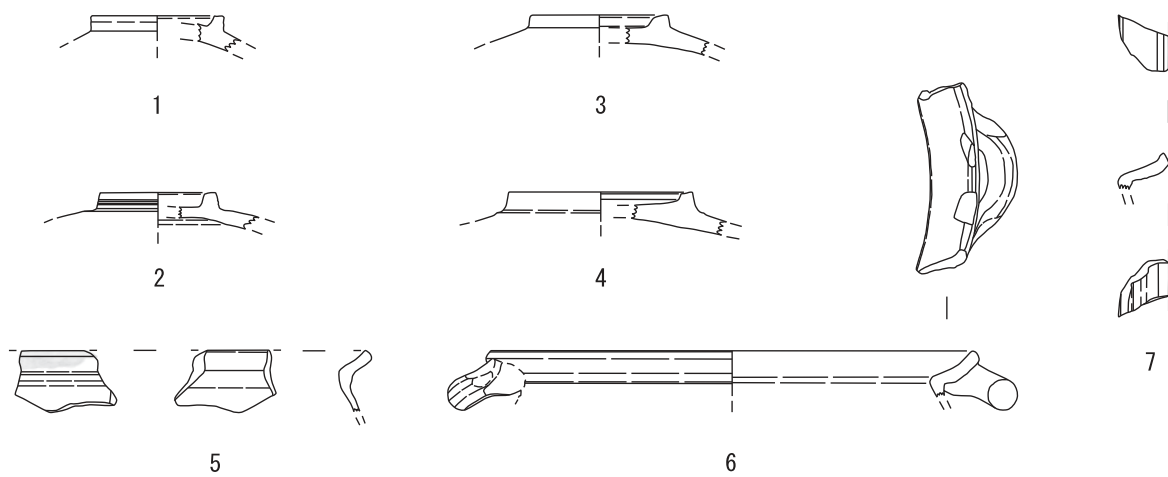
第34図 沖縄産無釉陶器 2 甕 (20～23)、擂鉢 (24～28・35～38)、鉢 (29～34)、蓋 (39～40)



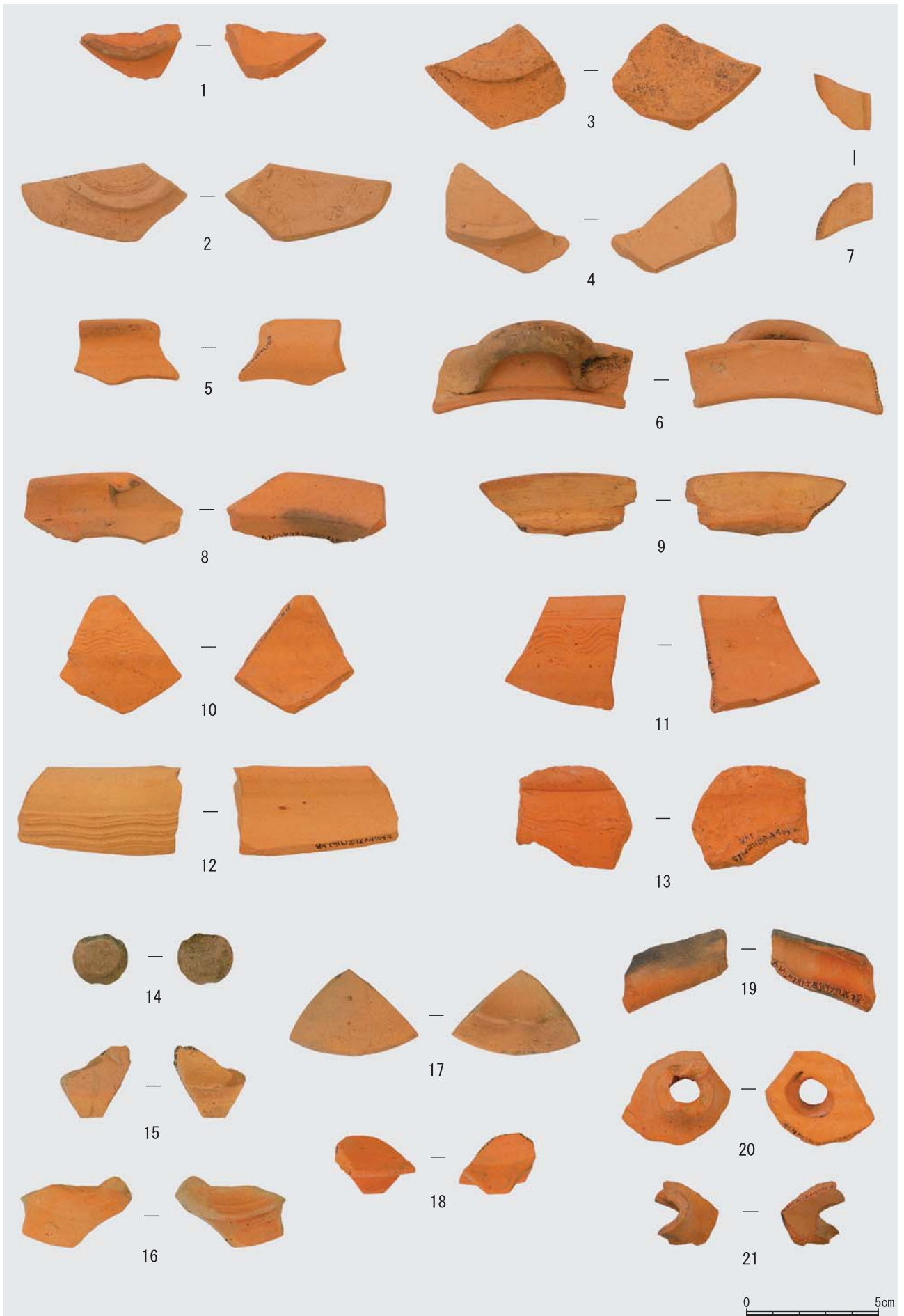
図版 23 沖縄産無釉陶器 2

第21表 アカムヌー観察一覧

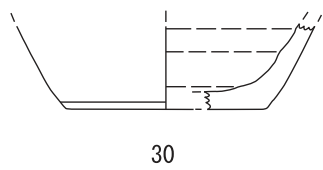
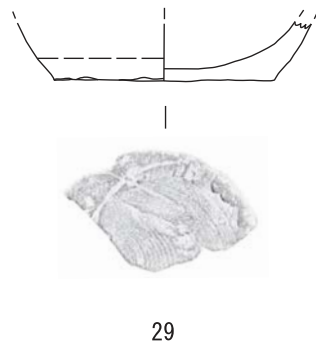
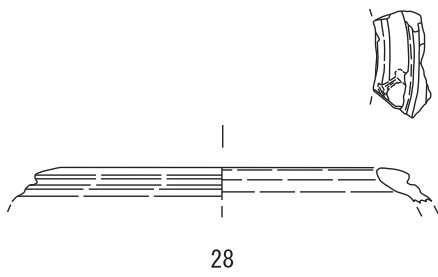
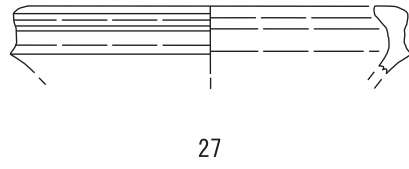
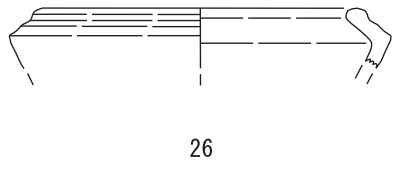
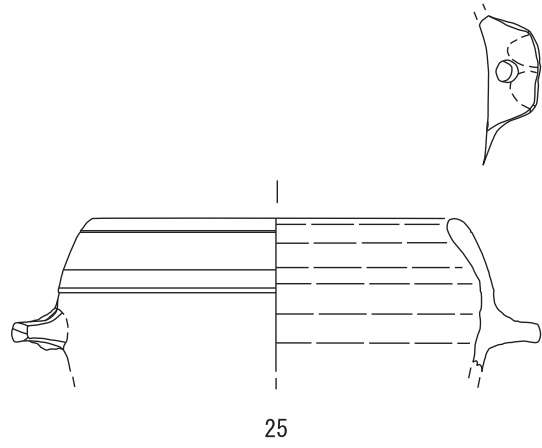
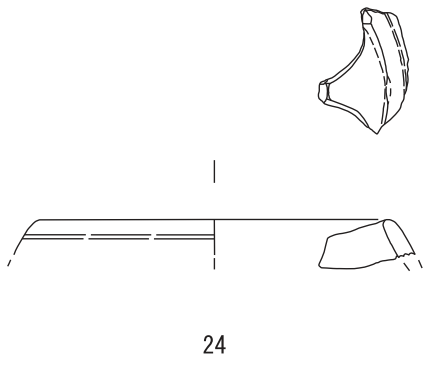
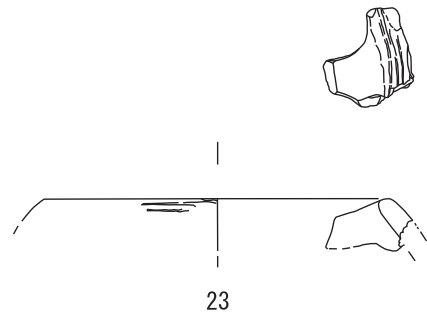
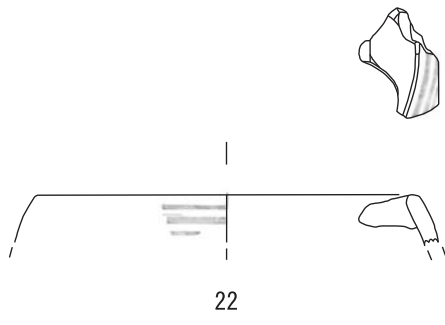
挿図番号 図版番号	器種・分類	部位	口径 器高 底径	器色	素地	観察事項	出土地	
第35図 図版24	鍋	蓋	1	撮み (5.3) - -	明橙褐色。	やや硬質。明茶褐色。 赤色粒。	外傾する高台状の撮み。 回転ヘラ成形。焼成良好。	O15 I b
			2	撮み (4.6) - -	淡橙褐色。	軟質。淡橙褐色。 ニービ様の黒色砂粒。	外傾する高台状の撮み。 回転ヘラ成形。焼成良好。	L14 I b
			3	撮み (5.4) - -	明橙褐色。	やや硬質。明茶褐色。 赤色粒。黒色砂粒。	外傾する高台状の撮み。全体に磨耗気味。 回転ヘラ成形。焼成やや良好。	L12表採
			4	撮み (7.2) - -	淡橙褐色。	軟質。淡橙褐色。 白色粒、黒色砂粒。	外傾する高台状の撮み。全体に磨耗気味。 回転ヘラ成形。焼成やや良好。	L15 I b
	鍋	身	5	口縁 - -	淡橙褐色。	軟質。淡橙褐色。 白色粒、黒色砂粒。	口折れ後、口縁はやや内傾。端部に煤。 回転ヘラ成形とナデ調整。焼成やや良好。	L15表採
			6	口縁 19.6 - -	淡橙褐色。	軟質。淡橙褐色。 白色粒、黒色砂粒。	口折れ後、口縁はやや内傾。端部に紐状耳。 外面に煤。ヘラ成形とナデ調整。焼成良好。	L15 I b
			7	口縁 - -	淡橙褐色。	軟質。淡橙褐色。雲母。 白色粒、黒色砂粒。	口折れ後、口縁はやや内傾。ヘラ成形とナデ調整。 焼成良好。	L15 I b～II a
			8	口縁 19.6 - -	明橙褐色。	軟質。明橙褐色。 白色粒、黒色砂粒。	口折れ後、口縁はやや内傾。端部に紐状耳片。 回転ヘラ成形とナデ調整。焼成やや良好。	M15 II b
			9	口縁 21.0 - -	明橙褐色。	軟質。明橙褐色。 赤色粒、黒色砂粒。	口折れ後、口縁はやや内傾。 回転ヘラ成形とナデ調整。焼成やや良好。	L17表採
	鉢	I	10	口縁 - -	橙褐色。	軟質。橙褐色。 白色粒、黒色砂粒。	内傾後、口唇は舌状。回転ヘラ成形とナデ調整。 外面に波状沈線。焼成やや良好。	西側畑表採
			11	口縁 - -	明橙褐色。	やや硬質。明橙褐色。 赤色粒、黒色砂粒。	内傾後、口唇は舌状。回転ヘラ成形とナデ調整。 外面に沈線と波状沈線。焼成やや良好。	西側畑表採
			12	口縁 19.0 - -	淡橙褐色。	軟質。淡橙褐色。 白色粒、黒色砂粒。	内傾後、口唇は舌状。回転ヘラ成形とナデ調整。 外面に波状沈線。焼成やや良好。	M14 I b
	13	II	口縁 - -	明橙褐色。	やや硬質。明橙褐色。 赤色粒、黒色砂粒。	内傾後、口唇は玉縁状。回転ヘラ成形とナデ調整。 外面に波状沈線。焼成やや良好。	M15 I b	
急須	蓋	14	撮み (2.2) - -	淡橙灰褐色。	やや硬質。淡橙灰褐色。 白色鈹物。	台形状。ナデ調整。雑な成形。焼成不良。	西側畑表採	
		15	蓋端部 (9.2) (6.8)	橙褐色。	軟質。橙褐色。 黒色鈹物。	蓋端部を下方へ丸みを持たす。見受けの突起は 短く尖る。ナデ調整。	西側畑表採	
		16	蓋端部 (9.6) (7.0)	淡橙褐色。	軟質。橙褐色。 黒色鈹物、白色鈹物。	蓋端部を下方へ丸みを持たす。見受けの突起は 短く尖る。ナデ調整。全体に磨耗気味。	西側畑表採	
		17	蓋端部 (9.0) (6.4)	橙褐色。	軟質。橙褐色。赤色粒。 黒色鈹物、白色鈹物。	蓋端部を下方へ丸みを持たす。見受けの突起は 短く尖る。ナデ調整。	西側畑表採	
		18	蓋端部 (9.0) (7.0)	明橙褐色。	軟質。橙褐色。赤色粒。 黒色鈹物、白色鈹物。	蓋端部を下方へ丸みを持たす。見受けの突起は 短く尖る。ナデ調整。全体に磨耗気味。	出土地不明	
	19	-	注口 - -	にぶい明橙褐色。	やや硬質。橙褐色。赤色粒。 黒色鈹物、白色鈹物。	手捻り成形で押圧後、ナデ調整。 外面下部は黒色に変色。	西側畑表採	
20	-	注口 - -	にぶい明橙褐色。	やや硬質。橙褐色。赤色粒。 黒色鈹物、白色鈹物。	手捻り成形で押圧後、胴部に貼付。ナデ調整。 全体的に雑な調整。磨耗気味。	西側畑表採		
21	-	注口 - -	にぶい橙褐色。	やや硬質。橙褐色。黒色鈹物、 白色鈹物。	手捻り成形で押圧後、胴部に貼付。ナデ調整。 全体的に丁寧な調整。	L16表採		
第36図 図版25	火炉	I	22	口縁 15.0 - -	にぶい橙褐色。	やや硬質。橙褐色。 黒色鈹物、白色鈹物。	内傾後、口唇部を舌状。ヘラ成形後にナデ調整。 口縁内面に下方突起を貼付。	西側畑表採
			23	口縁 13.7 - -	明橙褐色。	やや硬質。明橙褐色。 黒色鈹物、白色鈹物。	内傾後、口唇部を舌状。ヘラ成形後にナデ調整。 口縁内面に下方突起を貼付。	西側畑表採
			24	口縁 15.8 - -	明橙褐色。	やや硬質。明橙褐色。 黒色鈹物、白色鈹物。	内傾後、口唇部を舌状。ヘラ成形後にナデ調整。 口縁内面に下方突起を貼付。	M15 I a～b
			25	口縁 14.0 - -	明橙褐色。	軟質。明橙褐色。赤色粒 黒色鈹物、白色鈹物。	内傾後、口唇部を舌状。ヘラ成形後にナデ調整。 外面胴部に横耳を貼付。穴を穿つ。	L15 II b
			26	II	口縁 12.8 - -	淡橙褐色。	軟質。淡橙褐色。 黒色鈹物、白色鈹物。	くの字状に折り内傾させる。口縁外面を段状に成形。 全体的に磨耗気味。
	27	口縁 14.6 - -	橙褐色。	やや硬質。橙褐色。赤色粒。 黒色鈹物、白色鈹物。	くの字状に折り内傾させる。口縁外面を段状に成形。 口縁上部は平坦。全体的に磨耗気味。	O14表採		
	28	壺	-	口縁 13.0 - -	明橙褐色。	軟質。明橙褐色。赤色粒。 黒色鈹物、白色鈹物。	口縁部は内彎。口縁外面を段状に成形。 口縁上部は平坦。全体的に磨耗気味。	西側畑表採
	29	鉢	不明	底部 - 8.8	橙褐色。	軟質。灰色・橙褐色。 白色鈹物、黒色国物。	底部はベタ底状。糸切痕が明瞭。 胴部は丸みを持って立ち上がる。全体に磨耗気味。	出土地不明
	30	鉢	不明	底部 - 8.0	橙褐色。	やや硬質。灰色・橙褐色。 白色鈹物、黒色国物。	底部はベタ底状。糸切痕は不明瞭。 胴部は丸みを持って立ち上がる。	K～L15表採



第 35 図 アカムヌー 1

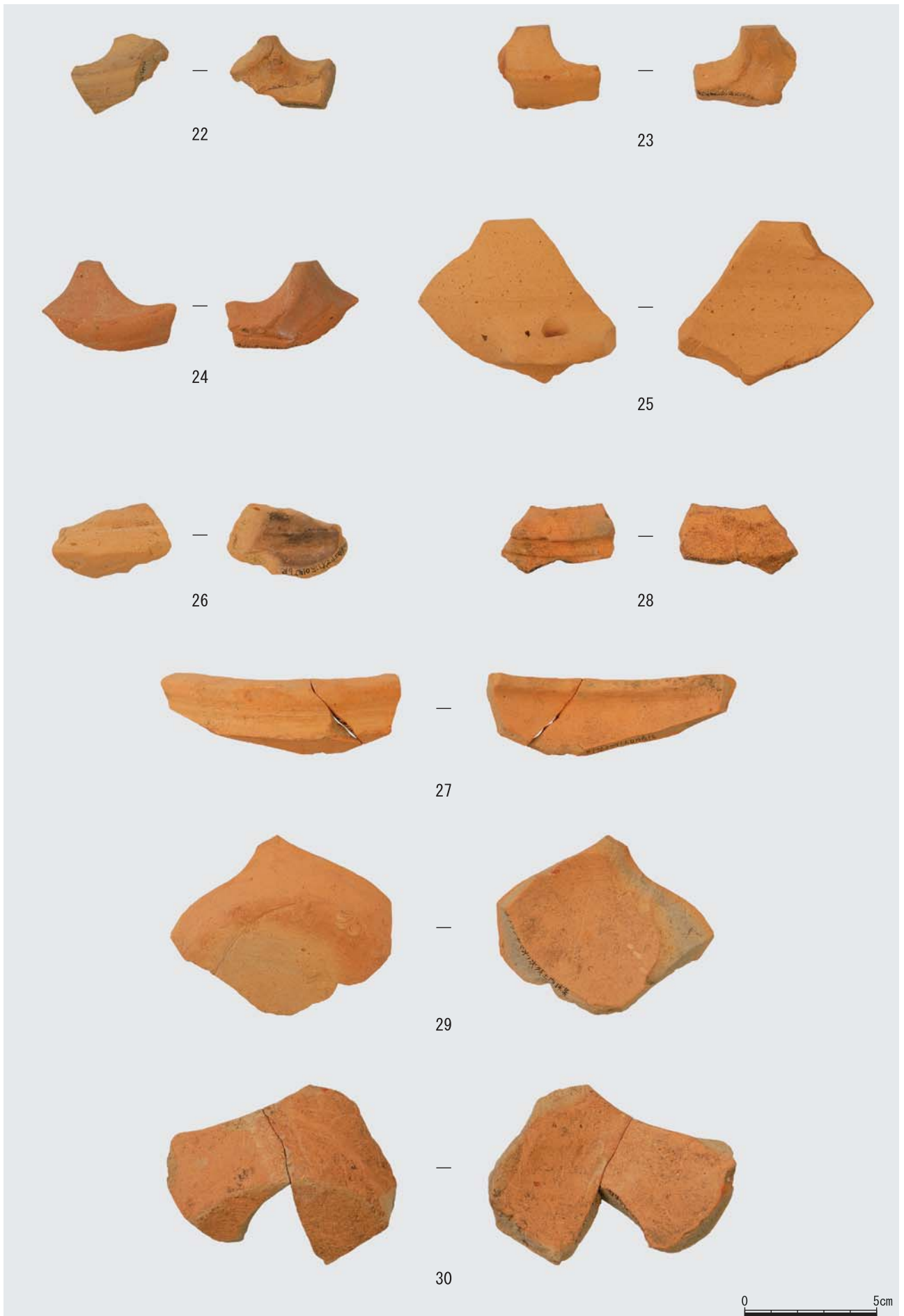


図版 24 アカムヌー 1



0 5cm

第 36 図 アカムヌー 2

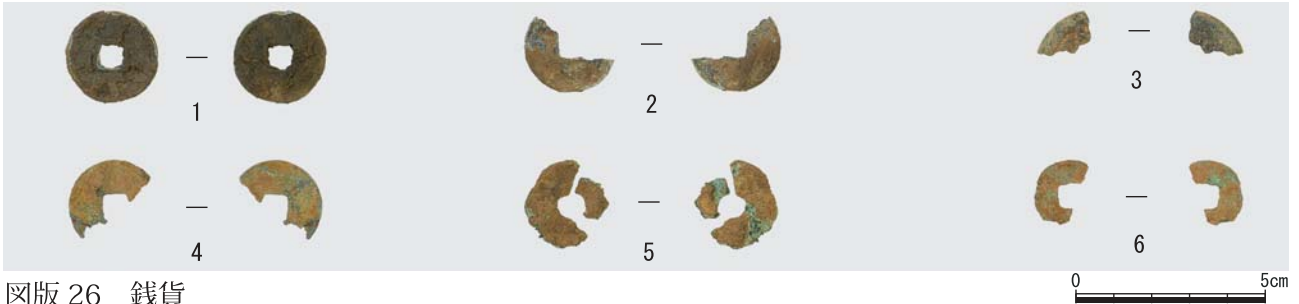


図版 25 アカムヌー 2

14. 銭貨

今回の範囲確認調査においては、銭貨が計6点得られており、有文銭が5点、無文銭が1点となっている。現在整理中の緊急調査報告書において詳細は記すことを了されたい(図版26)。

1～5は有文銭。1は完形だが、「□□通寶」で判読不能。外径5.0cm・孔径1.2cm(M14 I b)。2・3・4も劣化が著しく判読不能(M14 I b / L15 I a～b / L15 I b / L15 II b)。6は無文銭(L15 II b)。



図版 26 銭貨

15. ジーファー(簪)

竿部分のみ1点が得られている(第37図1)。ムディーから上位は欠落しており、全形は窺えない。断面は六角形を呈す(L15 溝状礫敷遺構②)。

16. 玉

玉は5点得られている。いずれもガラス製である。5は白色で外径0.8cm、孔径0.4cm(O15 No.2)。6は青色で外径0.75cm、孔径0.25cm(O15 II a)。7は淡青白色で外径0.6cm、孔径0.15(L15 II b)。8は淡黄白色で外形0.9cm、孔径0.3cm(L15 II b)。9は白色で外形0.6cm、孔径0.25cm(M14 I b)。

17. 煙管

煙管は9点得られている。7点が沖縄産陶製で、2点は青銅製となっている(第22表)。特徴的なものを図化した(第37図7～12)。詳細は次回報告に委ねる。

10は沖縄産施釉陶器製の吸口で、緑釉を施す。長さは3.7cm、接続部径が3.0cm、吸口が0.9cm(TP8-1層)。

11も沖縄産施釉陶器製の吸口で、緑釉を施す。残存部の長さは2.7cm、接続部径が約1.3cm、吸口が0.9cm(西側畑表採)。12は焼き締め陶器に鉄釉を施した雁首破片。断面八角形を呈す。火皿径は2.6cm、接続部径は約1.2cm(西側畑表採)。13も同様で、焼き締め陶器に鉄釉を施した雁首破片。断面八角形を呈す。接続部径は1.6cm(M14 I a～b)。14は青銅製の雁首で完形。長さは4.5cm、火皿は0.7cm、接続部は1.0cm(M15 I b～II b)。15は青銅製の吸口で完形。長さは2.2cm、接続部径が約1.3cm、吸口は0.5cm(N15 I a～II a)。

第22表 煙管出土状況

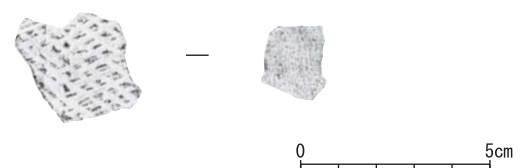
種別・器種・部位 出土位置・層位	沖縄産施釉陶器		沖縄産 無釉陶器	金属製		合計
	吸口	雁首	雁首	吸口	雁首	
I a～b	1	2				3
I a～II a				1		1
I b～II b					1	1
II b			1			1
西側畑表採	2					2
TP I		1				1
合計	3	3	1	1	1	9



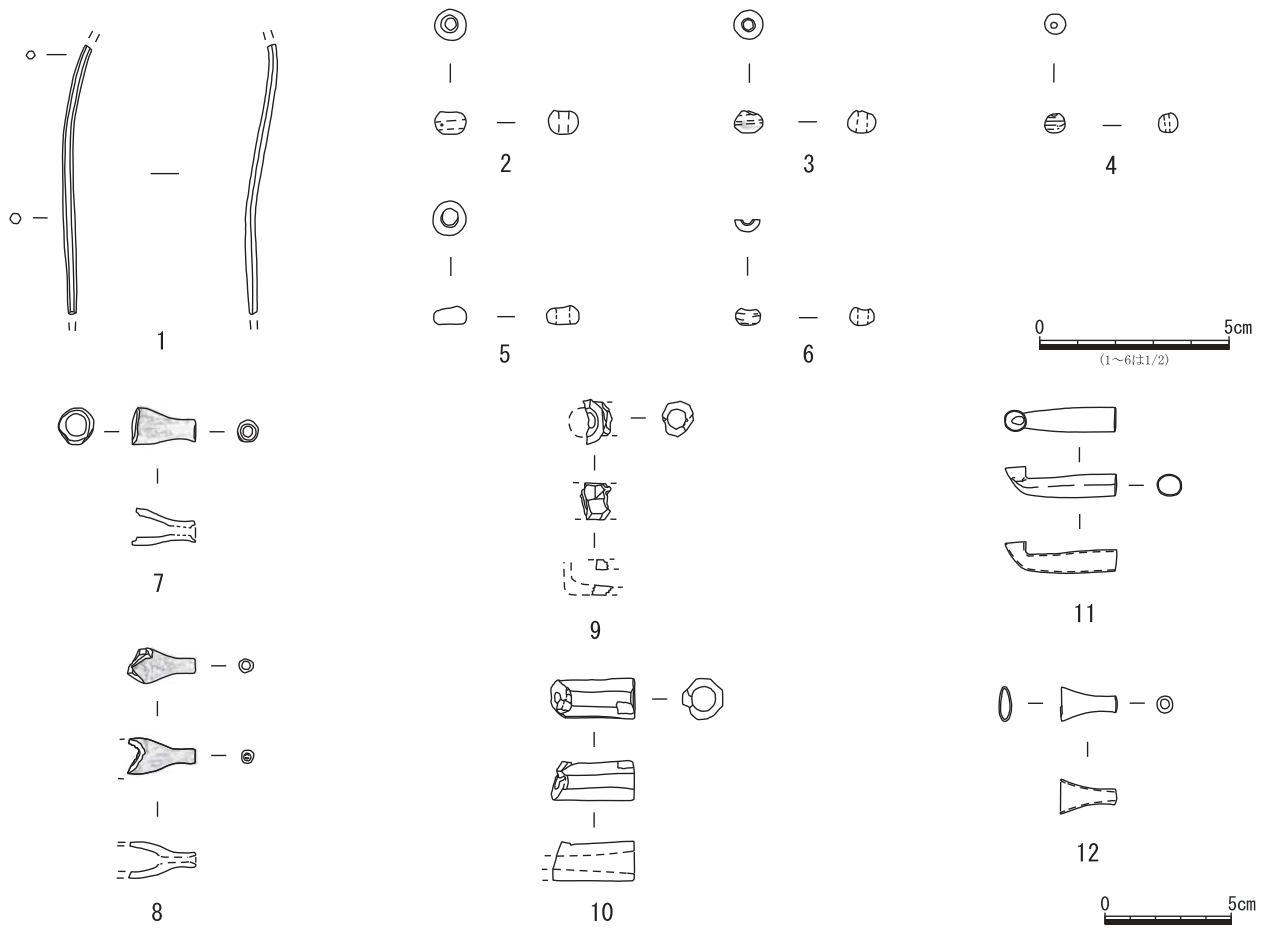
図版 28 高麗系瓦

18. 高麗系瓦

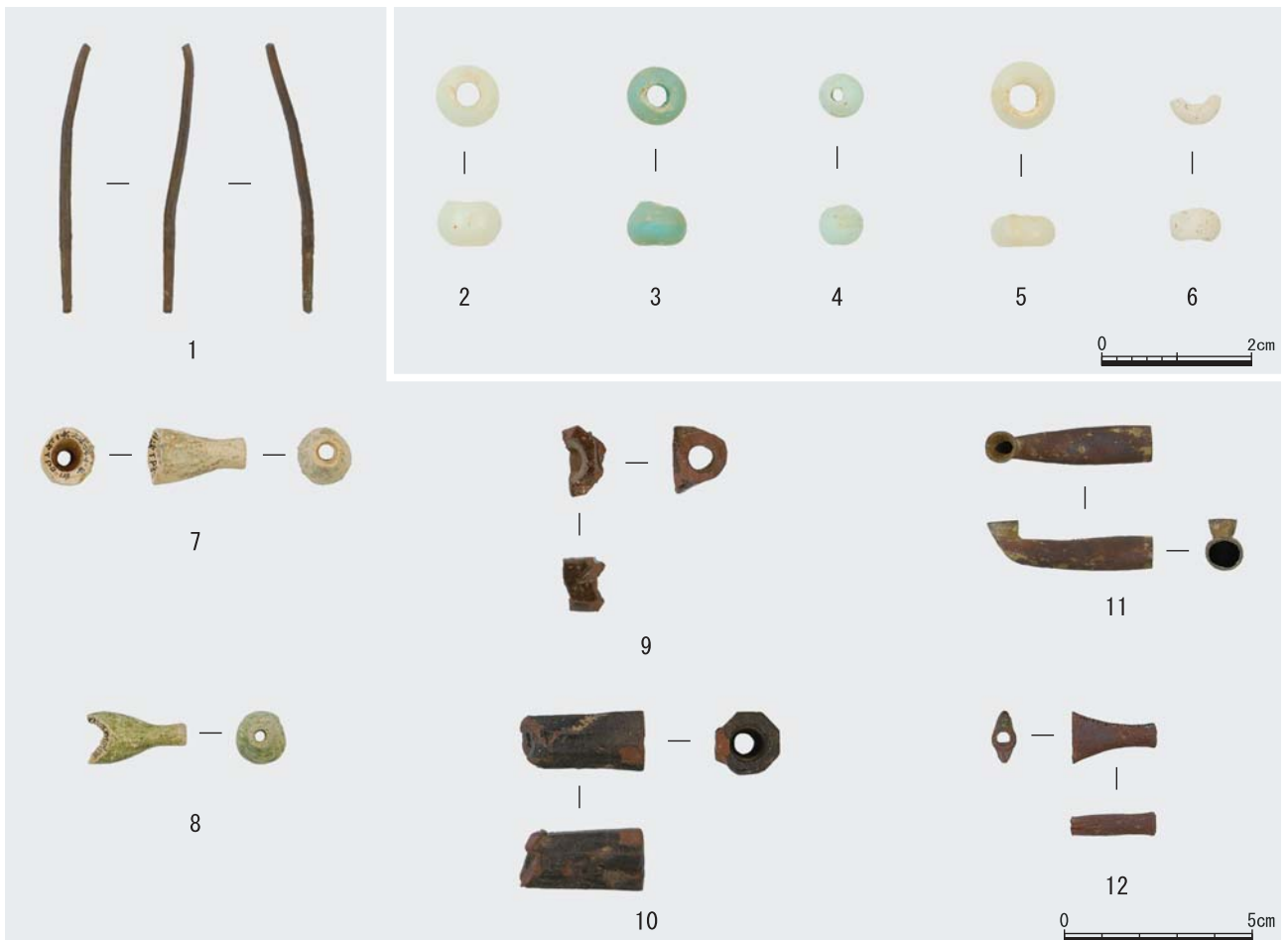
高麗系瓦の平瓦片が1点得られている。外面に凸面に羽状押捺文を施し、凹面には布目痕が認められる。焼成は還元焼成により、灰色を帯びており、器壁は1.6cmとなっている。小破片であることから、「大天」等の刻銘部位は確認できていない。



第38図 高麗系瓦



第37図 ジーフアー（簪）(1)、玉（2～6）、煙管（7～12）



図版27 ジーフアー（簪）、玉、煙管

分析方法

胎土分析には、大きく分けて鉱物組成や岩石組成を求める方法と化学組成を求める方法がある。前者は重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられ、後者では蛍光X線分析が用いられている。比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼成と考えられるグスク土器の分析では、前者の方が、胎土の特徴が捉えやすい、地質との関連性を考えやすいなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量、粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片及び微化石の種類等も捉えることが可能となる。客観的方法で表現した例として、松田ほか(1999)の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片及び岩石片の種類構成を調べたもので、この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器製作技法の違いを見出せるため、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能となるため、ここでは薄片観察法による胎土分析を行う。以下に手順を述べる。

薄片は、試料の一部を切断し、0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用い、胎土中の鉱物片、岩石片及び微化石の種類構成を明らかにした。砂粒の計数は、ポイント法により行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については粒数を計数し、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

結果

薄片観察結果を第24表、第39図に示す。計数された鉱物片及び岩石片の種類構成をみると、互いに類似した種類構成を示す試料がある一方、異なる組成を示す試料も認められる。また、碎屑物・基質・孔隙の割合では、碎屑物の割合が5%未満のものから20%を超えるものまでである。さらに、各試料の粒径組成をみると、モードを示す粒径が試料によって異なり、粗粒砂から粗粒シルトまでの各粒径にばらついた。以上に述べた鉱物・岩石組成と碎屑物の量比及び粒径組成の状況を整理して、以下に分類した。

① 鉱物・岩石組成

- A類：砂粒の主体は微量の石英と斜長石の鉱物片であり、これに微量の石灰質化石片を含むものをA2類とした。
- B類：石英の鉱物片を比較的多く含み、少量の斜長石の鉱物片と少量または微量のチャートの岩石片を含む。さらに石灰質化石を含むものをB2類とした。
- C類：斜長石の鉱物片を主体とし、少量の輝石類の鉱物片及び安山岩の岩石片、微量の不透明鉱物や流紋岩・デイサイト、火山ガラスなどを含む。

② 碎屑物の量比

- ①類：5%未満
- ②類：5～15%
- ③類：20%以上

③ 粒径組成

- a類：粗粒砂にモードがある。
- b類：中粒砂にモードがある。
- c類：細粒砂にモードがあるが、極細粒砂及び粗粒シルトの割合も比較的高い。
- d類：粗粒シルト～中粒シルトにモードがある。
- e類：粗粒シルト及び中粒砂が突出して多い。
- f類：粗粒シルトが突出して多い。

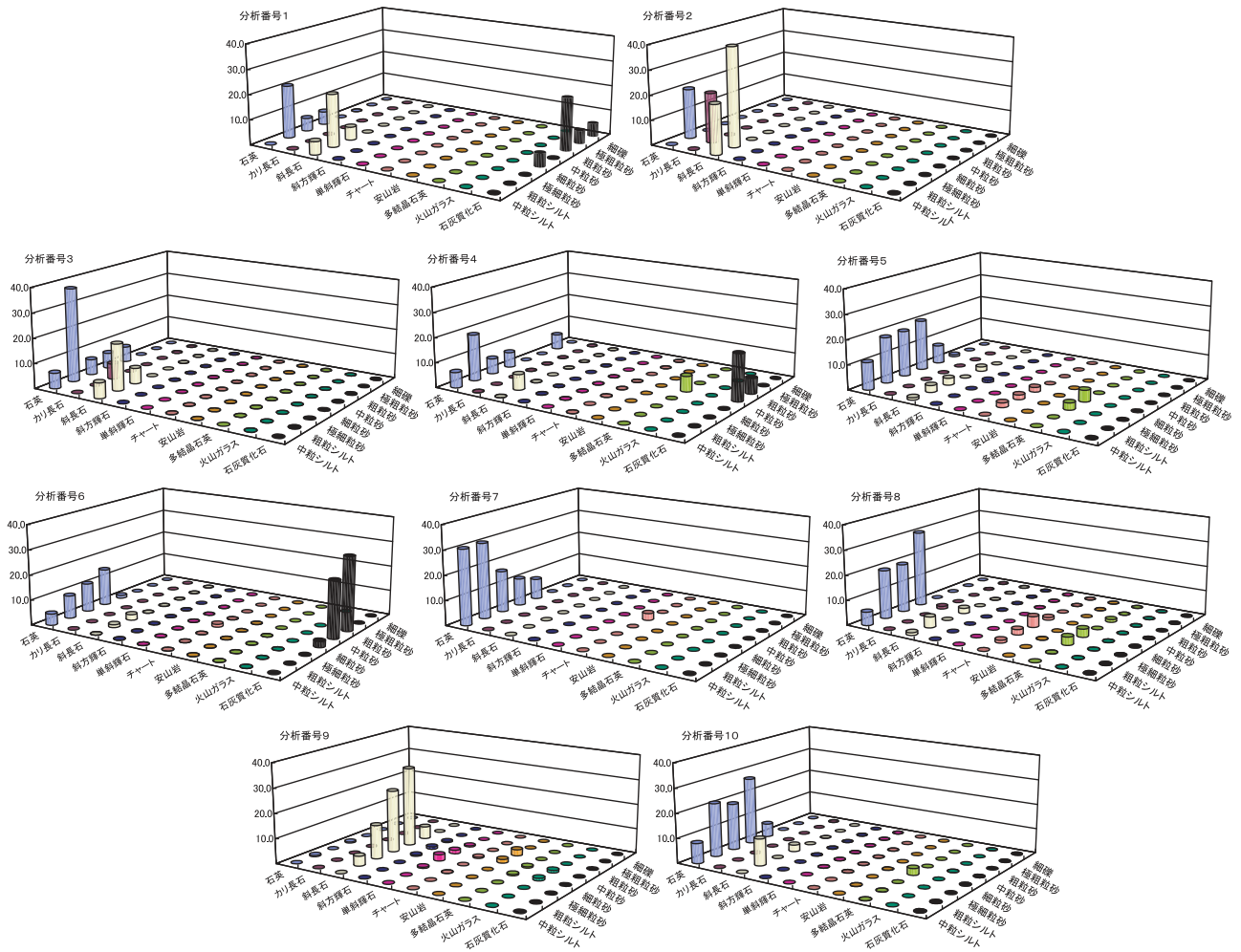
各試料の胎土分類結果を第23表に併記する。鉱物片・岩石片の種類構成では、肉眼観察によるI類の試料4点はA1類及びA2にそれぞれ2点ずつ分類され、II類の試料はB1類に2点、B2類に1点が分類された。III類の試料3点のうち、2点はB1類に分類されたが、1点はC類であった。

碎屑物の量比では、I類の試料4点は①類、II類の試料3点及びB1類に分類されたIII類の試料2点は②類、C類に分類されたIII類の試料1点が③類に分類された。

粒径組成では、A1類のI類試料2点がf類、A2類のI類試料2点がe類に分類され、II類の試料では、B1類の試料はc類とd類に分かれ、B2類の試料はa類に分類された。III類の試料では、B1類の試料はともにc類に分類され、C類の試料はb類に分類された。

第 24 表 薄片観察結果

分析番号	砂粒区分	砂粒の種類構成														合計										
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	緑泥石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	凝灰岩	凝灰岩・デボイト	安山岩		多結晶石英	珪長岩	緑色岩	火山ガラス	粘土塊	石灰質化石				
1	細砂																					1	1			
	極粗粒砂																						1	1		
	粗粒砂																						4	4		
	中粒砂																							0		
	細粒砂																						1	2		
	極細粒砂																							2		
2	粗粒シルト																						4	4		
	中粒シルト																						1	1		
	基質																						451	451		
	孔隙																							76	76	
	細砂																							0	0	
	極粗粒砂																							0	0	
3	粗粒砂																						0	0		
	中粒砂																						1	1		
	細粒砂																						1	1		
	極細粒砂																						1	1		
	粗粒シルト																						1	1		
	中粒シルト																						1	1		
4	基質																						300	300		
	孔隙																							44	44	
	細砂																							0	0	
	極粗粒砂																							0	0	
	粗粒砂																							0	0	
	中粒砂																							1	1	
5	細粒砂																						1	1		
	極細粒砂																						1	1		
	粗粒シルト																						6	3		
	中粒シルト																						1	1		
	基質																						474	474		
	孔隙																							93	93	
6	細砂																							0	0	
	極粗粒砂																							0	0	
	粗粒砂																							0	0	
	中粒砂																							1	1	
	細粒砂																							1	1	
	極細粒砂																							1	1	
7	粗粒シルト																						1	1		
	中粒シルト																						1	1		
	基質																						326	326		
	孔隙																							75	75	
	細砂																							0	0	
	極粗粒砂																							0	0	
8	粗粒砂																							1	1	
	中粒砂																							1	1	
	細粒砂																							1	1	
	極細粒砂																							1	1	
	粗粒シルト																							3	3	
	中粒シルト																							1	1	
9	基質																							274	274	
	孔隙																							93	93	
	細砂																								0	0
	極粗粒砂																								0	0
	粗粒砂																								0	0
	中粒砂																								1	1
10	細粒砂																							1	1	
	極細粒砂																							1	1	
	粗粒シルト																							3	3	
	中粒シルト																							1	1	
	基質																							326	326	
	孔隙																								75	75



第 39 図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

考察

(1) 胎土肉眼観察と薄片観察との対応関係について

第24表からは、肉眼観察分類と薄片観察分類とがよく対応していることがわかる。肉眼観察のⅠ類は、薄片観察のA類・①類・e/f類に対応する。特にⅠ類の「混入物の少ない」という特徴は薄片観察の①類として数値化されている。ただし、Ⅰ類には特徴として記載されていない石灰質化石が、薄片では認められるなど、肉眼観察では捉え切れない特性の存在も明らかとなった。また、Ⅰ類の試料で黒色鉱物とした粒子は、薄片観察からみると緑色岩の岩石片であると判断される。薄片観察結果も合わせて考えるならば、Ⅰ類は、石灰質化石を含まないⅠ類-1とそれを含むⅠ類-2とに細分されると言える。

Ⅱ類は、その特徴が「石灰質砂粒の混入が顕著なもの」とされた。しかし、薄片観察結果では、その特徴を示す試料は、分析番号6のみであり、他の2点には石灰質砂粒を認めることはできなかった。薄片観察結果に従えば、分析番号5と7で石灰質砂粒とした粒子は、多量に含まれる石英粒子のうち、白濁した石英粒子であったと判断される。したがって、Ⅱ類については、薄片観察により、石灰質砂粒を確認することが必要である。今回、Ⅱ類とされた試料のうち、石灰質砂粒を認めることのできなかった試料は、薄片観察も合わせた分類を設定するならば、「Ⅴ類」とする方が適当であると考えられる。

Ⅲ類の特徴は、「黒色鉱物の量比が多い」ことである。この場合の黒色鉱物とは、輝石や角閃石などのいわゆる有色鉱物を想定していた。今回の薄片観察では、Ⅲ類とされた試料のうち、分析番号9において、斜方輝石と単斜輝石の有色鉱物が比較的多く含まれることが確認された。一方、Ⅲ類とされた試料のうち、分析番号8と10については、輝石や角閃石などを確認することができなかった。これらの鉱物・岩石組成は、結果でも述べたようにⅡ類の分析番号5や7と同様のB1類に分類され、碎屑物の量比も分析番号5や7と同様であり、粒径組成は分析番号5と同様であった。これらのことから、Ⅲ類とされた試料のうち、薄片観察結果も合わせたⅢ類に相当するのは、分析番号9のみであり、分析番号8及び10は、上述した「Ⅴ類」に相当するとした方がよい。なお、肉眼観察で黒色鉱物とした粒子は、おそらく分析番号9では暗灰色を呈するチャートの岩石片であったと考えられ、分析番号10では不透明鉱物の鉱物片であったと考えられる。

(2) 胎土の地質学的背景と地域性について

土器胎土中の碎屑物における鉱物片及び岩石片の種類構成は、胎土の材料となった砂や粘土などの堆積物が採取された場所の地質学的背景を示唆している。したがって、鉱物片や岩石片の中に特定の地域に分布する種類が認められた場合、砂や粘土の採取地は、その分布域内あるいは、その分布を流域にもつ河川の下流域に所在する可能性がある。今回の胎土薄片観察では、鉱物・岩石組成はA、B、Cの3種類を認めることができた。

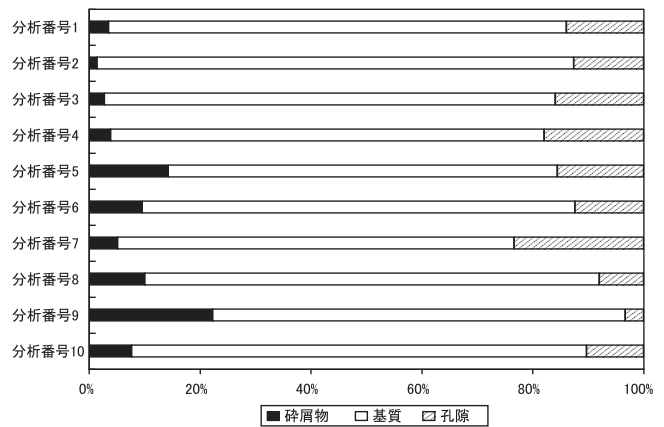
A類の主体をなす石英と斜長石の鉱物片は、様々な岩石に比較的多く含まれる鉱物であることから、その地質学的背景を推定することはできない。ただし、分析番号4において、極めて微量認められた黒雲母の鉱物片と緑色岩の岩石片は、A類の地質学的背景を示唆している可能性がある。沖縄本島の地質を想定した場合、黒雲母が比較的多量に含まれる地質としては、中生代白亜紀の地層とされている名護層の千枚岩や名護層に貫入する石英斑岩の岩体などがあげられる。また、緑色岩は名護層を構成する主要な岩石の一つである。木崎編(1985)などによれば、名護層の分布は、沖縄本島でも北部から中部(恩納村付近)までの西岸沿いであることから、A類の胎土が名護層に由来するとした場合、A類の土器は、名護層の分布する地域からの搬入品となる可能性がある。

B類の特徴は、多量の石英粒と少量または微量のチャートである。石英は、主要な造岩鉱物の中では、最も風化に対する抵抗性が強いいため、砂岩や泥岩などの堆積岩では、石英のみが卓越するような鉱物組成となることが多い。また、チャートの岩石片は、微細な石英の集合体であるから、これも堆積岩である礫岩や砂

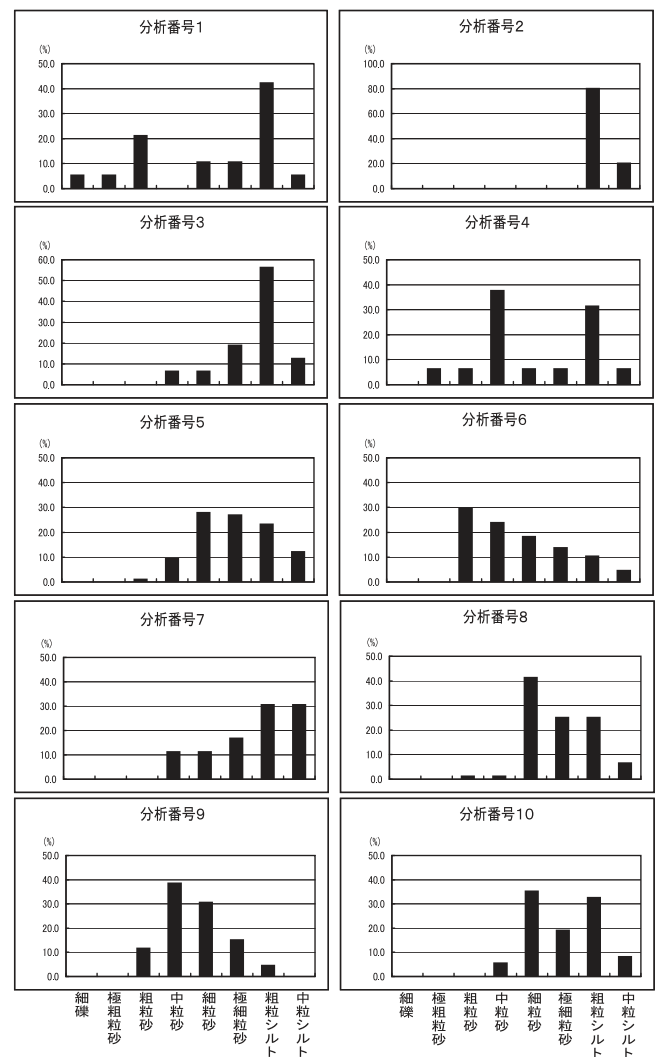
岩を構成する碎屑物としてよく認められる。したがって、B類の由来する地質としては、砂岩や礫岩からなる堆積岩の分布域が想定される。氏家・兼子(2006)による地質図では、宜野湾市及びその周辺域には、新第三紀の島尻層群下部を構成する豊見城層が分布し、豊見城層中には、小緑砂岩部層や中城砂岩部層などの砂岩も広く分布している。すなわち、B類から推定される地域性としては、嘉数トゥンヤマ遺跡の所在する宜野湾市及びその周辺域を想定することができる。

C類は、A類及びB類とは異なり、斜長石の鉱物片が圧倒的に多く、石英は極めて微量しか含まれない。C類には、輝石類の鉱物片と安山岩の岩石片が少量含まれ、他に凝灰岩や流紋岩・デイサイトなどの岩石片も微量認められている。このことから、C類の斜長石は、主に安山岩に由来し、凝灰岩や流紋岩・デイサイトにも由来するものが混在していると考えられる。したがって、C類から推定される地質学的背景は、安山岩の広く分布する地域を考えることができる。チャートや頁岩などの堆積岩類も極めて微量認められているが、石英も極めて微量であることから、堆積岩類の分布は伴わないか極めて限定的であると考えられる。上述した木崎編(1985)による沖縄本島の地質記載では、安山岩類の分布として、北部西岸域に岩脈として点在している。しかし、岩脈の周囲は名護層や砂岩を主体とする嘉陽層に取り囲まれていることから、その周辺の砂あるいは粘土中の碎屑物の鉱物組成を考えた場合に、C類のような斜長石が卓越する組成は考え難い。したがって、C類から推定される地域性は、沖縄本島外の地域である可能性が高い。琉球列島の中で、安山岩類の比較的広い分布を有する島としては、トカラ列島を構成する火山島の島々や久米島、石垣島及び西表島などであり、それほど多くはない。現時点では、これらの島々に限定するものではないが、想定され得る地域としてあげておきたい。

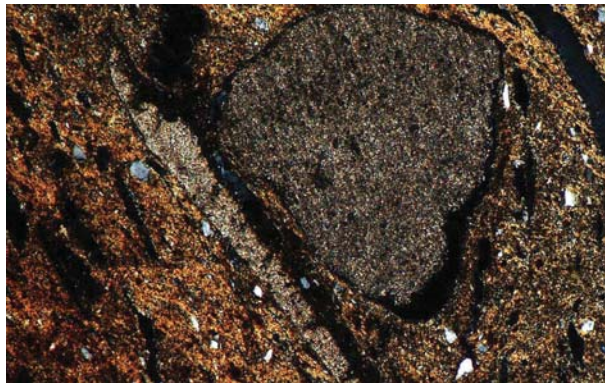
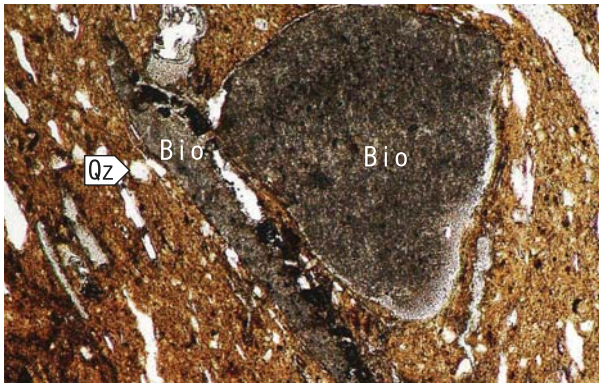
以上述べたA、B、C各類の地域性は、現時点では可能性があるという段階であり、可能性が高いとするまでには、今後も、各地のグスク土器の分析例を蓄積する必要がある。また、今回の分析では、胎土の肉眼観察の有効性も確認されたことから、分析例の蓄積に当たっては、肉眼観察による分類を広く進めた上で、薄片観察による確認を行うという方法により、効率的な展開が可能であると考えられる。



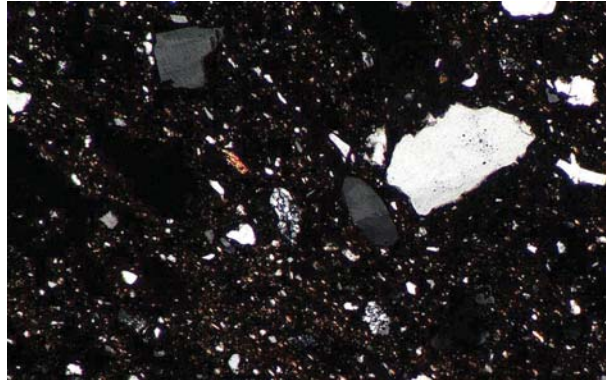
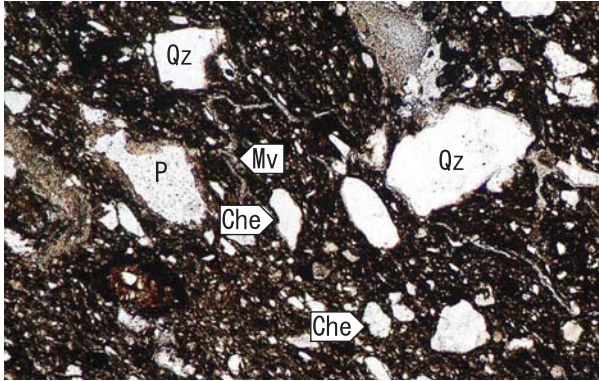
第40図 碎屑物・基質・孔隙の割合



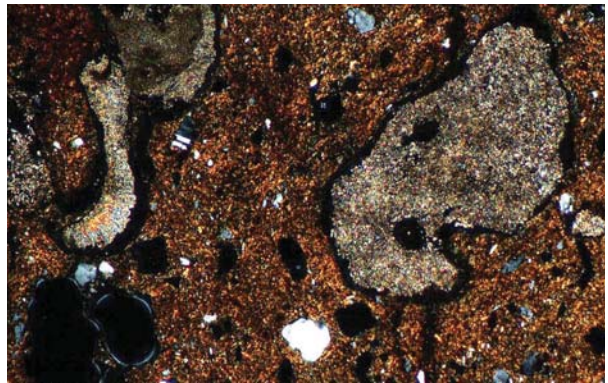
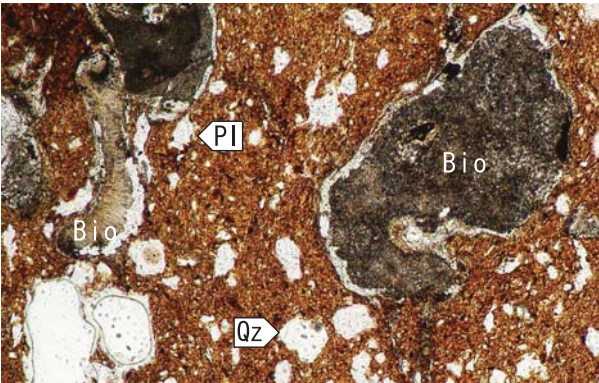
第41図 胎土中の砂の粒径組成



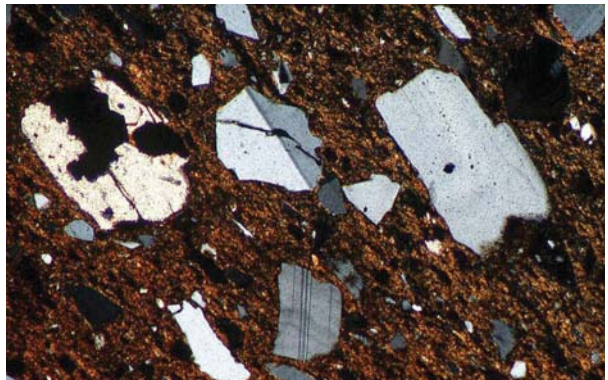
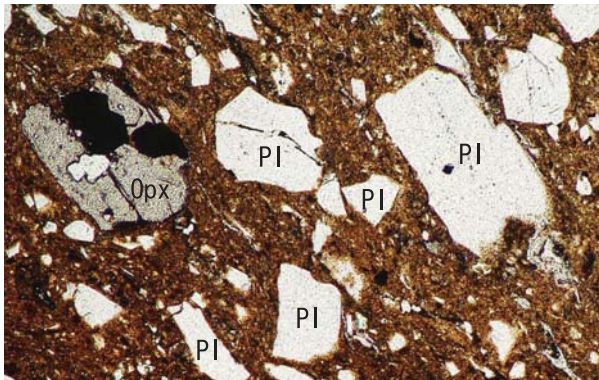
1. 分析番号1 (試料番号514 鍋 胴部)



2. 分析番号5 (試料番号172 鍋 胴部)



3. 分析番号6 (試料番号172 鍋 胴部)



4. 分析番号9 (試料番号500 鍋 胴部)

Qz:石英. Pl:斜長石. Opx:斜方輝石. Mv:白雲母. Che:チャート.
Bio:石灰質化石. P:孔隙.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

第2節 鍛冶関連遺物分析

調査方法

本遺跡からは、鍛冶関連遺構は確認されていないが、鉄滓が複数出土している。当遺跡での鉄器生産の実態を検討する目的として金属学的調査を行う。金属分析については、株式会社九州テクノロジー・TACセンターの協力を得て、第26～27表に示す出土鉄滓3点の調査を実施した。

第25表 鍛冶関連遺物出土状況

種類		椀形滓	不定形滓	滴下滓	ガラス質滓	流動滓	溶融物(炉壁)	不明	合計
出土位置・層位									
表探			7		1		1	1	10
I	b	8	10				2		20
	a～b	5	16		1		2	1	25
I a～II a			2						2
I b～II a		4	15						19
I b～II b				1			1	1	3
II	a		2			1	1		4
	b	1	4						5
	a～b		3						3
溝状遺構(2)			1						1
出土不明表探		1							1
西側畑表探			2					1	3
T P			1						1
合計		19	63	1	2	1	7	4	97

調査項目

(1) 肉眼観察

遺物の外観上の所見を記載した。これをもとに試料採取位置を決定している。

(2) 顕微鏡組織

鉄滓の鉄物組成、金属部の組織観察や非金属介在物の調査などを目的とする。試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μ と1 μ で鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して、写真撮影を行った。

(3) ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて、滓中の晶出物および金属鉄部の硬さ測定を実施した。

試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は50～200gfで測定した。

(4) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO): 容量法。
 炭素(C)、硫黄(S): 燃烧容量法、燃烧赤外吸収法。
 二酸化硅素(SiO₂)、酸化アルミニウム(Al₂O₃)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K₂O)、酸化ナトリウム(Na₂O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO₂)、酸化クロム(Cr₂O₃)、五酸化燐(P₂O₅)、バナジウム(V)、銅(Cu)、二酸化ジルコニウム(ZrO₂)
 : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

調査結果

<No.1: 鍛冶滓>

(1) 肉眼観察

17.4gの不定形小型の鍛冶滓破片である。色調は黒灰色を呈する。また下面のみ資料本来の細かい凹凸を持つ表面で、他は全面鋭利な破面である。破面の気孔はごく僅かで、非常に緻密な滓である。

(2) 顕微鏡組織

図版30①に示す。白色粒状結晶ウスタイト(Wustite:FeO)が、素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。ファイヤライト(2FeO・SiO₂)は高温により結晶として存在しない。高温操業が想定される。

(3) ビッカース断面硬度

図版30①の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は462Hvであった。ウスタイトの文献硬度値450～500Hvの範囲内であり(日刊工業新聞社,1968)、ウスタイトに同定される(磁鉄鉱(磁石)は530～600Hv、ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている)。

(4) 化学組成分析

第 27 表に示す。全鉄分 (Total Fe) は 57.33% と高値であった。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は < 0.01%、酸化第 1 鉄 (FeO) 63.37%、酸化第 2 鉄 (Fe₂O₃) 11.54% の割合であった。造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) は 24.09% で、塩基性成分 (CaO + MgO) が 7.28% と高値傾向を示す。また通常砂鉄 (含チタン鉄鉱) に含まれる二酸化チタン (TiO₂) は 0.19%、バナジウム (V) が 0.03% と低値であった。酸化マンガン (MnO) も 0.06%、銅 (Cu) < 0.01% と低値である。当資料は鉄酸化物 (FeO) と、炉材 (羽口・炉壁) ないしは鍛接剤 (藁灰・粘土汁) の溶融物である造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) が主成分であった。このため、純度の高い (製錬滓～精錬鍛冶滓) を含まない鉄材を、加熱したときの吹き減り (酸化による損失) で生じた滓と判断される。

<No. 2 : 鍛冶滓>

(1) 肉眼観察

11.7g とごく小型の鍛冶滓破片である。椀形鍛冶滓の側面端部の可能性が考えられる。滓の地の色調は黒灰色で、表面には茶褐色の鉄錆化物や土砂が薄く付着する。上下面と側面 1 面が資料本来の表面で、残る側面 3 面は直線状の破面である。また上面は比較的平坦で、下面は細かい凹凸が著しい。破面の気孔は僅かで、非常に緻密な滓である。

(2) 顕微鏡組織

図版 30 ②～④に示す。淡灰色柱状結晶ファイヤライト (Fayalite : 2FeO · SiO₂) が主体鉱物相で、白色粒状結晶ウスタイトは局部的な凝集と微細結晶の晶出である。

(3) ビッカース断面硬度

図版 30 ③の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は 542Hv であった。ウスタイトの文献硬度値の上限を越え、マグネタイト (Magnetite : Fe₃O₄) の文献硬度値の範囲内であった。ただし結晶がごく微細なため、周囲の影響を受けて硬質の値を示した可能性も考えられる。ウスタイトとマグネタイト、双方の可能性を提示しておきたい。

また④の淡灰色柱状結晶の硬度を測定した。硬度値は 637Hv であった。ファイヤライトの文献硬度値 600～700Hv の範囲内であり、ファイヤライトに同定される。以上の鉱物組成から、当資料も鉄酸化物と、炉材 (羽口・炉壁) ないしは鍛接剤 (藁灰・粘土汁) の溶融物が主成分と判断される。純度の高い鉄素材を低温側で素延べや火造りなど、熱間で鍛打加工した時に生じた滓と推定される。

<No. 3 : 鍛冶滓>

(1) 肉眼観察

20.3g と小型の椀形鍛冶滓片と推測される。滓の色調は暗灰色で、下面を中心に茶褐色の小さな錆化鉄部が点々と付着する。いずれも特殊金属探知機での反応はないが、一部磁力の強いものがみられる。また上面は中央が窪んでおり、下面の中央には稜が見られるため、椀形滓というより、槌状の滓の端部破片の可能性も考えられる。破面には若干気孔が点在するが、やはり緻密な滓である。

(2) 顕微鏡組織

図版 30 ⑤～⑦に示す。⑤は滓中の錆化鉄部である。素地の灰色部はフェライト (Ferrite : α鉄)、層状黒色部はパーライト (Pearlite) 組織の痕跡である。以上の組織痕跡から、この錆化鉄部は炭素含有量 0.2% 前後の軟鉄と推定される。

⑥⑦は滓部である。⑥は白色粒状結晶ウスタイト、灰褐色多角形結晶マグネタイト、淡灰色柱状結晶ファイヤライトが晶出する。また⑦は発達した淡灰色柱状結晶ファイヤライトのみが晶出する個所である。

(4) ビッカース断面硬度

図版 30 ⑥の灰褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は 553Hv であった。マグネタイトと推定される。
⑦の淡灰色柱状結晶の硬度値は 621Hv で、ファイヤライトと推定される。

(5) 化学組成分析

第 27 表に示す。全鉄分 (Total Fe) 43.25% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.09%、酸化第 1 鉄 (FeO) 42.46%、酸化第 2 鉄 (Fe₂O₃) 14.52% の割合であった。造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) 41.54% と高値で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は 4.07% であった。また通常砂鉄 (含チタン鉄鉱) に含まれる二酸化チタン (TiO₂) は 0.26%、バナジウム (V) が < 0.01% と低値であった。酸化マンガン (MnO) も 0.09%、銅 (Cu) 0.01% と低値である。当資料も鉄酸化物と、炉材 (羽口・炉壁) ないしは鍛接剤 (藁灰・粘土汁) の溶融物 (造滓成分) が主成分であった。やはり純度の高い鉄素材を、熱間で鍛打加工した時に生じた滓と推定される。ただし鍛冶滓 (No. 1) と比較すると、造滓成分の割合が高く、No.2 に近似した作業履歴であろう。

まとめ

14～15 世紀代と推定される、嘉数トウヤマ遺跡から出土した鉄滓 3 点を調査した結果、当遺跡では、純度の高い (製錬滓や精錬鍛冶滓の固着のない)、鉄素材を鍛冶原料として、主に熱間で鍛造鉄器加工を行っていたと判断される。分析調査を実施した鉄滓 3 点は、鉄酸化物主体の滓 (高 FeO 滓: No. 1) と、酸化鉄に加えて、炉材 (炉壁・羽口) 粘土の溶融物や鍛接材 (藁灰・粘土汁) 起源の造滓成分 (SiO₂, Al₂O₃) の割合が高い滓 (No. 2, 3) が確認された。これらの特徴から、当遺跡では純度の高い鉄素材を、熱間加工して鍛造鉄器を製作したと推定される。また鉄素材は一定の形状に加工された新鉄に限らず、古鉄 (鑄造・鍛造品) であった可能性も高いと考えられる。

鈴木ほか (2004) によると、こうした鉄器生産の様相は、沖縄・先島諸島全域で広く確認されており、先島諸島に残る『鍛冶例帳』の記載ともよく符合する (沖縄県教育委員会, 1991)。また鍛冶滓 (No. 3) 中の、銹化鉄部は炭素含有量が 0.2% 前後の軟鉄であった。これを即、搬入された鉄素材の性状と結びつけることはできない (熱影響を受けて、炭素含有量が変化した可能性がある) が、軟鉄材を加工していた可能性は考えられる。

第26表 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目							
					大きさ(mm)	重量(g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ヒッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリ-
1	嘉数トウヤマ	西側畑(表採)	鍛冶滓	14~15c	30×16×20	17.40	なし		○	○			○		
2	(第一次)	L15 II b層	鍛冶滓		17×16×19	11.70	なし		○	○					
3		西側畑(表採)	鍛冶滓		32×28×14	20.27	なし		○	○			○		

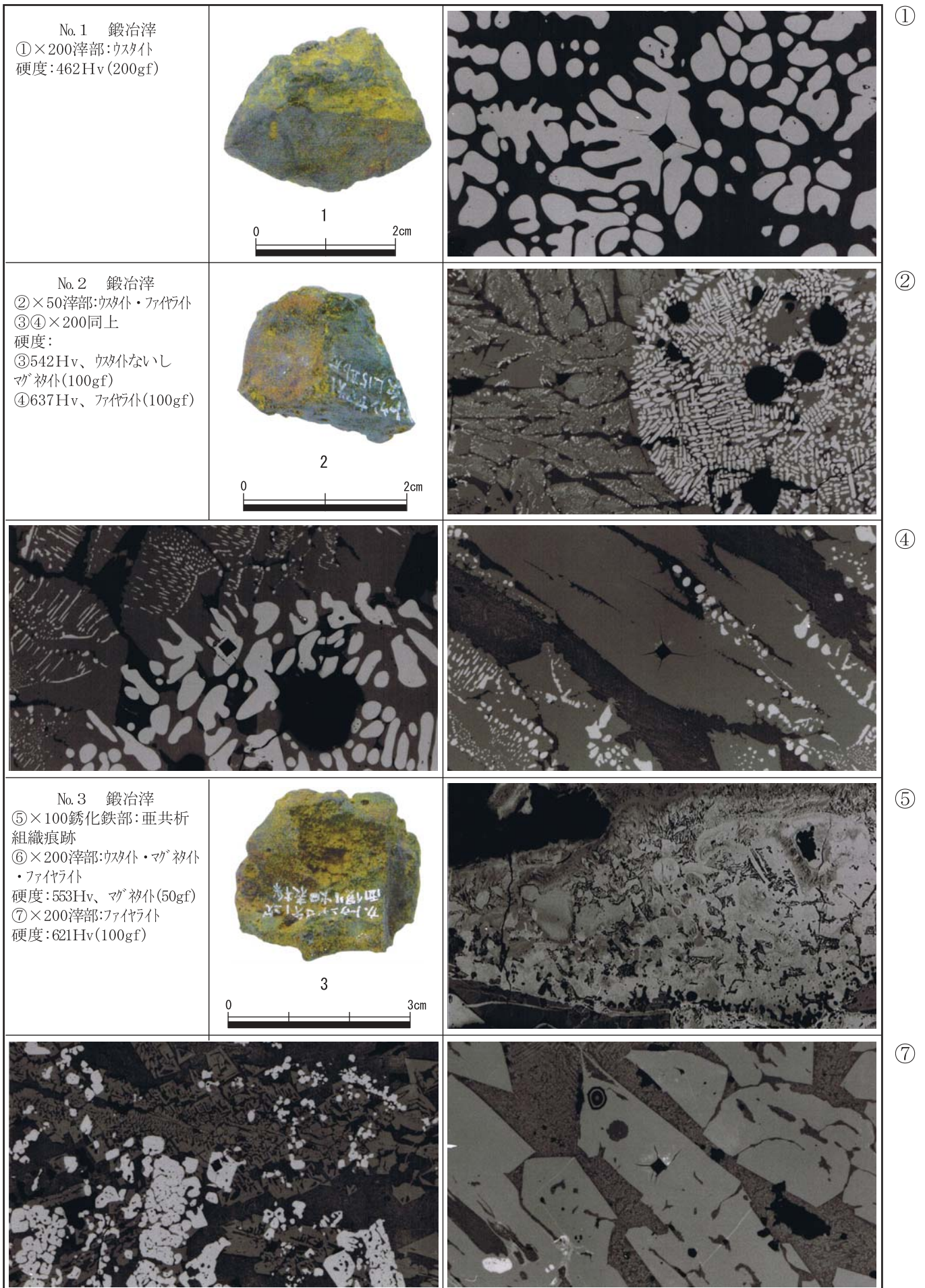
第27表 供試材の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値																	造滓成分				
					全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (Zr ₂ O ₂)	造滓成分 Total Fe	TiO ₂ Total Fe	
1	嘉数トウヤマ	西側畑(表採)	鍛冶滓	14~15c	57.33	<0.01	63.37	11.54	12.31	3.41	6.18	1.10	0.97	0.12	0.06	0.19	0.04	0.027	0.62	0.03	0.03	<0.01	<0.01	24.09	0.420	0.003
3	(第一次)	鍛冶滓			43.25	0.09	42.46	14.52	32.07	4.05	3.43	0.64	0.99	0.36	0.09	0.26	0.03	0.012	0.66	0.12	<0.01	0.01	<0.01	41.54	0.960	0.006

第28表 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成 (%)								所見
						Total Fe	Fe ₂ O ₃	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO	造滓成分	Cu	
1	嘉数トウヤマ	西側畑(表採)	鍛冶滓	14~15c	滓部:W	57.33	11.54	7.28	0.19	0.03	0.06	24.09	<0.01	鉄素材を熱間で処理した時の吹き減り(酸化による損失)で生じた滓
2	(第一次)	L15 II b層	鍛冶滓		滓部:F+WorM	-	-	-	-	-	-	-	-	鉄素材を熱間で鍛打加工した時に生じた滓、鍛冶滓 (No.1) より、炉材・鍛接剤起源の成分の割合が高い
3		西側畑(表採)	鍛冶滓		滓部:F+W+M、銹化鉄部・垂共析組織痕跡	43.25	14.52	4.07	0.26	<0.01	0.09	41.54	0.01	鉄素材を熱間で鍛打加工した時に生じた滓、滓中の銹化鉄部は炭素含有量0.2%前後の軟鉄と推定される

W:Wustite (FeO), M:Magnetite (Fe₃O₄), F:Fayalite (2FeO·SiO₂)



図版 30 鍛冶滓の顕微鏡組織

第V章 結語

前章までに、平成16年度に実施した嘉数トウンヤマ遺跡における範囲確認調査の成果並びに自然科学分析調査の成果について述べてきた。ここでは、検出された各種遺構・出土遺物等の調査成果について再度整理した上で、現在整理中の平成18年度に実施した調査成果についての概要も踏まえて、最終的な記録保存調査の報告書作成へ向けた課題や問題等についてまとめて、本報告の結語としたい。

周知の遺跡である嘉数トウンヤマ遺跡は、以前よりトウン（嘉数之殿）やジトゥーヒヌカン（地頭火の神）と称される拝所の周辺一帯において、グスク土器や類須恵器、輸入陶磁器、沖縄産陶器等のグスク時代（中世相当）から近世以降に相当する遺物が散見されている状況であった。今回の範囲確認調査における調査面積は限られた範囲であったにも関わらず、当該期に比定される各種遺構や出土遺物が把握されており、調査後に想定された記録保存調査を実施する上でも非常に精度の高い情報が得られたと言える。これまでも述べてきたように、今次調査は、嘉数トウンヤマ遺跡包蔵地内の国有地管理処分が予定される地所の範囲確認調査であったことから、当該遺跡の範囲や時期・時代等の性格を把握することが目的とされたため、基軸となる15ラインを中心として西側のL-14～N-14グリッドとL-15～O-15のみを発掘調査対象とした経緯がある。以下に、検出遺構と出土遺物について整理する。

調査区の表土を除去したところ、全面的に耕作土が確認されたほか、一部においては遺構面まで攪乱されている箇所も存在する状況であったことから、本来的に遺構を覆土していたと思われるいわゆるプライマリーな包含層は認められなかった。把握された本遺跡の基本的な層序としては、人為層である攪乱層と耕作土層に大別され、下層には各種遺構が展開する島尻マージからなる地山と琉球石灰岩基盤層が把握された。今次調査において得られた出土遺物のほとんどが攪乱層であるⅠ層や耕作土であるⅡ層、西側畑地より表採資料として検出されており、その全てが耕作行為等に伴う攪拌により細片化している状況であった。また、巻き上げによる層の上下移動が著しい状況であったため、記録保存調査における最終的な本遺跡の評価に際しては、検出された遺構の解釈と遺構内出土遺物を基にした各種検討とそれを客観的に評価する自然科学分析調査の導入が極めて重要であると認識された。

確認された遺構としては、ピット群、列状ピット群が集中的に検出されているほか、特徴的な遺構として土器一括検出土坑、溝状礫敷遺構が検出されている。ピット群、列状ピット群、土器一括検出土坑については概ねグスク時代（中世相当）の時期を、溝状礫敷遺構については近世以降の時期を比定している。

ピット群はⅤ層以降（マージ）の地山面にて159基検出されており、これらが他の遺構とともにグリッド設定範囲外の当該敷地全域に広がっている可能性が十分に想定された。ピット159基の内訳は、柱穴等が想定される124基と列状ピット群35基となっており、平面形は多くが円形・楕円形で、柱痕が明瞭なピットについては掘立柱建物の柱穴が想定された。限定的ではあるが、M-15の重機攪乱部分やO-15のサブトレンチにより損壊を受けた複数のピットを記録保存調査時の基礎資料とするべく調査・記録化を行った結果からは平面プラン1・2を積極的に想定しており、直径20～30cmで深度40cm前後のタイプと直径40cm前後で深度60cm前後のタイプの規格性が窺える。実際の記録保存調査時の全面発掘調査では、結果としてこれらの平面プランの1辺が3間（6m）以上となることが予想されたほか、M-14グリッドに残存したⅡ層下層からも同様な規格の平面プランが複数確認されている。

列状ピット群は、近年検出事例の増加が著しい遺構で植栽痕とも称されており、現在のところグスク時代（中世相当）の畑跡が想定されている。本遺跡ではN-14～15グリッドとO-15グリッドにおいて集中的に検出されており、いずれの列状ピット群も北西～南東方向の軸を有し、直径20～30cm内外の共通性を持っている。記録保存調査においては、これらの列状ピット群と先の柱穴が想定されるピット群が同一面にて検

出ることが確認されていることから、各遺構の平面的な展開や前後関係等の相対的な評価については遺構内出土遺物を含めた検討が必要であり、現段階において詳細は把握できていない。

土器一括検出土坑は、グスク土器片のみが一括して検出されており、非常に特徴的な遺構である。遺構の性格としては廃棄土坑が想定され、1～4層中において100点ものグスク土器片が検出されており、1～3層中において約80%を占めている。これらは全て鍋である可能性が高く、口縁資料から少なくとも10個体以上はあるものと想定された。記録保存調査において残存部分を調査した際にも多量のグスク土器片が検出されており、接合可能な資料も把握されている状況にある。また、土坑内覆土を全てサンプルとして取り上げており、今後実施予定の各種自然科学分析調査の結果からは想定外の遺構としての性格が窺えることも予想されることから、県内における類例資料の把握が急務である。

溝状礫敷遺構については、L-14～15・M-14～15グリッドにおいて2条確認されている。いずれも旧嘉数村の旧道が想定され、現在の里道とおおよそ平行する形でいずれも北西～南東に軸を持つ。調査成果からは、南側の溝状礫敷遺構②は溝幅が狭く、半円状に掘り下げた後、石灰岩礫を丁寧に充填しているが、北側の溝状礫敷遺構①は溝幅が広く、非常に浅い溝に雑に石灰岩礫を敷いているような状況であった。両者の切りあい状況からは溝状礫敷遺構①に先行して溝状礫敷遺構②が存在していたものと考えられ、溝状礫敷遺構②→溝状礫敷遺構①→現在の里道という変遷が推定できる。記録保存調査の結果からは、いずれも当該敷地外の北西側に延長して残存していることが確認されている。特徴的なのは、礫敷中に沖縄産陶器のほか、アカムヌー等の在地資料が多量に含まれているのが確認されていることで、記録保存調査においては遺物収納コンテナ(大)の25箱程度の出土量となっており、これらが旧道普請時に廃棄された可能性が考慮される。

確認された遺物は、概ねグスク時代(中世)及び近世の時期に比定される在地の土器・陶器類と輸入陶磁器等が主体をなし、種別ではグスク土器・類須恵器・白磁・青磁・青花・中国産褐釉陶器・タイ産褐釉陶器・三彩・鉄釉染付・瑠璃釉・黒釉陶器・タイ鉄絵・タイ産半練・本土産陶磁器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・アカムヌー・古銭・ジーファー(簪)・玉・煙管・高麗系瓦・鍛冶関連遺物等がある。多くは細片化しており、遺物の接合状況についても非常に複雑であった。記録保存調査時の出土遺物との接合可能な資料についても確認されており、改めて精査した上で接合・分類の再検討を予定している。主要遺物の層位別出土傾向を見ても、西側畑表採が3,348点と最も多く、次いでⅠa～b層中が3,111点、Ⅱa～b層中が1,779点となっており、耕作等に伴う攪乱の状況を表していると言える。出土遺物別に傾向を見てみた場合、アカムヌーが3,056点と他を圧倒する出土状況を呈しており、沖縄産無釉陶器2,281点、沖縄産施釉陶器2,047点、青磁1,882点と後続し、青花、褐釉陶器、白磁は比較的に少ないことから、嘉数トゥンヤマ遺跡が展開していた時期や器種組成等を考察する上で非常に興味深いと言える。

自然科学分析による客観的考察を行ったグスク土器については、肉眼観察等による質感・色調・焼成状況等の情報から4種に大別された初期分類に対する精査を行っており、あくまで可能性として、積極的に胎土や混和材等から地域性について言及している。今回は実験的に単一遺構出土グスク土器について、肉眼観察とそれに基づく剥片観察結果との比較を行っており、提示されたデータとの整合性を図った結果からは、記録保存調査後の本遺跡出土のグスク土器分類の方向性についてある程度設定できたと言えるが、未集計資料や記録保存調査時のグスク土器について全体としてデータ化することで本遺跡におけるグスク土器の様相が詳細に把握できるものと思われる。

範囲確認調査並びに記録保存調査におけるこのような各種遺構や出土遺物の検出状況からも、調査以前の立地状況や表採資料による考察からグスク時代(中世相当)から近世の時期が想定された嘉数トゥンヤマ遺跡について、概ね同時期にかけて展開した遺跡であることが把握されたと言えるが、現在整理中の記録保存調査成果報告書において、本遺跡の集落としての展開と陶磁器類の組成等に注目して詳細に報告したい。

報告書抄録

ふ	り	が	な	かかずとうんやまいせき																																																																																																																																													
書			名	嘉数トゥンヤマ遺跡 I																																																																																																																																													
副		書	名	範囲確認調査報告書																																																																																																																																													
卷			次	—																																																																																																																																													
シ	リ	ー	ズ	名	宜野湾市文化財調査報告書																																																																																																																																												
シ	リ	ー	ズ	番	号	第 43 集																																																																																																																																											
編	著	者	名	城間 肇、上田圭一、斎藤嵩人、橋本真紀夫																																																																																																																																													
編	集	機	関	沖縄県 宜野湾市教育委員会																																																																																																																																													
所	在	地	郵便番号 901-2203 沖縄県宜野湾市野嵩 1 丁目 1 番 2 号																																																																																																																																														
発	行	年	月	日	2008 年 3 月 31 日																																																																																																																																												
ふ	り	が	な	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因																																																																																																																																						
所	収	遺	跡	所在地	市	町	村	遺跡番号		m ²																																																																																																																																							
				ぎのわんし 宜野湾市 か か ず 嘉 数 こあざくしほる 小字後原	4720			26° 15′ 78″	127° 44′ 50″	040809 041105	約 883 m ²	国有地管理処分に係る 土地売却計画に伴う 範囲確認調査																																																																																																																																					
所	収	遺	跡	名	種	別	主	な	時	代	主	な	遺	構	主	な	遺	物	特	記	事	項																																																																																																																											
				嘉数トゥンヤマ遺跡	集	落	遺	跡	中	世	～	近	世	・	近	代	柱	穴	列	状	ピ	ット	群	土	坑	溝	状	礫	敷	遺	構	土	器	類	須	恵	器	白	磁	青	磁	青	花	褐	釉	陶	器	黒	釉	陶	器	三	彩	鉄	釉	染	付	瑠	璃	釉	タイ	鉄	絵	タイ	半	練	本	土	産	陶	磁	器	沖	縄	産	施	釉	陶	器	沖	縄	産	無	釉	陶	器	ア	カ	ム	ヌ	ー	銭	貨	ジ	ー	フ	ァ	ァ	(簪)	玉	・	煙	管	・	高	麗	系	瓦	鍛	冶	関	連	遺	物	グ	ス	ク	土	器	一	括	検	出	土	坑	植	栽	痕	検	出	近	世	の	旧	道	(溝	状	礫	敷	遺	構)
要	約	<p>本報告書は、周知の遺跡である嘉数トゥンヤマ遺跡における国有地管理処分に係る土地売却計画に伴う範囲確認調査の成果をまとめたものである。</p> <p>範囲確認調査の結果、ピット群が159基検出されており、これらの中には住居跡や倉庫跡が想定される柱穴とグスク時代(中世相当)の畑跡が想定されている植栽痕が確認されているほか、グスク土器が一括して検出された土坑も確認されている。また、近世に成立したとされる旧嘉数村の旧道(村道)も確認されており、嘉数地域を含めた宜野湾市内の集落遺跡を考える上で非常に重要な遺跡であると言える。</p>																																																																																																																																															

宜野湾市文化財調査報告書 第43集

嘉数トゥンヤマ遺跡I

— 範囲確認調査報告書 —

発行年 2008(平成20年)3月31日
編集 沖縄県宜野湾市教育委員会
発行
住所 〒901-2203
沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号
TEL 098-893-4431
印刷 株式会社 ちとせ印刷宜野湾営業所
〒901-2225
沖縄県宜野湾市大謝名三丁目4番17号
TEL 098-897-1902